女子文壇

第八年　十二月號　第拾貳號

明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十五日印刷納本）
大正元年十一月廿五日印刷納本



東京　女子文壇社發行

屏風襖衝立額表装類經師一式

幷に 御座敷用すだれ各種

金銀屏風製造販賣 青木静林堂

東京京橋南鞘町元(東仲通)

(電車中橋廣小路一丁東)

右の通り總て弊堂に於て製造販賣仕り原料下張入念注意致居候間何卒御用命の程奉希上候

女子文壇十二月號（第八年第十二號）目次

口繪

▼十二月一日より▲

食器新製品陳列會

歳暮年始御贈答用品大賣出し

格安反物及雜貨大賣出し

▼十二月十日より▲

羽子板陳列會

東京駿河町

三越呉服店

枯冬



(大江製版印刷)

THE GIRL'S GRAPHIC

少女畫報

第一年第十二號　定價十五錢　郵稅一錢五厘　六冊税共九十錢　十二冊一圓七十五錢

編輯顧問　高島平三郎先生　倉橋惣三先生

◎口繪◎冬の夜語り……竹久夢二
◎山茶花……岡落葉

讀物

上品な少女……倉橋惣三
少女小說 やどり木……尾島菊子
名流婦人少女時代……記者
少女實話 婉女の系脈……小柴天山
寄宿舍生活……さゆり子

▼忘れ得ぬ人々…夢二
▼毛織物の洗方…かね子
▼女學生癖比べ…鈴子
▼女學校參觀記…我川
▼向のお山…ゆめ二
▼簡單な羽織紐…あさ子
▼妙子孃の障子張…純一

畫報

▼果實▼日なた▼立書▼生花▼寄宿舍の一日
▼歳暮▼眞似▼格子戸▼お袴▼神戸の紅葉會
寫眞小說『淚の露』は目出度終を告ぐ、▼各女學校の
▼修學旅行は趣味あるもの多く、新懸賞其他鮮麗
なる寫眞版は悉く諸孃の見るべきもの！

讀物

斯樣ありたい事……小林第三校長
少女小說 一人娘……佐々木邦
少女小品 手紙……みゆき女
少女小說 家出……松山みどり
珍らしい動物園……谷江風

▼あれ飛行船！…紫蘭
▼カフェーの女生…古汀
▼水仕事と手…雪子
▼さらひ會の記…我川
▼學校便り……
▼神戸の紅葉會……
▼一口噺其他……

◎第一年最終の活動振りを御覧下さい

東京麹町區飯田町四丁目四番地　東京社　電話番町二三三九　振替東京一一八一八

第十二巻第十六號……十二月一日發行

女學世界

菊判紙数二百八頁　口繪石版寫眞版豊富　正價金二十錢　郵税二錢

東京・博文館・本町

孔雀



侯爵前田利爲氏夫人漾子



伯爵徳川達孝氏令孃繍子

かなりや



紳商大倉喜七郎氏夫人久美子

本劑と同一なる消化効力ありと稱し粗悪品を强賣する向あり信用厚き藥舗より御買上を乞ふ

タカヂアスターゼ

類似品數多あり
高峰博士發明品と
御指定を要す

發賣元 東京市日本橋區室町三丁目拾番地 三共合資會社



本劑の試驗報告御申越次第進呈す

セラバルロ氏 規那鉄葡萄酒

規那と鐵とを純良なる葡萄酒に包合せしめたるものにして風味佳良之を貧血、虚弱、重病の產後更期神經衰弱食慾不振等に用ゆれば血液を增加し元氣旺盛となる

各藥店及洋酒舗にあり

類似模造品あり注意

輸入元 東京齋藤彌平

總代理店 東京市日本橋區室町三丁目 三共合資會社

(ろノ一)

横瀬夜雨先生著

夜雨集 再版

▲製▲本▲既▲成 好評 再版将に盡んとす

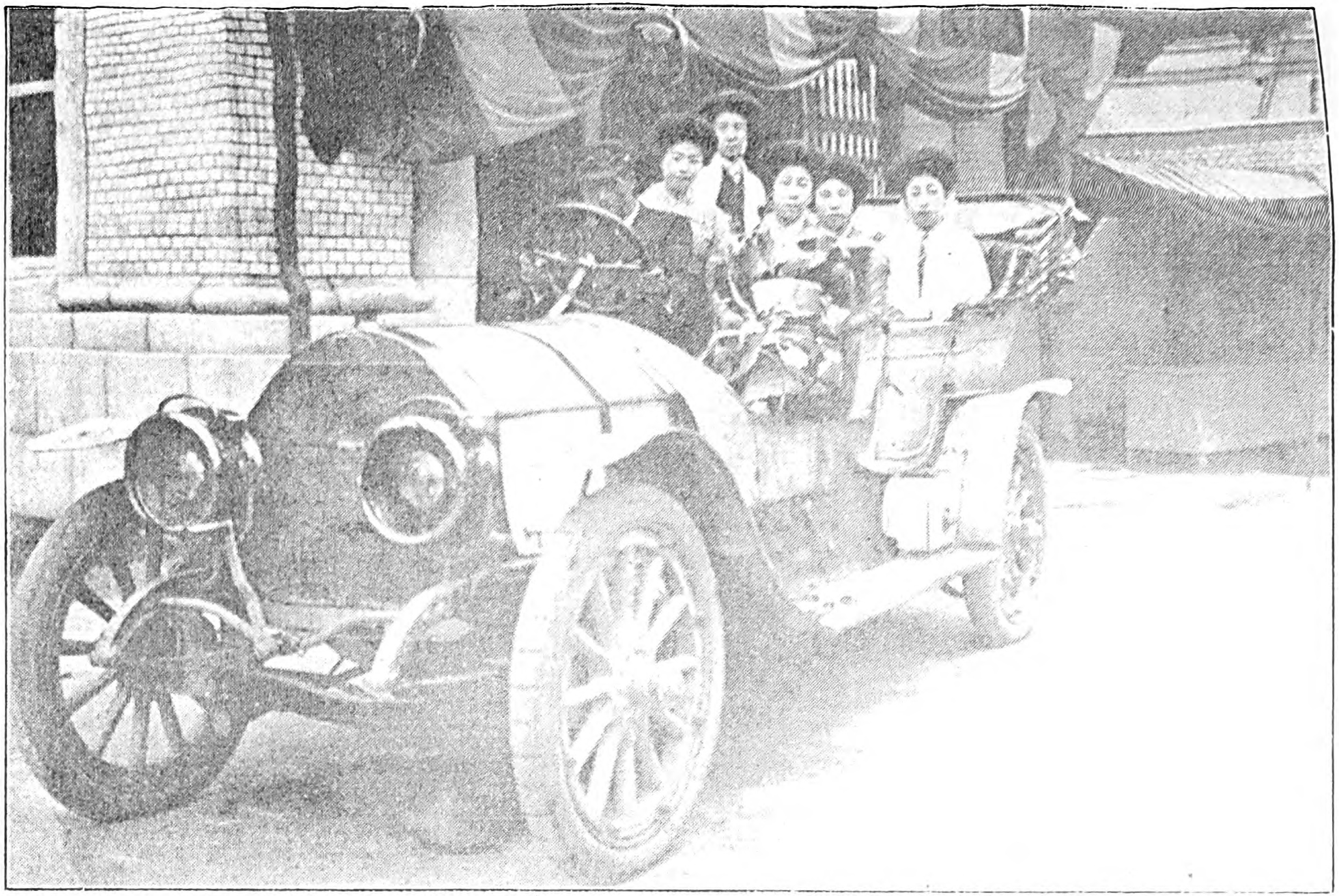
全一冊洋装本綴
紙数三百三十頁

特製色クロース天金雅装
正價八拾錢
送料六錢

並製色美箔入装
正價五拾錢
送料六錢

著者は我邦に珍しき郷土詩人なり身は筑波山下の一閑村に寂静なる孤獨生活を送れど其文名は天下の青年男女に渇仰されて驚くべき潜勢力を有せり殊に『夜雨集』は自己の生活を描くこと最も眞實にして其文、人を動かさずんば已まず而かも此書の如く男子より婦人を観、婦人より男子を観るに濃かなる感情の籠れるものは他に尠し蓋し本書は出來合の出版にあらず當然永遠の生命を有すべき眞面目なる著述なり

發兌元
東京京橋區大鋸町
女子文壇社
（振替口座一七二九番）
◀全國書店取次販賣▶



自動車に乗れる帝劇女優

黄水仙



吉川花子孃（學習院卒業）



岡村すゑ子孃

最新發見完全無缺の目藥が出來た試よ



枚眼水

藥價小瓶十錢▲中瓶廿錢▲大瓶五十錢送料貳錢宛切手不苦

主効。はやり目。ほし目。のぼせ目。ち目。かすみ目。トラホーム。つかれ目。其他の眼病に手術を要せず短日の内に奏効活眼となる實驗上不思議の妙藥平生眼力弱き人細業をする御婦人方は是非一度御ためしあれ

委細説明書 ハガキで通知あれ 無料送呈 取次希望の人には特に相談すどなたでも申込あれ

東京神田區五軒町壹番地大通り

帝國衛生商會

振替東京壹〇〇九番



レソール

多年獨逸に研學せし薬劑師間中綱彦製にして

拔け毛及ふけを

とめ髮のくせ

を直す事亦妙にして殊に新考案の横口瓶に使用に頗る便なり

定價大瓶九十錢、小瓶五十五錢

發賣元 東京本町三丁目 博愛堂

電話本二八六、四四八四番

振替 八八一三番

◎有名吳服店化粧品部小間物店に有

●歳暮進物用として

實用的で然かも高尙、殊に特製箱入(定價壹圓◯拾錢)は一層優美なり。

東京日本橋横山町三丁目

代理店 村田屋 柳下商店

電話浪 二二〇、一六〇〇番

振替東京 四四九八番



代議士小久保喜七氏夫人令妹米子



植村貞子孃



紳商藤井啓作氏令孃さく子（三輪田高女卒業）

寒菊



醫學博士平山金藏氏夫人道子



文學士伊藤成二氏夫人さこ子



農商務事務官法學士三浦惠一氏夫人宮子

女子會員募集

（電話番町四〇七五番）

◉本會に入會すれば誰でも歌詠みになられます
◉無料で添削する機關も備はつております
◉初學の方には最も親切に教授致します
◉目下婦人部會員は一千餘名あります
◉規則書入用の方は端書で申込めば直ぐ差上ます

會長　侯爵夫人　鍋島榮子君
顧問　跡見花蹊君
　　　三輪田眞佐子君
　　　下田歌子君

東京麹町區平河町五ノ一三
大日本歌道獎勵會
婦人部會

新刊

秀才文壇編輯局選

小品百篇

（十二月一日發賣）

新形美本　装幀優美　正價貳拾五錢　送料貳錢

現代青年作家が苦心慘憺の餘に成りし傑出せる小品百篇を收む。官能の匂ひ高きもの異國情調に富めるもの、温室の隅に夢みるグロキシニアの花の如きもの、或は赤い灯かげの町に湧く三味線の旋律、調子高きはクラリオネツト音を忍ぶべく、又はゴオガンがタイチの女の夢みる不可思議なる南洋の情調、幽韻なるは月見草の花の上をながるゝ笛の音に似たり

最も新らしく最も調子高く最も藝術的匂豐かなる現代青年作家が代表的の小品百篇！

東京神田旅籠町一丁目　文光堂出版

發捌全國書店　（振替一九五五番）

安全用達

本社代理部にては地方愛讀者諸君の御便利を謀り東京市内にて販賣する諸物品を始め各種の印刷及び製版とも迅速誠實に御用辨いたしますから多少に不拘御申込下さい

可成詳細に御書添を乞ふ照會は返信料付に願ひます

女子文壇社代理部（振替口座壹七貳九番）

◎十ケ月卒業

和歌講義錄

入會金免除す

◎本會は眞面目に短歌を研究試作せんとする初學者の爲に現代詩歌壇の名家が特に講演せられたる平易簡明なる和歌講義錄を發行し、懇切なる作歌の指導と、短歌に關する專門的知識を供給する、短歌に趣味を有する人、短歌を眞面目に試作せんと欲する人、現に作りつゝある人の入會を待つ

▲見本つき會則往復葉書にて申込次第無代進呈す

東京神田旅籠町一丁目廿三　大日本短歌會（電話下谷四八一九）

▼新年號より記事全く改善す

新年附錄 石川寅治畫伯筆

美人 畫（原色版光澤紙刷）油畫

（縱尺三寸横九寸大額縁）を添ゆ。口繪石版極彩色密畫及び光澤紙刷寫眞版八頁皆美しく記事亦改善讀物多し

第九年第壹號

一月元旦發行

▲製本賣出 十二月二十五日

●廣告〆切 十二月十五日

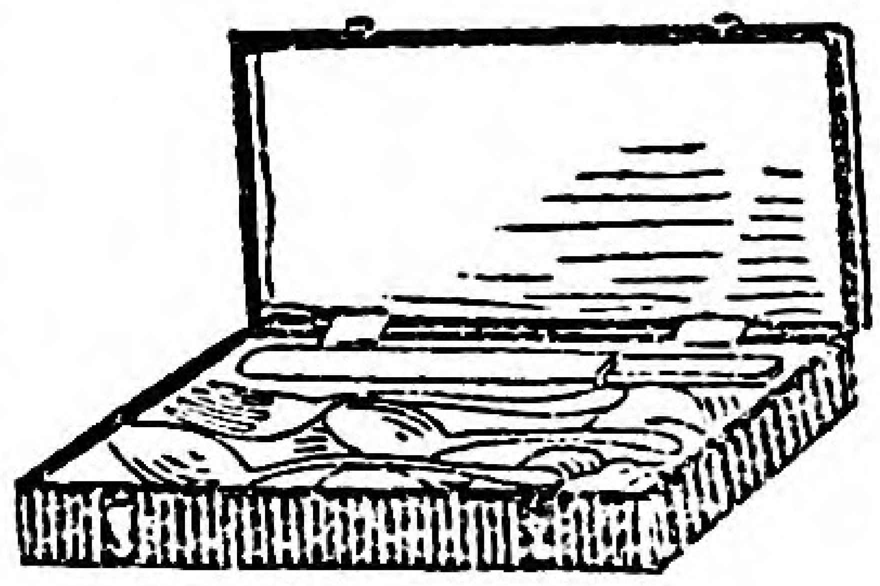
廣告申込所

東京京橋區大鋸町
電話京橋六〇七番
女子文壇社廣告部

博通社特賣品

舶來洋食器具

美しい丈夫な洋食道具調法な箱入にしてありますナイフーフオークースプーン二を一人前として一組箱入二組箱入三組箱入としてあります年末歳首の贈物としても適當なる品です



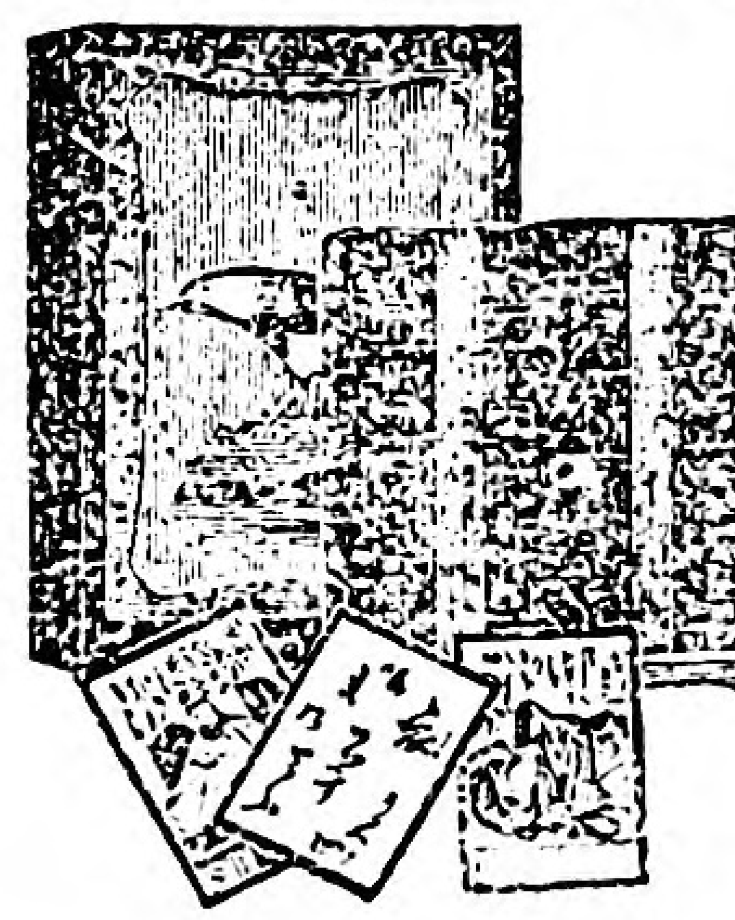
三人前揃特價 **金十圓五拾錢**

二人前揃特價 **金五圓五拾錢**

一人前揃特價 **金參圓**

送料 内地貳拾錢 領土四拾錢

御正月に何がないと云つてかるたがなかつたら皆さん御正月が御正月らしくありますまい悪戰苦闘徹宵曉を覺えずでせうねー



四號 **特價四拾五錢**

三號 **特價八拾錢**

二號 **特價壹圓**

一號 **特價壹圓卅五錢**

如何なる亂戰にも堪へます

送料内地拾錢領土卅五錢

皆さん御存知の硬質陶器です御正月には緑茶は陳腐です何んとなく温か味のあるココアか紅茶か若しくはカフエーかを召上がれ仲々ハイカラですよ御盆も同じく陶器です珈琲瓶牛乳入砂糖壺に茶碗及受皿各六箇總てを美麗な箱に入れてあります鑵入ココアにカフエー御匙等も御安すく御取次致します

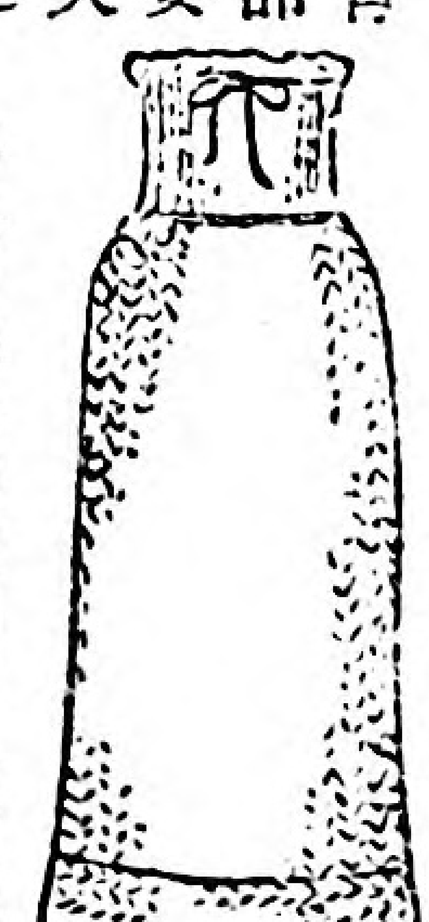


頗美麗箱入 **特價金四圓九拾錢**

荷造送料内地四拾五錢 領土七拾錢

女子の方は大人と云はず青年と云はず身體を殊に腰部を冷やさない樣御注意肝要純毛絲製厚くて暖かで丈夫な部腰卷を御召なさいまし

オカアさまも あなたさまも



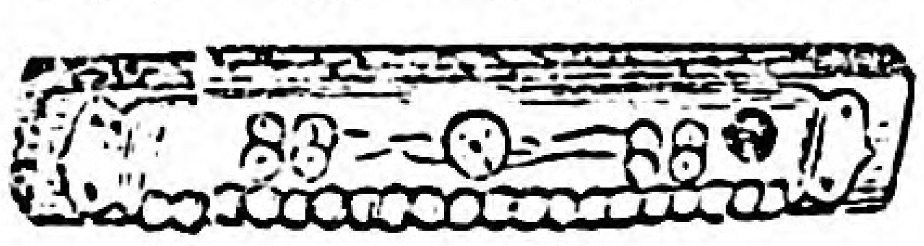
大人用 **特價壹圓五拾錢**

青年用 **特價壹圓貳拾錢**

小供用 **特價壹圓**

送料 内地拾錢領土卅五錢

皆さん御正月になつて隱藝で攻められる事が度々ありますね其時にすまして懐からハーモニカを出して滿座の人達にアツと云はせて吹奏しなさいましよ



舶來ハモニカ

甲號 **特價七拾錢**

乙號 **特價五拾錢**

音譜 **特價貳拾錢**

送料内地拾錢領土卅五錢

博文館代理部

電話本局六百十四番

振替口座東京五十番

日本橋區本町一丁目

長い鎖のついた錘の重力と振子の振動とに依つて時計がチクタクと正確に進み卅時間は大丈夫保つと云ふ誠に簡單な

不思議時計

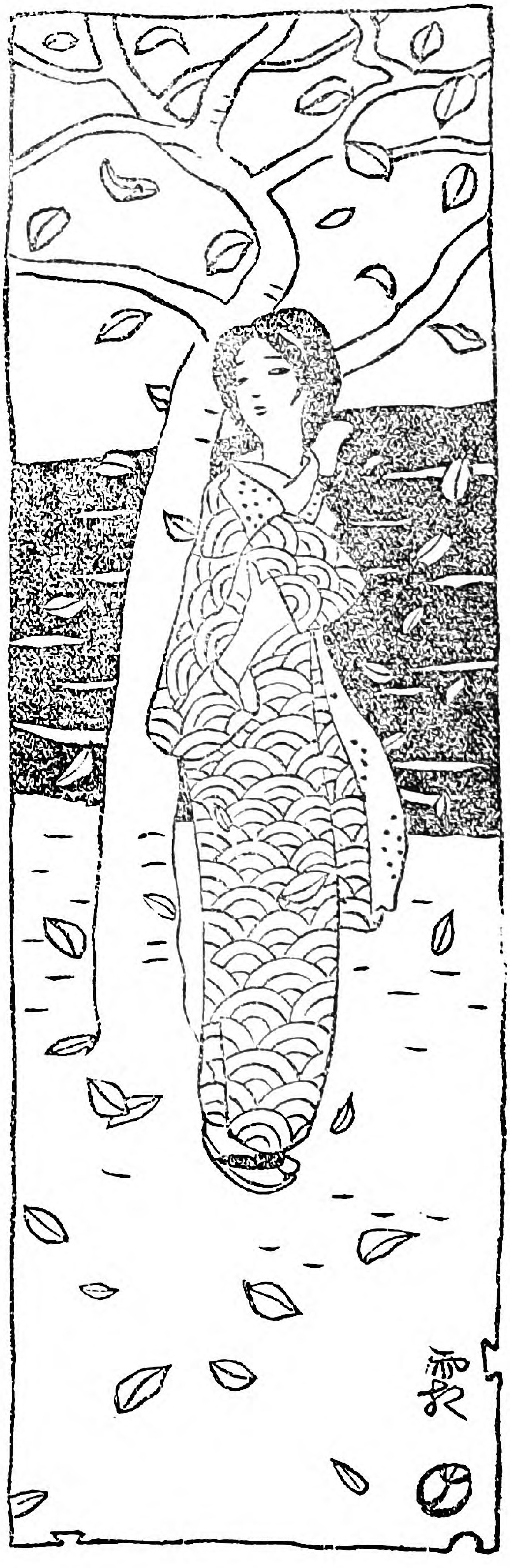
錘が下り切つたらがら〳〵と引き上げれば善いのです



特價一圓十錢

内地拾貳錢領土卅五錢

大正元年十二月一日發行



女子文壇

十二月號

（第八年第十二號）

新年號より生れ變つた女子文壇を發行す！

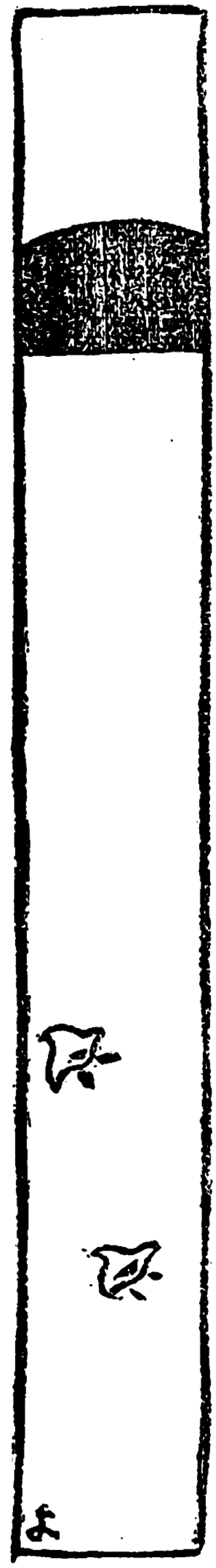
愛讀者諸君、皆樣にお知らせいたします。本誌は大正二年一月一日發行の第九年第一號からは、生れ變つたやうな新らしい雜誌になります。何う云ふ樣に新しくなるかと言ひますと、第一は、世間一般の若い婦人方の要求に應じて、讀物の種類を今までよりずつと博くすることです。第二には、讀物の文章を一層やさしくして誰にも能く意味の分るやうにすることとです。第三には、紙質、體裁を善くして、記事に伴ふ寫眞や挿畫を多くすることとです。此三つを實行し、讀んで面白いばかりでなく、爲になるといふとにも大いに氣を附けます。時節到來して女子文壇が此通り善くなるのも、世間が進んで來るにつれて、何うしても若い婦人の味方となつて善い方へ進んで行かねばならぬからです。婦人雜誌の數

も少くはありませんが、今まで女子文壇の歩いて來た道が能く分つて居るやうに、此から後も益々女子文壇の取つて行く道を明かにし、他の雜誌には見ることの出來ぬ而かも、若い婦人方の見免すことが出來ぬ讀物を滿載し、浮華に流れず、一方に偏らず、此こそ若い婦人の見るべき我邦唯一の好い婦人雜誌であるといふことを、實際に示して行かうと思ひます。願はくは諸君のやさしい同情を以て、到る所に吹聽の榮を熱望いたします。

追て新年號の內容等も右の趣意に基き、殆ど用意は出來て居りますが、態と此處に發表せず、多年の信用に任せ凡て愛讀者諸君の御推察を仰ぎます。

新年號大附錄　美人畫（大版畫額面用）……石川寅次先生新作

女子文壇は最善良なる婦人雜誌となる



一葉女史論

其一

島崎藤村

近頃は種々な方面に偶像破壊者が起つて來た。美術界が左樣だし、劇界が左樣だ。新派の婦人がしきりに一葉破壊を企てゝ居るのも矢張それだ。

一葉の破壊が始まつたのは、あの日記が公にされてからだ。もし一葉にすぐれたところが有るなら、それは破壊された後でもすぐれたものに相違ない。あだかも好く出來た城は殘つた後の城址としても好いやうなものだ。

一葉は thinker として特色のある人では無かつた。

一葉の日記を公にしたことは、彼女の艱難は生涯と幾多の興味ある挿話とを展げて見せたには相違ないが、一面に於ては彼女の最も不得手なところを併せ開放した趣がある。藝術とは何ぞや、戀愛とは何ぞや。それらの問題を思考する上には今日の婦人は幾倍かの有利な位置に立つて居る。偶像破壊者はその弱點に乘じて起つて來た。

假に今日の婦人の文學者が一葉時代の文學の空氣の中に居て、身を一葉の位置に置いたとしたら奈樣なも

のだらう。今の時に偶像破壞者であることは左程骨の折れないことではあるまいか。何故といふに、大抵の人が皆な偶像破壞者だから。

破壞された後の一葉には何が殘るだらう。臺音寺前の活畫は後に成つて見ても矢張好いに相違ない。當時の文學の空氣の中であれだけの自分の創作を日常生活に近づけたことや、あの才氣のある風俗の觀察や、女としての激情なぞは一葉の價値を定めさせるものであらうと思ふ。

正直に言へば、私は女としての一葉をあまり好まなかつた。あれほどサッパリした人であつたにも關らず私には女といふものを全くヌキにして一葉を考へることは出來なかつた。一葉の日記を見ると、彼女の方でも亦た私には殆んど交渉の無かつたことが分る。けれども女としての彼女を私があまり好まなかつたからと言つて、それが彼女に何の關りも無いことだ。彼女も亦た私の尊敬する友人の中でも好んだ人もあるし、好まなかつた人もある。

以上は近頃書いた『新片町より』の一節で、重複のきらひはあるが河井君の求めもあり女の讀者にも讀んで見てもらひたいと思つて書き送る。

※　※　※　※

其二

水野葉舟

自分はこの女史に對する婦人の文學者の感想が二つばかりあるのを知つて居る。處がそれの一方は、公にされた雜誌のない爲めに讀むことが出來ないで居る。勿論、自分はこの二人の人の感想に對して、最も興味を起して居るのは、「女――女」と言ふ關係に對してである。女が女を如何に見るかといふ、一點に不思議な興味を感じるのである。これは、わき路に入つた言葉から、この感想を書き始めてしまつたが、自分が、

この早い時代に死れた女作家の日記を讀んで面白く感じた、最も中心の問題は、女の一人で居る時の心といふことについてゞあつた。で、自分が、二つ三つこの一葉女史に對することを書いたものを、この雜誌の讀者が見られたらば、恐らく、自分が前に述べた「女――女」の興味と同樣にして、反對の心持を起される人が多いかもしれぬと思ふ。これはしかし、仕方がないことだ。自分はしかしこの雜感では「女としての一葉」――女の肉體を持つて居た一葉といふことは少し離れて、女史の作品と日記との間にある關係について重に書いて見たい。

* * * *

日記を讀んで、吾々の眼前に表はれて來る一葉といふ人は、決して不思議な處の多い人ではない。むしろ、極めて平凡な、なみ〱の心を持つて居る女であつたと思はれる。あの日記を書く、どの心の部分があの傑作「わかれ道」を書いたらう。それが初の間には、如何しても、自分に適確に了解されなかつた。

馬場孤蝶氏は十一月の「新潮」で、やはり女史の實際生活を知つて居る人は日記を見て意外に思ふだらう

日記と人とが違つて居る。

と言ふ樣に言つて居られる。又自分は女史について島崎藤村氏から話を聞いたのにも、日記とはまるで違ふやうな感銘を持つて居られるのを知つた。それが如何いふ譯だか一寸解りにくい。

しかし、自分はこの日記が意外に女史の心とは直接であつたことを信じたい。それと言ふのは、人の一人で居て思つて居る姿を、この日記位、自省することなく、思ふ儘に書いてあるとして見ると、ともかく、この日記と、日記の筆者とは、どれ位、呼吸が通ひ合つて居たかといふことは、思はれることではないか。自分はむしろ、當時の女史と知人であつた人々の印象はこの日記をその女史の眞の心を裝飾したものを多く見た、その記憶が強く殘つて居るのではないかと思ふ。女――殊にこの日記を書いた女史の如き女の人は、內

と外──心が一人で靜かになつて居る時と、人に觸れたその時の力でその人に對する感應で動いて居る時とは、全く別の人のやうになつて見えるのは當然と思はなければならない。

で、自分はここで少し女史がその前に表はれて來た人の心とその自分の心との尖頭が相觸れて相感應して來る有樣について少し考へて見たい。これらのことはやがて、女史の日記と、女史の製作との間の關係を考へる上のキーの一つとなるべきものと思はれる。



自分は斯うであつたらうと思ふ。

この日記の女主人公は、人に觸れると共に昂奮して、その意識し得ない才力が、火光を發する……さう言ふ性質の人は世間に澤山ある。持つて生れたその人の本性が、生々として自覺されずに居るのが、ふと外からの力に觸れるとそれに應じて火花を發して來る。それがたゞ一人に歸つた時には、その人の種々な力が治まつて、平常なありきたりの心になつて眠つて居るの

である。

女史の日記について感じることは、たゞの點である。女史はその心が、人間の心として、如何に、生きた進んだ心と相對して、激動したといふ經驗を缺いて居るか、女史の心は、或る因習的な殼の中に入つた儘で、その心自らが生きる姿の生々たる力が遂に眠つた儘になつて、亡つてしまつたのである。

で、こゝで、自分は話を一轉する。だが、この雜誌の讀者諸君には、自分の今言つたことをも少し解釋的に書いた方が便利であつたと思はれる、自分のこの感想を、も少し具體的な「人」を描いて話す方がよく理解されると思ふが、今はさう言ふことをする餘地がないのをお斷りして置きたい。

* * * *

一體、この藝術の作品を研究するのに、たゞその作品ばかりを讀んで、それに對する理解を得ることが、第一に貴いことではあるが、その作者の生活――たゞ人としての生活を知ると言ふことは、更らに一層その理解を明瞭にするものである。

で、こゝに一葉女史の全集の中で、最高級にある作の中、「わかれ道」を、この日記を讀みながら、その兩方を産み出した「人」を考へて見たい。これは面白いことであると思ふ。斯う解ふ方法は、かなり賢い研究の方法であると思ふ。

しかし、こゝにも、その考への大體を書くに止めて置かねばならないと思ふのは、あまり細かに書くことは、他の迷惑になるからである。

「わかれ道」と言ふ小説の女主人公は、勿論一葉女史の幻の對象である。小説を書くのに、或る趣向を立てて考へて書くと言ふのが當時の作のし方（極く幼稚な無智な仕方であるが）であつた。で、女史のこの作を見る時に、この作のヒロインはやはり、作者の心の或姿が非常に多い分量で宿つて居るといふことを思はせられる。で、この作のヒロインは、女史の如何なる心

の影であつたらうか？……そこを細かに研究して見たら面白からう。

自分は、作者が先づ、その日常の、現實生活から苦しめられて居る生活狀態の中にあつて、女ばかりの力で生きて行かうとする心細さと、方針のつかぬ狀態とを考へて見る時に、女史の空想の中に、或る時、このヒロインが偶然、極めて不整頓な狀態を以て、浮んで來たことがあつたに違ひない。それが又、一轉して、女史の藝術の對象になつたものと思はれる。



この日記を見る時に、女史がその生活の苦しさを彌縫する爲めに、種々な人に相談された——その仕方が、極めて他人の心の中に、自分を投げ附けるといふやり方であつた。そこは一面には怜悧な、人の心をすぐ摑んでそれに乘じて行く處もあつたらうが、一種の感情的な實際を否認した獨り定めな心持も多量にあつた。その爲め、女史はかなり人を怨んで居る自分を省る心はたゞ一通りの、抽象的な道德だけで、眞に、その生命を細かに、ごまかさずに考へては居なかつた。この點が一つ。

第二には、この日記を透して見て、當時の女の世界が如何に箱の中に封じられたもの丶やうになつて居たか

この作品のヒロインが墮ちて行くやうな有様に、墮ちて行く外には、ヒロインのやうな境遇の人には殆ど方法が無かつたらうと思はれる。その社會組織の發育して居なかつた程度についても、考へて見る理由がある。その中に女子は、やはり女として、社會の箱の中に封じられて居たに違ひないと思はれる。斯う言ふこともこの日記から考へて來ることが出來る。

それに向つて、添へられた傘屋の油ひきといふ男がある。これは恐らく六分通りは、モデルを描寫したものであらうと思ふ。或はこのモデルが意外の邊にあつたかもしれぬ。この日記の中にある人からも、幾分か想像される。と言ふのは、女史のやうな性質の人にとつては、この種のモデルが、その心の中に隨分豐富であつたらうと思はれる處がある。

第三には、この作のヒロインの氣性の中に、如何に女史の氣分の一部が宿つて居るかといふことが思はれる點である。むしろ、その心の誇張して、その點でものを言つて居るといふ傾がある。

まだこの外に幾らも、デテールがある。それを相對して仔細に研究して見ると、餘程、釋然として來る處があるに違ひない。少し隙が出來たら、自分も二四の作品について、それをやつて見ようと思つて居る。

* * * *

さて次には女史の戀愛の問題である。自分はむしろ女史の戀愛については、その書いて殘されてあるものと、その生きて居る心との間に多少の溝があるのを否むことが出來ないと思ふ。書かれた點は、その實際に生きて居た心が、餘程純化され、美しく言はれ、心が隱され欺かれて居るのを見る。これについても、自分は細かに自分の思ふことを書いて見たい。何れ、後の折を待つてとゝする。

其三

森田草平

私が大學へ入つた年の冬に、下宿に居るのが厭になつて、どつか間借りをするか、家を持つかしたいものだと思つてぶら〳〵歩いて居るうちに、一軒の小さい家が見付かつて、其處を借りる事にした。人の住居ふ家とは云はれない位、小つぽけな家ですべて整のつて居らなかつたが、それでも崖の下で、庭も廣いし日當りもいゝ室が二つばかりあつたので、當分其處に居るつもりになつた。



私がある年寄の女と一處にそこへいつて間も無く、馬場孤蝶さんが訪問ねて來られて此處はもと一葉女史の住んでゐた家であつたと云ふ話が始まつた。家の作りも當時の儘で座敷に勾欄の樣なものがあつて、其處から池に臨んでゐた。其の池は一葉全集のなかに入つて居る短い小品で、一葉の雨夜に硯を投げたと云

ふ樣な話も殘つて居る池である。當時とは池も大分小さくなつてゐたさうだが、芭蕉なども數株あつて、いくらか面影が殘つて居る。それで婆さんも面白く思ひ私もいゝ處に來たやうな氣がした。其頃私達の仲間が寄つて、一葉會なぞと云ふ名義で、菓子を食べたり、茶を飮んだりして話し合つた。

そんな風で、最初は當分の積りで借りたのだが、ずつと居附く事になつて、大學に居た三ヶ年の間、それから卒業してまでも矢張つゞいて其家にゐた。私の一葉女史に特別な關係のあるのは、それ位なもので、一葉女史の作を他の人よりも餘計に味つて居ると言ふ譯でもなければ、一葉女史について、立入つた意見を持つてゐると言ふ譯でもない。

然し一葉が、最後の數年の間、其の家で生活し、其家で死んだ處に、私も暫くの間ゐたのだから、一種の親しみのある樣な氣がする。一葉が凭れた柱とか、一葉が手を觸れた勾欄とかに自分も手を觸れたり、凭れたりしたと云ふ關係だから、親しみと云つても、一種の内輪の親しみであつて、一葉の家族の人が一葉に對する親しみを、私も持つて居ると云へば云はれぬ事もないが、一葉の家の人が、一葉と云ふ人を別段、他の人よりも餘計に知つて居る譯でない、あるひはむしろ知らないと云つた樣に、私も別段餘計知つてゐる譯でない。

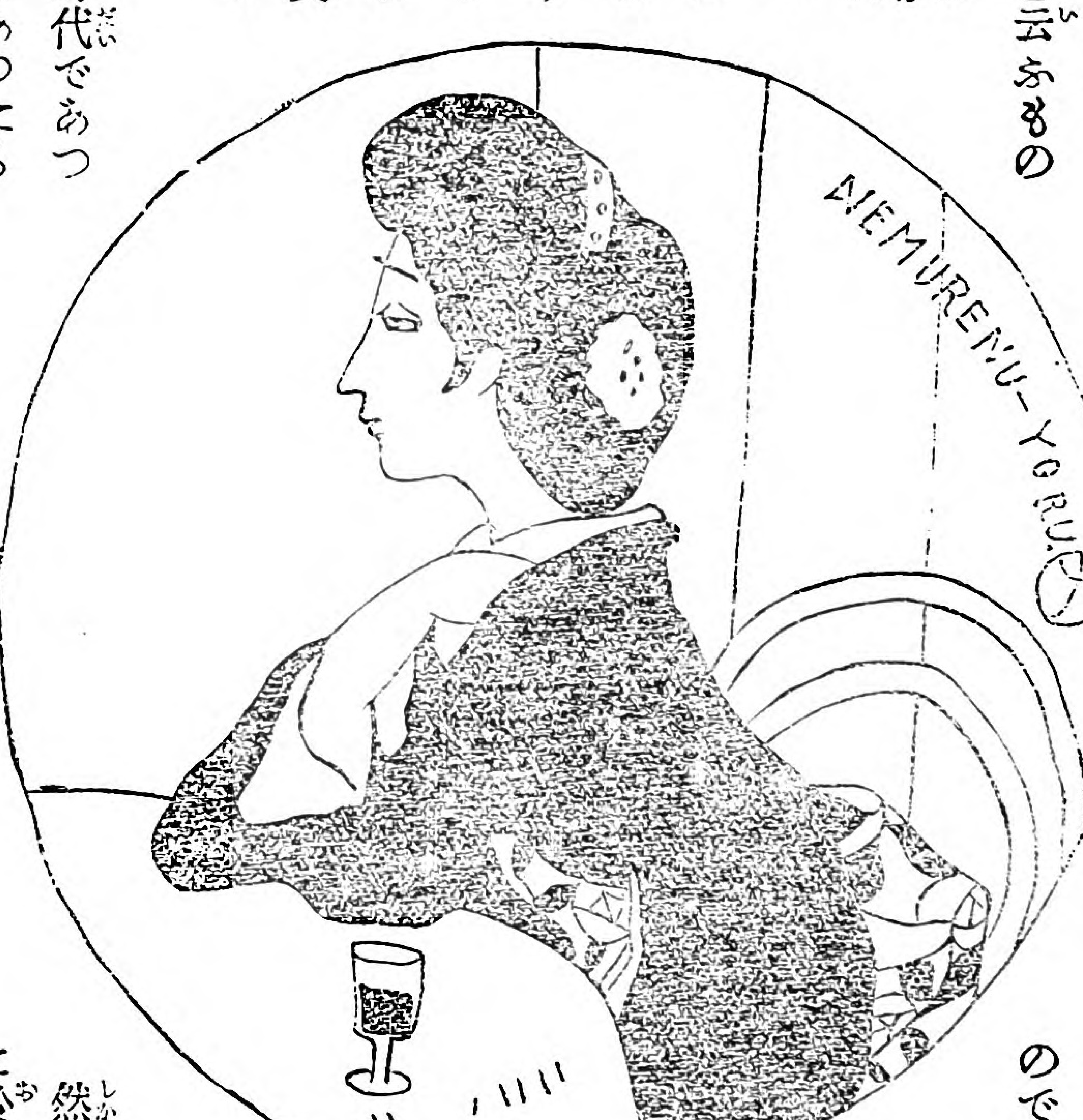
實は一葉に對する私の興味も其れ位に止まつて、女史の日記が出たさうだが、まだ讀んで見ない程である日記から見た一葉女史については、いろ／＼の人が話してゐるし、水野葉舟君なども、それについて書いてゐられたが、今それを讀んで見ると、成程さうであらうと思ふ樣な譯で、殆ど異存はない。

女としての女史は水野君の云はれた樣に、まつたく氣の勝つた一種の道德家で、而して凡ての女と同じやうに自分の考へる事を一番正しいと信じてゐた才女らしい。つまり女としては當時の時代から考へて見ると大分理解のある女らしいが、やはり自分の立場に立つてばかり人を眺めて、人の立場に立つて自分を眺める

だけの餘裕は持たなかつた女らしい。それが作物の上へでは破綻が見せて居ないが、實際の日記などになると大分それを見せて居る樣である。

もつとも私は其の日記と云ふものを見ないで、只其の日記についての、色々な人の斷片を見た上で、ぼんやり考へて居るので、何とも云はれないが、私一個の考へとしては、一葉女史はやつぱり他所行きの一葉全集によつて傳はらせたい、不斷着の日記にあらはれた一葉女史は見ないで止めたいとまで思ふ。

つまり時代もさう云ふ時代であつたし、女史もさういふ女であつたらうと思はれるので、女史の作品について女史の價値を論ずる場合にも、時代と云ふ事を、背景にして論じなければならないであらう。時代を離れて一葉全集の價値などを求めたら、勿論大したものではなからう。それから女史が今の世に生れて來たとしてならば、勿論あれ程もてはやされもしなからうし、またあれ位の仕事が出來たか、どうかも疑問である。女流作家の中で唯一人と云ふのは誤つて居る、其後一葉位の人はいくらも出て來たらうし現在あることも考へられる。



然しあの時代と云ふものゝ關係に於いて女史を見る時には、あれ位もてはやされてもいゝ人であると思ふ。あの頃にた

つた一人の女流作家として立つて居るのを見ると、われ〱は矢張、われ〱の一葉女史として長く記憶して置きたいと思ふ。

序に女流作家と云ふものは、男性とちがつた眼で、世界を見て、男性の觀ることの出來ない特殊な世界を讀者の前に展開して來なければならないと云ふ事がこの頃大分云はれる。私もそんな事を一時は考へてみた然し女流作家だといつて、男性作家とそれほどかはつた觀察かたがあるだらうか。强ひて男性と違つたとてろを求めると、いづれの點でも、男性よりも劣つて居ると云ふ事に歸着しはしなからうか。

私の今の考では、なにも女流作家だからといつて、別に男性とちがつた態度でもつて、違つた作品をもたらさなければならないと云ふ理屈はない。男性の作家が書くのと同じものを書いていゝ、そして男性の作家を凌駕すればそれでいゝ、極めて大體な議論であるが一葉女史の作品をずつと心の中で考へてゐる中に、思ひ付いたから一言述べて置く。

其四

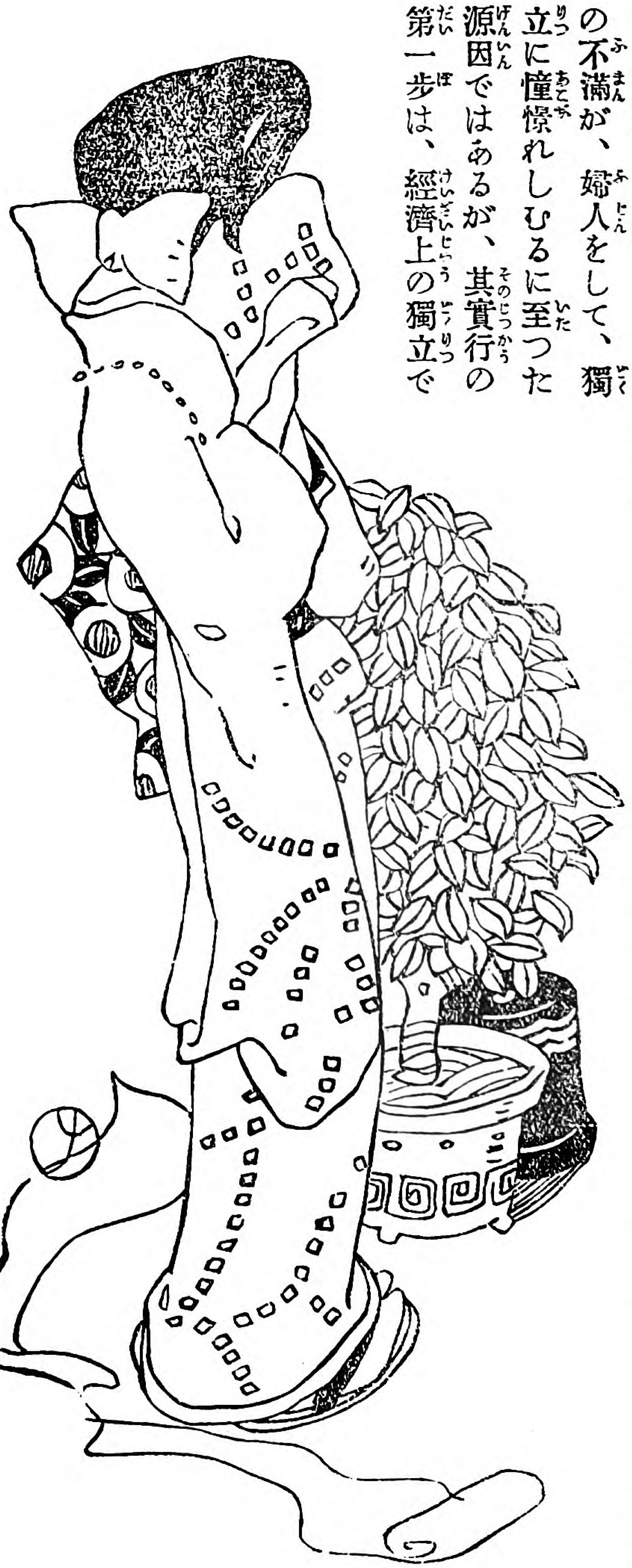
相馬御風

婦人の解放とか、婦人の獨立とか云ふ主張が、此頃の若い女の人に殊に著るしく聞えるやうである。

どうもそれを側から見て居ると、私たちにはどこかにまだ空想的な、ロマンチックな心持が、附き纏ふてゐるやうに思はれてならない。痛切な要求からの叫びであると云ふにはあまり現實に觸れかたが足りないやうである、就中、私たちに不思議なのは、若い女の人たちの、所謂生活の獨立と云ふのが、主として精神的な、理想的な方面に限られてゐて、肉體的な方面に獨立と云ふ事が、まだ充分に自覺されてゐないやうな點である。

一體婦人問題のもとの起りは、どうかと云へば、ヨ

ーロッパの事情がすでに明に示して居るやうに、何よりも第一に、經濟問題が來なければ僞である。無論今までの女に、拘束的な、奴隷的な生活境遇に對しての不滿が、婦人をして、獨立に憧憬れしむるに至つた源因ではあるが、其實行の第一歩は、經濟上の獨立でなければならない。ヨーロッパの婦人問題が先づ第一に、經濟上の獨立と云ふ事を得ようとしたのは、決して偶然ではない。つまり女が、今迄の男に對する關係から脱却して、もつと自由な、もつと女自身の權威のある生活を營まうとするには、何よりも先づ、是れまでの經濟的な男女關係をはなれてかゝらなければならない。つまり經濟上の獨立をはからなければならない此の經濟上の獨立にして、成功の出來ない以上は、何らかの形に於いて、精神上乃至、道德上の形に、拘束



せられなければならない。

云ひかへれば、經濟上に、奴隷の地位に居ながら、精神的には、王者の地位に立たうとするやうな事は、空想としては美しいけれども、實際としては甚だ悲慘な生活の形式である。

ところが此頃の日本の若い女の人の獨立とか自由とかの主張には、その所謂奴隷の境遇に居て、王者を夢見て居るやうなところがないでもない。

一時盛に起りかけた、女子職業問題も、さういふ種類の、新しい女の人たちには、あまり痛切には響いて居ないらしい。そこが私の所謂、ロマンチックだと云ふ所以である。

現實に觸れたとか、現實に打突かつたとか云つて居ながら、我々の現實生活の、根本問題であるところの物質問題を無視して居るのは、まだ眞實に現實に觸れたとは云へない。生活と云ふ事を、もつとも大切な言葉のやうに口にしてゐながら、衣食住の生活を輕く視て居るのは、あまりにその自家撞着が烈しいと云はなければならない。生活の本當の味は、自分自ら、自分の生活をいとなんでゆくものでなければ解することは出來ない。パンを得ると云ふ問題はなんでもない樣に見えて居ながら、尤も重大な問題である。其問題を外にして、生活の獨立や、自由を論ずるのは一種の空想にすぎない。

かう考へて來て私は故人一葉の生涯を思ふと、そこには此頃の若い女の人達の思ひも及ばない程の生活の戰ひがあつたやうに思ふ。

今までは物質的にも、精神的にも、全然男の奴隷として取り扱はれてゐた日本の女が、その奴隷的な境遇を脱して、自分の自らの生活を自分自らの力で出來るかぎりいとなんで見ようとする、そこに一葉の本當の苦悶もあり、また誇りもあつたやうに思ふ。

平塚明子女史にしろ、田村とし子女史にしろ、いづれも一葉を論じて、此の點に及ばないのは、やがて夫等の人々が、本當に生活の獨立と云ふ問題に觸れて居ないからだとおもふ。平塚女史も田村女史もともに一

葉の情的な生活のあまりに道德に囚へられて居たのを多少に拘はらず非難して居る。

それは一葉女史が、單に道德生活に對して、肉慾生活を卑しんで居たと云ふばかりではなくして、むしろそれ以上に大切な問題があつたからだ。その大切な問題は、前に云つた經濟的の獨立問題である。いかにしてパンを得んかの問題である。で、私は一葉女史の日記を讀んで、一番痛切に感じたのはあの女の人の其問題に對する煩悶である。



今日ならば、まだ女史の獨立と云ふ樣な事も、割合に誘惑なしにやつてゆけるのであらうが、まだ古い道德が、社會全般にわたつて、かたい根を張つてゐたあの當時にあつて、本當に獨立した、若い女の生活をいとなまうとした事は、決して一通りの事ではなかつた。一方には古い道德の眼から、婦人の獨立と云ふやうな事に對して、一種のさげすむ樣な見方をするやうなものもあり、一方からは、また當時の戲作者流の文學者連中の眞身に女の心持などを、解さないものもあつて、輕薄な態度を

むけてゐる。其間に立つて兎に角自分一人の生活を、眞面目に、而して他から一點の批難も加へられる事もなしに、立て貫したところに、一葉その人のどれ位苦しい思があつたかわからない。

世間を疑ひ、遂には文藝そのものすらも疑つたあの晩年の一葉の孤獨な絶望的な心持は、おそらく今の若い人たちに、解るまいと思ふ。明治二十九年の日記の中に、次の樣な事が書いてある。

見たりける夢の中には、思ふことばのまゝに云ひもしつ、思へる事さながら、人の知りつるなどうれしかりしを、さめぬれば、またもやうつせみのわれにかへりて、云ふまじき事、語りがたき次第などさまざまぞある。

われに風月の思ひありやいなやを知らず、塵の世をすてゝ、深山にはしらん心あるにもあらず、さるを厭世家と指差す人あり、そは何の故ならん、はかなき草紙にすみつけて、世に出せば、當代の秀逸などありふれたる言の葉をならべて、あすはそしらんくちのはに、うやうやしきほめことばなど、あなわびしからずや。かゝる界に身をおきて、あけくれに見る人の一人も友といへるもなく、我を知るものむなしきを思へば、あやしう一人この世に生れし心地ぞする。われは女なり、いかに思へる事ありとも、そは世に行ふべきことか、あらぬか。

此の短かい言葉のうちには、一葉と云ふ人の弱點も亦長所もともにあらはれてゐる。われは女なりといふことに對する舊來の消極的な考へ方と、あやしくひとり此の世に生れし心地ぞすると云ふ、孤獨の心持との間によこたはる、説かんとして説くことの出來なかつた、此の一葉の絶望の心持の中には、一面あはれむべき古い女の型があるとゝもに、一面將來の女の自覺をよぶべき何物かゞひそんでゐるやうに思ふ。

私はかつて一葉を論じた場合に、あの人をもつて、古き日本の女の最後の人と云つたけれども、私はこのごろになつて、更に彼女は古い日本の最後の女であつたと同時に、新しい日本の最初の女であると附加へて

置く。

このやうに云つてくると何だか女の生活と云ふ事をあまりに多く經濟的に解しすぎた嫌ひがあるかもしれないが、いかに女の經濟的の生活を重んずるといつても、やはり女の、人間そのものとしての種々な慾望を無視してゐるのではない。むしろ女の人間としての樣樣な慾望も、いかにしてパンを得るかと云ふ問題と觸れて來なければ、本當の深い味が出て來ないと信ずるからである。

平氣で親の飯を食つて置いて、平氣で夫の腕にたよつて生活してゐる間は、どうしてもそこに本當に新しい女の生活と云ふものが開けるわけがない。私は自分の獨立を叫んで家を出たノラよりは、夫を離れ友達を離れて、唯一人荒野の中を歩いた後のノラに本當の生活の謎を解きたいと思ふ。荒野の中にひとり餓ゑたものでなければ、決して本當の自分の生命の響きを聞く事は出來ないと思ふ。

其の意味から私は、新しい女の生活の主張は、貴族的な主張であらんよりも、平民的なものであつて欲しいと思ふのである。

其五

木内錠子

在來の一葉全集と通俗書簡文と、僅々此二卷の上に有らん限りの想像を擴げて生前の一葉女史が人となり殊に其日常の微細なる態度に亘つて迄も、此樣な場合は斯うも有つたらう、あゝも有つたらうかと好勝手に考へて來た私は、旦暮其僞らざる記錄たる日記の出版を期待して止まなかつたにも係らず、それを手に入れることが出來て、飢ゑた狼が餌にでも有り付いたやうな思ひで一息に讀み通して了つた時、云ふに云はれぬ失望に終つたのでした。何の失望で有つたでせうか？日常から知りたいくと憧れて居る一葉女史の生活、

之以上明ら樣に發表せらるゝ餘地を殘さない程忌憚なく告げられた内外兩面の女史の生活がどうして私に失望させたのでせう。それは實に所謂のない失望でした。私の頭腦の中に私自身の好勝手で丸め上げた理想の一葉を失なはされて了つたからです。

私が初めて樋口一葉と云ふ人の名を知つたのはまだ小學校に通つて居た十三四の頃だつたと思ひます。受持の教師からも何か作文の參考になるやうな書物を持つたら宜からうと勸められ、又お友達の人達も、其頃流行つて居た「女子手紙の文」とか「文の林」とか云ふ樣なものを各々が買つて貰つて持つてるのが羨やましく、鵜の眞似烏眞似で、私も頻りと家の人達にせがんだ揚句、買つて來て呉れたのが、此通俗書簡文でした。私一個の何かそこに命脈相通ずる一縷の綱が結ばれてあつたと佛者流に考へても考へられぬ事はないでせう。けれども其時の私は、それが其頃私共の爲によい書物として稍理想的に考へられて居た下田歌子女史の女子書簡文でも、亦昔の用文章式に立派に出來上つて居る帙入の立派な貴女の栞でもなかつた事が尠なからず不滿で有つたのでした。學校の先生にも持つてつて見せると、月並な眼識から却つて鼈頭にそれである別人の手になつた類語などの方が文句が美しくつてよいと云つて呉れた位でした。けれども無意識に讀んで行くと、丁度お世辭の甘い年若な小母さんにでも具合よくお相手をされてるやうなずる〱とゝけて行きさうな和らかい心持になつて知らず〱面白さに引かれて毎日學校から歸るとは、日課のやうに復習を了つた跡で十宛は必度聲に出して讀んだものでした。宙で斯うじつと考へて見てもあの中で最私の當時の心を引いたのが「妹の許に羽子板を贈る」「三月ばかり初奉公の友に」「ある人の新盆に」「山里にある乳母の許に」などで有た事が今ですら染々とした或懷かしみを以て、頭腦の中に、暗誦する程覺え込だ文句と共に明晰と浮かんで來ます。いつとなしに其習慣からは去りましたが凡幾度迄繰返しましたでせうか。小學校から女學校に移る時分に懸けてが最も其の夢中の程度が激しかつた

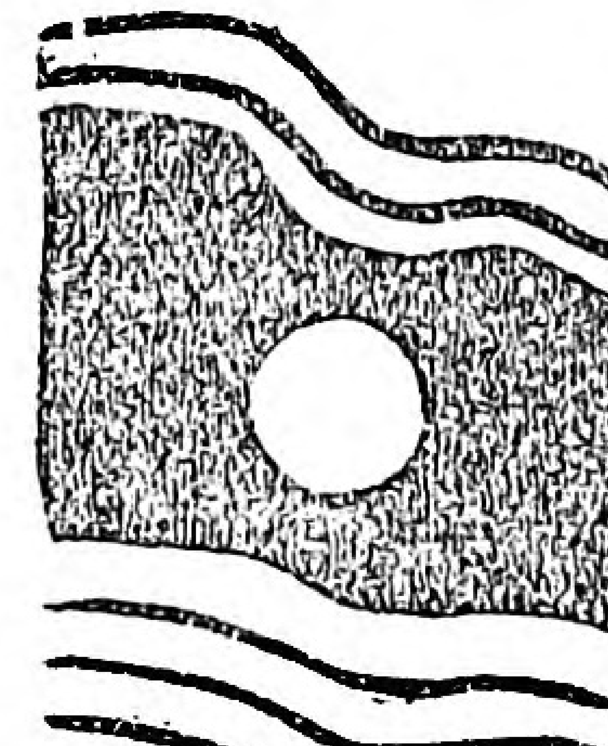
やうに記憶して居ます。一葉全集は女學校の二三年級の頃初めて讀みました。小説の方よりか、萬遍ないお世辭で如才なく人の機嫌をとるやうに書纏めてある書簡文の方で先へお馴染になつた私には、それに至つて、お坊ちやん育ちで世間と云ふものに對する理解力を餘り多く缺いて居た私は、讀みは讀んでもどこが上手なんだか面白いんだか、肝要な目を止むべき點にはとんと興味を引かず、たゞ文章が甘い位に心得て、「丈くらべ」や「にごり江」や「經机」をたゞ人の口眞似してどうのかうのと一ぱしな口を聞いて居たに過ぎませんでした。全くあの絢爛な一種の才筆に幼稚な頭腦が譯なく魅せられて居たに違ひないのでした。其頃一葉と云へば何でも彼でも好きらしく思へて、誰にも斷はらずに一人でチヤンと自分の姉さんに極め込んで了ひました一度遇ひたかつた、一目見たかつた、譯もなく旦暮書簡文や一葉全集をよんでは思ひ餘ると夕方など暗い庭の椎の木の影等をながめながら一人でしく／＼泣いてた事もありました。一度などはふと友達から借りた泉鏡花の「田毎かゞみ」と云ふ本に一葉の墓と云ふ一文を見て、今考へれば御苦勞樣にもそれを丁寧に寫し取り、それを懷中に押こんで、學校の歸りから友達に内密――で聞えると皆から冷されますから――築地へお寺參りに行つて尋ねあぐんだこともおぼえて居ります ぼんやりお墓の前に行つて、其頃烏合會に出品された鏑木淸方の「丈くらべのみどり」と云ふ、一葉の墓の處にみどりが水仙を長い袖にかゝへて呆然と物思ふさまに倚り懸つて居る、其前懸の裾の處を淡い香煙が朦朧とかすめて居る、――雜誌の寫眞版か何かで見た圖面をそれとなく心に呼び起して居る内に墓男はさつさと手桶に水を汲んで來てさゝらで掃除をして呉れました。子供心にも其まゝでは何となく濟まされない氣がして、お花やお線香を買つて殘り少なになつて居た財布の底をはたいて、此男の手に握らせたのでした。其代り歸りには鐵道馬車にも乘れなくなつて、灯のついた銀座の通りをトボ／＼、お辨當箱下げて嬉しいやうな心細いやうな心持をして、家迄歸つて來た事を今だ

に忘れません。其が丁度暑さのとつつきのお盆であつた事も、そんな騷ぎ迄して夢中になつた位でしたからいつか古い明星に出た馬場孤蝶氏の談話筆記になつてる一葉女史追懷錄などは——丁度明治三十六年頃のでしたでせう、數へて見たら其時が恰も一葉の八年目に當つてると思つた事を覺えて居ますから——珍らしい旱天續きであつた、土用の中のしかも眞晝間を二十何間か本屋を尋ね廻つて漸く本鄕迄來て手に入れた時などは、淚がこぼれる程嬉しかつたものでした。ともすると學校で使ふ讀本のうらにまで夏子妹ていなどゝしるして一人で悅に入つて居たことも其頃の思出です。而してんなのぼせ方の甚しかつたことも一しきりで、それからは、人に「此頃一葉は如何」などゝ水を向けられる位、冷たかつたものでしたが、唯、比較的其等の書物から、遠ざかつて居たと云ふのみで、好きなことは同じことでした。けれどももう其頃は少しは眼が開いて來かけたのでしたが、それ迄は何でも彼でも假初にも一葉の書いた文章であるとさへ云へば殆んど反對的に金言玉什のやうに心得て居たものでしたが、漸漸と、小說の中にも好き嫌ひが出來て來たり、あれは趣向が古いとか、詰らないとか、彼是生意氣を云ふやうにもなりました。

今度あの日記を讀んで、第一に感じた事は、一葉女史が、丁度私が頭腦の中で此樣な風であらうと空想に畫いてた通りの生活をして居た事です。或はそれが私と或意味に於て略同樣の生活であつたにも原因するでせうが、半井桃水氏に對する態度でも、亦矢釜しく云へば戀愛問題の見方でも、取つたあの處置も、總てもしも私が一葉で有つたならば、必度あの通りに行つたらうと思はれるやうな事ばかり至る頁に見出される事でした、半井氏とのことに就ても、確か隨筆の中か何かで、云つて居た詞だと記憶して居ます、「もと〳〵沓を瓜田に踏み入れたのがこつちの手落であるから」と云ふやうな謹ましい意見を述べて居ります。決して一葉には世間の多くに有勝な輕卒な戀はとても思ひも及ばなかつた事であつたでせう、それを敢て許し得る大

膽な良心はもつて居りませんでした。そこへ行くと妙に年を取つたやうな氣で、餘りに怜悧な先の見え過ぎる目で、決勝點へ達する前にチャンと奇麗に身を引いて居ます。臆病なのか意氣地がないのか、勇氣を缺いてゐるのか、叉、さういふ點が却つて女らしく愼ましくつていゝのか人々に依つての思ひ〳〵でせうけれどとにかく餘んに想像が走つて居た傾きは確かに見えて居ます。日記でも私は殊に最初の部分の方に同情を以つて居ります。あの妹御の國子さんを連れられて向島の歌會ながら上野から枕橋の邊まで花見に出掛られ、歸りに長命寺で、おるすゐをして居なさる阿母樣の爲に櫻餅を買て、妹さんに持たせて歸す、幾月の幾日でしたか何でも暑い盛りの頃に夕方圖書館から歸られると、お母樣が行水の湯迄とられる、糊のついた薩張した浴衣も出して置かれる、妹さんが姉さんの好きなさつまいりも製らへて置いたと云ふ、何と云ふ美しく溫かい幸福な家庭の縮圖でせう。今の新らしい婦人とも呼ばれるやうな方々の目から見たら、自覺して居ないからとも云はれるでせう、けれども小說でも書く婦人として、此位穩かな謙遜な心持で有り得たことを私はむしろ喜ばしく賴母しく思ひます。短かい一生ではありましたが、一生涯をあゝして純潔な處女で通された事も、當人の身にとつては決して淋しくも辛くもなかつたことでせう、何故なら、女史の生涯に附纏つて一生をくるしましめた貧乏なるものが、まだ年若く弱い女の身として、其頃には殊に稀で人目をそば立たした小說に迄筆を染めさせた程身邊にさし迫つて居たので、一身の行末をどう定めやうかなどゝ云ふ問題の方へは中々考へ及ばない先きに慌たゞしく生涯の極めをつける死の時が參り早く到達して了つたものゝやうに考へられます。

女史の一生を苦しめた貧乏、これが一生の華を飾らした尊い報酬の冠となつたのでせう、天禀と云ふのもつまりそれでせう。日記などを讀んでると往々これが二十そこ〳〵の女の云ふ詞かと驚かれるやうな節がしば〳〵御座います。



天の夢

横瀬夜雨



序

長塚節君、かつて痔を病みついて、喉頭結核に罹り久しく福岡に在りしが、肺患亦起り、孤影孑然として故山にかへれり、其家に入る前日、我を訪ふ。

拝啓過日武井準氏來訪、大兄よりと申して新橋青柳のかすていら一折贈られ申候、難有御禮申上候、日外旅行歸りにお宅へ伺ひし折見かけ申候以來、時も隔り候爲先方より名乘られ候迄は一向分り不申、小生を訪ね參られ候人として初めは怪訝に存候程に有之候。同氏の噂は折々大兄より承知致居候事に有之候が、肺病の全治せし由など直接聞くに及びては只管羨望に堪へざる次第に有之候。小生は此病院を出たる上は、兎に角久保猪之吉氏を福岡大學に訪ねて參り申度心得に有之候ひし折柄大兄の從弟である武井學士を得て頗る心強く感ぜられ申候。二十日頃には福岡へ歸省、其上にて手紙を送らるべしとの事只々それを待居候。

一月に入りて寒さの募りし爲か、患部宜しからざる樣にも感ぜられ、少しは心細く相成申候。どうしても福岡へ參りたくて堪り不申候、死ぬとしてもそれでなければ殘念に有之候。新年になつてからは、病院へ音づるゝ友人もなく、二日おき位に參り候舍弟もちぶすにて七日以來一室に横臥したる儘に候。近頃熟々考へ申候。小生が若し大兄なりしならば、

女子文壇の才媛は必ず毎日の如く慰藉しくるゝならん。然しながら櫟の枯木に西風の吹渡るが如き索漠たる小生の境涯には婦人の情味は求めて得べからず、病院の庭に日にうとき山茶花の二三輪凍りて殘るを、朝毎に必ず霜を踏で見に行くを怠り不申候。山茶花は池のあなたに人の目には留らず葉がくれに萎んで寂しく候。これを譬ふるに女子文壇の才媛は溫室の蘭花植物の花なるべきか。然



才媛か、才媛か、われ若し都に在りて病まばくづれ山茶花地に藉くとも誰か來りてわれを看ん、多くは是かも小生には此花を見るの機會遂に來るべからず、山茶花の花に心を遣るのみに有之候。

小説の腹案二つ三つ成りたれど、筆とる勇氣なく候。如此にして心は唯九州に馳せ申候。先は御禮のしるしまでに右申進め候。匆々

一月

十五日

節

美辭を交換し、諛言を貿易して互によろこべる君だちなり。師といひ友といふも、嫁げば洒然として相目するに道路の人を以てする君だちなり。水に溺るゝ者を見れど、其裳の濡れんことを厭ひてちかづかず。火に燒くる人有るを知れど、其眉のこげんことを悲しみて反つて遠く去るにあらずや。

長塚君は鬼怒川の岸に、我は筑波の麓に、同じく明治十一寅の年に生る。家有りて室なきことも亦似たり而われは元來半死不具の軀、孤獨三十年を存らへたるは唯母有るが故のみ、君が寂しき世を送り來し三十五年の心のいたみ實に失戀は終に知るべからず。野花折るに任すれど、紅や紫や色は君が眼に映らざりき。好んで信越の山河を跋渉し寂しき天地に遊ぶを常とせしが昨年の末に至りて婚約成り、今年は君が家に、千の火、花を雨らして、新人春に驕るのよろこび有らんとせしに、たま〳〵君病む。

悲しくも君が病も亦不治の名をあたへられたり、喉頭結核！これまさしく死刑の宣告なり。三歳英吉利病にをかされて幾たびか死生の岐路にさまよひ、三たび足痿へて三たび生き、昨年來また餘病を發して未だ死せず、醜き哀殘の命を有せるわれに比ぶれば、長塚君は猶幸福の人たるに近し。

索漠たる心をいはゞわれは自らかなしむに禁へず、われは癈人也、生くれど福せられず、死すればよろこばるゝ命ならずや。

長く久しかりし三十年、幾夜の夢かわれに安かりし詩を解してより意軒り、氣昂りしかど、わが心なほ夢に怯えて、中々にひとりある夜をねがひしにあらずや「われは癈人也」知恥の念、身を攻めて…………天にせくぐまり地にぬき足してわづかに偸める生を思へをさなき日はわれにも華やぎて仰がれき、今は滅び行く日を歩めるのみ、きのふは人の愛に居りき、今日は人すべて北き去りぬ。

かつて九段坂を過ぐ、立ちん坊の油じめる埃を全身に浴びて縄の帶せるが手を組んで寂しく立つに逢ふ。またかつて船をかすみが浦に泛ぶ。友は金丸を飛して

鳥を落し、紫羅に輾ちて花を探る華冑の人なり、三叉沖に出る頃日西に沒して北斜に紫の筑波を見る。小べりに立てる蠟燭のはだか火はやゝもすれば滅えがちに誰漕ぐと無き舟はゆら〳〵と眞菰の中に漂ふ、響くは三味のつれ彈、音するはつゞみの音、美しき女有り蹁躚として、起て舞ふに、美しき男有り半玉の桴を奪ひて越後獅子を打つ時……海の面はすでに暗かりき、我は病ましき頭を舷に凭せて、三十五里の濤の聲を聞かんとせし、うしろざまに水に垂らしゝ右手の指をそと握りし女有り。

願はくば汝いぬるに枕無き立ちん坊をあはれむを止めよ、彼れは猶親ら其汗に生けり、汝に何物有りや。また船にして汝を誘きし妖女を憎む勿れ、媚を賣り笑を呈して世に生くるもののひとり彼れのみならず。げに獨彼れのみならざりき。女子は半製品なり男子に配せざれば全き人たるあたはず、見よわが長塚君は婚約を破棄して可憐なる人をとゞめてひとり九州に赴けるなり、この悲痛たやすく説くべからず。

人ならばうき名や立たん小夜ふけてわが手枕に通ふうめが香。やさしきは人の心哉、えにしの絲こゝに絶ゆれば天涯地角また逢ふべからず、妾が心君に許しゝかど終に容れられず、わが身はやく君に捧げながらこれはた贄とし享くるを肯んじたまはず、いとせめて涙をつゝみて根岸病院をおとなへば、君はすでにすでに在らざりき。

かくて彼女は他にゆけるなり。

夢中醉臥す巫山の雲、覺め來つて涙したゝる湘江の水、湘江の兩岸花木深し、美人見えず人の心を愁へしむ、已んぬる哉。

昨夜またわが枕頭に多くの人有りき、家兄また東京より馳せ到る。食鹽水を飲まされて、わづかに睡るを得たり、のち覺めて、さめたる『天の夢』をかなしむ

大正元年十一月六日

君、別府の溫泉はね、男の浴るとこは一段高いんだから首を突出して下を覗くと、居るわ居るわ、一杯の

白鷺だ。

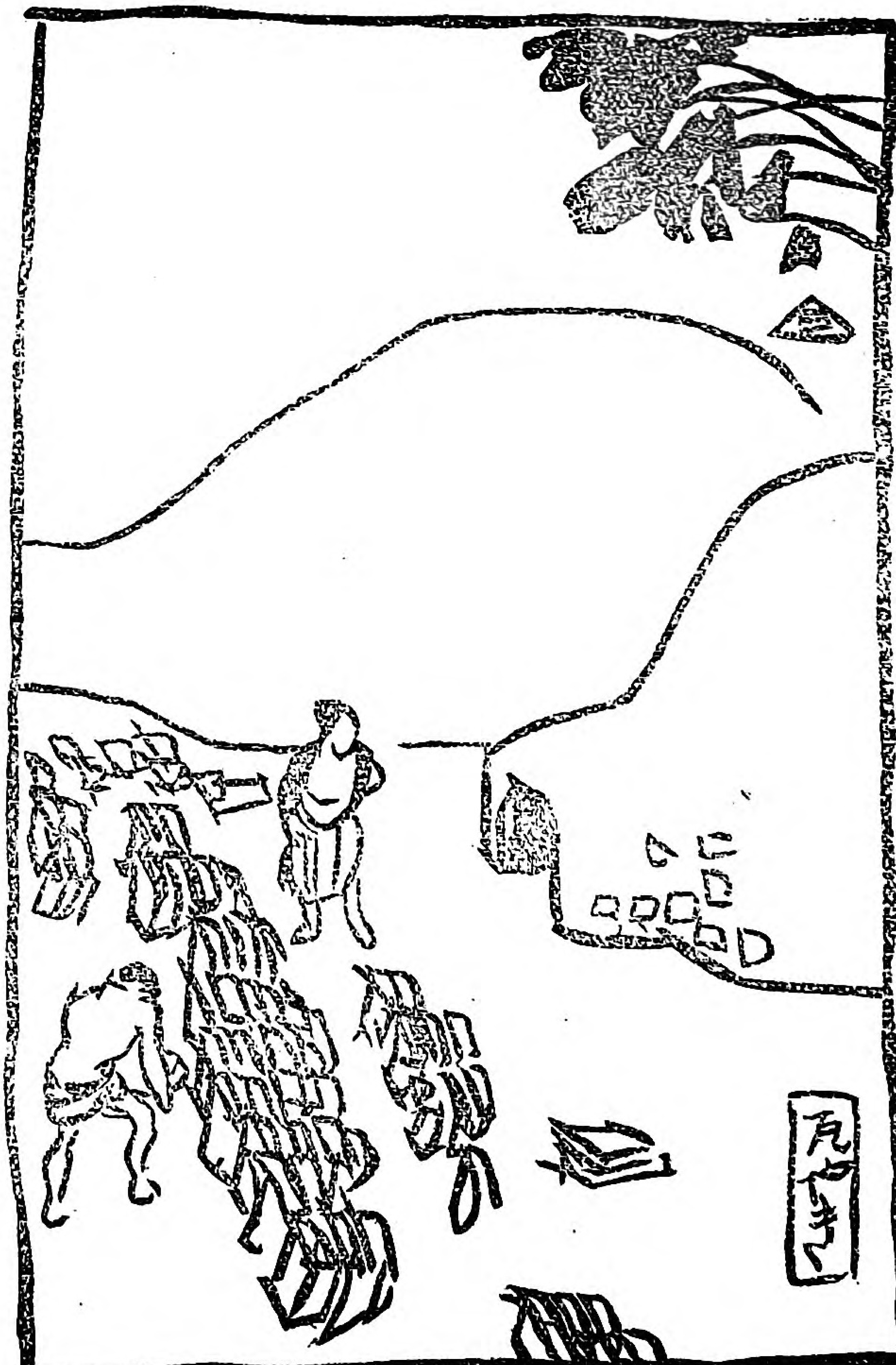
それは奇觀だつたね、どうだらう、それで君の妹を連れて行く氣になれるかい。をとゝしだつたが僕も平磯へ行つた、女は道義の觀念が緩いのかも知れないが風呂場で、平氣で立てゐるのを見るとたとへば別嬪でもにくゝなる。淺い海で一人の男がでしく／＼遣つてる前を、通りがゝりにわざ／＼後から其前を廻つていつた女もあつたし、尤もあの邊の漁夫は素裸も素裸、大手を振て船から上つて來るから驚く。

そりや君、湯にはひるといふ事其の事が赤裸々を意味するんだから、どんな者でも多少心がゆるむさ、しかし僕は見てゐてひや／＼したといふのは、船の出る時四人ばかり、めい／＼男につれられて棧橋へ來た。頭へハンケチを卷いてどういふ心か腕まくりをしてる野郎が中にゐた、無論着流しで、それから女連の中に、敏く目を働かして人の顔ばかり見る背の低い黑いのがゐた。汽笛が鳴り出すと大つぺらに握手の交換が始まつたと思ひたまへ、一人後の方でおど／＼してゐる笑ふでもなし悲しいでもなし、恥かしがつてもぢもぢしてるのがあつた、腕まくりの奴が手首を摑まへて、船の中の男と握手させたらうぢやないか、あゝして、あの無邪氣な純なる一人すらだん／＼泥ん中へ陷つて行くのだね。

網は到る所に張られてある、さうしてわざ／＼捕られに行く、美しき鳥がある、穢なき蝶もある、殷のかがみ遠からず、度すべからざる者豈不良少年のみならんや。思ひ／＼寢ながら長塚君の手を振つて語るのを見てゐた。

長塚君は大寶まちが來ると宅へやつて來るのが年々の例になつてゐる、今年も柿が葉がくれに見えそめし秋の祭が來た。君のとこのおこはゝ甘いと言つては屹度二膳づゝ喰べるのが、今年だけは喰ひはぐるだらうと昨夜は思つてゐた。旅の歸を東京からやつて來た今朝は、まだ顔を洗つたばかりだつた。たうとう今年も喰ひに來たなと笑うと、いや今日はやらない。乃公と一しよに根岸病院に居た奴等が皆死んで了つた、生き

殘つてるのは僕一人だから、これからは一日でも多く生きる工風をせねばならないなど沈み切るかと思へば讃岐の〻〻寺に義經の奉納した鎧が有る、殆どぼろぼろになつてるがそれで君、縅の絲の色が、まだあをあをと昨日染めたやうなのだ奈良の藥師寺だつけかには灰燼の中から取出した佛像が溶けずにちやんとしてゐたのが有る、お堂は燒けて了つたのに、驚くぢやないか、大紅蓮の中にあつて壞れもこはれもしなかつた。法隆寺へも三度行つた、君の行つた時は雨中あの庭をぴちやぴちや歩い



たといつた、案内の坊さんが法隆寺には地震がゆらない、此大伽藍の一寸一尺も傾かずかしぎもせんのは佛法の應護に因ると説いたので君はすべてを詩的に解したが、五重塔すら德川時代に手入をしたし、屋根も元は檜皮だつた。僕は矢張昔の人はえらいと思ふ。建築でも彫刻でも見る物皆ない、藝術的良心が頭に有つたか無かつたかは知らないが一刀三禮、心から佛に歸依し佛に信賴して鉋を執り鑿を手にしたからあゝした千古の貴重品が出來たのだ、日本のやう

な濕氣の深い國で紙に書いた物が千年以上保たるものはミラクルだ、西洋人が正倉院を參看して聖武帝の作つた紙を見て腹を立てたなどゝ面白いぢやないか。今日も此處へ來しなに大寶の八幡樣の御本社を看て來たあれもいゝ、今まで氣がつかなんだが、天正年間に立てたのだといふからざつと三百年にしかならないが、昔のやつはいゝ。昔のやつは皆一所懸命にやつたからなアといふ。

あれは下妻の多賀谷が建てたのだ、君の先祖も多賀谷の家の子だつたらう、高野山へ行つたんなら墓を見てくればよかつた、信長に逐はれた佐久間信盛や秀吉に放たれた北條氏直と同じ目にあつて、家康の爲に押込められて死んだのだからね、佐竹も馬鹿な目にはあつたが百萬石が二十一萬石に減らされたにしろ今は侯爵だ、多賀谷だけどうして德川に惡まれたらう。

それは俺も知らないが、小野子の城趾には美女塚が入水した夫人やお姫さん達の最後を語つてゐるぢやないか。それよか君一所懸命に仕事をしようぢやないか昔のやつはえらいよ。僕は『土』を骨折て書いたが、

幸に世間でも認められた。君も其やうすでは餘り長生もできまい、君の生活は一面悲壯凄慘だが、一面は豐潤圓滿である、似而非同情によりて慰めらるゝ時代は過た筈だ、もう天の夢は覺めたらう。

難有う。僕のくるしみは終生免れうる望みが無い矛盾した人格は矛盾した考への中に今日まで生かしてくれたけれど僕の空しき努力はたしかに終りに近づいたと思つてゐる、君はよく寂しき生活を嘆じたが、せうことなしにひとりある僕と違つてどうにでもなつたのに、あの女も嫌だこの女も好かぬと擇り好みが過ぎて寂しがつてるのだから仕方がない。人には言へないが君がまだ獨でゐると思つては僕はこれまで勵まされて來て、世間の奴等は不自由とか何とかをかしな口實を設けて結婚を急ぐのに、君は獨衆愚の中に立つてゐた僕のやうに硯の水が汲めぬぢやなし、本棚から本が取れぬでもない、事實僕よりは強い人である、其強い君すら群を離れて一人居ると思つて、心強く生きてゐたせめてあと五年は生きて『死刑囚』を書きたまへ。何か書かねばならぬとは僕も考へてゐるけれど、ひつきりなしに苦悶が來るので大きな物に手がつけられぬ。君は『土』が有るから憾があるまいけど、僕には何にも無い。花守、花守日記二十八宿、夜雨集、四卷の內容を說明し得る自叙傳を書いて死にたいとは思ふ。迷惑す

る者が多いので生前に公にすることが出來ないけれど

そりや君ぜひ書きたまへ。迷惑する者つて、Rだけは當人覺悟だらう。Rが君を離れた理由は××が坊主になるのは嫌だから妹に×××を續がせるといふのだつたね、そして××を續いだかい。僕はあの女のやうな詩的性格の人を見たことが無い。常陸へ來れば物質的には不幸のどん底に陷るかも知れなかつたが、君を欺いてまで賣つた良心のあたひが××の奥さんでは終生苦痛は忘られまい。あまりにくまない方がいゝよ。

畢竟女の連中は奴隷根性が脱けないのだ、奴隷と言つて惡けりや宿命論者よ、何かに行きつまるとすぐ運命をかつぎ出してさつさと片づけるから、すべてが滑稽だ。Rが姓を更へたのは六ヶ月の後だつた、兩親に迫られた爲か早く奥さんといふものになりたかつた爲めか知らない。兎に角廢人の胸に手を置いたのは永遠の罪である、宮城縣に小野といふ代議士がある其末の娘は、×女學校の鼻じろと言はれた夫を葬つた晩に第二の夫を求めた。有名な『森林生活』の譯者のもとの戀人は男が學士でないから嫌だと、他の男――無論帝大卒業の男に走つたので、憤慨して文科に轉じてからあの飜譯を出したんださうだ。が背德だ不義だと憤つたところで女の心に何がひゞかう。われ〳〵と同じ年まで男を持たずに居れといへば花風病になる位が最後だらう。僕は廢人だ。

僕は廢人だ、さうだ君はさう思つて慰めるより他は無いのだ、君がそれでなかつたら無論Rは君を賣らずにすんだらうし………尤も君の樣に女の戀を唯男がほしい爲だとばかり言ふのは酷い、あれでも美しい夢と醜い現實を捏ね交ぜてゐらあね、君は叩き大工よりも馬の臀をひつぱたく連中よりも潰しの利かぬ人間なのだよ。僕は君に同情するよりもRに同情する、一時は君の前にひざまづいて總ての誇を棄てたぢやないか君が其時『征服』しなかつたのが惡いのだ。………

もう止めよう、どれ寫眞でも見せたまへ。と手を延べて床から十一卷のブックを取下した、君はこんなに美人をお弟子さんにしてる。おれにや一人無いなどあつちこつち引くり反して見てゐたが、僕の寫眞も一枚挾んでもいゝが、挾んでくれるかと聞く。くれる所ぢやないあの女裝してとつた、あれを呉れたまへ、あの寫眞は傑作だつた。頰冠の顏はすつかり別嬪になつてゐたが、足の八文字に開いた所が氣に入つてるのだあれをくれ給へとからかへば、ありやいけないよと手

を振つて、どういふもんだか島田は少いねなど一つ一つ繰る。あゝこゝに面白い落書がある。君はよくらくがきをするぜ。

如何なる神の戯れを以てしても永久に再びかへらぬ處女の純潔を其人の夢見る誇より奪ひて、物質的なる永久の汚點を、雪の如く白き女のインノーセンスの上に沁みつけしある一男子！美しき犠牲を其獸慾の爪にかけて、其肉をも其血をも其心をさへも己一人の恣なる貪りに供へて舌なめずりするある男……

それはねそこにゐる女が呑んだくれの男と結婚をしたのをあはれんでうつしておいたのだ、御當人もうケロケロかも知れないけど。

無論。女には深い思索も無ければ強い悔恨も無い。ずる〳〵引張つて行かれてそれで終るのさ。もう歸らうか知らん、二里半有るから大へんだ。泊つて行きたまへ、久しぶりぢやないか。

いや歸らう、母も待つてる。君この茶碗は棄てさしたまへ。

おつかないな、茶碗を打捨るなら急須も、盆も、それから栗を剝いたナイフもだらう。その座布團はそれでも絹だぜ。寫眞帖もおつかないな。

さうおつかながらなくてもいゝよ。

シヤツとズボン下だけで笠と呉座を首へぶら下げて千金丹賣のやうにして歩いた當年の長塚君とは違つてゐた。今日は着物も羽織も、立派だつた。大分めかしてる、それぢや三十五錢づゝでは歩けまいとなぶつたら、うん今度は、大名旅行をやつたんだと言つた。自分は寢たまゝ見送つた。倉と母屋との庇の下を通つて出て行つた。

『土』の序に夏目さんは長塚君を豪家の人として紹介した。『新人國記』の著者が炭燒きの子だと書いた故だらう。長塚君は、僕の祖父かね酒を呑むと僕等をぐるりへ置いてよく君のうちの自慢をしたつたよ」と語つたことがある。下總の人である。

宅の門は三分卽ち七十五錢で建てた門だ天保十三年失火して村中を燒いた爲、竹槍で圍まれて、四棟殘つた倉を皆に分配するか、主人を殺させるかでなければうち中たすけて置かぬとおどされて（村中へ遠慮して建てた紀念の門である。夏目さんもあの門では豪家の折紙をつけて呉れてはあるまい。

長塚君はまたあの門から來るだらうか。

神戸の印象

森川葵村

私が神戸に赴任してから最早三月になる。誰しも知らぬ土地を踏む時は多少にもせよ一種の驚愕を感ずるものである。驚愕――この文字が多少當らぬかも知れないが、誰しもすることである出發前又は出發の途中未見の土地の有樣を色々と想像する。而かもその想像と實際とが相交接する時、假令其の想像が當つたにせよ、外れたにせよ、うら淋しいやうな何かそわ〳〵した而かも心うれしく驚愕が胸を打つのは、旅行者の知る所である。

併しその驚愕も最早追々薄れてしまつた。私はまるつきり平凡な、そして騷がしい生活をして居る。

農奴が開放されて人と土地とが離れた。貨幣經濟が樹立されて家計と企業とが分れた、貨幣と云ふ恰當な乘馬が得られて、人の營利衝動は盡未來當てもなく、限りもなく只驀進、又驀進する。いや人は當てもなく、無意識に走る。併し一段高い所に昇つて見るとそこらは、立派なからくりが出來て居る。宏大な機械が有つて自然に廻轉して居る。人間と云ふ哀れな動物は營利衝動と云ふ悲しい贈物を神から受けた爲猿の樣に木から木へ遊んで歩くことも出來ず、駒鳥の樣に赤い實を啄みながら歌ふことも出來ない。終日終夜この宏大な機械――不思議の巨人に虐使されて居る。兎に角今日の世の中は人の世の中でなくて機械の世の中である機械が眞黑な、いかつい肩を聳かしてこの世の中を支配して居る。

機械の世の中、かう云ふ意味は一度此の土地を見た人にはすぐ了解が行く、海岸通りをチツト、ブツクを持つて走つて行く、ボーイオフツスの中で帳簿を繰る

社員、波止場で鈴を鳴らす稅關官吏、是等が動くのは一車軸、一齒車の廻轉するのと、何が違ふであらう。港へ入つて來る船、出て行く船、旗が振られる。クレーンが荷物を揚げる、大なる運動と、廻轉運動と上下運動と、それ等相入り合つて『二十世紀の社會』と云ふ一大機械、一大工場が構成されて居る。居留地の赤松やアカシヤの並木は偶々一の商標の樣な裝飾をして居る。

所謂自然主義なるものを唱へた文士さん達、君等のペンは未だ〳〵生溫いインキに染まつて居るのを氣付いて貰ひたい。詩とや、歌とや、君よ、此のせんまい仕掛のオッフイスの一隅に、幼い細い巡禮の和讃が聞えたと思ふのは、私の錯覺であつたでしやうか、いやそれとも機械の幽かな泣音でしやうか。

此の世の中にあつて、此の土地にあつて、人間の凡ての生活は皆商業取引になつて居る。藝者招ぶに傳票を振り出すのは此の土地を踏むだものゝ誰しも知る所である、卽ち勞務は借方に、人各々勘定貸方に立つて簿記の仕譯が起る。道德、倫理是等の凡てを覆さんとして居る亂暴な巨人の手が社會に觸れんとしつゝあるのを氣付かずに居る人よ、少くとも是からの世の中に仁義忠孝と言ふ樣な標語は何等の意味をなさない。是に取つて代はるものは簿記の借方貸方である。一錢の密柑に對して一錢の債務が生ずる。一錢の給付に依つて一錢の債務が消える。凡ての社會的生活と私的生活とを問はず、斯の如くにして始めて秩序立てられて居る。母の背に眠る稚兒よ、正直な私は汝に人の聞かないアドバイスを與へよう。私の言葉は幼稚園の褓姆の敎訓に比べると鋼のやうに冷めたい。併し心して聞き給へ、汝は母から受けた一錢の菓子に對して一錢の貸方殘高を有することを忘れてはならない。戀に醉へる少女よ、汝は汝の情人のキッスを度每に貨幣に換算するの用意がなければならない。

あゝ貨幣は凡ての價値の指數になつた。大倉山公園を寄附した大倉喜八郎の忠義は何萬圓に値するか、赤松の下で繩飛びをして居る一年生に聞き給へ、彼は黑

板に書かれた加算よりも容易に答へる。道徳的價値を貨幣に換算する——この最困難なるべき、否昔の人の困難とした問題を二十世紀の一年生は最も容易に答へる。日本外史を讀むで南朝を慨く青年よ、活動寫眞と不見轉藝妓に占領された湊川の新開地を見て時代の變遷を知り給へ。

※　※　※　※　※　※　※　※

元町通りに灯が點いて、看板娘が夕化粧をして店へ出る時分、私は疲れた身體を運ばせながら、時には此の土地によくある霧のやうな細かい青い雨の粒をサージの上衣になつかしみながら、宿へ歸るのを常とする

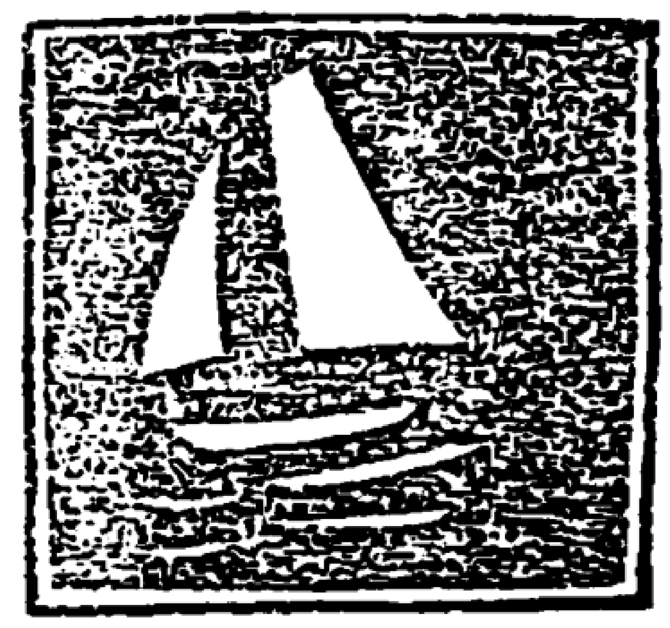
夕餉も終へて風呂を浴びて、さて机に向ふが、起きて見ても寢て見ても六疊の座敷に、自分は「宅に歸つた」と云ふ氣のしたことが無い。路傍の茶店に休んで居るとしか思はれない。私は到底三界に家を失つた。

噪音を消すには矢張噪音を以てするより外は無い。今は喧噪こそ身になつかしいものとなつた。自分は、「寂しみ」なるものを恐れる。その冷い手に頸を撫でられる時私はハッは自分に返つて、今更の樣に自分の身が嘆かはしくちやうどそれは自分の振り捨てた零落の女に袖を引きとめられた樣に歩みをとめて、居留地の白壁に顔を當てながら泣く、蟋蟀が鳴く……開港場でも秋だもの、夜となれば潮の色が冷めたい……

鳴れ、響け、汽船の笛と活動寫眞の樂隊と、税關の鈴と、自働車の唸りと、一時に鳴り響いて冷い手を追拂つて呉れ、私は行から再び喧噪の巷へ、店頭の四十年增が關西一流の淫らしい眼つきをするのも異ぢやないか。蕎麥屋や汁粉屋の二階に藝妓が上ると聞いたら東京の御人は驚くだらう、併しそれも陽氣ぢやないか

東京を離れるとき松聲會に行かれぬのを悲しく思つたが只ペン〳〵鳴れば三味線である。白粉の匂がすれば女である。引過ぎの靜けさに新内の流しを聞くことが出來ずとも、福原に灯は眞赤に點いて居る。

酒で酒を消す、支那人が阿片を好む樣に私は人一倍淋しがりの私は喧噪を以て喧噪を消たい、凡ては只此儘にあれかし、只此儘に——。



自殺したる若き夫人

（之れ最近の事實なり、去る十月廿二日の拂曉、多量の劇藥を仰ぎ二十二歲を一期として此世を辭したる〇〇〇子、記者も亦溫雅貞淑なる彼女には一面の識あり、其死を聞いて痛悼禁ずる能はず、新聞にも出ず、世にも知られざるは餘りにいたはしければ、此處に彼女の親友白木夫人を煩して其死を公にする所以なり（記者））

白木いと子

女といふものは斯迄に弱いものでせうか。眞に弱者と云ふ言葉を私は近く一人の友の上に見出した時深い悲みに搏たれて了ひました。弱いといふことが美しい女の生命であると思はれた時代はもう去りました。今さう思ふのは誤解では無いでせうか、自然に育まれた柔順な心一つを守つてわれと身を犠牲にしたSさんは眞に現代の弱者でした。

あの丸い顔、白色な、そしてキツパリと刻んだやうな目鼻立、わけて初々しい人懐つこい瞳をもつたSさん、Sさんの面影はもう二度と現實の世界には見出さません。幻ばかりはいつまでも私の胸に強い印象を殘してゐますけれど、呼んでも〳〵Sさんは再びかへつてこない人なのでした。

Sさんは東京に生れた人でした、慈愛深い父と母の間に末子として生れた幸福な子で、その上には三つ違ひの兄さんと七八才も隔つた一人の姉さんとがありました。年の多く相違した姉さんとの間には心持の共通がとかくしつくりとはゆきませんが兄さんとの仲は他目にも羨やましい位の親しさがありました。あんちやん——Sさんは兄さんの事をいつも恁う呼んでゐます子供の時から呼慣れた言葉が幾年たつても抜けません意識して居ても時折人の前で兄さんを捕まへて又このあんちやんを繰返しては笑はれたものなんです。Sさんの其兄さんも歌を作りました。文章も書きました。五六年前の本誌を取出して眺めますと、和歌欄の一隅にSさんの名が見出せます。本誌の愛讀者としてのSさんが初めて自分の名と歌を活字に組まれてあるのを認めたときの歡喜はどの位でしたでせう。

山の手の靜かな處に作られた平和な幸福な家庭、そこへ初めて私がSさんを訪問した時の印象は未だに明

瞭してゐます。袖の長い派手な着物に、ひわ色の兵兒帶を結んで下げて、白い西洋前掛した可愛い娘、それがSさんでした。

慎ましやかな物蔭に身を置いて聲高くは物もいはないやうな調子の、其癖人懷つていづたらないのです。恐らく我儘な世界を鳥渡でも覗いたてとのない柔しい女といふのがSさんの事でせう。氣の弱い壓せられゝばその壓迫に堪きれないといふ、宛で風の前に震へてゐるひなげしの花のやうなおの丶きがSさんの感情をよく説明してゐやうとおもひます。



可愛いく人、さういふ私の心持はSさんを捕へて放さなくなりました。どうしても自分の妹のやうな氣がしてならない

——Sちやん—

—暮れてゆく花畑の中に都會の空なつかしく、優しい俤をよんだ事もいく度でしたでせう。Sより、お懷かしき姉樣へ、綺麗な字はいつも私の心に云ひ得ぬ喜を與へました

櫻はまだ笑はない三月の中旬十八の矜を白襟の清さに見せてSさんは山の手から下町へと、新らしい運命の下に移されました、一人放たれて人の妻になる、世心なれぬ

處女の胸のわりなさ、まだ寒い風が熱した頰を冷く吹いて、Sさんは俥の上に湧いて來る涙を禁めえませんでした。

一人の男と一人の女と、お互に見も知らぬ人が只一度顔を見合つた計りで夫婦關係を作つてゆく。萬人がする其眞面目な滑稽をSさんもして處女の名を十八のゆく春に葬つたのでした。その事をきいた時、あの清い處女を、あの若いSさんを――と私は傷ましい涙が迸りました。妻とよぶべく餘りに傷々しい若さをもつSさん、私はいつまでも／＼Sさんを若い處女であらしめたかつた。あの純な感情をもつたSさんが溫かい抱擁から放たれて一人冷い人生に歩んでゆく――私は何物かを奪はれた寂しさと淸らかな處女を傷む思とに堪へ得ませんでした。

何故知らして下さらない。何とも知らせのないSさんにかう恨んでも見た。勘忍して下さい、はづかしいのですから、Sさんは眞個にいぢらしい人でした。

活動寫眞館の多くある、年中人出の絶えない處、複雜したものゝ音、混交したものゝ匂ひ、縞物きた男白粉の女、前の通りを電車が走つて、朝から晩まで動いてざわめいて已まない町、Sさんの嫁つた家はそんな處にありました。

父母によつて選ばれたものに對して只おとなしく嫁いで行つたSさん、表面は新妻の幸福らしく見えましたけれど、云ひ得ぬ内心の要求は時たまの手紙に私寂しくつての一語、私は人知れず暗涙をのみました。

家作持のしもたや、學校出た計の旦那樣はある處へ務めておいでゝした。生活はSさんのお實家よりも豐かでしたけれど、趣味の違つた配偶や周圍の空氣の壓迫はSさんにそろ／＼苦痛を感じ初めさせました。

そんな束髪でなくてゝらの人が結ふ風に、衣紋をもすこし拔いて――髪のゆひぶりからしてお姑さんは周圍の強い色彩の中にSさんまで染めさせようとされました。

すきな歌も何處へやら雜誌も見ず、從つて山の手にゐた時の友達とも段々に遠ざかつて了つて、只一週間目ごとに來る仲好の兄さん、そればかりが尤も親しく待たるゝばかりになりました。

お姑さんは能く可愛がつて下さるけれど昔の方ですからねえ、出すのがお嫌ひですの、初めてSさんの嫁つた家へ訪ねた時は私も姓を改めてもう人の妻となつてゐました。Sさんはかう云つて懐かしい笑顔を見せ

ました。隔てのない前と變らない樣子を見て、私はSちやんは仍且Sちやんだとうれしさ、心やすさ、希はくはての人の上に只祝福あれとばかり。

　時の流れ日の歩み、一年二年は早くもたつて了ひました。手紙を書きたくても中々思ふやうにかけません、と書いてあつた。さうでせうねえお嫁さんではと自我を沒了してひたぶるに只柔順な人を私は思遣つていとしがつてゐました。語學校出と聞ましたけれど、Sさんの旦那樣は平凡な人らしい。折角習つた露語が寶の持腐れで勿體ないとSさんにきいた事もありました。お姑樣といふ方が旦那樣の眞のお母樣ではないのでいはゞ爲さぬ仲、けれどもお姑樣はそりやよく可愛がつて下さるといつもSさんはさういつてゐました。

　一夏、露國の觀光團が來た時に團長の何かになる婦人が暫時の間Sさんの處に泊つてゐた事がありました。Sさん――露婦人のマヽさんは名を覺えていつもから呼びました。優しい性格のSさんを非常に愛して一緒に寫眞撮つたり入浴したり、Sさんの着物をきてマヽさんがSさんと一緒に立つてる寫眞を見せて貰つた事もあります。誰にでも愛されるやうな可憐なSさん、雖然どういふものか旦那樣がSさんに對する愛は餘り深くないやうに思はれました。

　三年にもなつて子供が出來ない。もう孫の欲しいお姑さんはこれが心配の種でした。時々遊びに家を明ける息子も子供があつたら少しは落付くだらうに――さう思ふお姑樣の心はSさんを婦人科の病院へ入れる事になりました。暑い夏を病院の中に半月暮して出たSさんは仍且子供が出來なかつたのです。醫者は確かにできると云ふのですけれど――寂しげにさういつたSさんの言葉はまだ歷然私の耳の底にのこつてゐますけれど。

　寂しくつて〳〵仕樣がない、心が闇の中に引込まれてゆくやうに思へる。そんな言葉は此春頃から時々書いたものに見えました。Sさんは可愛想だ――かき抱いても上げたい思ひ、雜誌など時々送つては寂しさの幾分をも救はせたい願ひなのでした。

　朝の片附物も終つて臺所から郵便受箱を何氣なく見た目にはひつた白いもの、とりにいつたら夫れはSさんからの葉書でした。

　會ひたくつて〳〵ねえ、おひまがないの、今日は來て下さるか明日はいらつしやるかと我まゝな思ひばかりして毎日Sはまつてゐます――鉛筆の亂れたかきぶ

り、ゆく、ゆくといつては行かれないでゐた私をSさんは待兼たのでせう。ゆきますよ、ゆきますとも。主人の許を得るや否や直ぐさま私はSさんの許へ走つた電車で半時間、あひたがつてゐて會へなかつた三年振のSさんは仍且娘々した若い人でした。

丁度Sさん一人でお留守番してゐた所、宅ではねお午過から獵に出かけましたのよ、泊りがけで。ちよいちよいお出かけですの。え、もう鐵砲だと夢中ですからね。厭はしい影がつと私の胸を過ぎました。色々な寫眞をSさんはだして來て見せました。御夫婦で撮つた寫眞、それを手にした懷かしげなSさんの瞳の色、Sさんは旦那樣を確かに愛してゐました。

周圍への氣兼、表面には見えぬ夫婦間のそりの合はぬ心持、Sさんは內心苦悶の一端を泣いて語りました此夏以來兎角身體がすぐれないでよく寢る事があるといふ事も話しました。簞笥の上には薄黃色い水藥の瓶がありました。お醫者はヒステリーだ、貴女のやうな病氣はいくらでも起せるといつた相です。

Sちやんの苦悶の底にはまだ何かある。もつと何かあるに違ひない――さう思ひつゝ歸つて來た私は、何て柔順なんでせう。氣の毒な位ですと主人に云ひました。それから四五日たつてよこした手紙には既うお目にかゝれないかも知れないとか、お二人の幸福を祈るとか常ならぬ言葉がありましたから、貴女のいふことはどうもよく分らない。眞個の苦悶の根本、心の奧底からなぜ話して下さらない、聞いた以外に秘したものが必度まだあるに違ひないと思ふ。是非逢つて聞度いと引返し返事を出しましたら其夕暮來たのは二三日の內にお訪ねするといふ葉書。

其日とは思ひもつかず私は重要な家用の爲に親戚を訪ねて歸りはもう暗くなつて了ひました。電車を下りるとあゝ丁度よかつた今電話をかけようと思つた處と云ふ主人の聲。Sさんが來てまつてるのだ早くおかへりといふ主人を後にしてあの急な坂を私は馳下りました。下駄ぬぐや二人は嬉しさに抱合つたのでした。恰度戀人のやうに。

溫かゝつたけれど荒れてザラ／＼したSさんの手の觸感があやしくいつまでも私の心を曳きました。

何も皆運命だと諦めてゐます、とSさんはわびしい表情を見せた。秘められた苦悶はごく表面計り乍らての時語られました。旦那樣の道樂、それから離緣問題も起つてゐるらしい。實は此七月にも家を出たのです

と話しました。それは先方が詫る爲却つて無事にすんだけれど夫れ以來の蟠はきいてゐても察しる事ができました。慰めるにも慰めやうのない氣の毒さ、電車道まで送つて別れましたが今日は五六軒も廻つたといふてとがSさんにしては不思議だと夫れ計り氣になりました。主人が傍にゐなかつたらもつと具體的に委しく心から底からきくのだつたにとむづ痒いやうな思ひし乍ら、すぐ出さうかと思つた手紙を用に紛れて二三日經つた朝出して其午後私は又外出をしたのです。黄昏た頃家へはひると慌しげに主人は一枚の葉書を渡しました。



それはSさんの婚家からのでSさんが急病で死んだと書いてある。私は葉書を持つたなり不覺の涙に咽びました。前日、今日はどうでも會つて歸ると晩く迄まつてたSさんはお別に私の處へも來たのでした。覺悟した心靜かに風冷ゆる曉の枕の下から取出した劇藥はSさんの二十二といふ短い生涯を現實に絕つて了ひました。私の手紙

はSさんの目に遂にふれませんでした。死ぬとしつたら彼時強ても禁めて放さなかつた物を、一人の妹を失ふた心持して私は限りない悲愁に泣きました。約婚かと迄人に云はれてSさんを唯一の寶持つやうに慈まれた兄さんのお心は奈何でせう。更に又遠い露西亞の空、きいたマヽさんは何ゝ悲むでせうか「現代の世に生きるには此子餘りに淸かりしかば」と番町敎會に名高い彼牧師も訪ねて涙を落されました。Sさんは基督敎徒だつたのです。

　何故に自殺したか、一人秘めて一人悶えたSさんは打明けるといふ事が出來ない人でした。Sさんの御兩親も兄さんもSさんの死因をちつとも御存じないのです。聞いた處から推せば餘りにSさんの死因は單純だとも思へます。純にして濁らない處は淸く貴いけれど慽う迄突詰た心は餘りに稚くはありますまいか、男といふ者をもう少し理解することが出來たならSさんは必度死ねなかつたでせう。破壞は貴女の幸福とは思はないと書いて上げた手紙は見なかつたけれど破壞せずに其代りSさんは我身を屠つて了ひました。

　十月二十二日、それが實にSさんの毒を仰いだ日なのです。事の眞相は堅く秘されて新聞へも鳥渡も出ませんでした。尤もSさんの嫁つた家は其區で有力な人を親戚に持つてゐましたから。

　遺書は死ぬ一週間も前にかいてあつた相です。無論あゝいふ内氣な人の事故死因など書いてありはしなかつたでせうと信じます。死ぬ位ならなぜもつと委しく打明けてくれなかつた。それが只何時までも殘惜しいことに思はれてなりません。一人の妹を失つた兄さんは集を編むといつてSさんの舊い歌稿等を今頻りに蒐集中ときゝました。

▲或る日の青鞜社の研究會――青いクロスを掛けた卓を部屋の正面に据ゑて、後には黑板を吊してあつた。萬年山の裏庭には樣々の色の菊が盛りだつた。色の白い鬚の無いA――先生はダンテの神曲の丁度地獄のあたりを一節づゝ讀んでは説明していつた。四つ並べた黑い小さい机に數人の女は各自うつむいて自分の書物を見てゐた。世間の理解の無い口から何と云はれやうと此女達は、其を笑ひかへして、自分の行く道を歩いてゐるのだ。此女達の眼はいつも生々してゐる。なにしろ此元氣な女仲間を見たら誰でも氣持がよい筈である。(續)

大日本ない事見立相撲

大關　丹波井に河むらに鯉を喰ふ者なし
關脇　對馬神主鳥を喰ふことなし
小結　熱田に竹の子を喰ふことなし
前頭　西ノ宮に巫女なし
前頭　春日樹木用に使ふことなし
前頭　北國にかつをなし

同　三河に年越の豆喰ふことなし
同　久呂田城門さすことなし
同　初米の城塀に白壁なし
同　一心寺の僧黒衣の外着ることなし
同　和布刈の神事神主の袖ぬるゝことなし
同　天王寺の雨垂落の下にかたつくことなし

同　八丈の島にはうそうなし
同　椿枝の油水に浮くことなし
同　京濟水やくら石盲人行當ることなし
同　京の借家につけものなし
同　長崎女は眉毛そることなし
同　律宗の僧に官位なし

爲御覽

行司　三輪に神殿なし
嚴島植木伐ることなし

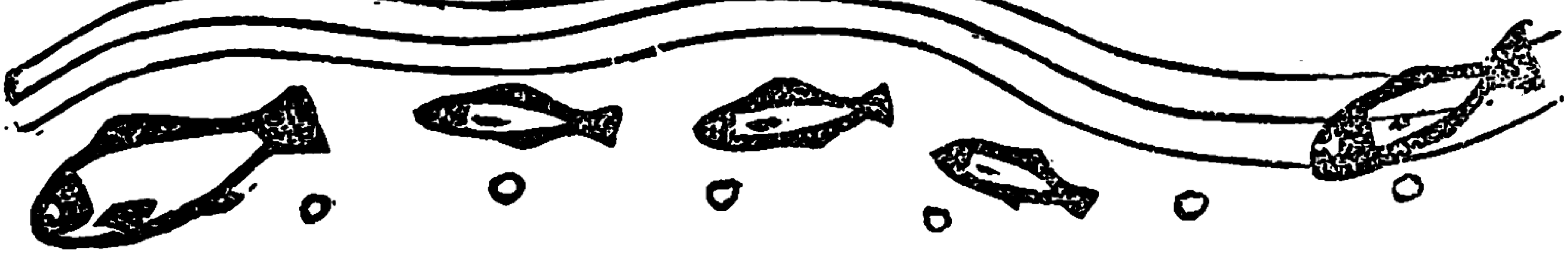
勸進元　越後の海に冬船の通路なし
差添人　攝州住吉の社戸びらなし

和田信次郎氏所藏

大關　遠州参宮せぬもの縁組なし
關脇　八幡に鳥喰ふことなし
小結　尾張の宮に玉子喰ふことなし
前頭　高津の宮に神主なし
前頭　北國まくり草生ずることなし
前頭　土佐日下近くに堂舎作ることなし

同　春日の神主鹿を逐ふことなし
同　三河須茂の城に隅櫓なし
同　和泉家原寺に石の窪み水溜ることなし
同　伴僧衆はわげさかけることなし
同　平戸の島に茶釜用ゆることなし
同　出羽越後の界に山の石に人が當りてけがなし

同　肥後天草壹岐の邊はうそうすることなし
同　ひきの油水に浮くことなし
同　二月堂廻廊の燈心の火つくことなし
同　大阪明石町に初夜うつことなし
同　太夫天神は足袋はくことなし
同　播州龍野にあしがるなし



無名婦人傳

(一四)　女の仲買人となつて吾子を一人前の醫師に仕上た苦心

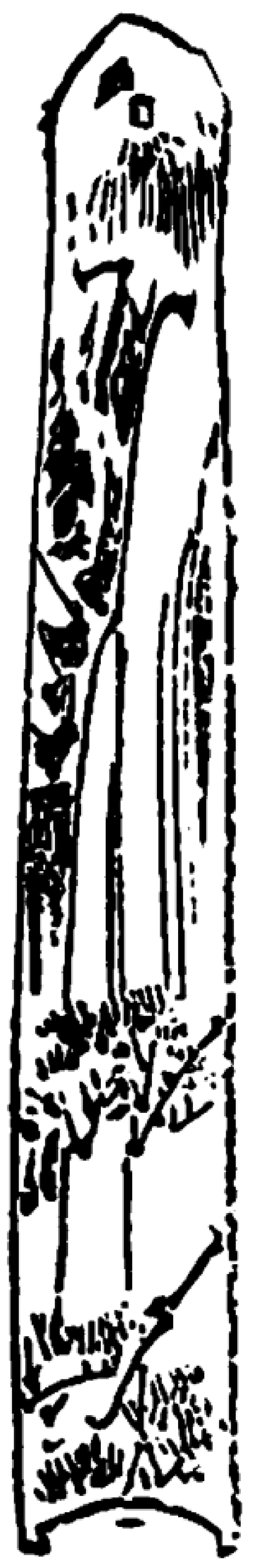
百合子(越後)

私の叔母は一書肆の支配人の所へ嫁入りしましたが、二十七歳の時に二人の男女を殘して夫は死にました。叔母は殘された子供を立派に育てねば、亡き夫に申譯がないと思つて、當地は幸石油地故株式が盛なので、女仲買人になりました。仲買と云ても門戸をはつてるのではなく、毎日相場を檢べては、得意先を廻つて、僅の口錢を貰ふのです。息子が中學校から千葉の醫專へ入學した時は、毎月どうしても二十五圓から三十圓の學資が入るので、隨分難儀したさうです。當時の苦心を、叔母は次の樣に話しました。少しでも人樣から補助していただいては、開業の曉に肩身がせまいわけだから、それでは氣の毒と思つても、景氣不景氣は常にある事ゆゑ、朝は早くから起きて、內職をし、知己をたづねて何處へでも廻て步て、少しの暇もなく働いて居りました。幸な事には息子が孝行な人で、お母樣僕アせい〴〵儉約しますから、そんなに心配しないで下さい。折角卒業しても、お母樣にもしもの事があつては、何の望もありませんから、學資の事など餘氣に掛ずに少はお甘いものでも上つて下さいと云ひましたけれど、人樣に聞けば、醫專へ入學なさる樣な方は、皆資產家なので、着物なども皆さんは絹物を召して被入るし、時々は洋食屋位に出掛なさるつてのに、宅の子供は私の着古した紡績物位で辛抱をし、お小遣なぞも餘裕がないので、皆樣のお交際なども出來なからうに、それを私に心配させまいと思つて、僕ア充分ですと云つてるのかと思ふと、實際買てくれと云はれるよりも身を切られる程辛う御座いました。然しいや〳〵てゝが一番大切だ、餘り裕福にして惡い道にても這入れては、却つて子供の爲によくない、それよりも將來開業する時の

用意に貯金して置いてやるのが、親の誠であると思つては、辛抱しました。長い〳〵と思ふた四年も夢の間に過ぎて、昨年成績もよく卒業致しました。かうなるまでは何女仲買人位で醫者に出來るものかと、半ば冷笑の眼を以つて見て居た人も今こそ見返してやれると思つて、なんだか肩の重荷が取れたやうで、やつと安心致しました。が私も親一人子一人の四年も別れ別れに暮したのだから、（尤も女の子は十歳の時に親類へくれましたので）すぐ國で開業してくれと申しますと、自分もさうしたいのは山々だが、折角これまでしたのだから、比較的出世の早い海軍々醫にして呉つて申しましたけれど、私はもう此先お前を手離しては淋しくて仕方がないからつて聞かなかつたので、息子も思ひかへしそれでは卒業すぐ開業しても、人樣も信用なさるまいからと、京都の大學校へお願して、一年間耳鼻科の助手をしました。今年の春こゝに開業したのですがまだ日も淺く經驗も小ないのに皆樣がお出下さいまして、毎日御食事もゆつくり食るひまもないので、これも皆神樣のお蔭だと思つて喜ん



で居ります。今ではかうして可愛い嫁も出來二人共私を大切にしてくれますので、自分は世界の誰より幸福だと思うてゐます。百合さんなんかも若い内に難儀しておくものです。年を取てから樂が參りますよ、若い内はいくらでも體が丈夫ですから働けるが、年を取ると弱くなるので、どんなに氣がついても駄目です。老人が衣食住に不自由してるのは、誠に氣の毒なものですが、それも皆若い内に遊んで居つた爲ですから、出來る丈お働きなさいつて、沁々仰有つたが實際さうですね。叔母はよい手本だと思ひます。若い後家によく有勝な不品行な事は露程もなかつたし、夫のない身が人に彼此云はれてはと氣を附けて、まだ二十代の若さで、袖裏でも胴裏でも赤いものなぞは少もつけませんでした。芝居やお花見に出るでもなし、不言實行の人でした。今では財政は、すつかり若夫婦に委せて、毎日お友達を集めては、お茶をのむだりお寺にお參りしたりして、人のうらやむ生活をして居られますが、これも若き艱難の賜でせう。



（一五）貧しき病人の垢を洗ひ、憐れな盲目の少年を救ふなど慈悲ぶかい奥様の行狀

榮子（美濃）

二三年前私の村から縣會議員に出られた某氏の奥様は、今の世の如く身ばかりかばつて居て人の事は如何に哀れな境遇に有て苦しんで居ようが、高見の見物と云ふ人の多い中にはいともめづらしい方で有ります。此方は、年は四十歳位で名前をおぢ枝様と申します、家にあつては良妻賢母として重き責任を難無く務めてゐられるばかりでなく、村の人に對して夫れは夫れは親切な方で有ります。先づ近いうちに有りました事を二つ三つ書いて見ます。

お隣りに伊三郎といつて、夫婦に三人の子供が有る家内が有りますが、極く貧しい者ですから伊三郎始め二人の男の子供は、百姓奉行に出て居ますし、妻のかぎと申すのは、機業屋の織物を毎日仕事として、朝から晩まで隣遊ぶもせずに、チヤカンチヤカンチヤカンと織つて居ました。ところがそのかぎが病氣になり

ました。始めはかりそめの病と思つて醫者にも掛けずに放つて有つたので有ります、其のうちに追々と病は重くなるばかりで有りますから、彼の醫此の醫と貧しいながらに、醫者にも掛けましたが、はかぐ\しく快方にも向ひませず、其上お金もなくなつたものですから、伊三郎も困つて居たので有ります。をりから此の藤枝樣が此の病人を御覽になつて驚ろかれたのです其れは病の爲めにお風呂にも入らずに、病床に在るものですから、髮は麻の如く亂れに亂れて居るし、體は元より手も足も垢と熱の爲に臭氣甚だしくとても病人の元へ寄れさうにも有りません、他の心無き者なれば其の家の附近を通るさへも、鼻をつまんで急ぎ足にして通る所なのを、藤枝樣には早速お家よりお湯をはこびおかぎさんや私がきれいにふいてあげるからと優しくいたはり、見違へるばかりきれいにふいておやりになり、髮とてもきれいに結んでおやりになりました。其後は毎日の樣におひまの時には必ずお湯で體をふいておやりになりました。その上何かと滋養品になる品を度々あたへました、かやうに看護をなさいましたがおかぎさはつひに永久の里とやらへ旅立ちました。かくの如き事は村の人に對して誰れ彼れの差別なく藤枝樣は心よりなさるので有ります。

又先達愛知縣知多郡の方から、一人の盲人が私の村へ迷ひ込んだのです、すると又直ちに藤枝樣のお目にとまつたので有ります、年はわづか十二三の男の子で、それはそれは可愛相で有りました、藤枝樣は早速お家の子供さんの單物を出して、彼の破れて其上きたなく汚れて居る衣と着かへさせ、始めは御自分の家に置ておやりになりました。此の子供は盲人のくせに大變話好きで、誰れとでも一日でも二日でも爲にもならぬ話をすると云ふ困つた性質の子供でした、藤枝樣のお家では毎日何かと來客が多う御座います事とて、つひに他家へあづけました、然し毎日の食料として、一日米五合宛惠んで居られます、丁度此の子供は、マッサージの樣な事を知つて居ましたから、毎日村中廻つてマッサージをさせてもらひ、幾分のお金をもらつて居ます。聞けば二歳の時に生母に死に別れ以來は、義理の母に育てられましたが、目が不自由故大變に難儀もし苦しい目にもあつたとかで、遂に二三年前家出をして、毎日何處が居る場所とも定めず、各所をさ迷つて居たのだとの話で有りました。

之等數多の費用は、御自身に養蠶をなすつて得られ

たお金で有ります、養蠶とても人手をかりてなさるのとは違ひますから、骨の折れるのも一と通りでは有りません、何を申せ多忙の身には、無理な仕事で有ります、其れを苦にもなさらず時には蠶の爲に夜を明かす事が有ります、何分ひる間は來客が多くて桑摘なんかには出られぬ時も有ります、其の時にはいつも夜提灯をさげて、御自分に桑摘みに出る事も少くは有りません、兎角人手を頼む事を心良く思はぬ藤枝様の事で有りますから、此の夏も御自分に鎌をもつて、體の爲だといはれて、せつせとむぎを刈りました。之れは中々女の方には苦しい仕事なので有りますのに、苦しさを忍んでなすつたので有ります。後でお話を聞きましたらあればつかりは手が痛う御座いまして、今だになほりませんよと云はれました。私も此の様なお言葉を聞きましては、遊んでは居られなくなりました。其他野菜類の肥料なども、御自分に扱ひなさるので有ます萬事かやうな風で有りますから、村の人には少しも高振りなさる事は有りません、數多の田地は有りゆたかに暮して居られますから、何も彼も人にさせてよいのを一寸でも人手をとからぬ様になさるので有ります。毎日召してゐる着物とても、手織木綿です、糸はぬけ、つぎ衣があたつて居る様なのでもきれいに洗濯して召してゐます、此の様なめづらしい夫人が、私の村に有ると思ひますと、よろこばずにはゐられませんそれで母など常に私にあの藤枝様を、よい手本として少しでも彼の様なよい氣質にならねばと毎日のやうに申します。

新記者を紹介す　河井醉茗

伊藤源宗
松井濤三郎
西崎花世

今回本誌の革新と共に、右の諸君は新しく本社編輯局の人となれり。伊藤君は青年文士として、健實溫厚の人、主として新年號より『お伽世界』を主宰す。西崎花世君は長曾我部菊子の名を以て多年本誌上に其作物を發表したれば、讀者諸君も紙上にてはお馴染なるべし、今回入つて『女子文壇』記者の一員となれり。松井君は年少氣鋭の書家『女子文壇』『お伽世界』兩誌の爲に其書筆を揮ふと丶なれり。此處に以上三君の入社を紹介し、讀者諸君の愛顧を仰ぐ。



姿見日記を讀む

西崎花世

山田邦枝さんの姿見日記を手に執つた時、私は云ひ知れぬ懐かしさと嬉しさとを感じました。それは唯に通り一遍の感情ではなく、又邦枝さんの才氣に富んだ『すがた』に接近して其の様々な聲を聞く興味ばかりではなかつたからです。姿見日記を透して、邦枝樣の歩いて來た道を見ると、私達女の歩いて來た道――更に細かく云へば、私が持つてゐる過去の生活と、交通したほゞ同じ輪廓を見せてくれてゐる爲めに、私自身の現在までの道程を回顧させる事が多かつたのです。

私が邦枝様の手紙をはじめて貰つたのは丁度今から六年前の暮春でありました。姿見日記の中の「十八歳まで」に、

お地藏樣の鉦が長閑に響いて、ぞろ／＼と花に浮かれる人の足音が病んでゐる枕に懐かしく崩れよる――其時後ろの障子が開いた。

と書いてある頃の事で、私は今病んでゐますと原稿紙に、信濃の櫻の花を一二輪封じてあつたのを見て懐かしさにたへずどんなに此の少女は、怜悧な綺麗な人だらうと思はせられたものでした。

感想がわきみちに外れないやうに、六年の間の、邦枝さんと私との間に多少持つてゐる交渉を最初に云つて置きたいのです。その一つは邦枝さんが今は諏訪の湖畔にゐるが生れたのはあなたの國であつたと云つたので、不圖思ひ出したのは、倉にある昔の小學校で使つた出版物に――山田邦彦と邦枝さんの父樣の名があつたことでした。それが邦枝さんの生れた年と同じ年をしるしてあつたので、可成興味を感じました。其の後私は、父が死去り、邦枝さんはお祖母さんが死去られて、北海道へ行かれました。

明日は出發と言ふ晩、裏の泉水に水がトン／＼／＼と落ちてゐた、中庭の松をこぼれてお湯には綺麗な月がキラ／＼と動いてゐた。

そのあさ湖水の水は冬らしい色に美しく澄んで、小舟が一つ黒く浮い

てゐた。――私たちを乘せた汽車はやがて、其湖水に添つてとある山の一角を廻つた涙をぬぐつた私の瞳にはもう旅の淋しさが恐ろしい力を潛め映じてゐた。

かうしていつた函館の土地は邦枝さんには、淋しい苦しいものであつたのでせう、信濃の天地を憧るゝ度に書いた長い手紙は、そのまゝの詩であり文でありました。そのうちにお父樣の御病氣で皆國に歸り、ついで死去られたのか、邦枝さんの二十歲の時だつたとおもひます。其の前後に、

或る時は針なげすてゝ、一向に都を思ふ我少女なり上京したい、自分が滿足する本當の道に出たいと憧れる事が強くなり、

背くなりさはさん乍ら背ゆく行手は更に暗し淋しゝ

信濃の少女は遂に上京しました。私に邦枝さんの上京のしらせを手に取つた時に、机の前でぽろ〳〵と泣いた事があつたのです。矢張私も事情だけはちがつてゐましたが、上京熱をもつてゐる事は同じでした。而して邦枝さんが上京した翌年の三月に、何物をも捨てて後を追うて家を出ました。東京に着いた時、新橋驛で、邦枝さんの出迎へを受けた時の感想は長く忘れられない記念です。それから約一ヶ月同じ下宿に暮したのです。

然し三年位の文通で知り合つた二人は、あまりに性格の違つてゐた爲、實際に理解しあふまでには、一月ばかりでは短かつたのです、別れる時に二人はお互に了解しあはないで別れてしまひました。百里相へだて居た時に比して、何がなしに離れ離れの感情になつていつたのは、考へて見れば仕方がない事であつたのです。それで『丘の家の日記』『番町日記』『姿見日記』を書かれた時代の邦枝さんは私とは、南と北とに別れてゐました。然れども其の背後にある一つの運命――と云ふと茫漠としますが、境遇の推移してゆく型はやはり似てゐました、邦枝さんが歩いていつたとほりに私も後を追うて歩いていつたのです。上京後三年の間二人は手紙の交通まで絕えましたが、邦枝さんが踏んでいつた足跡を自分が歩いて居るのだと思つた時には常に一種の間接のしたしみを持ちました。

私が祖母を失つた時に殊に其感が深かつたし、婦人記者となつた時にも更にそれをおもひ、非常に荒んだ感情生活に落ちた時にも考へ出したのでした。今一つあります、それは荒んだ生活の疲勞と、冷い周圍から逃れ出ようとした努力も同じ形でした。

私は『姿見日記』を見た時に何よりも自分に共鳴する

事の多いのを感じましたから、久しぶりのはがきを邦枝さんに送りました。すると折りかへして、長い手紙がとゞき、それにはお互に離れ離れになつた前後の感情を述べて、ともかく是非尋ねて來て下さいと云ふ意味でありました。それで十四五日おいて、私は三年ぶりに邦枝さんに逢つたのです、處女時代の人を、私は若い母になつてゐる人に見たのでありました。

がらくもふりあぐみたり泣聲を茫然ときゝ雀に見入る。

かう云ふ姿の若いお母樣になつてゐる邦枝樣の顔を久し振りに見て、人變りしたやうな幸福さうな常識に富んだ奥樣ぶりを快く印象しました、昔の私はわがまゝまだつたと邦枝さんは云はれたが、わがまゝと云ふのではなく、處女時代にはある一方に鋭く尖つた主觀に生きて居られた——その偏りが調つて、圓くふつくりと、愛嬌の好い夫人としての邦枝樣を見た時は、私は心から祝しました、其れと同時にこんな事を思ひました。邦枝さんはこの現在の境遇の裏に、猶『淋しさ』に觸れる心は昔のまゝであるだらうか、と。

姿見日記の中で、『十八歳まで』が最も長い、讀んで面白く感じさせるものでした。この中から面影を見得る、邦枝さんの姉さまには、いかにも沁々と懷かしまれました。『丘の家の日記』は明く安らかな生活、『番町日記』は、暗く淋しい生活のつかれを漂はせてゐました『姿見日記』には結婚に向いてゆく心が何のさまたげにもあはず眞直に動いて、行きました。

「私も苦勞しました」

「さうでせうね。」

其人は薄い花瓶からゼムニヤムを一つ拔いて、花だけ手の中でころがしてゐた。其都度輝く眼鏡が美しかつた……

二人はポンチの盃をかろく打ち合せた……

と處女のページにをはりを書きました。『迷走』に收められた三百首の歌——歌としての技巧を論ずる事は私には出來ません、唯新體詩に閃めいたあの才分が歌の上に光つて來る事があるやうに私は望みました。

生涯に只一つ我が歌卷を殘して死なん淋しき女。

それほど歌に屬する執着が邦枝さんには深いのです讀み了つた後で、私は日記を通じ、歌を透して、底にみなぎつてゐる氣分は『淋しさ』であつてそれが邦枝さんの半生涯の原動力になつて來たのだとおもひました而して未婚時代のやうに、現在も亦將來も其の『淋しさ』に觸れてゆかれるか、どうかと云ふ事が考へられ

たのです。

姿見日記に見得る邦枝さんと云ふ人は――淋しがりの人です。『淋しさ』に觸れ寂しさに生きて來た人だと云ふ事がよく解りました。然しその人の表面ばかりを見ては其の淋しい上をいつも蔽ひかくしてゐる賑かさの二重の生活を誰でも一寸氣付きません。

日を一日もの言ひつゞけ暮したる淋しきわれを人は知らなく。

白粉をときぬせはしくあなやふと淋しくありぬいかにかはせん。

と云ふ歌は邦枝さん自身でよく自分の性格をうたひました。

願はくばあらゆる人に抱かれて愛でらるゝ子となりたけれども。

かういふ氣分の歌は僅に一つ二つあるばかりで、全體のしんみりした調子は恰度白萩の花がうなだれて、夕暮の光りを吸ふてゐるやうな氣分――に充ちて居ます。以前私は邦枝さんの戀愛が火の燃えるやうに、牡丹の花の眞赤な色に開くだらうと豫想する事がありましたが、今になつて、それはさうではなかつたのだと云ふわけがわかりました。寂寥を感ずることのつよい人だつたと了解してからは、邦枝さんが、その『寂しさ』からいつまでも離れず、處女時代にそれによつて向上したやうにこれから後も、『寂しい』扉をひらいていゝ生活に進んでゆく事をのぞみました。『寂しさ』は眞面目な生活の鍵だと思ふのです。

母となりぬ今こそ我をいかにせん悲しき人に物ないひそね。

と云ふ心持、

我は淋し生れしさかにみちびかれ妻ともなりぬ我は淋しき。

と歌つた淋しさ、處女時代の自由をふりかへる悲哀、それらよりもむしろ進んで、

ものいはじかゝる夕はみつめたる葉のふるへさへ悲しきものを。

斯の歌の受感のするどい態度でこれから行末に向つて『あたひ』ある道を歩かれたい！と思ひました、『十八歳』までの筆致がこれまでになく客觀的になり、自分をじつと味ひ眺めて書いてゐたあの姿――あの姿を私は嬉しく思つたのです。



無言劇

犠牲

平塚白百合

淡い小夜曲は銀の迷鞭をふり掛けて、靜かに滑らかに物やさしいオヅンは闇の舞臺のカーテンを上げた。ひつそりとほのぐらい灯を取去られた觀客席、間遠な電氣は歡樂に勞れはてゝあへぎ、丸い飴色の丸石柱に微細な口づけをもつ天井の花電氣は和らかにおぼめく香料のそゝがれるやうな天井から暗い舞臺面にそゝがれる瞳は恐怖の流れに白くふるへて闇默が生み出す小夜曲はアダヂラに移り、さうしてやゝ爽快に何物か光明の跳るやうな旋律が波打つ。

無言にダークな舞臺はトーンにつれて薄ら明るみ、纖弱な曙光は忍びやかに舞臺をなめた。黝い奥には何時か影ともない影のやうな建物、ほの明るみはやゝ黃味、建物の色は蒼み渡り、次第に高調子にうつりゆく大ゲストラの快音、緊張した曙光は大方空にと昇天したのであらう。褪朱色のピラミットは遠く額を上げてエヂプトの夜明けた印度更紗のやうな色彩を、あくどく投げた。

綠葉素の多い二本の椰子の影は潤みをもたせん、白い階段と、人面を刻した正面の堂の扉が無言に語つてゐる。階段の下には右左に一基のスフィンクス像が据ゑられて、右手も左手も一樣に寺院の側面でもあらうか古武士の武裝姿が柱にもたれて刻まれてある。

――絕えなむとして樂は鳴りひゞく――

空の色は土耳其玉の樣な線に透き通つて、晴れやかに明るい綠は、萠黃色にも澄み渡つて來た。サクラ咲く國人の夢想もし得ぬ強い色彩は、建物の角にふるへてやまぬ。じつと見つめるに堪へぬ程の濃厚な、魅力を含める南國の空よ、其處にはぐくまるゝ戀は力強くなくてはならぬ。

寺院の扉は音もなく內から開かれた。

花片のほぐれる如に薄衣さばいて二十餘人の少女は靜かに細い手を上げて享樂に侵されるやうな衝動的なダンスを舞ひ初めた。

白い肌は足をけ上げる度、手をふる度、薄衣の中にひらめいて、霧の流れのやうな衣は一かたまりにもつれ合ふ。

寺院の入口には高僧ラダメスのまばゆい祭服に一かたまりの光線が、見るを許さぬやうに散滿させてゐる冠に、胸に、キラ〳〵射るやうな光りは身じろぎの度に光をもてあそぶ。瞳も！

高僧の髮は黑くふさ〳〵と襟元で二段許りの柔かい段をくせ付けて斷られてあつた。

——光る瞳と、きらびやかな祭服と、高僧と仰がずに歡樂主義の王樣と見たい、無言劇と名付けてある故に知らぬ人はどんなに見たかと思ふ。さうして、花のやうな少女は寵侍女とでも云はうか、寺院に侍へる尼僧にしては餘りはなやかに餘り敬虔の念がない。——

しなやかに右手寺院の方より碧眼の女は香をさゝげに寺院に來た。細腰にまとふ薄衣は白い肌を透かして明るい表情は美しいダリヤの花の奢りに笑ふ。

——寺院の中にはある罪により一人の若武士が捕へられてある。——

香をさゝげながら女は扉の中の若武士にふと美しい戀をかもされてしまつた。瞳は熱して、あふらるゝ心は誘惑的なしたゝるやうな舞ひに替つた。扉の中の若者は、心苦しい戀に默してゐるのが女は一層つのつて高僧のさとしも若武士の否定ももう見えぬ迄に高潮した。——彼若武士に戀してキッスを換するものあらば若武士はゆるされて、キッスの甘き醉ひのさめぬうち、其の少女は捕へらるゝ神の掟である。——少女の心には神罰も、戀と計るならば餘り輕くあつた。若武士の自制力はつきて、扉からまろび出ると共に二つの火のやうな唇は階段の下に相合して抱擁にあく事もなく、小鳥のやうに尼僧が彩羽ふり〳〵五彩の虹をつくる中に包まれて、やがてくべき離別の哀も豫知する心の餘裕はない。

高僧は神の掟に從ひ美少女ナラスを捕へて石段を昇つて行く——扉は音なくナラスを呑み、高僧を呑み、尼僧を入れてピッタリ閉さつた。

離別の苦しみに土に倒れた武士は栗色の髮毛をつかむで階段を走せのぼつた。扉はピッタリ閉ぢて冷たき掌の間に音を立てた。

扉は高僧によつてひらかれた。弓矢を若武士にあたへて、去れよと命ずれど、若武士は失戀の悲しみに弓矢も投げ捨て、ナラスに會せん事を愁訴してやまぬ。許されて、再び離隔された魂の合した時、思極まつて外界の何物に執着もゝたなかつた。

高僧の命にナラスは泣く〱訣別の舞ひをまふ。つきぬ離愁はくりかへしく〱綿綿と、ナラスは堪へかねて、若武士の胸にくづれた。なよやかに曲線をかく肩腰、寺院の庇にはたそがれの如な薄い影がしのび翳りをもつて遠く白い雲が湧く。

ナラスは重き足取りに堂の中へと引かれて行く。扉は閉ぢて、再び追ひすがる若武士の胸に高僧の瞳は輝やいた。石化したやうな若武士は猛獸のやうに狂はしくなつた。高僧ラヂメスの現出と共に狂へる若武士は白い銀の刃を胸深くさゝれて白い光りが靜粛に暗み行く光景に淒い色彩を塗つてしまつた若武士は高い戀の犠牲をはらつて靜かに階段の下に横たはつてゐる。



細い切れるやうな哀音が遠く離れ行く魂の跡をしめやかに追ふて行く――

スフィンクス像の影より若い女ドレイ走りいでて若武士の投げ捨てたる弓矢を、冷たくなりし胸の上に置くと共に薄くらがりに影をかくした。

犠牲の屍の上にたそがれの光りが重く漂ふてゐる。

▲山川浦路のヘダ、カブラは容貌や扮装は如何にもヘダを思はせたが聲を聞いて失望した。須磨子のマグダの強い高い緊張した聲を今一度聞きたいものだと思つた。

木曾口の秋

百瀬美水

しめやかな雨の日、桔梗も女郎花もない淋れた桔梗ケ原を、木曾行の列車は、トッテトントッテトンと、松林を顫はして阪を上つて行つた、林を出ると車内は明るくなる、と又も松林の中へ汽車は入つてしまふ。枯れ初めて萩は雨に亂れてゐる、松林の下の茶色に枯れてゆく芝生の中には、淡紫の美しい松蟲草と、白梅のやうな優しい小草の花が一面に白く咲いてゐた、林の途切れた處の粟畑は、暴風に目茶々々にされ、母親と娘と二人で、腰にびくをつけて穂ばかりを刈つてゐた。あちらこちら、とび〳〵の林がくれに小さい家が見え、葡萄畑がたくさんある。汽車は桔梗ヶ原を通りすぎて、山と山の間へ入つてゆく。

私は淋しい洗馬の停車場で汽車を下りた。

中仙道を南へ南へと行くと、右も左も山で、雨がやんで山を包んでゐた雨雲が、すう〳〵と晴れていつた目の覺めるばかりに紅葉した美しい山が、目の前に迫つて、何と云ふ美しさであらう。谷間にこめてゐた雲が靜に棚引いて空に消えてゆく。そこゝに浮んでゐた白い雲が淡くひろがつて、なくなつてしまふ。靜に吹いてくる雨後の山風は、冷たく身に沁みる。谷間のわづかな稲田には、節句の矢車のやうな、白木で作つた雀よけの風車がカラ〳〵と廻つてゐた。小高い處にある小さい堤は、遠くでみた海の色のやうに碧く、土手へ上つてよしを分けてみると、底がはつきり見られる、小さい波がよしの根本に消えてゐる、山が半分映つてゐる。

奈良井川の清流は、溪より溪へ幾曲りして、ザー〳〵と響を立てゝ流れてゐた。紺青の水が岩に打つかつて白く泡が雪と散り、また岩陰によどんで深い淵となつて渦を巻いてゐる。岩を包んで、藤や葛の青葉に、赤や黄に紅葉した草木が交り、水の飛沫を浴びてゐる。見上げるやうな赤褐色の岩の上には、緑深い小松が茂つてゐる。川下の方に、石を積んだり崩したりして、一人の人が河鹿を捕つてゐた。

高い幅の狹い粗末な、さうして長い欄干橋を渡つてゆくと、古杉の森があつてその奥の上の方にお宮がある。

森の入口の朽ちかゝつた木の鳥井をくゞつて奥へ入つてゆくと、石の水溜りへ筧の水が細く落ち込んでゐた。くねりくねつて上の方へ上つてゆく細道には、枯れた木の葉や枝が堆く積り、幹のやうな太い根がたくさん横たはつてゐた。一抱もあるとちや古杉が暗いほどに茂り、日光のさしたこともないじく／＼と濕つた木の下に、山の樹蔭にのみ生える三葉の草がねれてゐた。古い樹の切株に、赤褐の不思議な菌が生えてをり大樹の幹には深緑のやどりぎが茂つてゐた。私は、名に聞くのみでかつて見たことがなかつたやどり木を、目のあたりみた時は、實に嬉しく、珍らしく、じつとみまもつてゐた。

小さいお宮には、苔蒸した石燈籠があるばかりで拜殿もなく、黒く古びた幕をかゝげて、中をみると、うす暗い中に疊が敷きつめてあつて、美しい燈籠や花があつたが燈明はつけてなかつた。裏にある大きい池の水は、少しの波も立たずに鎮まり切つて、朽ちた木の葉の沈んでゐる周圍には名知らぬ水草の白い花が咲いてゐた。さびた鑵空がたくさん木の枝にかけてあつた參拜者がこれへ魚を入れてきて池へ放すさうである。魚は池の底に沈んでゐた。

遠く溪川の響がする。音もせずに杉間を漏れてくる風は、幽かに杉の匂ひがする。

社の後に立つてゐる小さい山は、全部岩からできてゐて、小松と山漆が生えてゐるばかりの美しい山であつた。私は、松や岩に捕まつて嶮しい山をのぼつて行つた。兩脚が折れて仕舞ひさうな思をしながら、やつと頂上まで上つてしまつて、見下すと、谷間の町々が目の下にみえた。奈良井川の上流は、溪間に見えて、隱れて、錦の山峡へはいつてゆく。

空は青く晴れてしまつた。岩の上には山の神の祠があつた。私は峰つゞきに次の山へ分け入つた。見上げるやうな大きい萩や、まだみたこともなかつた珍らしい草や木の中に、血潮のやうなにしきぎや山漆が交つてをり、細道は、丈なす芒の中へ幾度か失さうとしたすがれや、赤とんぼがまつてゐた。蟋蟀も鳴いてゐたアット思ふまに、足元から飛び出た兎の子が、消えてしまつた。

谷へ下りてゆくと、暗い杉の木立にからまつて紫のあけびがたくさん笑んでゐた。バシヤ／＼と、水が岩間から落ちてゐる。山葡萄や、松の匂ひのする松葡萄が、黒色に熟して高い木の梢にぶら／＼と下つて居た。

紐育のお豆腐買ひ

在紐育
きん

けさ女主人公の申つけで支那町へのおとうふ買ひ、まさか紐育下んだり迄來て、お豆腐を買ひに行かうとは、夢にも思つてゐなかつた。が主人公の命令には片頰ふくらす譯にもゆかず、ハイ／＼で安いハット引つかぶつて店を出る。

チエンバー街を第三街のパークローへ通りぬけて、三丁程上る、左手の横道はモット街で、此の町までがパークローとよぶ。此れより一丁目と名のつく迄を、バーアレーと云ふ。モット街は俗に日本人は南京町と云つて白人にもチヤイナタウンと云つた方が早くわかる。

事實名の通り支那人ばかり住んでゐる、第一に白人相手に商賣してゐるのはチヤプスイ屋である、一寸人に知られてゐる店は、旅順口と萬花樓等である。其の次はソイキーと云ふ雜貨商でこれは又なか／＼立派にやつてゐる。

口惜しいけれ共私の店なんか足元にも寄つけない。殊にソイキーは春夏秋の三季に一臺五十人ばかり乘せる紐育見物の自動車が、二十三町目と十四丁目とから日に何十臺となく出る。それが紐育中ずつかり見物して一番終りに此のモット街で車をつける、此所で客を下すとガイドはソイキーの店へ連れ込んで、見物させながら品物を買はせる、これが又なか／＼大きい相である。

私が初めて支那町へ連れて來て貰つた時、自動車が何臺も／＼モット街の入口に止めて見物させてゐるのをみて、支那人／＼て一體日本人は馬鹿にしてゐるけれ共、商賣にかけてはかないませんね、小さいながらも南京町を造つて白人に見物させるんですもの、と云つたらこれは間違つてゐた。其の譯は、此のバーアレーが紐育のそも／＼家のたて初めで、此所から順々に開けていつたのださうな。

それで紐育見物の自動車は、一番終りにバーアレーを下つて來る、と丁度此のモット街でバーアレーが終りになつてゐるから本來なれば此所から引返すところを、ソイキーが此の會社と特約して下車さす事にしたんださうな。

是れはお豆腐の御用がおそくなつた。さて南京町を七八間入ると、右側が萬花樓で其の隣が十六番、トン〳〵と三段程下りたベスメントがお豆腐屋さんである。

内は眞暗幅一間程で奥迄三四間の間がある、其の細いホールの左側には豆腐にする大豆らしいアンペラ袋が高く〳〵ヅート積み重ねてある、私は右手のかべを便りに奥へ進む、アンペラ袋がとぎれると、ムット生あつたかい香がする、此處から廣くなつてぼんやりと明るい。半開きの戸を押てそろつとは入ると、三人程男が盛んに未だ豆腐になつてゐない、クリームのくさつた樣なのを、すくつてはふきんに包んでならべてゐる。

ハローシンサン、びつくりした恐ろしく大きな聲を出す南京サンだ、シンサンと云ふ英語はないと思ふ、兎に角ハローと云つて置く、小さいお豆腐十程注文して後を向いてしまふ。

と何だかガヤ〳〵云つてゐる、キット惡口に違ひない、癪にさはつたからクルット前を向いてやつた、ニヤ〳〵笑ふ、いやな奴だ。一寸見渡した處隨分くすぶつてゐる、大きないつみがいたとも知れぬストーブやきたならしい大きな鍋、一隅にはふきんがかけてあるやら、裏の出口にはたきつけが山と積である、天井はひくしガスが其の五寸程下ときてゐるから、天井一體眞黒だ。其の下であのいやらしい支那人が豆を煮て引いて豆腐にするのだもの、きれいのが出來樣筈はない。私はたべない、オーライ、としまりのないアクセントで折りに入れたがお豆腐を紙に包む、二寸四角のが一個に付二仙、おつり取るのがきたなくて、二十仙仕拂つて早々に薄暗いお豆腐屋を逃げ出した。

其の晩久々で日本飯をたいて牛のすきやき、私はたべ樣かどう仕樣かと迷ひながら、グリンオニヲンをザク〳〵切つた。

▲**大喪中の年賀に就いて。**來る大正二年の元旦は、未だ御大喪中だから、年賀を見合さうとする向も多い、また普通民間で往復されてゐる年賀状に就いても、種々の意見を聞くが、年賀状は御大喪中でも廢するに及ぶまいと思ふ、只其賀状に謹愼の意を表すれば宜いので、不斷の新年よりは異つた新年であると云ふ意味はありたい、年賀状には隨分形式一遍のものが多いから此際なるべく、年並でないものを往復せしめたいものだと思ふ。



休息（小説）

多恵子

私にも始終羨ましいと思つてたー子さんやー子さんの樣な生活をする時が今後こそ本當にきた。それは何につけても私の心を暗くしめらせてゐた姑が娘の小姑と一緒に遠方へ緣づいている總領の娘の家へ當分のつもりで荷物をまとめて出發ていつたからだ。

其の前から大分ゴタ〳〵した日が幾日もつゞいて、たうとうその日がきた。私も暗い中からおきて、ねまきのまゝで十八になる小姑の着替の世話をしたり、髮を結てやつたりした。卵色の幅のひろいリボンをかけてやると、「嫂さん、どうもありがたう。」と指をついてお禮を云うのがいつになくやさしくみえて可愛らしかつた。

お茶の間の電氣の下で姑と小姑は支度の出來た姿で忙しげに食事をすました。其頃俥屋の來た事を下女が知らせた。

「それぢやね何卒おねがひしますよ」身體を一番氣をつけて、病はない樣にね」と姑は玄關へおりてからもやさしく繰返した。小姑も「できげんよう。」と丁寧に挨拶して俥へ乘つた。私は門の外まで出て見送つた。三臺の俥が早朝の靜寂な街を辷る樣に走つて行つた。一番後の俥には停車場まで送つてゆくつもりの良人が背擴のガッシリした身體を乘せてゐた、私は何となく氣のぬけた樣なガッカリした氣もちでヒッソリとした家へ這入つた。「あゝたうとうおいでになつて了ひましたね。」若い下女は玄關の柱へもたれて眠さうな眼付で私の顏を見乍らさう云つた。「本當にね…何だか呆然してしまつた。」何だ、まだ五時前ぢやないか。私しや眠るんだ眠るんだ。お前も門をしめてもう一眠入りおしよ。」私はとり散らしてある座敷を其まゝにして自分の室へ這入つて片隅はづしてある蚊帳の中へ勞れた身體を投げ出す樣に這入つて横になつた。

眠らうとしても、何となく頭腦が冴えて、眠れなかつた。明放した縁側から白々とした朝の光りが何ともいへずつかれたあたまに快く沁みた。私はいつまでも床の中にじつとしてゐた。其中いつかウト〱眠入つて了つた。「奥さまよくおやすみになりますね。」ふと下女の聲で私は眼がさめた。頭の上の蚊帳をはづし乍ら下女は私の顏をみて笑つてゐた。もう縁側には朝日が眩しくてり返つてゐる。「まアちつともしらずによく眠たね」と私はねまきのまゝ、楊枝をくはへて臺所へ出ると、もうすつかり朝の掃除が出來てどこもかしこも氣もちよくかたづいて了つてた。

それから廣い食卓の上でたつた獨りで氣まゝな食事をすました。

「もう御隱居樣はどの邊までいらしつてゞせう。」下女は時々思出した樣にそんな事を云つた。

「さアどの邊だかね。」私は餘りそんな事は考へられてなかつた。それより今日から當分の間放されて思ふまゝのおき伏しが出來るのだと云ふ事が大變に樂しかつた。

すべて自分の手一つで切盛してゆくと云ふ事も何となく樂しい事の樣に思へた。それを出來るだけ上手にして見せたいと云ふやうな事も大變に自分の心に張合を持たせた。――其の日は何となく勞れた樣なきもちで終日ひろ〲とした座敷で細帶のまゝねたりおきたりゴロ〲眠ボケた樣な心持で暮して了つた。でも夕方には紙を結たり、お湯へも出かけたりして、夏のお湯屋はすいてゝきれいだつた。歸りに近所の果物屋で甘さうな水蜜や梨を買つてきた、下女はきれいに掃いた庭へ雨の降つた樣に水を撒いてゐた。ダリヤやおいらん草の赤い花がびしよ〱に濡て慄へ乍らポタ〱しづくを垂してゐた。「そんなに水を撒くと水道屋からお尻がくるよ。」私はさう云ひ乍らも涼しい風が湧いて來る樣な好い氣持で暫く手拭を持たまゝぬれた花の間に立つてゐた。「斯うぬれてる間に旦那樣がお歸りになれば好いんですね。」と下女は、又はだしのまゝ馬けつをさげて門の外まで出かけて行つた。私は家へ這入つて買つてきた果物を冷たい水へ放しておいた。それから鏡臺をおろして湯上りのつや〱した前髮へ櫛のはを通して叮嚀にとかし上げた。例となく心がのび〱してるしどつちを眺めても氣になる對象は何にもないもう終日寢ようと唄はうと自由だ〱――私は縁側の籐

椅子へ身體を投る樣にもたせかけて、扇をつかひ乍ら小聲で大好きな三味線の唄をうたひ出した。ふつと氣がつくと門の内で下女の喋る聲と良人の笑ふ聲とがきこえてゐた。私は元氣な心持でむかへに出た。――「お歸りなさい。おはるが一所懸命に水をまいて旦那樣に見て貰ふんだつて、あなたのお歸りを待ちかねてゐたんですよ。」

「だから氣を利かして早く歸つてきてやつたんだよ。」と云つて良人は面白さうに笑つた。下女も「あんな事仰つて。」と云つて大きな聲で笑つた。

食卓の上には自分が慥らへた、カツレツにトアトを附けた白いお皿や、キヤベツの三杯酢なんぞが涼しげに並んでゐた。

「カツレツ？有がたいな。」と云乍ら良人は光つたナイフをとり上げた。

「もうお母さんはお着きになつたでせうか。」私は暫くしてふつと早くきかねば惡かつた事を忘れてた樣な心持で良人の顔をみて。

「急行だからね：：さアもうかれこれ着く時分だらう今日は涼しかつたんだから大てい醉ふ樣な事はあるまい。」

「さうですね、お醉なさらなければ好うございますが」

其の話はそれつきりだつた。

其晩も座敷の縁側へ岐阜ぢやうちんをつるして、蚊やり粉をくすべて例日の樣に涼んだ。下女は早く臺所を仕舞つて町へ買物に出かけた。

「二人ゐないと何となく淋しいやね。」やがて良人は森閑として家の内を見まはして淋しさうな聲をした。「さうですわねえ。」と私も何となく淋しかつた。

良人は若い男のくせに無口な沈着なはづまぬ性の人だつた、だから私の樣な、世間なれぬ、ウブな女ぢやとても陽氣な、さばけたさしむかひの味は知る事の出來ぬ筈であつた。でも私は若い普通の女なんだしどつちかといへば浮いた方の性だつたからさうしたありさまは何となく飽足らぬ、淋しい不幸な事の樣にも思へるのだつた。だが私にはもう今はそんなことは餘り考へ樣とする問題ぢやなくなつてる？それに私はもういつとはなしに、ずつかりと此の場所になずんで了つたこの無口な、沈着な、はづまぬ性の男の外に私の眼に映る意味のありさうな對象は何にもなくなつて了つた

もう何でも好いから此の男が身體中の思を私一人に投かけてくれゝば一番好いと思つてる、外にどんな刺

戟も感じたくなつた。

私はそれから當分の間何にもせぬ、怠惰な自分乍ら氣のひける位氣まゝな所作をして暮してゐた。臺所の臺の間へ腰かけて出入りの八百屋を相手に一時間も下らぬ事を喋つてた日もあつた。たゞ晩のお總菜だけは一所懸命に考へて慥へ／＼した。學校でした割烹の筆記帳をとり出してむづかしい名のお料理を慥らへるために時々臺所をさわがしたりもした。

獨りになつたら、あゝも斯うもと考へてゐたいろいろな仕事もなか／＼出來る日はなさゝうだつた、時時良人の同僚の細君なんぞが訪ねてくれた。それは私にとつて決してうれしい事ではなかつた。座敷の眞中へ新聞や雜誌をしつちらけて、涼しい風に吹かれ乍ら好きな本にでもよみ耽つてる樣な時、ヒヨツと氣取つた某の細君にでも這入つてこられると生涯の面目をつぶされた樣な耻かしい氣もちがして、それと一緒にわけのわからぬ反抗心がおこつたりする――「あゝあの奥さんに來られると私は堪らないわ、どうかして誰も來ない法はないのかしら」なんぞと私は眞から嘆息する樣な聲で下女につぶやいた。――「あらいやな奥さんあんなと仰つて。」と下女はおかしさうな顏して笑ひ出した。

さうして久しい間どこへも手紙一枚書く氣になれなかつた、第一の親友であるK子さんからもはがき一枚來なかつた、それさへ苦にならぬ程私の心はどんな處へも交渉が切れてゐたかつた――時々目に見えて斯うした空な時間の保つてゆく事が苦しくやるせない想を感じさせもした。だが其日になると矢張り何にも形にのこる樣な仕事は出來ずに了ふ、終日無智な下女を相手に喋つて、笑つて喰べてゴロ／＼して暮して了つた姑からは時々便りがあつたいつも親切な詞を使つてあつた。私も姑にだけは屹度長い手紙を叮嚀に書いて出してゐた。

暑い日がつゞいた。良人は白い洋服をきて暑想な顏して毎日同じ時刻に行つては、同じ時刻に歸つてきた時々私の好む喰べる物なんぞ買つてきたりした。

「今日電車で川船君に逢つたよ、きのふまで舞子へ行つてたんだつて、相變らず先生元氣だね。」

良人は洋服をぬぎ乍ら其の話をして。其の話は久しく眠つてた樣な、彈力の失くなつた私の心の調子をフイと破つて了つた。――さうして思ひかげもなく淋しいつらい悲しさが久しぶりで遣瀨なく私の心を傷め

た。良人は何にもしらなかつた。いつもの通り軟かな、圓滿な顏で食卓へ向つたさうしてめづらしく、

「今夜は冷たいビールを飮うぢやないか。」と云つた。下女は心得てすぐさま氷屋へ走つて行つた。

「奥さまも召上るんでせう、お好きぢやありませんか。」

下女は馴れ〳〵しい詞付でさう云ひ乍ら私の前へも氷の入つたコップをおいた。

「飮むだらう。」と云つて良人は壜をつきつけて私の顏をみた。——「止しませう。」と云つて私は何となく笑つた、笑はなければ惡い樣な氣がして笑つた。

私は御飯を喰べ乍らも沈んだ心持でさま〴〵の事が考へられてゐた。何とも思はず滿足しきつた樣な心持で繰返してる此頃の自分の性格が沁々哀れに思つた。生涯あの人だけは自分の心にしつかり握つてゐればゐられたのに、其人とさへいつとはなしにすつかり離れて了つてた。もう全くどつちを向いても賴りになる顏は見えない、私はもう生涯出られぬ穴の中へはひり込んで了つた樣な、心細さがちひさい身體に沁渡る樣に思つて泣出したい程だつた。

其晩も赤い灯の入つた岐阜ぢやうちんが緣の廂につるされた。丸い月が水の樣にきれいに澄んで星も光つてゐた。私は緣側へ脚を投出して月を見乍ら、泪ぐんだ樣なセンチメンタルな心持で蟲の音にも哀しく耳をすました。「あゝ好い月だね、電氣を消さうか。」と良人は私の顏を見乍ら立つて行つてパチッと電氣を捻つた。暗くなると一層月の影はあざやかにたゝみの上まで青い光りを投げた。

「ねえ吉野町の兄さんは樂しみだらうね。」私の傍へ寢ころんでた良人はふと其の事を思ひ出した。

吉野町へ嫁いでる私の姉が姙娠したと云ふ噂があつたからだ。私にはいつまでもそんな事思ふ氣分にはなれなかつた。「あなた小供がほしいんですか。」私は厭だ、小供なんかつて考へたゞけでもいやですね、第一みぢめだわ。」と私は反抗する樣な強い調子で云つた。

「何故？金がないからつて云ふのかい。」と良人は相變ず落ついた聲で云つた。私は何かはげしく喋り出したい樣な、イラ〳〵した心持がしながら何となく默り込んで了つた。其晩良人も下女も蚊帳の中へ這入つて了つてから私はひとりで起きて、K子さんに感情的な長い手紙を書いた。



歸省（つゞき）

長曾我部　菊

三

汽車を降りて歩きはじめたころ——其の時は丁度二時半であつた。濃くぼやけ濁つた空氣の色——それは晴れそこなつて、むし〳〵するので一層暑苦しかつたその上草の多くの大きい葉に太陽が燃えかゞやくいきれで、息を抑へられる程なやましかつた。殊に北の方の山脈の輪廓線を壓する雲のもの〳〵しい、氣勢が夕立を孕む樣に見えるのであつた。

此處から三里にある田舍路をあの三峰山の下まで歸らねばならない。雨に襲はれると思ふと、私は『冒險』でもする樣な感じがした。停車場から北へ四五町程歩くと、吉野川の二重堤防になつてゐる高い土手にあがつた、桑摘籠を背負つた若い男女が五人程ゆく後からその土手を歩いた。赤い帶をしめた女は、男達にいろ〳〵からかはれると嬉しさうに聲を立てゝ笑つてゐた、土手を下りてからは涼しい節で唄をうたつた。男達は私を見た時。

『荷物を持つていてあげまへうか、姐はん』

と云つたりした。人の好さゝうな人間ばかり——私は桑つみ達に別れてからも遠くまで、女の唄ふ田舍の戀の唄を聞きながら歩いた。

防水藪を出て了ふと、目の前には再び桑畑の廣がりが、境界も限りなく遠く見え、自分の身體がその桑の中に沈んで、青い暑熱の中をゆくのが苦しくも快くも感じられた。

けれども此の桑の大きい廣い青色は、十年前の此の土地の大洪水の姿をあり〳〵と思ひ起させ、當時のものすごい水流が、崩した家を浮かし、溺れる人間を流して、轟々と、防水藪の方に動いた巨大な渦の光景を桑の葉の上に見せてをつた。殊に桑畑の中程になると地肌が裂けたやうに土地が凹んで、水が淺く透けて流れ、板の橋が、危くかゝつてゐた。

此の流れからまた五丁程息をあへいで歩いていつて今一つの前よりも低い――然し、河原の白石が、草にまじつてゐる土手を上つて河原の方に出ていつた。流れる水はまだ見えなかつたが、白い石の光りが廣く目の前に現れた時、私は、ハンケチでしと〳〵と、流れる汗をふいたり、水の滲む樣にこまかく足の皮膚にまみれた砂をはらふ爲に、足袋をぬいで了つた。

桑畑で臭覺の爲めに苦しんだ私は、河原の中をまた強い光線のために、盲目になつて了うのではないかと思はれた。こんな時、私の身體は火のかたまりが轉んで行くやうであつた。

河原の石は盡く白い其の肌に鋭い光線の反射をあげうち返された光りは多くの石の上で更に他の石からはぢけた光りと打ち合ふてゐた、只一つ私の目は此の炎熱の世界に、小さく涼しい桃色の花が、ぱつと圓く眼を開いて居るのを見た。熱と光りとの戰ふ中を平穩な靜溢な小さな花……私は花の權威と云ふ樣な事をしきりに感じて、そのそばによつていつた。影も伴はぬ小さな此の草の身體には、大きい？程淡紅い花が、その瓣を、のびやかに開いて笑つてゐた。

私は事もなげに咲いた石竹の花の涼しい薄化粧の色を見て、胸のかわきを忘れて了うのであつた。殊に、此の場合の此の花を私の心とは共鳴するところのある氣分に觸れた。

河の瀬は變つて三年昔に舟を渡した所は、もう跡方もなく、遙か下流の方に舟が、木の葉の浮んだ樣に小さく黒く見えた。路もない河原の上を私はまた歩かねばならなかつた。私は此の時こそ自分が炎暑の爲に狂人になるだらう――とさうおもつた。

身體に火が燃え付いて、ひら〳〵と燒けてゆく人の樣に悶えながら、不思議に倒れもせずに歩いた。

舟にのつて私は、水を掬つてのんだ、水をすくつた時、手の下を、魚が走つた。波の上を辷る日の光りは流れていつたり、返つて來たりぎら〳〵とした。

舟を降りて堤に上ると、そこから私の村ははつきりと見えた。三峰山の裾の傾斜地に、私の村が、見上げる樣にひろがり、村の中程に、白い一點の色が星の樣に見えた。

昔はよくこゝで私は、自分の家の倉が白く星の樣に見えるのが嬉しかつた、町から歸るのにも、この堤の上にさへ上る時、もう自分の家に歸る樣におもつた。二つ並んでゐるあの左の方のがうちの東倉で、右の方

のが、裏の㊍と云ふ家の倉であつた。今からうして白い一點しか見えぬ倉の色を見ると、あゝ家の倉はもうなかつたんだ。誰か買つて、どこへか運んだのだ！私は、少時、たちどまつて、そんな事を思つた。

四

樫の森に圍まれた家が三戸程あつた。その一つの家の前に繩張りがしてあつて道の方に沿つた便所には白い粉をふりまいてあつた。石炭酸の臭氣が強くそこらに漂ふてゐた。此の青々した明るい自然の中にひろがらうとする惡疫を私は不思議に思つた

そこを離れて行くと、私の村にはひつていつた。私は、歩きながらこんな事を思つた。私の愛する母、私の愛する弟や妹、その人達はもう十町にも足らぬ向方になにかをしてゐるのだ。——而して私は此處を歩いてゐる。私は今一人と雖他人を見たくない。此處から彼の人達の傍まで何も妨たげるものを見たくない。草も木も家も、況して人も皆私に出逢つては呉れるなと思つた。私は何にも見ず何にも聞かず直ちに、向方に居る愛する母親の胸に大きく手を擴げて飛付きたい。弟や妹をしつかりと抱きしめたい。誰も私には逢つて呉れるなと強く祈るやうに思ひながら歩いていつた。わざと廣い道をさけて、草に埋れた石の多い路を、狂ふ様な息づかひをして私は歩いた不思議に人が來る様子もなかつた。一かたまりの人家



のうしろを通つて、それでも、犬にも出逢はなかつたので思はず私は笑つた。それから山の麓の谷にそうて木樵の通る道を歩いていつた。

暴風雨と大水とで、崖のところ〲の變つてゐる、然し全體を見ると昔のまゝな此の谷には昔の通り草花が咲いてゐた。桔梗の花の紫、野菊の薄紫ところどころに、葉ばかりの女郎花がなよ〱して、『秋』がそこらに姙まれてゐる樣な氣持がした。

上を見ると、墓地の山が見えた。私の家の墓地が一番高い西の端にあつて、祖父の大きい墓石が一つだけ高く見えて、其の他は見えなかつた。――父がそこに眠つてゐる。花世、花世と、臨終まで呼びつゞけて逢ふ事の出來なかつた祖母がそこに眠つてゐる、叔母も二人の弟も、一人の從妹もそこにゐる。

私は草の下をちろ〱と響きを立てゝ流れる水をまた手に掬つてのんだ、小さいどぜうが小石の間を走るのが可愛らしい。

やがて、我家の西の大松が見え、母家の屋根が見え出した。私は、心のまゝ聲を上げる事が出來た。母が今に喜悦で泣くであらう。そして、涙の中から私の名を呼ぶだらう。而して、母は何を最初に聞かすであらう。それから誰が私を見付けるであらう。

果樹園は昔の通り竹垣にかこまれてゐた。倉のあとには、大豆が植ゑてあつた。中門のそばに黄色いダリヤの花と、暗紅色の大輪のどが咲いてゐた。而して、家は開けつぱなしで、裏庭の五葉松が、通りの方から繪のやうに眺められた。

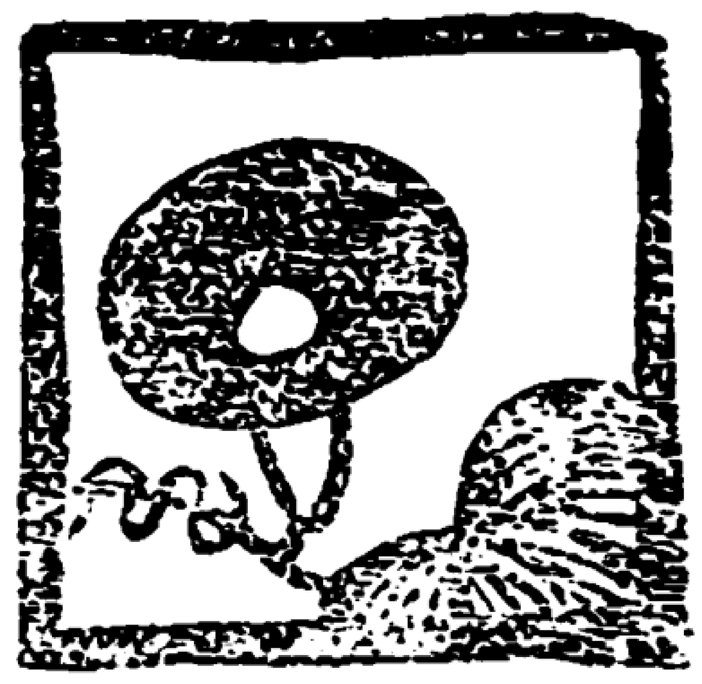
北座敷の方に黑い子供の頭が見えた。頭の大きさがすぐそれが三四郎である事がわかつた。私は庭に立つておもはず恍惚とした。……ふくと、云ふ昔馴染の犬が飛んで來て、わすれた人の顏を見て大きな聲で吠えた。

私は此處に立つてゐる。母は此の家の何處に居るだらうと思つた時、三四郎が聲を上げて私の前を走つて來た。此の子は、

『母さん。姉さんがもどつたでよ。東京の姉さんが‥』

と夢中に叫んで笑つた。

母が出て來た、ぼんやりした母の顏を私は見た。涙を帶びあまりの驚きに言葉も出ずに、じつと私を見守つた母の眼。私は母の手をその時握つた。今迄に此れ程母を愛した事があつただらうか。私は母を、脊中から抱えてゐた。（をはり）



出勤日記

扇花

遅刻した日靜枝は何日になく三十分遅れて、役所の門を潜つた。出勤名簿には、「遅參」とべつたり黒印をおされて了つた。

急いで黒の事務服を被つて、昨日やり掛けた計算をパチ／＼やり始めて居ると、ドアーが開いてコツ／＼入つて來る靴の足音に、誰かと思つて、算盤の手を止めて頭を上げて見ると、高等官で、此の女子計算室の主任△△であつた。一同からの默禮を輕く受けて、まうけの椅子に身をよせると、ポケットからつまみ出した敷島をスパ／＼吸ひ始めた。淡い紫の煙りは、狹い室内にたゞよつて鼻がいたむやうだ、給仕は氣をきかせて窓を開け放した。さつと流れ出る煙りは朝の冷い空氣の中に吸ひ込まれたやうに消えて了つた。直ぐ前は源助町の電車通りで、電車の走る音が馬鹿に耳につく、主任は一番先に出勤簿をひろげて凝と見て居る

靜枝はヒヤ／＼した。今月に入つてからまだ間もないのに、最う三度遅參の印がおされてあるのだから、きつと「吉川さん」と呼び出されて、彼のネチ／＼した男らしくない叱言を聞かされるのかと、胸ばかりワクワクさせて、算盤の上を走る可き指は空である。「なぜ遅れました」ときかれたら彼の樣に言はう、斯う言つて見ようなど丶思ひながら、些々ぬすむ樣にしてあぶらぎつてふとつて居る主任の横顔を見て居た。が其れは徒勞に過ぎなかつた。主任は見をはると同時に腰を浮かせてさつさとドアーを開けて出て行つて了つたのである。ほつとした靜枝はニツコリ傍の友を顧り見て、「富村さん、春枝さんは。」と聞いた。「まだ入らつしやらないのよ、最うおやすみでせう。」「さうでせうか‥‥。」若し春枝さんが來れば遅參者は自分とで二人である。そしたら主任は默つては居まい。そりや自分が惡いのだが、病氣に惱んでる春枝さんが可憐さうだ、何日だつたか、五分遅れたら大騷ぎ、平常低い聲でものを言ふ主任の其の時ばかりは顔を眞赤にして、「醫者へも行かずにおくれたんですか、貴女は遅參の慢性病だ。」隨分皮肉などなり樣だつた。

勝氣な春枝さんは口惜しがつて體を顫はせて机の上

に泣き伏した。そして何時迄も泣いて居た、靜枝は見るに堪へないで、一所に泣いた。今日は矢張り遲れたらしい、いつそ〳〵病氣で休んでくれると可いがと思つた。合はなかつた計算も濟まして、帳簿の記入をして居ると、柱時計は高く十時を打つた。遂々春枝さんは來ない、缺勤である。靜枝は自分は叱言は言はれずに濟んだもの丶、仕事の間々に思ひ出したやうに振り返つて、互に顏を見合せてニッコリ笑を交はす美しい人の居ないので何となしに物足らぬ思ひがして淋しかつた。役所に居ては、いくら仲の可い友だからとて然う思ふ樣に口はきけないが、それでも正午の食事がすむときつと靜枝は、新聞をよんで居る春枝さんの肩に身をよせて、よみをはる迄默つて春枝のも丶われの髷をといてやつたり、かんざしをさし直してやつたりするのがくせだつた。今日は、食事はすんで了つたが、ゆく可き人の影だにない。主なき其の机の上には、皆の仕事が山の樣に積まれてあるばかりだ。靜枝は傍の人達がジゴマの話しに悅がつて居るが、つり込まれもせず、机に頰づえついて、金ペンにブリユーインクにじませて、白い西洋紙の上にスラ〳〵と「風流線上下」と書き出したが、フイと思ひ出して、書いた字の上には棒を引いて了ひ、新たに

實にや浮世のわざながら、誠に拙なき海士小舟の、
渡りかねたる夢の世に、すむとや言はんうた方の、
しほ汲み車よるべなき、身は海士人の袖共に、思ひを干さぬ心かな……。

とかき流した。是れは謠の松風の一端であるが、春枝さんの大好きな風流線の中、芙蓉館の樓上で、艶なる夫人の松風を口誦さむ條があるのだが、何日も靜枝と話しのきれた時、春枝さんは、ふつくりしたも丶われをかしげて、夢見るやうな美しい瞳をうつとりさせて

ペン走らせるのは空に覺えた松風であつた。靜枝は是迄小說には少しも趣味をもたなかつたが、春枝さんを心に親友と誓つてからは、めつきり小說をよむやうになつた。然も鏡花の著や、鈴木さんの返らぬ日なんか幾度よんだか、自分でも驚く程の熱心家となつて了つた。「春枝さんは何をして居らつしやるだらう……。」

役所がひけて、今日ばかりは一人ぼつちの淋しく、上野行の電車の一隅に俛いて斯うつぶやいた靜枝は、東竹町の、とある小路の門がまへ、何日も黃昏れて琴の音させる美しい友の樣子を、さま〴〵に胸に畫いて見て、一人淋しくほ丶笑んだ。



新奧樣

涙路

早いもので學校を出てからもう三年目の年を送つてしまひ、本年ももうコスモスの咲く頃となりました。朝夕むつび會つたクラスの方々はどう遊ばしたのやらおたよりも中々きかれません。學校時代には一番の御轉婆クラスとして知られたもんですが、もう母樣と呼ばれてる人々も出來てしまひました。秋の夜長のつれづれにクラスの若い奥樣方でも御紹介申しませう。

まづ一番脊高の花子樣、五尺二寸もおありなさるので主任のE先生では日本も有望だ決して西洋人と競べてまけはしない、なんて申されますの、校中での運動家でした、私達の組がテニスの牛耳を取つて居られたのも、此方のあつた故と申てもいゝ位御熱心でしたの、スタイルはよし頭高の束髪に赤の五インチリボンなどかけてお出になるので随分目につきますの、中々の御交際家で御出あそばすので下級生の御花も澤山御持ちでした、異性との御つきあひもさかんになされた樣でしたが、御一方御氣のどくの方が御座いました。何でも文科に御出になる方で、かたい／＼御約束あそばして或人から御父樣へ御ねがひになつたんださうですの御物がたい父君のなんで許されませう！御二方共とげ得ぬ戀をなげかれて、花子樣も決して三年間は結婚いたしませんとちかはれたのに其御言葉の消えぬ間に工學士の君と御結婚、今ではもう可愛い坊ちゃんの母樣となつてしまひました。僞はられた君の御腹立ち！女の心ほどあてにならぬはない、僕はもう決して妻なんか持たぬ。と云はれたさうです。嫁かねばならぬ事情もあつたでせうが、此の御言葉をきかれた時の御ねざめはどんなで御座いませう！？

ゴム人形と呼ばれた春子樣、リンゴの樣な赤い頰をしてすきとほる樣な御色の白さ御納戸の袴を短かくはいてひばりの樣にとびまはつて居りました。無邪氣なので皆樣に可愛がられて居りました、何時でしたか先生が、皆樣は何が一番樂しみですか、と御きゝになりました時に春子樣は、私は母樣の膨脹してるのが破裂して赤ちやんが出るのが一番樂しみですつて御答へしたので、大笑ひした事が御座いました、それがもう海軍

大尉の奥樣になつて逗子に新家庭を作つて御出になりますの、まだ肩あげのある御召物があるかも知れませんわ、○○大尉夫人と札でもさげて置かなくてはねホホヽヽ。

ほんとにまげに御あげ遊ばした所拜見致し度う御座いますわ、どんなに可愛らしいでせう！

高子樣、卒業式の翌日御結婚、エンゲージの君が御待ち兼ねだつたのださうです、學校を出たはかりですのにほんとに感心な御方ですの。

ハス君は開業醫、書生が一人と御姑樣に十五許りの妹さんと坊ちやんも御出來あそばしたのに下女もなしで御一人で萬事きりまはして行かれます、先日御伺ひ申ました時丁度八百屋が二人もつぎ／＼參りましたので、そんなに御買ひになるの？て伺ひましたら、エヽ皆で三人來るのよ、一つ家からとると競爭がないので高くていけませんもの、御米屋も二軒よつて仰しやるの中々ぬけ目が御ありなさらないわね。最も學生時代から萬事こんな風でしたので主婦と云ふニツクネームつけられた位ですもの。

綾子樣、白色の鳩の樣な目を持つた御氣立のそれはそれはやさしい方なのでエンゼルなんて申して居りました、早くから御父樣が御ありにならぬ故でもありませうが、局長の位置の捨てがてに嫁かれたんでせうが御姑樣が有名なむづかしい御方だとの事、旦那樣は御結婚後間もなく滿洲へ御轉任あそばされたので御姑樣の御そばに淋しくとりのこされてしまひました、嫁く早々簞笥の中を一つ／＼しらべて御着物の御小言、そして、こんなあらい柄は役者ではあるまいし、家ではとてもきせられませんから早速染めかへる樣に、と皆ほどかせて、四十位の御婆さんが着る樣なのに染めさせてしまつたのですつて、旦那樣からの御手紙は皆先へあけて綾子樣あての爲替でも皆御姑樣が取上げてしまはれるので一年もすぎた今日まで、まだ一錢の御小遣もいたゞいた事がないさうな、御やさしい綾子樣なればこそ不平も仰しやらずにつとめて居られるんですわ、御苦勞あそばしたと見えて近頃の御やせになつた事。

K子樣、兄樣が工科を御出になつたので御友達のやはり工科出の方へ御嫁になりました、御二人と下女一人の新世帶、それは／＼のんきですのよ、うるしの樣な黒い髪をローマに御あげになつて荒いかすりの銘仙にめりんすの帶などしめて居るので奥樣と申あげるの

もきまりがわるい樣、旦の君は〇〇會社へ御通勤です、たまに御友達の御宅へ出かけられて御歸りのおそくなる時などは待つ間にねむくなつてねてんでしまふんですつて先日も十時すぎても歸られないんでせう、例の通り御待ちしてる間に下女と二人してぐう〳〵とねてんでしまつたのオイ〳〵、と云ふのでふと顏をあげると何時のまにか御歸宅、どうしたんだ？瓦斯はかん〳〵ついてるし、火鉢の火は一ぱいおこしたまゝ、いくら呼んでも出て來ないから茶の間へ入つて來たらこれだものつて驚ろいて居たので、ほんとにきまりがわるくなつてしまつたと御話しなさいました、其から旅から夜分歸つて來て御飯をめしあがる時にはよく困る事があるんですつて、時間は遲いし、もうすんで來る事と思つてると腹が減つた飯をくれ、そんな用意がな



いので御飯はなし無理にも他のもので間に合はせていたゞく事があるのよなんて笑つて居りますの、何しろ御姫樣の御臺所なのでまご〳〵なさるんでせう？出來たばかりの御羽織を七輪で三枚も燒こがしてしまつたと云つてさすがの御自分でもあきれてましたつけ、學校ではらかん樣の親玉だつただけあつてほんとにのんきな奥樣！

　とし子樣、たで食ふ蟲もすき〴〵とはよく申したもの、よくあんな御猿さんが着物着た樣な方を立派な法學士が御貰ひあそばした事、學校に居る時分には成績も少しあぶない處に御出でしたので、先生方の方へいろ〳〵運動あそばしたので組中でだれも相手にならぬ時も御座いました其くせ理想？は御高いのよ、それも極つて結構、彼方此方と結構な組が幾個も出來てめでたし〳〵。

耳袋(二一)　猿丸太夫

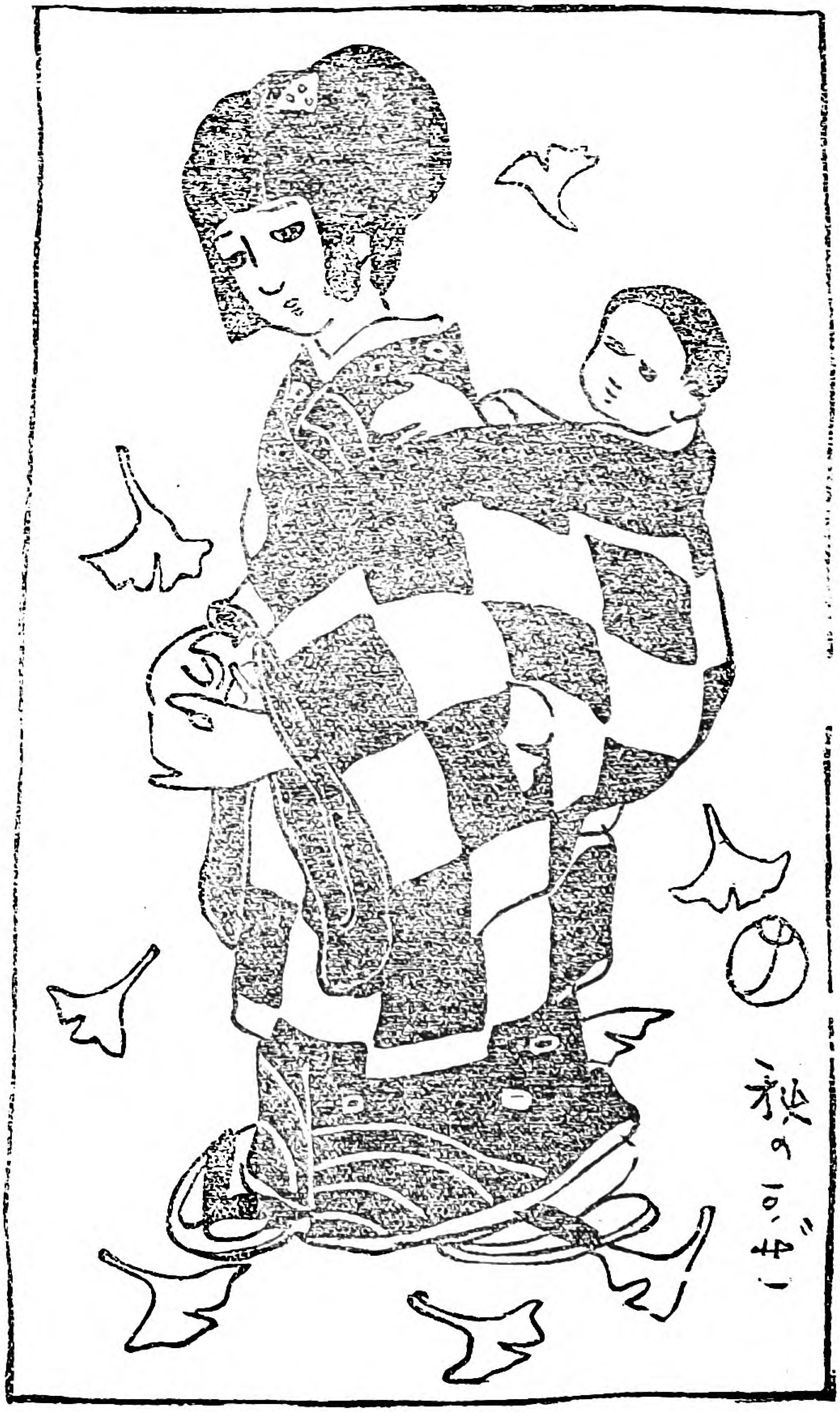
△英國の遊山地ブライトンの或宿屋に、柳櫻を混雜せて三人の女中あり其喫煙室の壁にお神の筆にて、マリーの肩に手を置く者は五志、ジエンを抱く者は二志、フワニーに抱きつく者は七志、フワニーをキスする者は十志、ジエンの首を抱へる者は一志、マリーの腰をかゝへる者は五志の罰金に處すとの掲示あり、ジエンといふのが一番醜さうな面だが、お客樣たることをも亦難い哉。

△丹波篠山の藝妓梅鶴の許に、其馴染の客より送りたる譴責狀なるものあり、曰く僕で梅鶴に對する譴責狀を足下致す、足下の僕とは昨年七月より切つても切れぬ許りの仲にして、僕は足下の爲め、父兄を滿着して、是より捲上げたる金錢を殘らず其許に入れ、只管足下の感心を買はんことと勤むること孜々汲々たり、然るに足下何んぞ薄情なる、余本月二日王地山公園に散歩したるに、足下は扇阪なる男子のと親密さうに手を取つて、園内を吟歩しつゝありたるに非ずや素より藝妓の職權として容を叮嚀に取扱ふは法律の命ずる處なりと雖、當夜扇阪某に對する取扱方は、一種變りたる所ありたり、足下如何に辯解する所あるも、余は既に其擧堂の怪しきを認めたれば、一向受付けず、又今度何事も一節君に依賴せざるべし、然りと雖是迄余が足下を採用し居りたる職權を以て、二日の晩の不品行を譴責し置く、幸に之れを請け上草々頓首と名文といふべし。

△日でり年に饑饉は無いといふが今年は夏中雨が降らんで隨分方々で難義した、水かけ論も再再有つた、丹波では天晴智惠の有る男が白衣を被つて大狸にいでたち、毎夜皆を化して逐ひこくつたあと、充分水を引きくした、それを兵隊上りが、岩見重太郎を氣取つて退治にかゝつて半殺しにして了つた。

△邦人にして某國留學中のものに金井といふ男二人あり、混雜を防がんため色の黑きを黑金井色の白きを白金井と呼びなせるを新來の邦人怪みていふ『白かなゐ』といへば黑かるべき筈、『黑かなゐ』といへば白かるべき筈ならずやと何だか受取れぬ話だが、自分で命名したのでなく、傍の連中が便宜上内々で名けたのだとすれ

ば有り得ることだ、あの處に佐藤といふ家が二軒在つた貴様は分家だからおれより上席へ坐つてはならんといつたのが初まりで、奉行所へ訴へ出てどうか黒白を分けて下さいといふ、奉行は大岡越前守の生れ代りでもあつたらう、原告には黒◎、被告には◎白の一字づゝを下されて、以來黒佐藤白佐藤と呼ぶべき事と申し渡されて閉口した昔話がある。



▲『拙者妻春江、二十三歳、長け五尺程、丸顔色はほうべん、女學校卒業、口うまし……小生留守中に衣類其外いろいろを持出し家出候……若し小生の願如何にやと御考へ候へば右實兄新舞鶴住嘉三郎殿や神戸相生橋署へ御紹介願上申候』と岡山署へ願ひ出た男あり、口うましは佛典謂ふ所の三十二相咽中津液得上味の事にや、若くは口前がいゝといふことか、どつ

ちにしてもいゝ太郎作が有つたものだ。

▲佛國のル、プチー、ジュルナル通信員がガロー氏、此程京都の都ホテルに晝食を濟ませて稻畑氏の店員等と談笑の折から人品鄙しからぬ上流婦人、隨從の男兩三輩と隣の卓子に着いて食事を始むる樣子、ガロー氏急に目を細くして婦人の横顔をとみかうみ、斯んな佛蘭西式美人が日本にあらうとは思はなかつたと感嘆措かず、實際日本人の眼には何と見ゆるか知らねど、佛人の眼には女優にして見たいほどの尤物なりと佛語にてペラ〱〱、ユメ分るまじと思ふたる其婦人が急に此方を見て失敬なといはぬばかり、ガロー氏を白眼んだので氏は頭を掻き乍ら、彼の奥樣、佛語が分ると低聲微語、しかし決して惡意ならぬ敬意の批評許して頂きたいものですナー、と聞えよがしに叉も佛語で話して居ると、婦人も急にニコ〱顏、其婦人の去つた後で、何處の奥樣かと聞いて見ると、名は知らぬが近頃京都に滯在の東京商人の妻君だと分明、ガロー氏嘆じて曰く、日本の男子には佛語の分るのが少いけれども東京の婦人間ではウカと佛語を饒舌られぬと言つて居たのは事實だつたと。

▲伊太利の聲樂家カルゾーの聲帶と咽喉の四十萬圓、バイオリン界の名手ポペミアのクベリックの手指が四十五萬圓、巴里歌劇界の明星チェネー孃の踝が四萬圓の保險附とは驚くべし、日本には身體全體で一萬圓の保險料を支拂へるもの數を讀む程なるは心細し。

▲愛人を互に我が物にせんとし猛烈に競爭した匈牙利ブダペストの二少女は決鬪によつてやりとりを決めることゝなつた、スルト其時別に二人の青年が現はれて二少女のために其介添たらんことを申込んで來たので二少女は其强烈なる意氣に感じ早速和解をなし改めて介添人に對して別々に結婚を申込み其の承諾を得た馬鹿を見たのははじめの好男子だ。

▲大分縣に一少女に侮辱を加へた四人のしれ者あり、其詫狀に曰く若姙娠致候はゞ屹度四人にて御引受可申候。これは今後三ヶ月にて判明致候事故。七月十八日を限り上記の條項は其効力を失なふ事。

▲フランクフードでこんな判決があつた、此間パン屋の小僧を使に遣つてパンを運ばせてゐた途中、腹が減つたといふので小僧奴そつと其パンの盜み食ひをしたすると此奴は委託物費消の廉で罰せられたが、今一人の小僧は同じく腹が減て來たのではあるが、今度は人の持てるパンを横取りして食つたので、それは屋外窃

盗の廉で罰せられた。法律話の序に今一つ、これも獨逸で近頃あつた事だが、ある所で巻煙草の箱を一箱盗んだ奴がある、又一人は箱ごと盗まないで、こいつを壊して其中から十本ばかり盗んだ奴がある。すると其一箱を全然で盗んだ奴の方は罪が輕くて、十本盗んだ方は破棄罪として重罪に處斷された、法律もこゝに至つては餘程可憐な餘程小兒じみた興趣が起るものだ。お仕舞に一寸お笑を入よう、裁判官『お前はなぜ其若年になつて自轉車を盗むやうな不都合をしたのだ』被告『ハイ私の若い時は生憎自轉車がありませんでした』

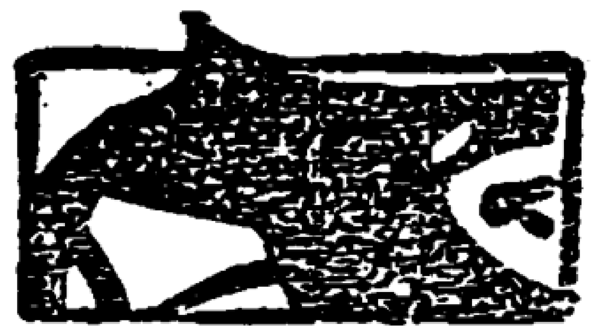
▲長野縣下伊那郡長齋藤氏の乘つた舟が、天龍川でひつくりかへつて、破れた船板に座して流れながら、自ら郡長だ郡長だと叫んだので、ソレ郡長さまを殺してはならぬと第一番に救はれた。タイタニックに乘り合せないでお仕合なり。

▲岐阜竹ヶ鼻字下坂山田秀助等四名、同町坂倉ことの飼猫おこまを撲殺し、之を肴に一杯を傾けしが、斯くと知りたることの怒り一方ならず四名を相手取り四十五圓の賠償の訴へを起したる上、化て來て喰ひ殺してやるのだよと泣き泣き猫の靈をせつてうしてると聞いて、一同身の毛を慄立て、仲裁人を頼み、羽織袴にてこと方に出掛け、佛壇に祀りたる猫の靈に向ひ、三部經を唱へ前非を謝して事ずみ。

▲いくら庭へやつてはならんと禁止してもきかずに生徒がたれるので、校長先生持餘してると頭のいゝ女の先生が工風して小さな水車をWCにしかけた。それを發見した奴がおい水車がめぐるぜと振れたので、學校中の評判になり出たくもないおしゝまで無理にするやうになつて甘々と成功した。

▲熊本市の安巳橋の下で魚を釣つてる子供があつた、通りがゝりのお轉婆娘が、お前に釣れようかいと冷笑したので、子供が怒つて竿で打てかゝつたら、絲が飛んで來て、鉤が鼻へひつかゝつて大さわぎだつた。

▲露領波蘭のソチヤクゾーといふ村は、猶太人の部落であるが、此ごろ村の檀那寺に來住した僧侶は、みだりがましき風俗を矯めんとして、舞踏を嚴禁せんことを圖つた。スルト若い娘達は其娯樂を奪はれるのを悲み、其禁を解いてもらひたいと和尚に迫つたが、和尚頑として之を聽き入ぬところから、嫁入盛りの娘達は同盟して結婚せぬことに定た。處が此ストライキは大に和尚の米櫃に影響するので僅か二ヶ月にして甲を脱いで娘連に降參した。



化粧問答

化粧研究會
婦人修容會　顧問　藤波芙蓉



○『化粧水』と『霜やけ止め』並に『抜毛どめ』について　かねて御約束申して置きました化粧品中、「化粧水」だけ出來ましたから、御用の方は文壇社に御申込み願ひます、皆様又時候が追々寒さに向つて參りますので、ヒヾ若くは霜焦けの玉のやうな御顔や御手が、といふ醜魔に襲はるゝのを防ぎ且つ直す化粧料が欲しいと御申出により特に苦心して「霜やけ止め」をこしらへ殊に毎月皆様方よりの御質問中或は毛を生やしたい、或は抜毛をとめたいと御望みになるのが大多數を占めて居りますので本社長からもこれが適劑をこしらへてわけて上げたらとの相談を受けましたが、毛を生やすといふことになると中々ビン一本や二本位で成績の見らるべくもなく、且つ多少劇物も要すこと故、これは尙考へた上のことゝ致し、「抜毛どめ」だけもと苦心致しました、併し單に抜毛と申しても種々なる異つた原因があり、其原因の異る所、從つて方劑も違はせねばならんのでどうも一般の抜毛に有効のものをこしらへるといふことは至つて困難の仕事なのでしたが、種々實驗の結果漸く適劑を考へ出し、漸く御わけすることが出來るやうになつた譯です。誰方にも文壇社から御わけさすことに致しました。詳細は廣告欄に出て居ります。

問　先月の婦人畫報に先生が顧問におなり遊ばして、フレンドリ化粧水、トレート香油及びライフクリームの三品が修容倶樂部から希望者に分與するとの廣告が見えて居りましたが、これも先生が御手づから御こしらへになつたのでせうか、何故それ等に限り文壇社から御わけ下さらないのでしたらうか。（長野、花の露女）

答　修容倶樂部と申すは、私がかねて顧問として時々化粧術の實修や化粧品の實驗を致し居ります婦人修容會と化粧研究所との分身で、從來この會員の爲めに、私が特に調製致しましただけを、修容料のうちから、一般的に使用さるゝ化粧品だけを廣く世の希望者に分與したいといふ評議の結果、右のやうな廣告を出すに至りました譯既に修容倶樂部員のために調製したものを、今更女子文壇社からといふ事は義理として出來ません他に何等の理由もありません。

問　白色外用劑としてお敎へ下さいましたペトロリームは何處で買求めましたら宜しうございませうか又これを用ひます分量を。（洛中、夕月女）

答　ペトロリームとは過酸化水素水の原名で工藝化學用の藥品を取扱つて居る商店にある筈と存じます、分量と申して丁度化粧水を御使ひになるやう、又その程度で結構です。

問　ソバカスで困つて居りますが、これを治す方劑を先生に御調製願はれませんでせうか、それとも手製の出來る藥がございましたら。（茨城、愛讀者）

答　その發生原因によつて方劑に差がありますが、兎も角甘硝石精、ケシ油各一匁、ケラヤ丁幾五匁を九十三匁の薔薇水に加へ、よく振りまぜて御つけなさつて御覽なさい。

問　先生御著作の新式化粧法なり又は合せ鏡なり、どちらでも宜しうございますが先生の御手許におありでしたら御ゆづり願はれますまいか、代價は何程でございますか。（川越、ちか子）

答　兩方共自家用の外只今持合して居りません、文壇社代理部に御依賴なさつたら御入手出來ることゝ存じます、甲は四十五錢、乙は二十五錢郵税は八錢づゝの筈です。

問　（1）私は今年十九歳になりますが昨年よりか髮が大變少なくなつたやうですが多くなる法を、（2）先生御調製のニキビ劑を用ひました上に艶肌劑をつけましても差支ございますまいか。（下關、田舍女）

答　（1）規那皮浸劑、沒食子浸劑各五匁、カルミン一匁、肉荳蔲實油、橙花油各五分、アルコール十匁、薔薇水、各百匁を合せたものを毎日一回づゝ御つけなさい。（2）差支ありません。

問　（1）顔の毛穴があらく其上アブラ性です

が、(2)新式化粧法の中に御示しになつた化粧品調製法の原料は藥屋にありますでせうか。(關の東の白菊)

答 (1)洗顔して沒食子酸蒼鉛をすり込み、その上に輕石鹼をぬり、暫らくしてよく洗ひ落し、杜松子精を御つけになつて御覧なさい、これで直らねば剝離劑により、一たび表皮を剝取らねばなりません。(2)地方の藥店にはそろつて居りますまい、都會の問屋ならある筈です。

問 恐ろしい程毛が拔けて今では小指程の大さになりました、適當な毛生藥を。(長崎、秋子)

答 本欄(下關、田舍女)さんへの(1)の答を御覧下さい。

問 私は舶來豚と呼ばるゝ程醜く肥えて居りますため、また縁付かずに親の厄介となつて居ります、何卒哀れな女を救ふて下さると思召しヤセル藥を、而して其分量〇、〇なんて仰しやられては一寸わかりませんから、茶碗にどの位といふやうに。(小樽、舶來豚)

答 朝食を廢し、空腹になられた處へ、カルルス鹽一匁を茶碗に一杯の水に溶かして毎日三度御のみになり、夜間おそく食事をなされば必ず瘦せます。

問 (1)自宅にて出來る石鹼良否の試驗法、(2)白粉を毎日つけますと色が黑くなるとか又外出の時白粉をつけますと日に焦けぬとか申しますが。(3)夜化粧の法。(4)現今の白粉にて自然に皮膚を黑ずませるもの及び白粉良否の自宅試驗法(5)頸を白くする法。(6)水白粉は肌を黑くしますか。(7)ニキビとアセモの自宅療法。(8)チヾレ毛を根本的に直す油。以上を何卒。(田舍、少女)

答 御尋ねの中、(1)(3)(4)(7)は精しく拙著「新式化粧法」及び「合せ鏡」に述べて置きました、猶目下「日本」新聞紙上に連載しつゝある「化粧の話」を御參考下さい。(2)皮膚に水氣があれば、日射のために黑くなるは誰方も御承知のこと、白粉を御つけになり水分の含まれてある限り右の理の應報は免れないといふことも自明の問題と存じます、この故に私は常に粉白粉を扮飾料の最上であると申して居るのです(5)過酸化水素水がよろしいでせう(6)は(2)の答に同じです。(8)今の處發明されて居りません。

問 (一)私は非常なアブラ性なんですが、これを少なくする法を、(二)毛穴のあらいのを縮むる法、(三)先生のニキビ劑はアブラを增すやうに思はれますが、(四)過酸化水素水はその儘用ひても差支ございませんか、又その上に化粧致しても皮膚を害しますまいか。(山口、千代子)

答 (一)アルカリ性石鹼精を御つけになり約二時間程したらよく洗ひ落し、毎日一回づゝ右の方法を御やりなさい、(二)は(一)の如く御やりになつた後、艶肌劑を御つけなさい。(三)そんな筈はないと信じますが、餘り一度に澤山御つけになつたのではありませんか、若し其樣な事實ありとせば無論改善を加へます、今一應御つかひになつて見てシカとした御實驗の報告を御賴み申します、私は斯樣な御尋ねを自分の智識を促進さして下さる恩言として承ります(四)其儘御つかひになるのです、其上にお化粧なさつても差支ありません。

問 ベンゾール其他合せ鏡などに御書きになつてあります藥品や香料は何處に參りましたら求められませうか。(諏江の里)

答 藥品類は化學用藥品を取扱つて居る藥店、香料は香料品店にあります。

問 私は色黑く顏にオデキが出來、又ニキビの樣のものも澤山出來ますが。(山口、幸子)

答 神田旅籠町文光堂からニキビ劑をわけて御貰ひになり、それに過酸化水素水を等分に混ぜて夜間御やすみになる時御つけなさい。

問 或醫師にソバカスを取つて貰ひました所が、直る處か其跡が茶色のアザのやう生れもつかぬ見られぬ顏になりました、何分先生の御力で。(和歌山、北坂の上の女)

答 あとがアザのやうに?それでソバカスは取れたのですが、お使ひ殘りがあるから、その藥を見せて頂けませんか、それでないと一寸見當がつきませんから。

問 (1)私は今年十六歲ですが若白髮で困つて居りますが。(2)ニキビの跡が出來て其所にアブラのやうなものが出ますが。(3)ニキビの跡が穴になり凸凹して居りますが。(岡山、操子)

答 (1)その白髮を御拔きになり、其所へ直ぐ生姜の汁を盃に二分目程しぼり取り、それに丁子油三滴程滴らしたものをすり込みなさい。(2)と(3)は(關の東の白菊)さんへ答へた(1)を御覧下さい。

問 (1)今年二十歲ですが、四五年前から頭髮が段々と減じて參りました、これが良劑を先生に御こしらへ願ひ度う存じますが。(2)顏のキメの荒いのには艶肌劑だけつけましても綺麗

になりませうか。（神戸、さよ子）

答　（1）直接私の方へ御申越し下されば、よく考へた上で何とか御需めに應じませう。（2）コールドクリームと一所に御つかひ下さい。

問　身長を短かくすることは出來ますまいか又新芽色白粉はドンな場合に使ひますのでせうか、而して如何なる効力のあるものでせうか。（岡山、大女）

答　衣物の着こなしによつて短かく見する外には私も存じて居りませぬ、新芽色のは赤黑い顔の方の使はべきもの、扮飾上の効果としては、肉色白粉と復用することによつて高い處を低く見するの力を持つて居ります。

問　先生の御著書「新式化粧法」の中に白色內用劑として冬瓜子外二品を御示しになつて居られましたが、それを先生に御調製を仰ぐ譯には。（大阪、信貴）

答　おやすい御用です、直接御申越し下さい。

問　（一）赤黑き顔の服用白色劑を。（二）クリームを使ひますと顔の毛穴が更に目立ち其上へ粉白粉を打ちますと一層ボツ〳〵と見えますが（三）御著書に御示しの種々なる藥品及びキセロルクリーム新芽色白粉等の賣店を。（本所、なでしこ）

答　（一）新式化粧法に書いて置きました（二）ソンな筈はないと思ひますが、御使ひになつて居るのは何クリームと何白粉ですか、いつか拙宅へ入らしつて御覽なさい、私が扮飾して見て上げませう。（三）種々の藥品とだけでは御答に困ります、キセロルクリームと新芽色白粉とは御宅の近くでは兩國米澤町の紅屋にある筈です。

問　（1）毛髮が軟かでクセ直しを致してもクセがつきます何とか髮を硬くする法はございますまいか。（2）美髮香油の使用法（その香油のビンに美髮劑のペーパはつてありますので解りませんから）（3）高い所から落ちて頭に切疵を致しあとが禿げました、毛の生える藥を。（津山、木世）

答　（1）亥亞硫酸カルシウム三匁を二百匁のオリーブ油に溶かし、それにイランイラン油五分を入れたものを普通の髮油をつけるやうに御つけなさい。（2）使用法は美髮劑と大概違ひませんので、それで美髮劑のペーパを張つてあつたのです、「猶クセの多からぬ人は」三以下を除き、他はそれを應用なさつても差支へありません、併し今度からは別に美髮香油としての使用法をつけさす事に致しませう。（3）どうも六ケ敷からうと思ひます。

問　元來男子のやうな手の格好をして居りますのに搗て、加へて青い太い筋が張り、それに長く手を下げて居ることが出來ません、甚らなく重くなりますのでございますが（群馬、大手子）

答　折角ですが私には解りかねます、專門醫に御相談なさるべきものと思はれます。

問・美髮劑をつけまして、あとを梳かねばいけませんでせうか、私は前々から頭髮が抜けますので少しも梳かずにつけて居りますが、それで宜しうございませうか、而して美髮劑をつけましたら普通の髮油を用ひませんでも毛がわるくはなりませんでせうか。（横濱の乙女）

答　よくお梳きにならんでは美髮劑の効果は見えません、又美髮劑自身としては毛髮をわるくするやうなことは斷じてありません　けれど髮油の代用にはなりません、抜毛は別に療法を講ぜねはなりますまい。

問　（一）寒さに逢ひ又暑く感じますと鼻ばかり赤くなりますが、（二）新式化粧法を求めたいのですが代價を、（三）ニキビでも御座いませんが、小さな吹出物が出來たり直つたり致します爲め顔が荒れますので。（無名女）

答　（一）兎も角文壇社から「日やけ止め」を御求めになり、それをおつけなさつて御覽なさいその上で考へて見ませう。（二）四十五錢です三艶肌劑を御つけなさつて、二十分したらそれを洗ひ落し、その上に今度文壇社から御わけすることになつた「化粧水」を御つけなさいまし。

問　（1）自然美を失はずに手輕に出來る美顔法（2）肌を黑くせず、光澤のないのを直す法、（3）毛髮を長く且つ生やす法、（4）色を白くする果物。（5）レート化粧水や水白粉は肌の光澤をわるくし黑味を帶びさせはしませんか。（6）石鹼と洗粉の優劣、（4）米のトギ水で顔を洗つては如何ですか。（田舍の少女）

答　（1）（2）（3）は「合せ鏡」と「新式化粧法」に精しく説明して置きましたからそれを御參考願ひます（1）西洋の化粧法の本などに色々と載せてありますけれど實驗して居りませんから、これかと特示して申上ぐる果物もありません、俗説に桃は顔色を艶やかにし林檎は肌を白くすると申して居りますが、別に害にもなりますまいから御ためしなさつて御覽なさい。（5）斯樣な賣品は斯樣な公閉の問答で可否することを避けたいと存じます。（6）要するに其原料によります、石鹼だから洗粉に劣るとか洗粉だから石鹼に優るといふ判斷を下さるべくも覺えません（7）俗説には色を白く肌理をよくすると申して居ります。

時代の要求により顯はれたる最新レコード破りの大理想藥は？

スギタ製

ラジール液

定價｛大瓶金五拾錢。小瓶金拾錢
　　｛中瓶金貳拾錢。送料市内四錢 地方八錢

主治概要

◎急性及び慢性僂痲質斯◎神經痛其他諸關節及び筋肉手足腰肩の凝り●シモヤケ●等痛みに特効あり

製造本舖　東京市四谷區麴町十二丁目十六番地　杉田藥房

特約店　東京市神田區橋本町二丁目角　合資會社福井商會

全國著名藥店にて販賣す

貴婦人達はナゼ美しいでせう!!!

▲其れはこの様にしてみがき立てるからであります

美顔と化粧法

定價送料共金三十七錢
切手代用は金四十錢

目次の大略▲色白くなる方法▲赤キ色を櫻色にする方法▲シワのよらぬ方法▲キメを細かにツヤを出す方法▲日にやけるを防ぐ方法▲歯を白くする方法▲手の色を白くする方法▲髪の毛を黒くする方法▲毛のぬけるを止める方法▲毛をのばしつやを出す方法▲ふけを去る方法▲ちゞれ毛くせ毛赤毛を直す方法▲やせる法▲ふとる法▲鼻を高くする方法▲髮をよくする方法▲入浴の方法▲化粧品の撰び方▲おしろいのつけ方▲衣服の模樣と縞柄▲衣服の縫ひ方▲衣服の着方

此外いろ〳〵の事が書いてありますが皆どなたにもすぐ出來る事ばかりで其効果も面白い程あらはれます。私方へ御申越下されば特別に割引いたして差上げますから十五錢切手十五枚又は一錢五厘切手二十枚手紙の中に封入して至急御申越下さいすぐ送本いたします

◎本書著者　東京神田錦町三ノ二　高柳孝子

色白くなる

色黒き方、青き方、赤すぎる顔の御方は郵便切手二錢封入御手紙下さい必ず色白く美しくなるよい藥を御知らせ致します。冬になつて御顔のあれて、おしろいの付きがわるい方などはすぐなほります。皆様に御實驗を願ひました所「日本一の黒美人などと笑はれた生付きの色黒が色白くなりました」とか「美人の神様と拜んで居ります」などといふを始め數千通の御禮狀をいたゞいて居ります。

東京市神田錦町三　高柳こう子

お正月も近づきました正月迄に色白く美しい御顔にならうと思ふ御方は一日も早く切手封入御問合せ下さいませ

▼女子文壇化粧顧問　藤波芙蓉先生實驗發明新化粧料△

クセ毛をなほし 美髪劑（びはつざい）

●定價小瓶參拾錢、中瓶五拾錢、大瓶壹圓（送料）市内四錢地方八錢

「美髪劑」は十有三種悉く人體皮膚並に毛髪の攝養となる純植物性のものより成り、天性のチヾレ毛には些しも効能はありませんが、クセ毛なら何んなひどいものでも直ります、譬へクセ毛の人でなくとも、毛がやはらか過ぎて、ハエギハもビンも、タボも下り易い毛髪でも、之を防ぐことが出來ます、又毛髪が硬くて自由の利かない人でも、すなほな好い毛髪となります、加ふるに毛髪の色澤を美しく致します。

（清韓臺樺各送料參拾錢ヅヽ）

美髪香油（びはつかうゆ）

●定價一瓶金壹圓五拾錢（送料）市内四錢地方八錢

「香油」は美髪劑の總ての効能を具有してある外に、一時的にチヾレ毛を直し、毛をフクラマス力をもつて居りますから、如何なる毛の薄い御方でも、これをつけて髪を御結ひになれば、フックリとして澤山の毛のやうに見えます、又皮膚が剝脱してフケが出たり、毛髪が赤く細く枯痩するのを直す權威を備へて居ります。

（清韓臺樺各送料參拾錢ヅヽ）

純植物性 洗粉

●定價小袋入參拾貳錢、大袋入六拾錢（送料）市内四錢地方八錢

此「あらひ粉」は顔料の洗粉として皮膚を美化するのみならず、洗髪料洗粉として髪のツヤを出し、毛をサラサラとさせます、即ち先づ此洗粉で御顔やおぐしを洗つて「美髪劑」を塗け「コールドクリーム」をスリ込み、其上に「艶肌劑」を御つけになれば「四劑互に相たすけ合つて、根本的に自然美を發揮する譯であります。

●附言（本品は原料輸入品のため暫らく品切の處今回澤山入荷製造仕候に付何時にても御用命を願ます）

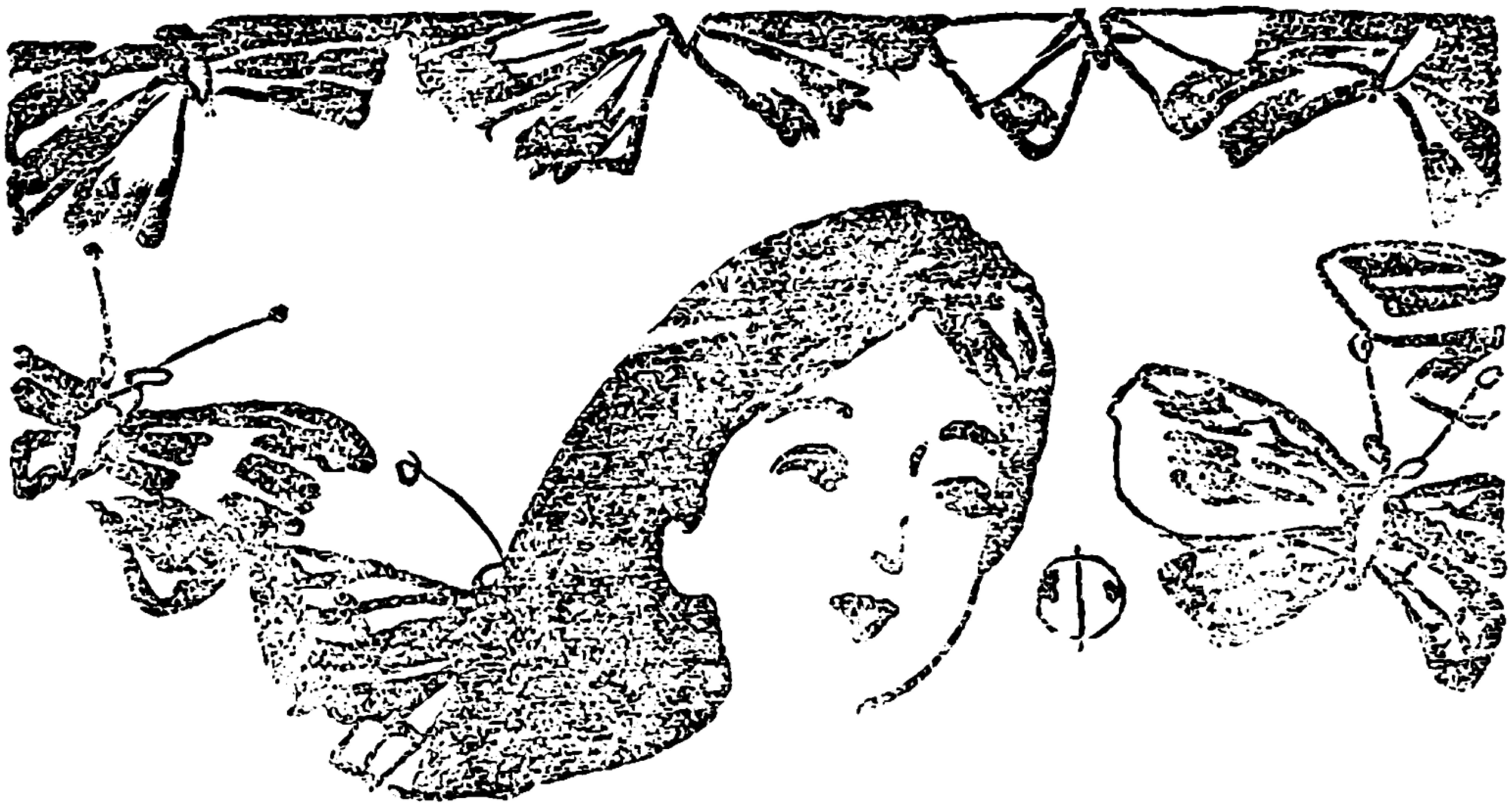
（清韓臺樺各送料參拾錢ヅヽ）

化粧水

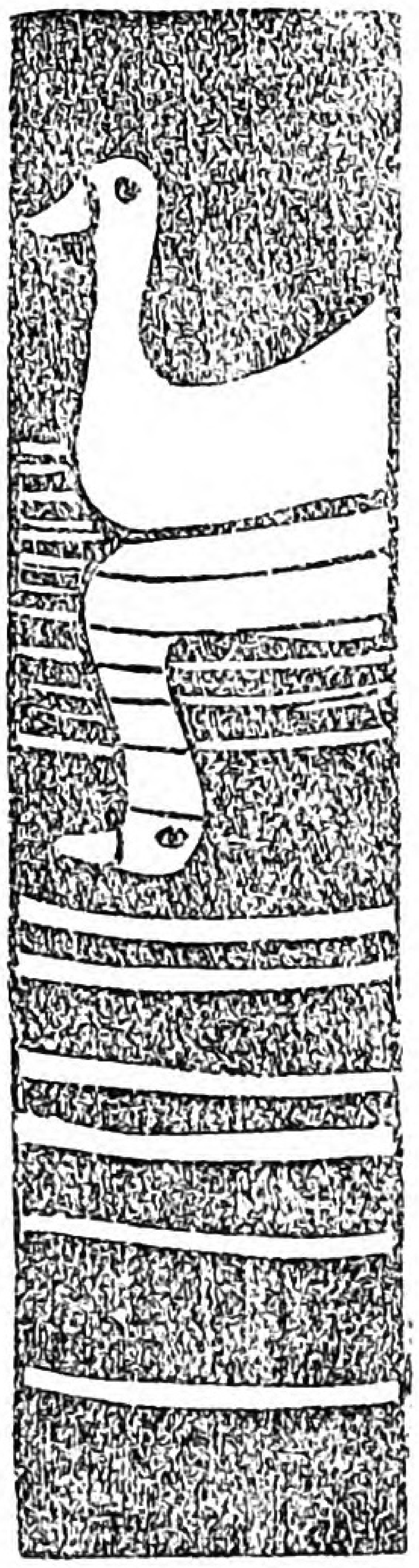
●定價一瓶金五拾錢（送料）市内四錢地方八錢

白粉のノビやノリをよくし、化粧を長く保たせ、肌理をスベ〳〵にし、吹出物を防ぎ且つ直すといふ丈の効力しかありません、使用法は普通の化粧水と同じです

（清韓臺樺各送料參拾錢ヅヽ）



誌友欄



小説

○お京

水野葉舟選

廣島縣　葵の花

「お京わしは畑へ行くがの、お前は疲れて居ようから
ゆつくり休んでえゝからのう。」
枕元にしやがんで母のお正が恁んな事云つて居たの
にお京は夢うつゝ返事をして又ぐつすり寝込んで了つ
た。ふと目が醒めた時はもう爛れた様な朝日が障子に
あたつて室内はぽか〳〵暖くなつてた、お京は慌てゝ
起上つた、そして手早く蒲團も寝巻も押込に突込んで
柱の釘に掛つて居た手拭を肩にして井戸端へ出た、つ
ひ一月の中に恁うも變る者かと思はれる程邊りの様子
が全然違つて居た、青黒い木の葉は唐紅に染め出され
て荒地であつた畑は一面白い蕎麥の花と化し碧梧桐の
實に訛しい秋風が訪れる毎にカラ〳〵と寂しい音を立
てゝ泣いて居る、丁度時候が夏から秋へと歩んで居る
間を旅で過したのだとお京は恁んな事思ひ乍ら未だ耳
底に殘つてゐる工場の機械の音をもつとはつきり聞き
たい様な氣持がしたので其處にあつた大きな石に腰を
下して目を瞑つて耳をじつとすまして居た、身體は綿
の様に疲勞れて居た、さうした内に大きな魔の様な幾
つもの機械、其呪ふ様な音響につれて動く同じ運命の
元に漂ふ多數の女工の變つた顔や姿がまざ〳〵浮んだ
其内には自分の姿やお雪さんの丸い顔までが交つて見
えた、チヽヽケチケチキチキチ、と頭の上を百舌鳥が
嘲弄つた様な鳴き方をして裏の椎の木にとまつてまだ
さうした鳴方を續けて居た。お京は急いで面を洗つて
家内に入つた、閉て切つた屋内の濕つぽいじめ〳〵す
る様な空氣がひやりだるく疲れた身體にあたつて引き
締められる様で氣持がよかつた、長火鉢の土瓶に湯が
立つて居て其側にお京の膳と黄色い香物の鉢が持出し
てあつた、お京は其前にべたり身を横投げに坐つて物
懶相な面して珍らし相に室内を見廻して居たが思ひ出
した様にそれでも美味しくお茶かけをかき込んだ。
　野良に出てゐる母の事を思ひ乍ら、お京は日當りの
いゝ縁に寢てころんで何時迄も立たうとはしないで物置

の前ゝ竹竿に亂脈にかゝつて居る自分が昨夜着て戻つた着物を見て居た、彼女の爲には一張羅の瓦斯双子の袷や紅地に白模樣浮き出た縮緬と淺黃繻子の晝夜帶、柄の大きな友禪の襦袢の袖なんかを恍惚見てる内にお京は此一月の變化多い刺戟多い一生を通じて忘れる事の出來ない變つた生活を思ひ出さずには居られなかつた「晝は絹機を織つて賃錢が貰へる夜も日曜日には裁縫生花茶湯何でも好みのものが無月謝で教へて貰へるのに喃お京はん行つて見んさいお雪さんも行きんさるのに羨しい事ないかい」、三木のおさつ婆さんが岡山絹絲會社の女工勸誘に來てベラ〳〵喋舌つた中で是丈殊にお京の若々しい血汐を湧き立たせた、會社と云へば紡績より外なく女工上りと云へば墮落者かでなくば肺病患者に大概相場の定つたものゝ樣に心得て居る頑固な父親の頸筋を竪に折らせる迄には餘程骨が折れた、泣たり拗ねたり膨れたりはねたり散々母を困らせたあげく漸つと九月初めおさつ婆さんの手から伊東とやら云ふ肥つた四十男の手に渡つた會社行きの二十幾名の女工の中にお京の姿をみとめる事が出來た。其夜思ひは同じにをどる胸を抱いた田舍娘の一行を積み込んだ汽車は黑い東の雲をのぞんで暗闇の夜の野を走つた、そして希望輝く朝日の光りを仰いで蘇生つた樣に皆が深い息を吸ひ込んだ時はもう日頃憧憬れし岡山の土をふんで居たのである。

「殘念だつた四五日後れた爲に機場の方が滿員て居たまあ當分此方で辛棒して居てお呉れ其内には皆彼方へやつて貰つて上げるから喃」、伊東は誰ともなく恁んなとを云つた、之に對して多少不滿らしい色をなすものが中にはあつたらうが、さりとて抗議を申込者もなく皆柔順に賣買のすんだ物品かなんぞの樣に會社の手に渡されてしまつた。

廣い工場内の凡ての裝置はいかに見界のせまい田舍娘の心を驚かせたであらう、彼等は物珍らしげに目を見張つて一々感心して了つた、大きな機械の廻轉につれて幾百とも數知れぬ枠に繰り込まれつゝある絲の切れはしないかと己が受持十幾つの枠を變變る見てゆく女工の内にお京は加へられた、機械の響枠の音男女工等のさんざめき恁うした賑はしい中に居てお京は或一種の淋しみを忘れる事は出來なかつた、ガラスの窓越しに白や赤の綿の樣な夕の雲が西へ西へと、とんで居るのを見ては雲のゆく山又山の彼方の故郷を思ひ父母を想ひ野山を戀ひ里人をまで懷しいものゝ一つに數

へてお京は何時も涙ぐんで居た。

「初めちつとは淋しからうけんど馴れて了へばなんともなくなるから一寸の間の辛棒だ」、伊東が汽車の中で恁んな事云つて居たのをお京は思ひ出して其の内には馴れるだらう淋しくなくなる日が來るだらうと思つてもみたが然し來る日も來る日も同じ樣に寂しかつた。一緒に來た誰彼はもう古參の女とぐるになつて監督の目をぬすんでは男工等と姦しく騷いで居るのであつたお京には夫等を不思議なと云ふよりか寧ろあきれて見て居た、恁んな人には父母も故鄕もないのだらうと思ふとたまらなくいやらしくなつて、寂寥と哀愁の影が犇犇と身に迫まつてくるのであつた。恁うした日がお京にはかなり永く續いた、其内に、「女工の逃走」、が二三度工場内の重つ苦しい空氣を搖がせてつたへられた。

お京の血は湧き動悸は人知れず高まつた、そして、「逃げ樣か知ら」、と恁心の中で呟いてみた、けれどもさうした思ひ切つた事は氣の小さいお京には殊に土地不案内の地で容易に出來得べき事ではなかつた、お京は疲勞れと失望とに落膽りした體軀を薄つぺらな夜具の中に横たへてまたしても涙に咽ぶのであつた。

「お京さんかへりたくないの？」、床を並べてとつたお雪さんがすり寄つて來て忍ぶ樣な小さい聲で云つた

「歸りたくて歸りたくて仕樣がないのよ」、涙はお京の頰をころがつてほろり枕に落ちたけれどもおゆきには見えなかつた。

「歸らないの？貴女は……」

「え、どうして？」

「逃げて……」

「歸れるでせうか？」、お雪は一層小聲になつて、

「逃げられるのよもうちやんと好い事を聞いて置いたから……私歸らうと思ふのよ」。

「おゆきさんお願だから、私も一緒に連れて出て下さい」お京はおゆきの手をしつかと握つて云つた。

會社を逃げ出して後の嬉しい樣な恐ろしい樣な一種異樣の感慨に追はれ家の敷居をまたぐ迄のことをお京は手枕をして横になつたまゝ印象の深い然も恐ろしい夢からさめてほつとした心にまださう思つて居る樣な情緒になつて茫然として居た。

一しきり秋風が木の葉を誘ふて南にゆけば日はしばし微睡む、お京は思ひ出した樣に起きなほつて大きなおくびをつゞけ樣に三つした。（入賞）

○釣瓶

若狭　長谷川英

「ほんとに――、小母様、今度といふ今度は是非暇を貰はなけれやどうせ年とつてから泣かなけれやならないから、今、悲しい目を見ても若いんですもの、末に見込みのない人にどれ丈、添つて居たつて、つまらないんですもの」、お富さんはもう涙のかつた冷たい目をして云つた。小母様は眼鏡越しに針に絲を挿しながら、

「また――、先日やつとのことで治まつたばかりだのにほんとに、一通りや、二通りの骨折りぢやないんだもの、ね、どうせ女つてものは弱い者なんだよ、十年も連添つた亭主に――しかも、あの人でなくちやならなくて無理に夫婦になつた仲ぢやないかい、少し位の道樂は堪忍してお置きよ」



（地賞）隣の女　下谷　山田いま子

「だつて、小母様、今度はどうしても――」と、樂しかつた昔を思つて、ホロリとして目を落した。

「また！お富様、いいかげんにおし、そんなことといつて、私を困らさうと思つてるんだね」と、小供を叱る様に云つた。

お富様は、少しムッとした様な顔をして、「あら、小母様、私、小母様を困らさうなんて、そんなことを――私何も云ひたくてこんなこと云ふんぢやないんですもの、困らすなんて、小母様、妙なことをおつしやるわ」尚、言はうとするのを

さへぎつて、「だつてさうぢやないかい、よつく考へてお見、二人が、行くの行けのと、言ひあつてるのを見て、隣りで默つて居られるかい、だから私、此間だつて、いらない所で頭をさげて、やつとの事でその場を治めたんぢやないかい、それだのに、五日もたゝない今又そんなことゝ云はれて困らずにはゐられないよ、人はどうか知らないけれど、私は困らずには居られないよ」いつの間にか、縫物の手を止めて、をば樣は意氣まいた「何も小母樣に媒介して貰つて夫婦になつたんぢやなし、私等二人が、勝手になつたんだから、別れようと別れまいと、小母樣のお世話になりませんわだからそんな困つて頂くなんて、困つて下さいなんて、お願ひしたことぢやなし」

「ぢや勝手におし」お富さんは、フイと默つて立つて腹立しさうに襖をしめて歸つてしまつた。

其の翌朝、小母樣と、お富さんは二軒仲間の井戸端で顏を見合した。併しどちらからも「お早う」とも云はなかつた。

其の日の午後、小母樣は町へ出てわざ〱小さな釣瓶を一つ買つて來て井戸端においた。そして皆にこんなことをいつた。

「今までのは、あまり大きくて、水を汲むのが、苦しくてならなかつたから」と。

それまでは、お富樣の內の釣瓶を仲間の物の樣に、用つて居たのであつた。

お富さんも、默つては居ない。小母樣に借りて居た可愛い鉢を、紅い花をつけたゼラニアムをわざ〱引こぬいて返しに來た、釣瓶の復讐の積りであつた。

二三日もたつたけれどあんなに云つて居たお富さんも亭主と別れる模樣はなかつた。二人共あの時の事はうその樣に、面白さうに笑つたり話したりする聲が聞えた。その度に小母樣は「それ見た事か」といふ樣な皮肉な笑を洩した。小母樣とお富さんはいつまでたつても解ける模樣がなかつた。

時々清さん　お富さんの亭主――が來ては話して行くけど、釣瓶のことも鉢のことも、どちらからも、云ひ出さなかつた。手持無沙汰の樣子で直に歸つてしまう。

斯して段々清さんの來るのも遠のいて滅多に顏を見せなくなつた。一寸遇つても、橫向いて知らないふりをする樣になつてしまつた。

淸さんとお富さんは每日睦まじさうな聲が聞えた。

小母様(をばさん)にはそれが聞(きこ)えよがしに取(と)れてならなかつた。いつも聲(こゑ)が聞(きこ)える度(たび)に「チヨッ」と、憎(にく)憎(にく)しさうに舌(した)打(う)ちをした。（人賞）

（人賞）別れ　麻布　小絲子



○日曜日

日本橋　小やな

夏子はバタ〳〵と引きずるやうな足音をして、二階に馳け上つて、ガブ〳〵と机の側にあつた土瓶の水を啣つた。

そしてさもぐつたりしたやうに、斜に身體を机に倚せて、恍惚と暫く凝として居た。口の中のネバ〳〵としてゐたのもなほつて、身體が落ち付くと、今塵にまみれて探して來た家が思ひ浮んで、知らず〳〵輕笑が頰に上つて來る。

何となく嬉しい樣な、不安な樣な氣がして、斯うむづがゆさを覺える。

あの××町の角に「かしま」とはられてある紙を見付けた時には無性に嬉しかつた。道路に向いて居る障子の處に机を置いて、彼所をあゝなど〳〵一人で點頭いたこの形式ばつた堅苦しい家をさへ出て終へば如何に伸々するであらう。

無理に此家に居なく共、私だつてさう自分を忘れた事はしはしない、立派に一人でやつて見せる。手も足も心迄も責任があるから、責任があるからと言つて、束縛らうとするこんな家に居ては、今に病氣になつて終う。

自由！自由！放縱…

夏子は氣儘な一人の新らしい生活を思つて、ソハソハと、自分の希望してゐる色々の事迄がもう成就した樣な氣がする。

机に額を伏せて種々と後の事を考へて居ると、バタバタと梯子を上る音がして、

「夏子さん社からこれを持つてきましたよ。」

と封筒を佐江ちやんが出した。

夏子は受取つて、川上夏子樣としてある表書の手蹟を見ると急に動悸がし出した。

昨日は如何なされ候哉、至急御面談致度き儀有之候間乍御足勞此書着き次第社迄御來出 被 下度 候

××□□□社

「あの直ぐ行くからつて歸して頂戴ね」。

佐江子が下りて行くと、さも落ち付かぬ樣に立ち上つてキヨト〳〵帶をなほして、

「誰の用なのだらう？　日曜なんだから。」

亦社の用箋に書いてある手紙を取つて見た。　稍躊躇つて居たが思ひ切つて立ち上つた。

「ね小母さん、あの社からこんな事を言つてまゐりましたから、一寸行つて參ります」。
帳場に居る叔父の眼を避ける樣にそつと、囁いて出た。
狹い路次をせつせと拔けて、通りに出るとまだ強い太陽にアルパストのほてりで赫とする、夏子は此處迄來て、漸と安心した樣にゆつくりと歩き出した。
それでもまだあの帳場から瞳が光はしなかつたらうか。自分のコソコソと出た姿を見て、疑ふらしい批評を加へはしなかつたらうか。
「何だつて今少しの辛棒さ」。なげやりに心で叫んで、勝ち誇つて上を向いて千代田橋を渡つて川に沿うて歩いて居ると
「川上さん、——夏子さん！」
「まア」



さよなら大阪　大關さとの

夏子は意外と言ふ顔をして、自分の動悸を秘さうとして力めて冷靜に裝ふた。
「手紙が屆きましたか。實は僕の用なのでした。」
「昨日は何故來なかつたんですか。
えゝまアこんな處で話しても詰らないから、何故か海の方へでも行きませうか、千代本も直ぐ其處だが」
「えゝ、おや海の方に」
男は夏子と並ぶやうにして歩き出すと、
「夏子さん昨日僕は何奈に待つて居たでせう、一昨晩

の事はよもやお忘れにはならないでせうね。夏子さん何とか仰言いよ」。

夏子は一昨晩……と言はれると、ぎくりとして、全身が顫へては居ないだらうか、蒼くはないだらうか、無理に自分の息を小さくした。

「嫌よホ……」

と蓮葉な笑に、男の覗き込む視線を避けながら、言つた語尾は幽に慄へてゐた。

大通りに出ると人が多勢なので、男は先に立てすたすたと歩いて行く、夏子は追つ驅けるやうにしてゐたが、偶然瞬間懷かしい甘え度い氣分がして、ソツと寄つて堅く男の手を握り度く思はれた。

一昨日――今男の言つた言葉を思ふと直ぐ其氣分は消え去つた。

眞んとにさうだ、彼人とは好きな人として親しい友として交際しようと思つたのは、決して二人誓ふ等と言ふ事は夢にも思はなかつたものを。

夏子は今更のやうに自分の身を振返つて、次第々々に重い鎖で引きずられて、身動きすら出來ない、渦の中に入つて行くんぢやないかしら、と急に重い或力で壓し付けられるやうに思はれる。

「取り返の付かぬ事をした」。心の底で悲しい聲が起ると、足はつと硬ばつて其處に立ち停まつた。

「何うした？」

男の優しい顏のふり向いたのを見ると、急にむらむらと反抗心が起つて、

「では今日はこれで歸りますわ」

と口走つたものゝ、男の人の心を見透いたやうな表情の眼を見ると、

「ホ……」

と笑にまぎらしてまた衝いて行かなくてはならなかつた。

今迄家で考へた、新らしい計畫も滅茶々々に破壞されて終つた。（入賞）

○殘る人

信濃　世良田優子

「鈴ちやん、これをお掛けなさいな、私にはもう派手で、をかしいのよ、それに一二度しか着ないから、一寸も汚れてゐやしないわ」と姉の葉子は紫地に紅蔦の派手な模樣の半襟を鈴子の襟の處にあてゝ見て「おゝよく似合つてよ」と横顏を覗き込む樣にして鈴子の膝に置いた「姉さん濟みませんのね」有がたう御座います、と鈴子は結ひ立ての島田を恥かしさうに半ば上げて、つゝましくかういふた、おゝかうして何やかやと色

色親切にして下さる姉さんを思へばあゝ私は眞實に濟まない、濟まない姉さんよりも先へ嫁くなんて、濟まない〳〵と思ふと胸が一盃になつて知らず涙が頬を傳はつた。

「ホヽヽ、鈴ちやんどうしたの、又馬鹿な事お思ひでないわ、何にも姉さんに濟まない事なんか無いぢやありませんか、鈴ちやんはもう、ちやんと嫁く時が來たんですよ、姉さんは未だ未だ處女の務めが濟まないのですわ」、「でもねわたし」と悲し想に下を向いて涙を拭ひてゐる鈴子を見ると氣の弱い葉子は、却て自分がすまない樣な氣が



日入る頃　芝　後藤明あさ子

してならない、「まあもうちき出來るのね、襟くければ、いゝのでせう、早くくけ上げて着て御覽なさいな、きつと似合つてよ、鈴ちやんには派手なのが似合ふからね」、葉子はつとめて鈴子の氣を引き立て樣としてゐる「似合ふかしら」鈴子は姉の言葉に勵まされて針の手を進める、庭先の櫻の納が紅くなり初めてチラと一葉蟲喰い葉が落ちた、それをじつと見てゐた葉子は秋と云ふ言葉が痛切に胸をついた、そして自分は頼りない秋の野に一人捨てられた樣な氣がして寂しい涙がホロリと落ち樣とした時、ハ

ッと鈴子の前といふ事に氣が付いて、あわてゝ心を强いて强〳〵した「鈴ちやん早く御造らへなさいよ出來たら呼んで頂戴、私仕掛けた用をして來るわ」と葉子はさも用事有り氣に其處を立つた、葉子は自分の部屋の襖を手早く明けると簞笥の上の鏡の前にさしたコスモスがやさしくふるえた、バタンと、かなり大きな音を立てゝ机の前に坐ると、今迄張りつめてゐた氣が一時に弛んで涙は止め度なく頰を傳はつた、あゝこの私の苦しい心父樣だつて鈴ちやんだつて解りやしない無論繼母にはわかるものぢやない、あゝ私は一人だ——一人なんだ——と思ふと後から〳〵涙が湧く〳〵、そして二三日前に來た友の手紙を思ひ出さずには居られなくなつた。

拜啓日頃の御無沙汰御許し下され度候私事先月十八日に女兒出產いたし兩人共肥立よろしく候へば御安心下され度嬰兒は松子と命名いたし候先は御知らせ迄早々葉子は此手紙の文句を心の中で繰り返して見た、ああ此冷かな何の懷しみも溫みもない通り一遍の手紙、此れが何もかも打明けた親友の花枝さんの手紙とどうして思はれやう、あゝ結婚は友の情を破壞してしまうのだ。結婚の案內狀は云はゞ絕交狀の樣なものだ、と思つた、自分は決して〳〵そんな小さい愛の泉になり度くないと沁々思つた、一方にそゝげば枯るゝ樣な愛の泉にはなりたくない、自分はそゝげど〳〵盡きない愛の泉を心に一溢湛えたいと思つた、けれど又これが普通の女の心ぢやないかしらと思ふと急に鈴子の心が思はれて又淋しい悲しい暗い〳〵方へ心が引入られていつてしまふ、慾ぎはの秋海棠は秋の聲をカサ〳〵立てゝ枯れてゐる、あゝ秋は衰へて人の心は荒んでゆくのだ、あゝ母樣は私に對して道ならぬ事をなさる——なさる——けれど私は決して母樣を恨まぬ野の百合は自然と美はしい花が咲くではないか一日の苦勞は一日にて足れり、何も行先を思ひ煩ふ事はないのだ——ないのだ、動搖し易き、そむき易き人心のはかなさ。夜雨の心を思ふと葉子は處女の時代の一日も長い方がうれしい樣な氣がした、そして未だ未だ處女の時代に味はふべき事、務むべき事が澤山殘つてゐる樣に思はれたそして心が靜まると共に自分は此世の變り易い愛よりも淸い永久の神の愛に觸れてゐる自分はクリスチャンだといふ幸も痛切に感ぜられて來たと眼の淚は何時か乾いて、心に明るい光がさした樣な氣がして、鈴子の着物を見てやらうと立上つて鏡に顏を寫し見て淚の跡の無い樣に襦袢の袖に淚を拭いて一寸笑ひ顏をして見た、そしていそ〳〵として部屋を出た。（入賞）

○從姉妹

廣島縣　宮垣はつ代

まあこんなによく肥えたお多福だから丁度よいと思ひますよ、もしむかふばかり美男子だつてごらん假令今はよくてもすぐに嫌はれてご了ひますからね、此間見合の時に一寸私も見ましたがまあ人並ですわ此子も辛棒すれば此上はないのですが？」白の縞ネル着た金緣眼鏡かけて品のよい丸髷姿の叔母は片頰に笑みを洩らしながら語る正江さんは英ネルの上に白の襦子の帶しめて髮もマガレット、ローマの頭は小さくわけて日本髮に變つてゐるかへつてよく〳〵うつると赤いかけ物がほんとに嬉しいこと娘らしいわもう五日したら人妻よどんな氣がするかしら？正江さんはおばさんのかげに小さくなつて耳元まで赤く〳〵して聞耳たてゝゐるいつもは正江と露子とはよく話をするのだが今日はなんだか改まつた樣で叔母と母との間の話にのみ興をおぼえる露子は話を聞きながら見るともなしに庭を眺めた。五坪に足らぬ此狹き庭四季ならば三四輪美しくさいてゐる

鉢の黄菊白菊にも秋の色は見えるなつかしい色した眞紫の桔梗は小山の石垣の間に只一輪私を招いてゐる樣なすゝきは庭のすみにかたまつてをみなへしも二株三株さきまじつてゐる見れば正江さんも一生懸命に庭を見てゐるはたして二人の心は合つた「正江さんいつやらねさうさう五年前だねおもしろかつたこと?」二人が思ひ出した樣に笑つた五年前のこんな秋の日の空すみ渡つて白ばらの香り嬉しき日であつたあの白ばらの下に二人が兄に寫眞を撮つてもらうと云つて大騷動したどちらも袴をつけて荷物かゝへて私が石へ腰かけてばらの花一つ持つてすましてゐると正江さんがその側へたつて右手に花をもつて私の肩へ左手をおいて速成新寫眞師の兄にうつしてもらふといつて二時間も立たされてすぐに見れば皆眞黑?どんな美人にうつつてるかと思つたのが皆眞黑だから腹がたつて腹が立つて二人がそのガラス板もつて大叱言いふた兄はあれは

柿日和　福岡　市川久子



樂がわるかつたのだと…あゝ思出の種?澤山從姉妹はあつてもわけて思想があつて何もかも同じ樣にしてゐたのは正江さんのみ年も同歳あゝ別れたくない〳〵露子はふと氣がついて坐をたつた茶器を運んでお茶をいれた叔母はお茶を吞んで嬉しさは倚合に昇つて微にふるえた「少しお手傳に行かうと思つてゞでらんの通りの無人で晝はこれは學校に出勤るし良人も不在がちで私一人ですから行かれませんが正江さんの事だからどつさり出來ましたでせう」とは母の言葉「まあ正江の財産だと思ふて一通りは揃へて思ひ殘しがない樣にしてやらうと思ふと大抵ではありませんあれもこれも皆買つてやりたくなりますのよもう大方出來ました明後日は簞笥へ收め樣と思ひますからぜひ見にきて下さい露子さんの事もあるしねえ」つて笑はれた露子はなんとなくはづかしくて正江と顏見合して笑つた少時すると叔母と正江とは頭道具を買はねばならんからとて座をたつた挨拶まで大人びた正江さんは千代田草履のさばきも輕くかへられた露子は緣側に出で白ばらを見て無心に正江の事のみ考へた正江さんは幸福よまだ生活難の味も知らず良家へ嫁ぐあゝ仕合せよ自分と比べて見ていかに違ふでせう陽の花と陰の花げに自分は陰の花で強いて光りを求めて他の花を羨しがる群ではないかあゝ!正江さんはスヰートなホームを作つて子をこしらへて養育して老いて行かれればいゝんだけれど自分はなか〳〵そんな平凡な一筋をわたることは出來ない過去を思つて未來を考へて見ても明瞭だ唯だ波瀾あり喜憂あり抑揚頓挫烈しいあらゆる道を走らねばならないもうこんな身體だもの鴻毛より輕い惜しくない出來る丈け奮鬪しめざましく斃れたい私は羨しがる心は起つても內心の努力によつてすぐに消えました大に奮進勇往します「お母さま正江さんに何を祝つてあげなさるの!」といへば何やら考へていらつしやるらしい返事がない庭では細く虫が鳴いた?。(人意)

階上の書齋より

葉　舟　生

今回投書と一緒に、社の方から、私に宛てた手紙が三四通屆いた。斯う言ふ手紙に對して、私は、公に答ふべきものと、私に返事を書く可きものとを分けるつもりで居る。今回の中、長谷川英子の手簡に對してはこゝで自分の感想を述べた方がいゝと思ふ。

長谷川英子の手紙に書いてあるやうな手紙は、これまでにも、二三の人から手紙で訴へられたことであつた。實は、私はそれに向つて答へやうを知らないのである。それはその人の心が、藝術に對してあまり知る處が少いからである。私は如何したら小說が書けるやうになるでせう。如何してもよくはものが見えないし、智識が足らなくつて困るのだが、如何したらいゝでせうと言ふ種類の言葉がある。私にとつて、これ位困る手紙はない。その人が眞面目な顏をものを言つてる姿を見るのだが、それに私は何を與へる力も無い。その上に私はその人々の生活とは全く交涉がない人間であるので、たゞ考へる當の目標すら無いわけである。

それで、私はその場合に斯う云ふ。たゞ斯う言ふより仕方がない。自分で自分の生活の意義を適確に信ずるやうになさい。今迄のいゝ加減にごまかして來た生活を、積極的な心持で鮮明になさい。自分たちを若い時代の人── YOUNG GENERATION の一人だと信じられる樣になさい。(但しこれは現代の俗惡な享樂主義の文學の模倣者になれと言ふことではない。自分の心が自分の力で目を覺ますと言ふことだ)自己を僞らないやうになさい。立派な理解力をお持ちなさい。勝れた趣味をお持ちなさい。斯う抽象的な言葉を重ねて言はなければならない。これより外に仕方がないのである。長谷川英子の手

紙にもやはり斯う答へるより外はない。

私は今は實際に生きて居る人々の生活について、種々と考へたく思つて居る。それで、こゝで小說を見て居る人々と、多少の交涉が起ることを煩はしいとして避けようとはしません。それで、日曜日の午前には在宅日として置きますから、東京の人は訪ねて下さつてもいゝ。又、直接に手紙を下さつてもいゝと思ふ。私の住所は府下中澁谷五七二です。

それから今回又、村岡梅子の作を受け取つた。「紗きもの」この作は抒情詩に近い。多少センチメンタルな處はあるが、眞底、心から湧いた感情でものが言はれて居る。いゝと思つた。

次に小笠原貞子の作の消息について少し書いて見よう。その後にこの人の作の分量はかなり多く見て來た。こゝに書いて居た人々の中で、この人に一番進んで來た。少しづゝ、現在の文壇の人々の中に交へてその距離を多少なりとも計つて行ける位になつて來たことは喜ばしいことである。その作の中、二三は「青鞜」で公にされた。村上妙子は、今、心を引きしめて、飛躍されねばならぬと思ふ。その生活が、一つの渦の中をぐる〳〵廻つて、混迷しては居ないだらうか。一度は、人もわが身も抛ち捨てよ。卽ち「爾が播く處の種、先づ死せざれば生きず」と言ふ言葉がある。その味に到つて見ねばなるまいと思ふ。勇猛心を振ひ起してほしいと心ひそかに思つて居る。しかし、これは思慮の缺けた、激動と破壞とについて言つたのではない。

十月の雜誌の中で面白く思つたものは、「文章世界」の臨時號「明治文學の槪觀」の中に集められた。「明治文壇に於ける幾多の光景」と言ふ中の五六の章であつた。つまりこれには明治文學に於ける文學史的に意義のある幾多の插話が集められて居るのである。それが面白い。

創作――小說の――では、自分は近來面白いものに接したことがない。田山花袋氏の「暑い日に」を氏の作として、少しく面白く思つたにすぎぬ。このごろは下らぬ、お人好しな藝者小說が、臆面もなく書かれるので、毎々の事だが、苦笑して居る。

さて、選評に移る。

今回も全體が拙い。自分は今回から一層、嚴格に選をしたいと思つてる。レヹルを高くするつもりでかゝつた。

何時も考へることだが、この欄に投書する人達がもう少し自分で自分の事を眞に考へられるだら如何だらう。自分は平氣ででたらめを並べたり、一人で泣いて騷いでるやうな小說を見せられるのは、實は不愉快だ。この選評の出るナンバーは今年の最終の號だから、一つ總仕舞のつもりで、苦情を言つて見ようと思ふのだが、如何も、誰れを見ても、平氣で考へた覺えのないやうな恥しい心をさらけ出して見せてくれる。それでは、なんぼなんでもをかしくもない。僕は僕の方が恥しくなる事が多い。あなた方でも、小說を書かうと思ふ位だつたら、少しは生きた自分の心について考へる事があるだらう。も少し眞面目な、自分の心を引摑んで見た生活に入つてほしいものだ。とにかく、こゝに集つた人が、日本の進んだ階級の女にならうと自分達で思つてかゝつてほしいものです。來年は年も一つとるのだから、何とか目ざましい事をして下さい。

宮垣はつ代の「從姉妹」には單純な描寫だが、心持よくこの二人の母に添つて坐つて居る從姉妹の娘の姿が寫されて居た。丹草女の「友」、こんな輕い、下等な言葉をいゝ氣になつて書くものではない。これ等の言葉が生きるのには、本來の心が、それに對する適確な値を見た上の事であらう。小やなの「日曜日に」あまり考へなしな才ばしつた筆である。

もつと、ものが見えてしかるべきものと思ふ。篤子の「母校行」何處かにシャルマンな處があるが、ふわついた調子がいやだ。小松磯子の「姉弟」戯言と思はれる程、低級な心を持つた人だ。こんな心を自分は卑しいと思ふ。山崎民子の「同宿」都合よく兩方からせりふを使つて居る。これは八百長をやつて説明をして見せて居る。世良田優子の「殘る人」これは前の作より拙い。センチメンタルな處がいけない。わかばの「頽癈」も同前、こんなものを書くやうでは、駄目だ。優花の「一年後」あはれつぽい作。中程から後に、都合よく作つた處はつくぐいやだ。瑠璃香の「京都へ行く前日」はともかく描いてある拙いことは拙いが。信子の「友」これも下手であつた。長谷川英の「釣瓶」小器用にすぎる。しかし、描かう。見たゞけを描かうとして居る心持はいゝ。たゞその見える目が、斯う力がないのでは嫌になる。秋子の「職員室より」大方雜錄の原稿がまぎれ込んだのだらう。無智な田舎の小學教員の生活を臆面もなく書いてある。糸萩の「葉子」薄つぺらな情緒を書いた作。葵の花の「お京」今回の作はずつきりして居る。それは書き方の點に於てゞある。その外の點からは、やはり前の通りさうよくはない。禎枝の「暗き奥」は心の上の材料が足りぬ。つまらぬ場合を平常の心で描いたに過ぎぬ。港の女の「手紙」ありふれた作。

以上の中に、以下の順序でとる。「お京」「釣瓶」「日曜日に」「殘る人」「從姉妹」「友」「頽癈」「京都にゆく前日」

（小生在宅日日曜日午前、住所東京府下中澁谷五七二）

○友

月草女

『もう眞赤な花は跡方もない代りに小黒い實が幾つとなく重なつて居る椿の林に又かくれます。

誰とだか、それは貴女の御想像に任せるがもう大抵貴方も愛想がつきたでしやうね、あたしは此處で、世の中の凡てから捨てられて最後に殘つた友の貴女にまで捨てられつくした暗い自分のすがたをジツと見守つて居たいのです……離れ島にて千枝子』。

這麼手紙を寄來してから二た月許りの間、フツツリと便りもしなかつた千枝子から今日は珍らしく電話が掛つて來た。

「まあ、如何したのよ」

「何でもいゝから、初音館まで來て頂戴、紹介したい人があるのだからね、屹度よ、さよなら」此方で何とも返事しない内にもう電話は切れて終つた。

澄江は苦笑ひをしながら電話口を離れた。けれど心は何となく嬉しかつた。

彼のジツと物を見詰める時の夢みるやうな眼、圓く太つた女らしい肩の肉づき、殊に子供の樣にまるくとした手の甲にポツンと五つ孔の開く所までが妙に可愛くて、いつも澄江は居所さへ知れると引付けられる樣に尋ねて行くのだつた。千枝子は心配な程、方々を渡り歩くけれども不思議に人ずれのしない、いつも若々しい女である。

澄江は夕刻に待兼ねたやうに、あわたゞしく車にのつて色々の想像を廻して行つた。初音館と云へば横濱では一二を屈する程の旅館である、大きな商館の立ち並んだ本町通りを右に折れて萬國橋の袂に高く建てられた其館の前に下りると、もう、そこの女中は心得顔に莞爾して、

「石川さんでございませう、さあどうぞ」

長い廊下をいくつも曲つたり、階子を上つたりする内に或る一室の明るい障子に銀杏返しの若い女の姿がチラリと映つた。

詩

河井酔茗選

○正午

周防 若菜

惚けたる正午の光線、
窓硝子の輕き呼吸の疲れ、
萎えたるインキ壺の色彩、
黄なる花音もなく、
夢みるやうに頽れてゆく――
靜寂の平安よ、
かすかにかするゝ記憶の滴、
微かにうちふるふ生の線條、
あゝ死へ――睡眠へ――
そこに忘却の――
かぎりなき快感、横はり待てり。

（地賞）

二三のわざとらしい句がなかつたら好い作だ。（評）

○青白い世間

長崎 町田敏子

哀愁！悲哀！
何ていやな文字だらう
赤い着物の女は――
かう云つて白い靴を音させて
ピン〱とはねて見た。

アザケた舌の如なランプの灯を
白い横目でジツトにらんだ女は
世を呪つて居る……。

ゲラ〱笑つてさしのばす
黒い手の誘惑を――
白い細い女の手は……
ハンマーを振つて打くだいた
……アヽ其悦び……。
赤く充血した頬と
ピリ〱うなる神經の微動！
誘惑に勝ほこつた女は
青白い世間を冷笑した。（人賞）

何處にか新しい呼吸がある。（評）

○死せる枇杷の木

國子

象の皮膚をおもふ
白き
枇杷の柔肌

枝撓めつゝ
ブランコせし
兄も幼かりし
眞似ては我も
太き幹
抱きみつ

六月のかゞやく空に
累々と黄金なす
甘き實のしたゝり
二人の幼子は
母の膝の如くにも
あまへすがりし
枇杷の大木よ

慘めにたてる殘骸
力なく
剝ぐにまかす皮のあとの
むごきやつれ

觸れなば折れむ
もろき小枝
「ともに」とや
一群の枯葉
燒けて殘れる
なつかしき枇杷
遂に死せり。

惜しいかな詩になれないから折角の題材も充分に歌ひ得なかつた。(評)

○秋の終

富山　村山咲子

午後の月はやはらかく輝きて
凡てのもの微笑の中にかくされたる如く
常には蒼きわが頰にさへ、紅潮は漲りて美しく
見ゆる。

青き空のいろ
木々の葉の色づける
秋草の花のすがた
これら皆、秋のをはりの美をよろこべるを──

あゝされど、太陽の色のおとろへよ
すだく蟲の音は今死なんと歎き葬ひ
氣は今、秋より脫せんとするを。
野に山に人の心に、秋のをはりは充ち、かくて
秋より冬にうつらんとする、刹那のすがた──

今、少し注意して此の心持を味つてみると好い詩になつたらう。(評)

○赤き舌

神戸市　田中港の女

明るみの中に立ちて
しみじみと暗黑をみつめてあれば
我にたわむれよる男の子の如
ひしと抱きしめたき心地こそすれ

我がおそるゝ凡てを包圍して
虛無を裝ひ莞爾と笑み無邪氣げに
手をひろげて親しみよらんとするか
我が心いつしかも彼と手をつなぐ

我が手のひらの虛無の感觸
ぐる〳〵と暗は渦巻き
我心にまとひつき──
もののけの厭の如き氣味わるき響の波動。

あら赤き舌火のやうな赤き舌が光る
渦巻の中心に──我に近よる──今我心に
火の色の舌──悶く心
暗黑はしづかにも嘲笑ふ

斯く抽象的に進んで來る作者の苦痛を察する、大いに省みて此苦境を脫却せよ。(評)

○死のいざなひ

在別府稿　吉田夕草

ふみのはした足のやはらかき感觸
亡者の如沈靜に橫はつた私の靈肉は
情なくひからびた白いベツトに吸ひつけられて
──もがけど、あせれど、自由を奪はれた身の?
夜は夜とて、まつはり來るたへがたい哀愁
瞑目してもまつはり來る、無數の魔は明瞭と!!!
──七色の衣かついでおそひ來る
追へどはらへど、前から、右から、左から、後から、
前からすがりついては叫ぶ!! さけぶ!!! 死灰色の
面に、凄い笑みをたゝへて、すがりついてはさけ
ぶ……靑い、重い聲して、私の名を呼ぶ──よ
ぶ──……おそろしい病魔が……
眞黑くうちしめつた夜氣は異樣に震へて のがれ
樣と戰慄く、
おそろしい夜?死が誘ひに來た!

此詩も抽象的に傾きすぎた、題材も陳い、新しい感覺は此詩から得ることが出來なかつた、寧ろ今一つ『夜のみだれ』の方から多くの新しい感覺は味ひ得られる、すてばちの女の思ひ切つて物を言ふやうな處にチヤームがあつた、併し其詩は紙上へ發表することは出來ない、作者には氣の毒だが。(評)

○謎の女

高知　藤村紫華子

白堊の家のバルコニーに夜每出て泣く謎の女よ
泣き濡れし碧き瞳には何をか夢む
潔白のろずものにつゝむ其胸には何をか秘むる
肩迄垂れし金髮はすゝり泣く每に打ち震ふ
利鎌の如な寒月が寺院の塔に落し時
懷かし氣に忍やかに胸を刺す如き笛の音
悲し氣なあのメロデヰー
女は悶へぬ幾度か立上らんとしては深き溜息を
洩しぬ
やるせなささうにぱつたりと笛の音の途絕えし
時淚拭ひてピアノによれば
おのゝく指は鍵盤にふれ悲哀の曲は戸外に洩れ

に
思ひ出した樣にあれ又聞こゆる笛の音が……
——血のやうな接吻がかをる——

○星

茨城縣 鶯草

花のやうな柔い夜の小徑
微動する匂をくゞり出て
何處をどうさまよひゆく心にか

星がひとつ
やさしい線の光を見せて
私のゆくてを、來た小徑を
只ひとつの星が照つてゐる

星よ、なぜ青みを帶びてひかるのか。
今宵も空は淡い雲が低くとんで
ねたましい程つゝましく、すましてゐる星よ。

あゝ、あゝ、何と云ふ深い海のやうな青みであらう。
星よ、汝の前で
血染れた心はおのゝきながら……
なやましい青春のまことを
……飾るのか!
……つかれた夜の抱擁!
深い〳〵睡眠に、思はずふるへた楊

○暮秋

羽前 長澤美也子


白粉の香　芝田島しま

秋は行く——
淋しき蟲の音は落葉の下に細り行き、
いつしか消えて——
——秋もゝう行つてしまふのだ
木枯を渡る颯々の風!
何と淋しい眺めなんだらう。

旅人は行く
小高い丘に見え隱れする
旅の後姿を——
私はなつかしく〳〵見送つた——
此の世に夜がなかつたらば……
旅姿の後を追つて行きたかつた。
噫……野も山も
淋しげに眠らうとして居る。

○繪飛白

上毛 阿久津雲路

落葉する日のたそがれ
わたしが織た渦にS字の
薄色飛白
新聞紙に包まれて戸棚の角
でじつと物思ふ
あした機屋のこぞうにつれられて何處の家に行

ものだらう

そは〱と紅い柿の葉が散る緣ばたで
さくり〱と織り出された
田舍生のやさしいわたし

せめて東都の貴きやからえ
美しい可愛い十七の子に
あのスミレの花の香水いたゞいて
やさしい腕ときつすがいたしたい

落葉する日をわたしが織つた渦にS字
の薄色飛白
戸棚の角でヒソ〱と囁やく

○秋夜

筑前　稻花

嬉しい……懐かしい……淋しい悲しい……
何ともわかぬ秋の夜の心。

單衣の肌寒い
すつきりと落ついた……打沈んだ
秋の夜の色。

蟲の哀調
落葉のかすかな音にも
忍ぶ人の足音かと
風もなき小雨上りの秋の夜

地響凄く、緣先の柿の實の
おちしその音

○處女の悶

神奈川縣　浮草

何故なればかくは悲しき我胸よ
悲しさを、うたはんとすれど、それに
ふさへる詞見あたらず
痛める頭をおさへつゝ
血狂ふ胸をさすりつゝ
猶も物を思ひつゞくる、
ヅキ〱と顔は熱すれど落つる涙は冷たし？
アヽ我行く道よいづく
いづくにかある女の行くべき正しき道は——

○柿の實

埼玉　喜代子

甘蔗畑の眞中に
チラホラ見ゆるよ赤い實が
淋しいわびしい畑の秋の日に
お前ばかりがなぜさうだらう。
華やかなまつかな色——甘い香を身につけて
そしてはづかしさうに微笑んでる
お前ばかりがなぜさうだらう——さうだ——
お前は人の歡心を得んがため
そんなにまで美しゆう
あくまで優しう粧ふのだ
赤い柿よ
お前もやつぱり女性かね。

○たゝずめる君

堺市　茅草

たゝずめる君よ
君をみしゝたまゆらに
我が胸の熱はほとばしり——
血は怪しくくるひ……
打ちふるふ神經の痛みに——
五體はしびれし……
君!!知らずや？
我が胸のくるひを
あはれ——一秒々に身は燒きたゞされ
たゞれたる口唇は——
胸の焰を吐んとして苦しく微動せり
あゝたゝずめる君!!
君は氷の如き——おん眼にて
痛ましき泣くるほへる
われを見て
心地よげに笑みてあり

○秋の情緒

桂の華

夕の緣に佇立みて
展開ける野の面の青きを見れば かにかくになほ
賴みあるこゝちすれ。
落日の弱き光り空氣に今日の終りを 低語き——
西の山蔭にかくるゝとき——
雜然たる蟲の聲野の遠近に蔓延れど——
わがこゝろは力强く明日を想ひ
みどりをおもひ
更にそが宿せる露の上に新しく輝きわたる朝の
太陽の光りに執着へり。
心憎きまで高く清う 澄みわたれる碧空の下に
晴れがましくもほゝゑめる山の容姿と
いさゝかは靈の失せ口れ



人事（散文）　編輯局選

○小槌の音

若狭　さと子

やりばのない眼は、とぢるより仕方がなかつた。

さいせん、腰かけた時にはふんわりと、柔かいと思つた寝椅子も、一とき、二ときとなれば、枕にあたつた後頭部はしびれて、口は開いたまんま、うすいゴムの紙をはられてわづかに鼻孔にのみよつて、つく息、吸ふ息のくるしさ、それに小やみもなうコツ〱コツ、コツ〱コツと。

小さい音ではあれどうちおろされる小槌のひゞき。

涙ににじむだ瞳を、そつとあげてみた、かすかにまつ毛とまつ毛との間から、鼻柱を傳つて高い卓の上にはアルコール洋燈の弱い焔、うすい焔、けれど強い力をもつた熱に、純金の片れをニツケルのピンセツトに摘むでは少しづゝ熱くしては、わが前齒につめ、コツコツ〱とをやみもなうちおろされる。小槌の音は我が五體中の神經を、みんな〱その前齒にのみ集めてづき〱とうづかす。

風が吹くのか、雨がそゝぐのか、かすかに硝子越しにみどり葉のゆらぎはうつつたけれど、すぐととぢた眼は朝とも、夕暮ともわかず、たゞ暗黒な中で、コツコツ〱と、小槌の音ばかりがまたもや神經をつく。

まるで暗室で死人の棺をうつ音をまいてるやうに耳がいたい腦が、齒が。

氷なす懐劍にて十指はひとつ〱切りおとされ鮮血滾々として十條の赤泉灑る如く、赤梅液につけたる生姜に似たり、亦數十本の竹釘もて肉體の肩といはず手足、胸急所はさけつゝ丁々八ツシとうつ大鎚の音は——

強い白縫姫は男を、人をかうして大きな瞳に、快よい笑をうかべつゝ見てゐた、わたしのは鎚とはいへ、小さくはあれど、しかも寸にもたらぬほどかろくはあれど、疲れきつた耳に腦にひゞいて、キリ〱とうづく、わが心臓よりながるゝきれいな血も、この音でひびきで氷りついてしまいさうな。

やつぱりコツ〳〵〳〵とをやみもなう――。（天賞）

○秋のまひる

京都　廣江曉子

しとり、しとり、折ふし低く、雪消の雫の葉よりしたゝるやうな音を立てゝ、朝顔のしぼんだのが落ちるその度毎に暗い地上に眼をやるけれど、なえてちゞかんだ花片は傷々しうひつたりと、露をふくむだ土にそうて、今落ちたのとも思はれぬ、低いかすかな、つひ物にまぎれてしまいさうなあの音は、空においてつて空に消えるのではないかとうたがはれる、秋くる迄はこんな音にも氣がつかなかつた。

垣にまつはる白、あさぎ、しぼりの中をぬけて、濃い紫のはひとりまつすぐに高い物干竹の頂きまで登りつめて、清々しい夏の朝々、花やかに明るい空に向つて、優れて太きく、色も一入つやゝかに咲いたけれど、つひ手のとゞく[illegible]て、[illegible]見えずかへつて餘所の眼なぐさみになるのであつた、屋根の間に高く秀づる花柱を、面白いと賞めた向うの宿屋のうら若い旅の人は何處へ行つたのやら、夕ざらく

事

れば吹きいづる笛の音の、さびしい心に涙を誘うて、なつかしかつたものを、何時しか聞えずなつて、その頃から花は朝毎に小さう、冷やかな秋風にはら〳〵とさわぐ葉の、見る眼も寒くすがれて來た、聞きなれたあの聲と、あの笛の音と、面影知らぬ旅の人は何處へ思ひだしたやうに、くゝ、くゝと蟇が鳴く、大わだつみよりも廣い紫の空も、二坪に足らぬ庭の住處より仰げば鏡のやうに小さく見えよう、見る物は常に同じ垣の中、庇に落つる秋風の冷たさにおどろく蟇よ、朝顔の花がらをかづいて、せめては思ふ事なく眠れ。

また、いさゝかな草のかげから、きりゝ、きりゝ、きりゝと、蟲が鳴く、一つが鳴くと、ちゝゝ、と其處からも、此處からも鳴き合はして、絶えるとまた、しばらくはひつそりと、針のこける程の音もない。

表通りに遠く聞えて居た順禮のりんの音が次第に近う路次をはひつてくる。

まつかせや、音羽のたきはきよみづの、うら悲しい[illegible]に、[illegible]の手を見つめる眼は懶かつた、やがてしめやかな、りんの音は我家の軒へ。私は靜にたつて報謝を進せた。笠のかげから目禮した順禮の女は若いのに眉そり落し

て旅のやつれの外に、何處となう、淋しい暗い影が伴ふやうに思はれる。

遠く南の島に志す四國遍路や、短かい經文を殘しゆく六部に迄、いさゝかの報謝を忘れぬ母になれて、鉦の音や、りんのひゞきには云ひ知らぬ哀れさなつかしさを感ずる、まして振分髮の肩にもとゞきかぬる幼いのゝ交る順禮の群のあはれさ、道に行き合うてしばらくじつと涙ぐむ眼に見送つた事もめづらしくはない、これが最後のおねがひにお四國さまを廻つてまゐりますと、春の彼岸過ぎに立つた、眼の見えぬしやぼん賣のおぢいさんはどうしたらう、年よつてかゝる子に先立たれて便る方もない身には、旅も故鄕もかはりはなからうけれど、便りない杖の先に探りゆく後姿を思はずには居られない。

きりゝ、きりゝ、ちゝゝ、ちゝゝと風にさそはれては蟲が鳴く。（地堂）

○宵

大森染子

なしや？と、縁の柱に片手をさゝへて片手を廂の外へ延ばして見たら、やつぱり霧雨の微な冷さに手は濡れる。

今しがた八時を打つたので、門錠をおろしに行く。雨は頰や手を柔かく刺戟して氣持ちよい程な、お向うの田村樣の軒燈が内の低い板塀越えて、松の梢から斜めに、朧な光を流し入れる。地は燻銀に美しうぼかされて、處々の窪地に水たまりは自然の鏡面が現せられた。けれど光り弱い鏡は絶えず顫へてゐる、折々は風の吹く儘に消えもしさうな……と思ふと又サット強い閃きを見せて、又も靜かに〳〵鏡面を顫はせる。

涯しもない暗黒のみ空を見上げながら私はいつまでも〳〵音せぬ雨にうたれて立つた。秋の夜風の冷たさ肌とほす風の刄も銀色の痛さを含むやうな……庭木は槇も躑躅も一樣に仄のりと水銀色の薄衣をまとうて——。勝手の方の木戸にも小さい釘さしに廻る。裏の家の天りう樣のお宮に灯が障子紙通して淡紅に美しく眺められる。大入道のやうな人の影法師、あの頭の大きさ、伯母樣のいつも小ちやなく丸髷が今宵ばかりは髮形の看板のやう『あしきを拂ふて……』とそれはお可笑な拜み方をする、八手の葉のやうに大きな指がひらいて四本のお手が上つたり下つたり、すくつたり。

すつかり濕つた着物を拭き〳〵して六疊の机の前へ坐る。母樣は御佛壇の前へ圓くなつてお經を上げていらつしやる。

池上へお出掛けの度きつと素人よみの法華經を頂いてきては『おぼえられない〳〵』とこぼし〳〵それでも朝に晩に缺かさずアノ四角な字を拾うて――。沈と机の上に兩手をのして聞いてゐると耳や腦がむづがゆいやうないやな氣分になつてきて、裏の家のと母樣のと、私の腦髓をぐい〳〵押しつけるやうで堪へられなくなつてきた、どうかしてアノ聲がきこえないやうに、思ひ切つた高調子の三味でも彈き廻はしたい！と思つた、去年から皮が破れたまゝなのを思ひ出してもう情けなくなつて、どうせうか〳〵とじり〳〵しながらふと思ひついて戶棚から唄本箱おろしてまた黑ボッチのついたけんどん外して厚い稽古本引き出して見はじめる長唄と淸元で十二三冊と、「明烏」や冬編笠の「吉田屋」それから「櫓上」『三千とせ』なんぞの鼠色表紙のとお本がゴタ〳〵入れてある、久しぶりのせいかひどく珍らしくつて一枚一枚と繰つては橫幅の廣いよみにくい字を讀んで行く。

『――冷えかへる春の寒さに降る雨も暮れていつしか雪となり上野の鐘の音も氷る――』じつと見つめてゐるうち、いやな〳〵いらだゝしい氣分がだん〳〵和いできてうれしいやうな氣もちになつてくる。艶な姿の三千とせがちらり〳〵と目の前に幻ずる。丈賀がうどん屋へくるあたりのしんみりした哀しい情景が夢のやうに見えてくる。幼ないときおぼえた雪場の舞臺、それはほんの幽かな記憶であるのに今こんなにつく〴〵と深く胸に沁みこませて私にをしへてくれたよい唄本よ！ほんによい唄本よ!!

ソツト引出しぬいて、色の褪せた淺黃ちりめんの象牙の撥を出して見る乳色にすべこくて、持つとヒヤリとして優しいよい格好に刻まれた撥、姉樣の指ののつたあとがむつちりと黃色してゐるのがなつかしい、私はそつと小指と紅指の間へはさんで三味を彈くまねした、只徒らに空を切るばかりで何の反響もないのが淋しい眞に淋しい、それでも私はいつまでもこの音無い三味を彈いてゐた。（入賞）

○柴蘇つみ

加賀たま子

柴蘇つみゝ　その名に何となく微笑まれて、白手拭の姉樣かぶりのまゝ

音の好い鈴のついた鋏をとつて、笊を小脇に庭に出ました。朝。

あの土塀と中檣子との間にせまつこい所なのです。あすこに殘つた五六本。紫蘇はいくらでも生えるもんですから、つひ草と一處に抜きとつて仕舞ひますが、母は老人だけに、三本だけ庇つておきました。

一番實のいつて居さうな一本の前に私は、笊を置いて跼みました。

無數の粒からおこる床しい香り――。

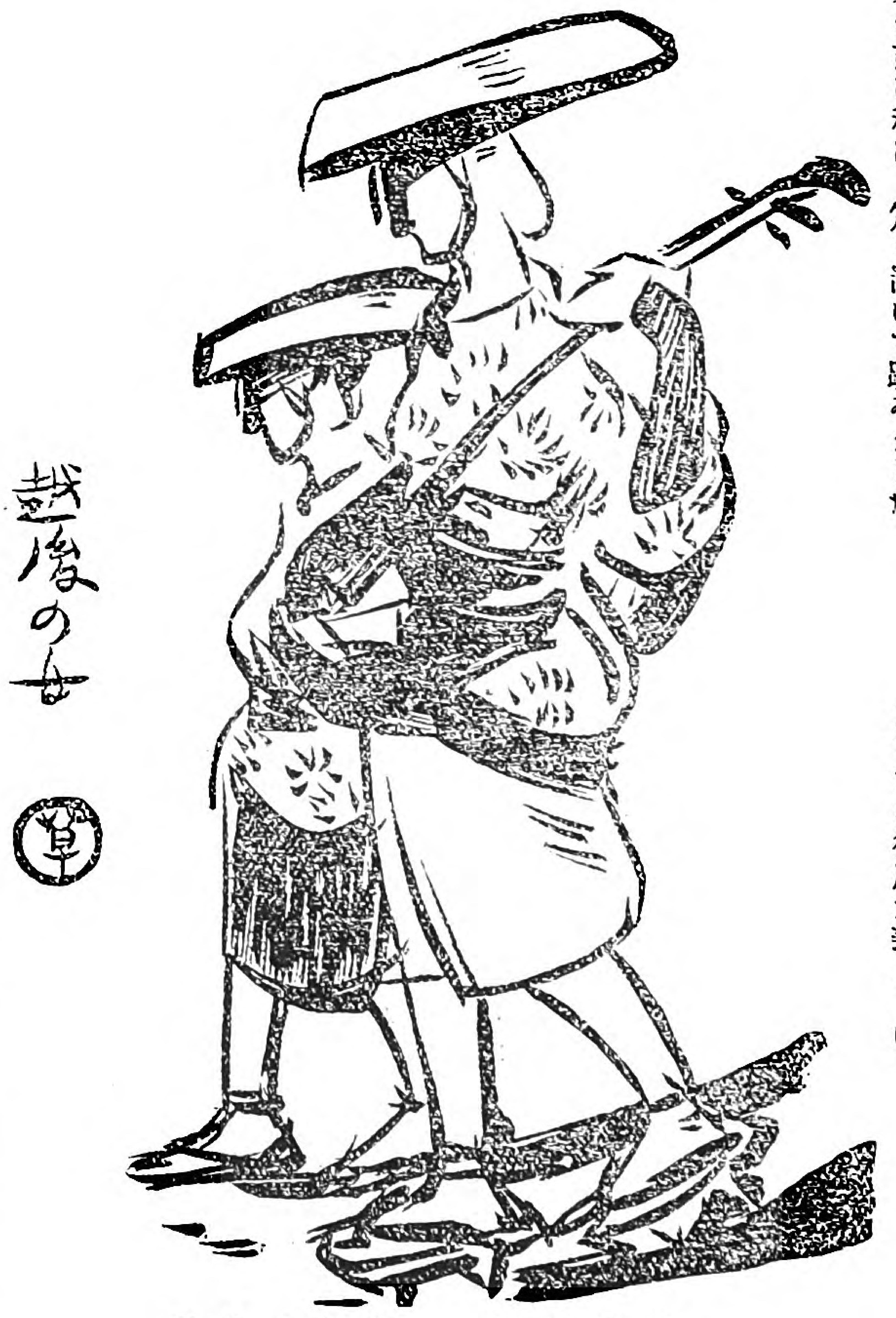
手でちぎつてもいゝところを、つゝましやかに一つ一つ鋏をあてる、その度にコロ／＼と、くさむらに鳴く蟲の忍び音のやうに、小さな可愛い音が、紫蘇の中から漏れる。

青しそは、さきの方に少しづゝ未だ花を殘して居て、すつかり實いつては居ません、小さなのにも、もり咲く花の盛りがあつたらしく、細かな／＼蕾が白くまはりにふりこぼれて居ます。

手拭にかくれた我髮の緋鹿子もゆる桃割ではなくたゞ圓くのみうかせた束髮であるのと、あやどつたたすきの、赤いくけ紐でないのとが少なからず興をそぎますけれど、靜かな初秋の日に身をつゝまれて、まぶかに冠つた白手拭と紅い帶、絣の前垂――紫蘇つみ……私は微笑まずには居られませんでした。

すぐ盡きる紫蘇のうらめしさ。

あなたの御庭が羨ましい。



越後の女　　氷室くさ子

葱の川、菜種の海の中に立つて、遠く林檎畠をのぞみかへり見て、カツと夕を受けた茶の木畑の幾分を見たあの廣いお庭をおぼえてをります。

今頃は何がみのつて居ませう。草を分けてそこゝ數しれず散らばつた紫蘇を摘み歩きたまふお姿が、見えるやうです。私のやうにかう一本にしがみ付いて、坊さまになるまで摘み取るやうな事はなさいますまい。

緋扇も今は實となつて莢を破れば、おはぐろの齒のやうに並ぶつや／＼しい黑玉、眼の藥だと云つて母はとつておきます。コスモスがはじめて、此頃から咲きそめましたので、五つ六つ干菓子のやうな花が、嬉しさうにそわ／＼、寸の風にも笑つております。

○町田靜樣

山口とき

夜每々々のつれぐに友のゆくへを偲びて私は靜樣の事を思はずに居られませんそれは八月の一日久しぶりで女子文壇を手にしてパラくとページをくりましたもう一度やっぱりない私の大きい目見のがすはずはないのにせめてこれでも拜見したならなつかしい御有樣がわかりませうにと思ひし心はあだでした失望しつゝよみゆく手に花柘榴と云ふ處に小さい字で(されど町田さんはもう女子文壇を見ておないらしい)これを見てどう遊ばしてか永久に靜樣の御文才はつきぬ者よと思つて居りましたのに心許なき事に思ひて私は文樣に一筆さし上げました御返事は六日目に靜樣はやはり赤阪色々の御けいこ事に御忙しいさうで御座いますとこれきりかほどに思ふ私は又なぜ直接靜樣に手紙さし上げないのかしら自分でもをかしくなるけれど平凡な事もかき度くないしあまりの御無沙汰に手が出ないのですもの夏もすぎて秋空の晴れたるは一入人なつかしい折私は黒表紙の特別號をよみまして知らずくよむ中に私の目はピタととまりました八人胴胞!まあ初鹿野道子なんて御大層な御名ですけれどせめて御筆とつて下さつたのはうれしうございますあゝ文樣も靜樣と同じクラスの何れおとらぬ花あやめうき世の風もしらずにやすゝと御そだち遊ばした文樣の小さい御胸の亂れましたのは一昨年の春でした御母樣亡き後の文樣は生れかはつた樣に情にはもろい方となつてよくたく山の御弟妹をみちびいていらつしやいます私は一ツ下の級でしたけれど文樣とも靜樣とも仲よしでした文樣にはすぐ御たより出して今宵つくぐ靜樣の事を思つて見たい靜樣よ私は決して貴女の御親切と輝いた御ひとみを忘れませんやるせなの思ひ出よありし面影目につきて私は御はづかしいけれどかびのはえた頭から靜樣の思ひ出よ語らして下さい衣服の虫干はいたしましたが私の頭はもう古いものでしたさつして下さい御別れした後の四年間をなれぬ家事萬端に隨分くるしい藥當をやつたものです近頃ですやつと自分と云ふものがおちついたのは私はかうして三年の長い年月を一人兒のため都をさけて田舍にるす守る人になつたので御座いますたとへこれが靜樣の御目にはふれずともいつかは君思ふ心の通ふらんと神に心をつたへておきます靜樣は校中の花でした日本科英語科かずあるもの皆滿點文に秀で數學に秀でた靜樣はたゞ天才の君と申上げて居りました暗誦力はことにつよく其の上根氣がよいので先生方も大變望みをもつておらつしやいましたさりとてあの頃流行した詩人をきどるではなしなかくのいたづらつ子さんで先生方のまねなども眞先になさつて「三十サンデスネー」とをかしいアクセントのリカズさんのまねも「サボーシングアイセイフン」とせきばらひ　まねも御上手でしたクラスヘツドの靜樣がこんなでしたからあのクラスは春の樣でした時々先生に見つけられると靜樣はきつと双の袂にまつかな御顏をかくしてベツタリ板の間に坐つて先生御めん遊ばせ」何しろ面白い方でしたから下の級にもおらしつて私なんかもよくさわいたものですそして又其の世話ずきに御深切なるはクリスチヤンの御心がよくこもつて居りました十一の靜樣はいぜんの改良袖兩手にあまずみどりの黒かみ坐ればたゝみにつくと云ふ見事なかみを紫の打ひもで結んで前がみを下げておらしつた豫科生の時より御一人娘樣でしたが早くから寄宿遊ばした故かわりにませていらつしやいました私共がマガレットの頃靜樣の其多い御毛はそくはつの無造作に結ばれました全科優等の首席もて御卒業の靜樣は其の相かはらず白粉氣更になきいつもいきくした御顏色でメリンスの永い御袖に赤い御帶しめて火曜の活花にいらつしやいましたつきぬ思ひ出の昔のなつかしさよこれにて一まづ筆とめて今宵の夢路へたどりませう私は決して靜樣をいつの日までも忘れません詩にみちたゆかしい御胸に時の事思つて下さる日が御ありになりませうかこれだけが伺ひ度い。

七擒八縱

張三

■今回は平素の四倍ほども有る原稿を渡されてうんざりした處へ、先生はまじめな人だと思つたら、人の藝術を茶にばかりなさるんですねと、川崎春子といふ女名の人の葉書を受取つた、どうして茶にするどころか私はメシの種にしてをるのです、棄兒の歌ではないが、此兒捨てずんばこの身飢う、免職されては食ひ上げだから、今日から大まじめにやらう、自然欄の先生のナマケルのと違つて評の多いのを買つて下さい。それ御覧のとほり。

實は夜雨氏が「最後の一瞥」を書いてくれる筈だつたが、故有りて書かず書けば五年間の感想に交へて、寄稿家に對する注文があるのだと言つてゐた、文章は唯達意ばかりではいけない、猿の物まねでもいけない、鳴門海潮の奇、天下たぐひ無しと稱す、東淡州の端を拍ち、西阿山の阯を添ふ、海面乍ち高低、澎湃南に向ひて駛す、或は萬馬を驅るが如く、或は群兒を叱るが如し、巖に激して白雪飛び、日に映じて彩煙起る、文章も亦かくの如くあらねばならぬとも言つてゐた、しかしこれは女の人には無理な注文だらう。

願ふは眞なれ、女なればべにをさし白き物ぬるもよし、起つて長袖をかざし、座して三絃を彈ずるもよし、唯筆を執りて紙にむかふ時、ねがはくば僞らざれ、衣に戯るゝ心もて文にたはむる勿れ、たゞ眞なれといふが夜雨氏の告別辭です。どうぞお忘れなく。

▲秋のなげき。千葉、伊東花蝶。にくき人によりて復讐さるゝ前彼女には許嫁があつた、喜悦があり、望みがあつた、ぬれ衣を三面子に謠はれその後彼女はレールを血に染めた、今にして知る「氣狂になつたで嫁の理がとほり」▲浮れ心地。京、田中千夜。われをさしてゆめアントニオを氣取る者よとそしるを止めよ只夕のわが思ひの一ふしをかきしるしたるのみ▲秋夜。柏崎、芹田紫紅「ギオリンの悲しき調あがれども街の人の足をとゞめぬ▲五時。長野堀内春江。任事を片つけて、向ふの家、行李、樂隊、字が皆ちがつてゐますよ▲午後三時。富山、とし。謄寫版で書いてあるのにまづ驚かされる、夢に友を訪うてヒステリカルな唇に強く口吻をすると目がさめた、口吻をする、口つきをするとはどうする事か、とんがらかした口つきをしたといふのでもあるまい▲フレンド。羽前、長澤みや友の美しい桃割、私のもこんなに一本もはずけずにあげられてゐるだらうか、頭だけとつてそつと見たい」ビリケン野郎に山ん中で追かけられて切角結つた髮を散々にはねかしては首をもぎつて見るが物はありません▲亡弟。築紫、靜代。いかなる神の戯ぞ一月十三日といふに、花も咲かせず香り放たで亡くなつた」沈香も炷かず……お可愛さうです▲初秋紀伊、ゆり香。「繪師なれば赤黄紫色々のかたちにゑがけわが泣く姿。「月夜よし夜よしと君のうたひけん秋は來つれど君は來まさず▲講習。兵庫、森谷しづ。車やとかけつこをしたといふのだら其速力つたらめつたあらへん▲歸省。横須賀、森さん。次第に唄が近づいて姿が見える。頭には手拭を冠りもえるやうな緋の湯卷は歩のまにまにちらちらに見えました」それは姉だつたといふ、ゼイゴ坊まる出し▲筆に任せて。羽前、月見草。オールドミスに近きわれとあるが、山形縣では十九はもうお婆さんなのにや▲午後。岡山、野菊。蕈狩に誘はれて嬉しくてたまらない記。この君はきつと大ルドさんと違つて小ルドさんだらう▲露にぬれて。大阪、ゆめ子。秋深き八月十六日の夜天下茶屋の露にそぼちて男と語つた記。露は尾花とねたといふ、尾花は露とねたといふ、あれねたといふねぬといふ……▲旅立。山形、ほゝづき。草のかげに小さな笠をひらいた茸を見つけた所はいゝけれど、描寫細に入りてやうやく若々しき色どりを失はんとす。願はくば癖なき昔にかへりたまへ、緊張に過る勿れ。▲秋。吉澤ひろ。繩をなつてる爺さんの頭に、壁の間を通つて黄いろな夕日の光が一筋さすのを見つけたのがえらい。柿をつゝついてもく取れないのでがつかりしてる弟の顏を見たのもよし、蜻蛉をつり落して怒つて垣を叩いた隣の子もよし。何故に住所を書きたまはざる▲夕陽。越後、紅雨。私は藝者の子のお京さんと中がよかつたダリアを見ると思ひ出す」敎室でいつかそつと見せられた錦繪といふのが氣になる、女が女に執着の深いのも戀

テコなり▲小槌の音。若狹、杉菁里子。齒科醫室における出來事である、いしくも拵へたるよ▲作業を止めて、淡路、淸水花子女史、どこかの誇大妄想狂が自ら先生と書く話は知つてるが、女自身女史と名乘るのも氣が知れない▲祖父。岡山、石井玥子「櫻露集のこし玉ひしそのかみのぢいぞ戀しき人の子のわれは▲殺された人。橫濱、殘花。詩欄の投書が紛れこんで來たのだ、返すのも世話だが、評するにも方角がわからない、私は殺されたのだ、愛くるしい小さな唇でとある唇で殺されたら、あなはた眼で殺してやればいゝのに▲三疊。久留米、岩井原たつ。三疊はかつて叔父の書齋だつた、それから坊さんの子がゐた、それから孝さんが代つて今は弟がゐる、面白い座敷だ▲森。神戶、港の女。例によつてイラ／＼と苛ついた文▲疲勞。大分、紅芙蓉。あなたのかながどうかすると爪突くのはかね子といふ名を花音子とかくので分る、花は「か」とは訓まない〻たとへよむとしてからが花音と書いてはかおんとしかよめない）花は火と同じく「くわ」である。おわかりになりますか▲宵。大森、そめ、誌友の中には英文學に造詣深き町田靜江さんがゐる、ユーゴーの哀史を原書で讀みたまふ三宅つね子さんもゐる、お二人共夜雨がよくからかふので古事記の大物にすら嚙りついて辛棒してゐるのがをかしいけれど、兎に角よく讀むのが感心だ、『宵』の作者はお二人と違つて女學校もやらないし本もさう讀んではゐない、江森よし子さんもたしか小學校きりだつた、けれど染子さんは唄と三味線と踊とによつて多くの趣味を養はれて來た、「宵」は學問で書いた文章ではない、それだけすつきりしてゐる、私の可愛い子の初陣を見て下さい▲夜の人へ。大宮、桂。あなたは松葉牡丹の種は乾くと死ぬと仰有いましたとも、あれはね猿をかせが石に生えぬと同じやうに、砂の中へ入れておかねば生きちやゐませせん。川越の近くにゐらしつてお芋に不自由なさるとはお氣もじ樣だ、故鄕の茨城が戀しいでせう▲黃花。相州、ゑをゑ。塀の穴から見付た土手の黃色い花！上に生ひかぶつた青葉を暴君のやうに憎らしがつて見見してるうちに、花は枯れた、むごたらしく▲首。福州、內山小夊。七十幾つの生首を見たのは女として破天荒の事である、惜むらくは血の氣のかすれた新聞記事とあまり異らぬ、難いかな作文の道▲北の人へ、橫濱、彩羽。一步一步進み來る、女優ばかり材にしてゐた時とは全然ちがつて來た。以前も諷したやうにあなたの病は英語を交ふる點にある▲赤い手まり。大分、みどり素直に延びればこの君も望みがある。伊勢ほど長い町長い、手まり唄は知らないが町はまちと書いたらなほいゝでせう▲一夜。伊豫、行々子。こんぐらがつてゐて困る。だから力に應ぜぬ客觀描寫はいけないといふのです▲ぬけ星。諏訪野の花。命題奇拔也、筆力亦雄健▲わが儘女。高知藤村しか。男と見ればからみつく豌豆（いんげん？）女を罵つたもの、二十一や二でさうあせらずともいゝわけだが、女は弱いものさね▲逸題。古河、浮舟。いつか失した手紙を死んだ友が拾つておいたとて、死後其母から渡してくれた、あすは其葬式を送るのである」もし作り事でなければ、それこそ事實は小說よりも奇也と誰やらの廣告をまねるところです拾つて三年間かくしてる位なら、秘密は永遠にあかさず、わが苦しみと共に葬る筈である、それではすまない氣がゝりだとは外の人の言ふ事だ▲おはり。相川萩香。おはりの間に本をよみたい何か書きたいとお定まりの才ある女のなげきです。せめては忠實なる讀者たれ、私共はこれより外いふことができない▲高原より。信濃、世良田僊子、太田きし子さんは海を戀ひ海を戀ひてうたとなり詩となつた、あゝ海、わが千曲川の流れも海に行くのである、戀しきは海よ、いたましきは個性を有する女のあこがれである。剛健なる信濃少女よ、ねがはくば山より下ること勿れ君は山に生れて山に死ぬべき命をもてるなり、山の南には赫々たる日は照れどさわやかなる月は照らさず、ダリアコスモス今めかしき花は咲けど、石轉じ巖くつがへる大きい流れは流れず……▲思出。廣島、小出百代。嫁いだ先には思ひもそめぬ繼子まであるとは、はてさて何といふ事だらう」はてさてさういふことも有るものですかねえ▲秋の夜。里の乙女。今回の投稿で一番短いのはこれである、自分で乙女と書くのを見ても其たあいなさが分る▲苛々。牛込、猪野鈴琴女。輪廓の惡い大きな顏をもつてるといふ。不二額三日月額などはきいてるが輪びたひといふのはどういふ額でせう▲靜樣。山口、ゆかり。これは素的もなく面白し、本號第一のよみ物であらう、町田さんの顏の赤くなるのが早く見たい。花山院きみ子さんも同慾の人である、あの人が素破拔かずに山口の方から來たのは面白い。但町田さんの八人兄弟はつまらなかつた、やつぱり昔夜雨君のはめてたやうに長い髮を垂らしてサヽンクロスの君をうたつてる方が

いゝのだけれど、奥さんになるとして見るとさうも行くまいか。どなたか三輪田校における河野まき子商業學校の石井夕ほし、日本女學校の望月れい子木村章子などの珍談を書く方はムいませんか、れい子さんなんか殊に餅さんの稚號を持つておらしつたし、誰だつたかは長刀の名人だつたし▲桃色の女。京、黒椿。何だかせか〱した文體だが、生命保険の勸誘員を撃退した手際はえらいものだ、私なども度々あいつには手こずるので沁々と細君の口ぶつてうが嘆かれる。東北生れと來てるからなほと困る▲御前水。豐後、三苦幽月子。細川侯がお風呂の水に汲み汲みした名水の今昔を語る、榮枯今さら驚くに足らんや▲夕ぐれの對話。本所、かすみ。この人の身もとがわかれば興味を以てよまれる文だけれど、惜むらくは筆が足りない、内容の放恣に伴ふ筆があつたらそれこそ瞠目環視の裡に誇り得る人である▲お師匠さん。名古屋、波の花。下手がひく三味線のやうに矢たらに切れてゐる文章だ、名詞止めにしてあるのでよけいナマぬるい▲眠られぬ夜。茨城、波香。七年ぶりに逢つた兄さまは向うのお部屋に休んでいらつしやる、父も母も深き眠りに落ちて今草木もいこへる眞夜中である、足音を忍んで兄さまのお床へよつて枕元へ坐つて小さく呼んだ、兄さまは無言のまゝ暖かい手でじつと私の手を握る、あすは東西に別れねばならぬ二人である、からだがふるへる……「兄さまの正體見たり化け尾花」▲ありし昔、大津るり香。所有雜念といふ小字あり、心理學にでもいひさうな言葉ですね。▲乾かぬ涙。芝、石井まこと。兄さんどうぞ信心しで下さいね、神さまどうぞ救つて下さい、苦しい時の神頼みてこれをいふんですねと言ひ〱露子は父の手に縋つたまゝ亡くなつた▲秋の思出。靜岡、水野やす。女らしい文章だけれど、字まで女らしく、手がつけられぬ▲芝居がへり。信州、青木よし。そばにゐた男たちが私を初から終まで見通しでゐたのは驚いた、ハイカラだなあと思つたのか知ら。田舍はのんきでよろしう御ざんす▲秋の夜。肥前、章子。月が照る蟲が泣く、忘れはせじ、文枝の君は死んだのである▲山里。廣島、石冬歟。ちつとも山里らしくない▲長屋の夜。なごや、波の花。壁ごしに隣の喧嘩をきくとあるが、この人が長屋住居であるとは受取れぬ、丸きり作つた物ならそれでも可なれど、さうすると何の爲の道樂だらう▲行方。堺、大澤けい。逸鳥をあはれむ、思無邪▲あこがれ。大阪、宮崎たゞよ。ギコチなくりきみ返つた文なり、力の入ればえもないだけ氣の毒だ、なぜありのまゝ書かないのだらう▲午後。三國、井上みさを。ブラツクインクの瓶が赤い色のまゝ紙へうつゝてゐるとあつた、隣の嫁さんの足を投出しておはりしてるのを見てゐたら小さな欠伸をしたとあつた、お手柄▲夕。大連、築紫饒子。新しき目に映じた關東州の秋の風物、悲しき觸目はなほ深く大きくあらねばならぬ▲學期始。京、西村いし。二十三にもなつて猶教師をしてるのだ、友達にあふ度、心で泣かれる、パラソルをすぼめて校門を仰いて見た、寂しき命よ▲ある夜。大分。みどり。私は戀をしたことがないけれど、男の信ずべからざることは知つてゐる、一度男からあるさゝやきを聞かされたが私は冷然として斥けた、私は女の爲に女の尊さと美との爲に泣かねばならぬ」借問す、君は山田邦子が凡人の悲みを歌へる心を解し得るや。更に君は河野まき子の玲瓏玉の如き心に同化し得る力ありや。女子の所謂誇りには多くの割引を以て對せざるべからず、君に自覺あらば乞ふ空しく生きざれ。まづ男子を侮蔑するを止めよ、戀愛を解せざる女性は眞の女にあらず▲視力。陸前、黄川田かよ。視力のおとろへを發見する條り才のひらめきを認め得れど、結末は平々凡凡、まさしく龍頭蛇尾となれるなり▲月清き夜。福井、白露。母の亡くなつた後陰鬱の人となつたことが書いてある、唯それだけでは困りますねちつとお笑ひ遊ばせ▲夕ぐれ。はりま、藤井つや。お寺のお孃さんである醫師に五年しか生きぬと宣告された榮さんといふ人をあはれめるもの。五年といへば隨分長い。精神的には一かどの事業を成しうる月日であるそれを悲むからやはり女だなあと言ひたくなるのだ▲明るい窓。大分、みね子。敷居を跨いだとある跨の字がをかしくて腹が痛くなつてくるたまには玉篇を御覽あれ▲かへり。千葉、野の女。曰く私は腰かけた、左の足を右の足の上へ重ねて包みを膝において、腕を組んであたりを見たと。序にカイゼル髭をねぢつて、煙草を吸へばいゝに▲紫蘇、み。金澤、たま。野趣愛すべし、芳香かぐべし、われ始めて純なる美文に接せり▲不快。大阪、宮崎たゞよ。女子文壇を買つたのを叔母に見つかつて長たらしいお說法をきかされた、私は食客である、あゝ親のない子に、人はなぜつらくばかり當るのでせう▲分らぬ心。伯耆、文子。自分には戀人がある、他の女の髮一筋でも思ふまい、他の男の髭一本でも見まいと誓つて血をす

つた人がある、それなのに或日或時顔を見合つてにつと笑つた或男の事が心にからまりついて離れない、戀だらうか戀ではない、戀でないならどうしてかう思ひ忘れずにゐるでせう▲嵐。紀伊、あぢさゐ。四人の女の人がねばなを嵐にあひて土居さんといふて逃げる記、但あたりは闇かつたせいかたゞ風の音しか書いてない、下駄のぬげかゝつたのを氣にする位だから恐怖もさうあらはれてはゐない▲夕月夜に。鳥取、夕美香。「少女」から轉じた君らしい、白羊君にしこまれて矢鱈に空漠な美しい文字を並べてある、あなたの名はセキビカウとよむのですか、お氣の毒だけれどゆみかとはよめないよと夜雨先生にからかはれた君であらう、悲しい悲しいといふのが事實は少しも悲しくないのだから幸福だ▲車中。石川、磯部仙子、觀察微に入る、たのもしき將來といふべし▲一日。備前、よしのお萩を三ぜんたべた、も一つと思つたけれど從兄の嫁さんが見てるからがまんしたとはびつくりする、嘸かし力が有るだらう、かういふお母さんから生れるのだから中國の兵隊さんの强いのは尤だ▲爺舞踊。藤田やす籠をあんでくらしてゐる村の爺さんは大哲人だとある、女氣はちつともない、雜誌文學に中毒した中學生の作としか見えぬ▲若き女。下妻、沼尻省子。仁平先生といふのが私は子供は二人しかございませんといつたさうだ下妻にさういふ馬鹿がゐるとは知らなかつた▲なやみ。廣島、不冬欺八年育てられし祖母を捨つる時のなやみである、誘くものは父と學問とであつた、人は二人の主に事ふるあたはず▲落日。筑後、栗山ひろ。これ亦祖母を悲む文也、長くておまけに中心がないから降參する▲桃われ。金澤、中崎京。京子さんは藝者であつたり、料理屋の姉でであつたりしたが、今度はりうとしたお孃さんだ、十次郎をした役者の名を忘れて了つたのが面白し、美しい顔だけがちら〱と目に見えてゐるのであらう▲窓。麻布、長谷川未女。この君も亦上京す、美しき手をもてる君！知らず大都の第一印象はなにものぞ▲よみがへり。青山、西お貞。結婚によりてよみがへれる命、永劫の力を與へられてたの君今や歡喜の中に在り、心を安んずる者豈君の母のみならんや▲二十の秋。札幌、ゆかり。戀の秘密を抱いてかなしき母と相むかへる二十の女！いたましく悲しくをゝしき心に居れる二十の女！「二十てふ年のかずこそ悲しけれ戀をおもへば、母をおもへば。▲秋のまひる。京、廣江曉。しんみりしたいゝ作だけれど假名違の多いのには驚く、思ふて綴ふてなどは誰しも陥る誤りなれど、何時までもでは困ります。盛裝した美人のお白粉兀げを見るやうでそれで濟してるかと思うと笑止千萬だ▲蜘。堺、茅草。「壁に這ふは蟋蟀ならで蝶なりぬわれを捕るとや夜を出でくる▲逆上。金澤、路傍の花。ハテ不思議な誰か私を呼ぶと目が明いたら母さんに抱かれてゐた「遠遠し道の長手をかへりみてわれ涙しぬ母の懷▲夕。茨城、白部こと、雨がふつてるのに無意識に散歩に出たとあるから頭からヅブぬれになつたらうと思ふと、何時の間にか目がまひさうな赤い日光を浴びてゐたとある。葬式が來たいつどうして知つたのか死んだのは五つ六つの女の子とキメて、あゝ母の懷を辭してお前はこれからダヽクの世を行くのねと悲しんでゐる、つらつら惟んみるに成佛疑ひなし▲手紙。佐賀、花野久。唐紅の春の花にもにたる花やかの、夢を抱けるわがハートは戀のレターに綴らんだ「大へんだ兄さんに見つかつて了つた」こゝに於てかこれも亦成佛せざるを得ざる也▲言はぬ日、紀伊宇田すが、かなり長い一日のサイレンス可なり長い一日の沈默をくりかへしたのを見ると山茶花日和の秋の日はよほど長かつたのでせう、だからお嫁さんにおなりといふのです、あくびなんどしたくも出來ぬことは受合ます▲夜。笠間、平凡女。妹に羽織を讓つたら姉さんはこれを召してた頃はマガレツトかお下かにしてゐたでせう、あとがついてますものと言はれて、ピンクの五吋のリボンを一文字にキユーと締めてた時代を考へがしてとめどもなく涙を流した記、お孃さん達の涙は相談したやうに止度なく流れるのだからミモノでムいます▲師匠。札幌、かや。寒いので內地へ歸るお師匠さんの家をうつしたのだが、これもこんぐらかつて要點を捉へるのが難儀だつた、お師匠さんと小母さんといふのも夫婦だやら親子だやらわからず、お師匠さんは男か女かもわからず▲妹。長崎、ちさ。何かあせつていらずやうだがわからぬ。踏れば火の出さうな文▲落日。臼杵、吉田夕草。頭は出來てるやうだけれど素養が足りない、お白粉だ紅だと騷いでるうちに、切角の芽は枯れて了ふだらう▲やすみ。信濃、由比まさ。信州言葉丸出しで飴屋をかいてある、男が覆面もせで交つてゐるやうに思へもすれど、自分といふものを沒して人の事を書いたのでは何のタシにもならない▲其日より。大阪、村田ひろ。お葉は六疊の部屋に閉込で悄然と何か考へてゐますに初まる、これも亦他人の事である、原稿を鼠色のきぬ絲で綴ぢた所は可愛いが人の事は書かなくてもすむでせう、皆つまらぬ骨折だ。

誌友評論（一四）

一記者

假の結論

◎誌友評論は京阪地方から初めて、秩序もなく各地方の誌友を評し、前號で四國を終つた、なほ地方別にすれば、遺却されたる地方は澤山にある、就中誌友中でも尤も問題になる東京の誌友に就いては、未だ何事も言ひ及ぼしては居ないが、年と共に本誌の體裁も一變することゝなり、誌友の顏觸も年毎に變つて行くから、此評論は一先づ此處で切上げ、他日又筆を新しくして評論を試みやう。

◎で、本論を終ると同時に、本誌の誌友――殊に現在に於て紙上に活動してゐる誌友に就いて一言して置きたいと思ふ。

◎從來の誌友評論に書き漏らした地方で主なる人々は近江のわかば、伊豆の加藤爲子、羽前の粒木つね、武藏の三ヶ島よし子、同じく桂の華、近江の細野鈴蘭、伯耆の新田文子を初め岡山縣の二三の人々。紀伊の宇田菅、陸前の沼倉ふく、金澤の高橋正枝。其外顯れんとして努力中の人々は非常に多い。

◎都會としては東京と京都だが、大阪には今に目ぼしい人が出ない、小泉貞子が小さな努力を健實に續けてゐるだけだ、京都では廣江曉子の活動が目ざましい、『盲人鄕』以來の作は確に進境を示してゐるが、殊に前號の『黑綸子』の如きは近來の好い作だと思ふ、新しい空氣には觸れては居ないかも知らぬが、藝術的の香が高い、地方色を出すことの巧みな點に於て、江戶つ子の佐藤萬壽子と匹儔する、其他京都では三宅壽賀子の復活も賴母しい、からほねの女性らしい筆も、病葉の自然描寫も、小さいながら一つの個性を持つてゐる。

◎東京の誌友は大いに變化した、小說では小笠原貞子の若々しい態度、詩では望月れい子のおちついた詩風佐藤萬壽子の小說は餘り表はれないが、用心深い態度を以て進まうとするかも知れぬ。普通の散文では、小いそ又の名禮枝あり、花山院貴美子は他の誌友の描き得ない材料を持つてゐる點で勝れ、琴子は才分はあるが出たり引込んだりするので態度の鮮明を缺いてゐる

河野槇子も造詣する處はあるらしいが、餘り顏を出さない。

◎平塚白百合の文章は派手で、色彩的だ、短い引締つた散文詩風のものに一寸他に眞似られぬ妙所を持つてゐる。小林たか子は前號の告白を眞實とすれば、矢張多感な一女性だ、小說も亦多感多情なもので、女性の心理を巧みに分解する。同じ向島の鈴木春子は微恙ありて筆を執らなくなつた、彼女も一部に深い觀察は持つてゐたが、詩歌的抒情的の作物だけで、小說の技倆は然まで新しいものではない。

◎新晃榮だの、荒木貞枝だのいふ幼稚ながらも進んでゆけば好い素質だと思はれた人々――小說を作る――もあつたが、最近では消息がない。

◎和歌では江森美子を第一とす、處女の日の若さと淸さと誇りと榮えとは美子の歌に新しい姿で表はれてゐる、彼女も未だ若々しいと云ふ丈で今後の造詣は修養次第だと思ふ。

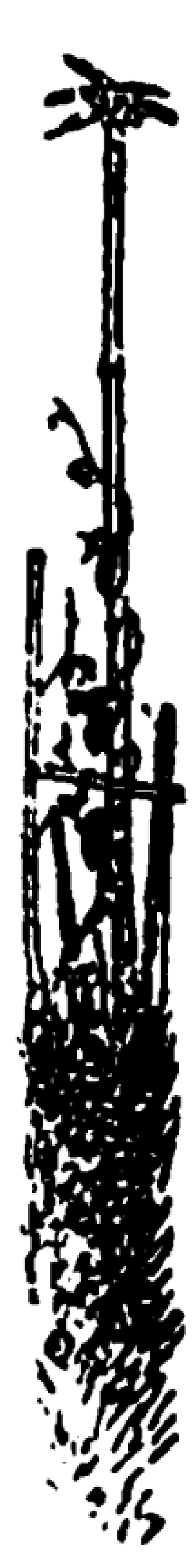
◎千住の白妙、本所のかすみ、深川の榮子など皆筆は達者に立つが、香といふやうなものが乏しい、香が乏しくてもしつかりして居れば宜いのだが――。

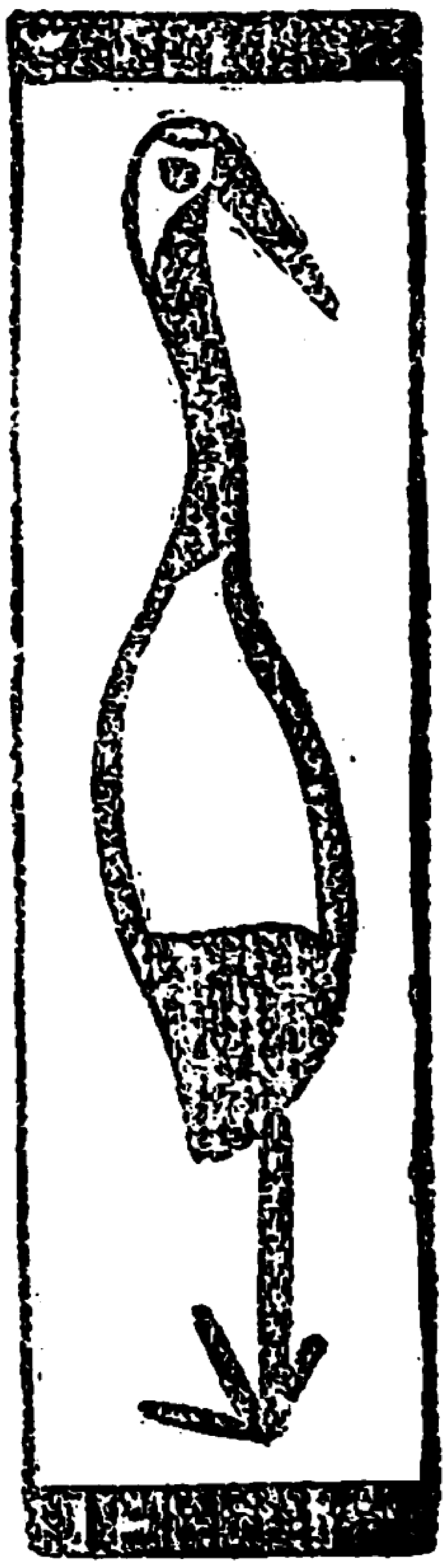
◎しつかりした筆は初鹿野道子の文に見られる、彼女も今は相當に永い間の誌友で、誌友間のしつかりものの一人だが、それだけ書くものも理性の勝つたものだ整然として襟を正してゐるやうな文章だ。

◎之を要するに、女子文壇の誌友の進步は第一期の佐久間芳子や、太田らく子や、服部水仙の活動した時代第二期には尤も澤山な人が出て活動し、第一期第二期と引續いて物を書いてゐる人もあれば、消滅した人もあり、名を成した人もあり、而して昨年あたりから第三期の時代に入つてゐる、殊に今年に入つては、人が新しくなつた。

◎第二期には東京の人が尤も能く活動したのだが、その時から見ると第三期に入つて寧ろ東京の誌友は淋しい、二三の力のある人はあるやうだが、全體の調子は二三年前ほど引立つて居らぬ。

◎全體の調子から云へば、地方の方が活氣があり、個人に就いて云へば、東京に有望な人があると云ふことになるのだ、暫く記して此處一二年の動作に注意して居たいと思ふ。





和歌

編輯局選

○（天賞） 陸前 小岩りう子

萬感のうづまく胸と一つ木の野分に枝のもつるゝさまと

○（地賞） 京都 三宅壽賀子

帯赤き少女のむれにうち交り七つの玉をあやつりて見ぬ

○（人賞） 小石川 中村千代子

恨みえず君いかなれば憎きまでめでたきさまに生れたまへる

佳作

○ 佐賀市 黒田紫蘭

あひたさに戀しさにはた悲しさにやうやくにくくなりにけるかな

○ 埼玉 渡邊積翠

我が胸の空虚を滿す何か來よよろこびもよし悲しみもよし

○ 福岡 筑紫星夜子

わがてとに涙ながるゝ否あらず大海底に日の落つる故

○ 在別府 吉田夕草子

斷層の赤きに強くなげかくる秋の日ざしのなやましきかな

○ 神田 阿曾照子

とりぐにみだるゝ心かきあはせみちびきてゆく君はたふとし

○ 信濃 中島ふみ子

とつぎゆく子と山里に殘る子と更けゆく宵の灯もなき室に

○ 下關市 西村文江

弦なき弓もて君を射むとする我なりと知り泣きて走れる

○ 宮城 齋藤すみれ

あな淋し右と左に二叉の路にしあれば君と別れて

○ 下總 浮舟女

よく笑ふ少女なりけるたまゆらのよろこび奪ふつれなき君よ

○ 京橋 大郷米子

しら〴〵と草のかしらの老いて行くしまの空地に日光の熟睡する

○　大阪　きぬ子

よりそひてやさしく君はのたまふに扇まさぐりはぢらひて居ぬ

○　近江　瑠璃香

あな嬉し今日こそ己が芝居観る其の夜の如く歡樂の湧く

○　下總谷　横谷ゆき子

北國は雪の上なる春の風たけなる君の前髪をふく

○　新潟縣　若井紅雨

柊の葉ぶちにすさぶ風の音はよき君の如胸そゝるかな

○　羽前　長澤美耶子

紅葉散る野末の里に我一人傾えてあれど知る人もなし

○　羽後　蔦の花

狂ふほど心は戀にもえながらなどつめたかる我がふるまひよ

○　佐渡　わくらば子

君故にすさみ果てしかわがこゝろめしひにおなじ日は仰げども

○　備前　柴田銀水

ふとしては涙ぐましきことのあり心のこりのあるにあらねど

○　尾張　水谷靜枝子

戀と富いづれ選ばむ夕燒のうするゝ部屋に物想ふわれ

○　淡路　清水花子

淡き雲西より飛べる朝ぼらけ百舌鳥の音聞けば涙さしぐむ

○　舞鶴　白菊子

我もまた理想といふを知りにけり少女十九の霜月のすゑ

○　山口縣　椰眞美耶子

秋を病む我が窓下に弟等は重玉草の實をあさる哉

○　岡山市　石井明子

み言葉を拜する毎になつかしき君がみ名よぶ夕暮の窓

○　岡山市　洋月子

甘山へのぼれば遠き秋の田に稻刈る少女みゆる嬉しさ

○　福岡　孝子

君を見て知ると云ふより愛といふ其隣なる戀と云ふまで

○　上毛　雲路

救ひ來てちゝに花など與ふれど病める胡蝶は夕に死にぬ

○　山口縣　田中鶴枝

弱き身と自棄と涙の中にゐて一人の君を探し選みぬ

○　若狹　神田美樹子

言ひなれし幼な名をさへ呼びも得ずうつむきがちに行きすぎしかな

○　若狹　海の子

はかなさに人の群をばそゝのがれ柱によりて海をながむる

○　周防　重原美女子

わが窓の月にも恨み重なりぬなど心なき天地の蔭

○　神戸市　田中港の女

いづれより讀むべきかあゝ一時の彼の君の書この君の書

○　神奈川　間瀬靜子

吹く風にいざことづてん君よ今彼の日をおもひ吾はゝゐむと

○　大阪府　中阪都美子

立ちよりて路を問ひたる一つ家の菊の白さの忘れがたけれ

○　鹿兒島　是枝花枝

かくあれと祈りし君の玉章を受けし夕はほくそ笑しぬ

○　芝　白菊

幾日待ち幾夜待ちけむ我が心待つに飽きたり君の來ぬ夜を

○　埼玉　桂の華

落葉掃きふと願し瞬間の土におとせし眼のこゝろよさ

○　宮城縣　長谷川紫葉
コスモスの枝すく〳〵と伸び行きぬわが悲しみのとけざるうちに

○　久留米　涙花子
思ひ出のわく日は悲し城あとのぎんなんの木にすゝり泣きよる

○　北海道　伏見屋康子
別るゝといふにあらねど朝顔の露の消ぬるが悲しきかなや

○　京都府　秋星子
キウラソウの緑の酒に酔ひしれて男の如く世に交かく

○　水戸市小湊はるさめ
我が二十戀知り染めしわりなさをたゞ髮亂しもがきてありぬ

○　福岡市　疋田みさを
あたゝかき少女の夢のさめなむと仄さみしみを知れるこの頃

○　北見　夢衣
戀もたぬさびしき胸は戀さめしうつろの胸に遙かまされり

○　久留米　中村佳律子
戀多く弄びする友の前つひに默しぬ男を思ふ

○　岡山縣　よしの
君が家は人問はざれど春くれば君が庭こそ蝶の宿なれ

○　鹿兒島　さき子
我が胸に淡き不安はうす煙ひろがるごとくひろがりにけり

○　岡山市　桂木淑子
亡き君がおくり給ひしきくの花今日また咲きて涙こぼしぬ

○　茨城縣　刑澤廣代
今はたゞ思ひ疲れてしみ〴〵と昨日の我のなつかしきかな



散歩　麴町　木村松子

○　麴町　牧野銀杏子
唇を固く閉して物言はぬ人の如くに冬は來にけり

○　東京　草路
人と我はなれ行く日の擴がれど猶かなしまぬすさみし心

○　下谷　小黑紫子
よき人の來ます頃なり村はづれ水車の横に蟋蟀のなく

○　京都　義子
目をとぢて君が言葉を思ふとき愚かさをしるよわき人かな

○　仙臺　橋本秋草
新妻の水くみにくる井のそばの垣根にさけるコスモスの花

○　岐阜縣　佐藤待宵草
こみあげて來る悲しみをこらへつつたそがれ頃にこほろぎを聞く

○　伯耆　新田文子
くろがべに指觸れし時そと覺ふ冷さのごと君が心は

○　吳市　山本哲子
霜しろきあしたの月に泣けよとや今日此頃の君のつれなさ

○　下谷　山脇もと子
いつはられいつはられつゝ悔いもせであはれや老ふる身をいかにせむ

○　城南　鈴枝
悲しきはふとあやまちて致せるをたくらみ事と思はるゝ時

○　金澤　光朗女
目をとぢて凡てのものを呪ふ時我心なむ冷たく笑ふ

○　石川　ため子
十六の盲目の少女三昧をとる軒に泣き入る夜の雨かな

○君が心晴れては曇る此頃の秋の空にも似たりなど思ふ　金澤市　路傍の花

○君はしも戀の玉をば碎きけりそが片われに心いたみぬ　佐賀　花の雫

○なにげなくふと投げすゑし我がひとみ土昏の中の蝶の骸見き　紀伊　宇田すが子

○秋雨のそぼふる夕べ山寺に柩を送る人まばらなり　下野　N子

○かすひ灯の青き息はく柳道淡き悲哀のつと胸に入る　東京　萩の露

○人しれず築き上げたるこの胸をはしより君に嘆ませてぞゐぬ　福岡　壽美子

○取り上げし手紙の重さなつかしさ窓を開けばいてふの散れり　久留米　中島みき子

○醒めし子は吾た思ふ人のあると聞き思はれぬ身を泪するかな　高知縣　野村登久子

○わが持てるくれなゐの玉捧ぐべき君も居まさず秋は暮れゆく　靜岡　石垣靜子

○小鳥なけば熟れ穗のいねのふくらみにあきの日しめばものゝなつかし　德島縣　田村もと

○御君の花とはしらず男の子達少女てふ花手折らんとする　伊賀　山中靜子

○哀しさも淋しさも口惜しさも八分の針に縫ひ綴り行く　愛媛　優花

○あまた度秋はへぬれど今年の如悲しさかつて吾はしらじな　兵庫縣　花吹雪

○此の思のかれてゆきし夕映えのあかきがなかに黑きくもみゆ　廣島縣　葵の花

○人々のあはれといへる秋の夜をわれはこのみぬ君逝きまして　竹田節子

○世の人の喜び事と我幸と少したがふとはゝゑみをやる　靜岡縣　宮下美代子

○火の華は胸にこたへつ燃えつれど果敢なきえにし悵みつゝ泣く　千葉　伊東花蝶子

○垣間みし艶なる薔薇の香に醉ひて手折れば刺のきずつけにけり　奈良縣　多香子

○黃昏は薄乳のごと蒼空に迫まりて悲し百舌鳥ひたに啼く　山梨　岸花子

○文机のダリヤ眞白く散りしきぬ頰に眺せんしばしの房　福岡　林豐枝

○ありし日はうれしきものゝきはみなりしゆめもうとましさめし戀には　京橋　渚の花

○やるせなき心持ちあぐむ此のからだ眞蒼き海に入らんとぞ思ふ　越前　井上美佐尾

○むつかしき戀の謎なぞ解きかねしをさな昔しを偲ぶ秋かな　茨城縣　皆川さち子

○たゞひとり思ひ出つきせぬ野の家に白菊いけて風の音きく　北國　茅夕子

○別れにし君を戀して泪する病の窓の夕ぐれの色　福岡縣　岸夢子

○旅の二十日波の響に潮の香に憧れに泣く心洗ひぬ　德島縣　蔦紅

○木犀の強きかをりにひたりつゝ君が文よむ壁の靜けさ　岐阜縣　佐藤夕月

○ひるすぎのうすあたたかき秋の野に忘れては亦人を戀ふかな　石川縣　磯部仙子

○鐘の音に花散るゆふべ嫁せし人のほそりて見ゆる秋の夕暮れ　土屋露

○机の上の紫苑の花がかぎりなくさびしくなりてぬき捨てし夜　筑前　いさを

○友禪の舞袖長らなぶられつゝぬかたれて行くはま町の川岸　南千住　白妙女

○旅順　泥子

足元にうづまきて來る黄なる葉を見つめてあれば涙こぼるゝ

○長崎　町田星

あざけたる舌によく似しランプの灯世を呪ふ女の目に心地よし

○群馬縣　新井つま子

行く秋の庭に默して涙する性弱き子に柿の葉が散る

○上野　萩野つゆ子

そばの花白きが末にうら戀し故郷の山淡ゝ浮べる

○常陸　田村はつ子

たそがれの町のはづれ路あはれなるゐざり車が音たてて行く

○備前　我澤竹子

をゝ君のふみを手



秋の女　山城　竹村まき

にせし少女子のなみ打つ胸は春の初花

○　北國　茅夕子

別れには泣かず笑はず惜さげにものをも言はで去にたまふ君

○　加賀　村田いと子

二十とは處女の坂のいたゞきに羽衣かつぎ舞ふ心かな

○　加賀　夕雲

月出でぬ大野に立ちて草の如身はおのゝきぬ青き光に

○　關口ちよの

遠近の山は紅葉となりにけり中に淺間の大紅焰はく

○　吳市　船尾いく

やう〳〵にたづね來りし萩の堂雜草はびこり人はまれなり

○　岐阜縣　大橋榮子

門はきてホト息つきぬはき持ちて土の香匂ふ秋の夕暮

○　大阪市　河盛よしの

たへがたき悶えはつひに歌を得ぬかくて小さき喜びを得ぬ

○　北海道　大野淺萬子

小夜ふけて淋しさまさる秋の夜に寄せてはかへす浪の音きく

○　大阪市　大關さとみ

火の車五つ來りぬ鬼も來ぬかくて我をばうばはんとする

○　山形縣　伊藤習紫子

はからずも露西亞少女に似し戀をしてありし身の卷に吻づく

○　長野縣　淺田千代子

町の灯の明るき方へたど〳〵とくらき河邊をひとりゆくかな

○　京都　內田澄江

彼岸花咲く野の道に大原女の歌ひつれくる秋の上加茂

○　鳥取縣　三島紫子

別れたる人を仄かに思ひ出づるカンナの花の黃なる夕暮

○　相模　高根小鈴

思はれてあるを誇りに生くといふ女の胸にそゝぐ秋雨

○　玫子

怪鳥なけばあなと叫びて君が御手にすがり果にしくらがりの途

○　橫須賀　美蘭子

をかしをかし女はよわきものとかで遠方人がはかりごとする

○　京都府　竹村まき

アカシヤの並木の路の黃昏を荷車引きて騾馬の走れる

○　伯耆國　田中春子

秋の風胸の悶えのはの見ゆる君の姿の美はしきかな

○　長野縣　秋野晃

葉に光る秋の日光の流れしづかにもこの裏町に匂ふ木犀

○　伊豫　高橋政子

此若さ張りつめし日を誇らんにあまりにかなし髮落つる夢

○　高知　津野文子

ハラ〳〵と散るコスモスの花びらを口にあつれば涙こぼれぬ

○　播磨　龜岡うすみどり

山坂を走せ下るにもさも似たり花の少女の時はすぎ行く

○　石川縣　北犂利子

思はじと誓ふ心に文やきて友なきものと又も針もつ

○　金澤市　歌の宵女

無果花の葉陰に響く蜜蜂の羽音につどうてわくら葉の散る

○　石川縣　秋雨

そばの花ま白き畑に一人たてば夕の汽笛悲しうなりぬ

○　大阪市　藤井ひさえ

なんとなく想ふともなくおもひみる冷めたきこひに溫かき戀

○　市外　野の百合

ひなげしをコヽリコなどゝよぶ國にあな生甲斐や二人在して

○　佐渡　加藤薇香

曉の風にからだをふるはせて書をよむ少女月や見るらん

○　日本橋　小林政子

佛前に亡き母戀しなつかしき氣高うして悲し白菊

○　世良田悠子

そむきゆく心と知らでありし日のなつかしきかな涙わりなし

○　群馬縣　羽鳥夕美花

のがれきて夕ばえ赤き野に立てば吾胸をさす若き悲しみ　山口　千香

○くれなゐのほのほの如き君が目も冷やかに見る我瞳かな　山口縣　照子

○ほゝゑみて去りにし人の玉章を夢と知りつゝ待つ弱き子よ　牛　椿野鈴琴

○意の儘に狂へど止むる人も無き淋しき日なり戀に泣く我れ　廣島縣　宮垣初代

○暖き夢破られて秋風の冷たき朝ぞ歌もならざる　岡山市　矢木武子

○砂美の浦磯山松の木の間より澄みのぼりたる秋の夜の月　熊本　落葉

○月さえてコスモスの花光るなり寮の廊下を一人しゆけば　三重縣　中村和子

○戀をして二言目には死ぬと云ふ昔の葉われは誰におぼえし　信濃　保科伊津子

○木の葉散る音を聞きつゝ唯一人君と語りし花の日思ふ　神戸市　なでしこ

○うつし世のたからつくして迎ふとも我は嫁くまじ君にあらずば　渡島　小木白菫

○故郷の清き川邊の初雪は戀する子にはつれなかりけり　宮城縣　長谷川紫葉

○若き日の悲しみ胸におそひ來る如くに降りぬ夕時雨かな　群馬縣　布施つね代

○ゆく秋の悲しき思ひ我が胸に落葉散る窓欄に佇む　福岡縣　中垣香須子

○しのばるゝ秋を淋しと思ふ時紅葉飾りて樂しみし日を　小林操子

○疲れたる瞳うつせば蝿一つあざける如く足づりしてあり　群馬縣　小澤しづ子

○わが泣く日君もなかれぬ別れてはふみがら胸にわれ一人なく　若州　元山ふく子

○小窓邊の白菊ほのに咲く見えて朧月照りぬなつかしき家　堺市　高橋直子

○薄れ行く入日を窓に見てあれば悲しき歌を歌ひすぎけり　新潟市　まり子

○十五夜の月を見つゝも豆食ぶる姉妹の姿愛らしきかな　淡路　高田清子

○思ひ出に燃ゆる血汐の滌ぐべき術なしあはれこの若人よ　支那　失名

○絹絲のほぐれし如き我胸をすの長きに斷たむとぞ思ふ　土佐　橋田紫葉

○會ひに來し其の夜の事を思ひ出る此の黄昏を雁啼きて過ぐ　網島すみ

○白菊よまたもゝ草よ心あらば此の秋ばかりは黒うこそ咲け　神田　柏直操

○紅の絆のはしにつながれて夢に路ゆくわれのこの頃　伊豫　花井隆子

○道傍の枯れかゝりたるたうきびのすき間より見ゆ戀人の家　和歌山市　春子

○もみ裏を縫へばわが瞳の痛みけり餘りに綴めし戀なるが故　信濃　青木かつの

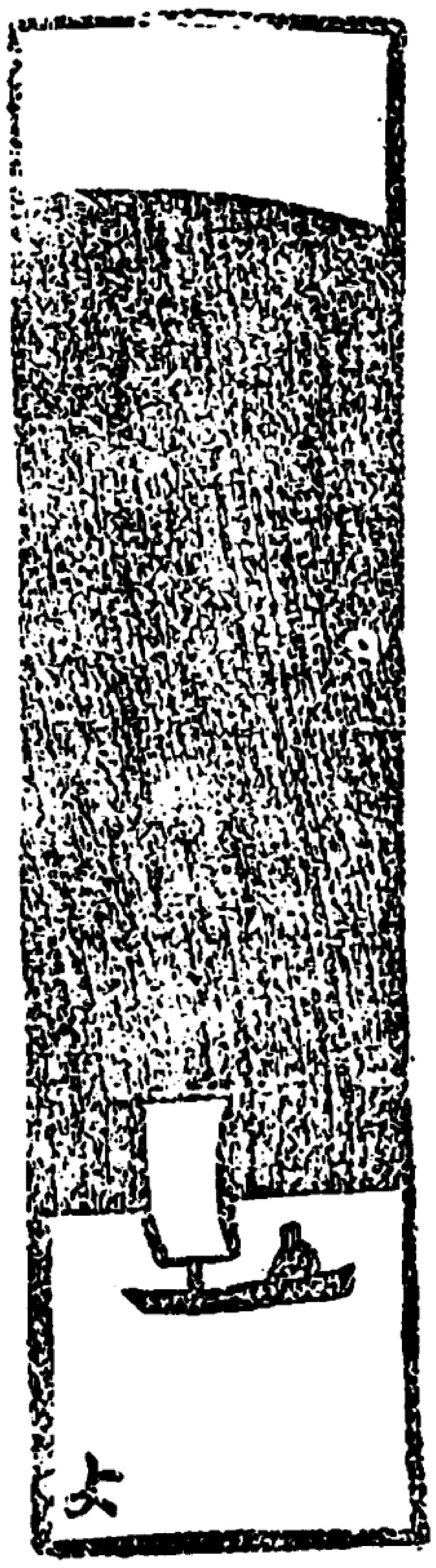
○ふと窓によりて野原を見渡せば早や黄ばみ來ぬ秋はかなしき　長崎　町田とし子

○いたましく彼の赤土の斷崖の如くも冬に身をさらすかな　靜岡　葉子

○人妻といふ名をおひて我胸の赤き花にも波立たぬかな　筑後　柴田百枝

○美はしき手蹟なりき詩に妙なりきあはれやさしき人なりしかな　大阪市　關地敏子

○秋風に桐の一葉も散りにけりやぶれし戀をふとおもふ日に



自然（散文）　編輯局選

○蔦

横濱　江の柳

ガラス戸ごしに見てゐたのであるけれど、そう外を見るのも厭になつてしまつたので、首を心もち下へさげ樣とした時、ふつとお向ふの洋館の垣根一面にはつてゐる蔦が目についた。それは形のいゝ葉のこはい大きい蔦なのである。何だか珍らしいので、そればかり見てゐると、だん／＼一つ／＼の葉がわかつてきた。それにつれて葉と葉との間が、濃い紫してゐるのや、もう赤くなつたのやが目につき出す、もう蔦はあかくなるのかしらと思ふと、ふとお墓のそばの敎會が思ひ出された。敎會はその赤煉瓦の高い所まで、これと同じ樣な蔦がまつはつてゐたからである。けれどあのつたは冬になつても決して紅葉しない。だから異ふのであらうと考へなほす、私が小學校に通ふみちで、あの敎會を仰いでは、この蔦が日本の蔦の樣にまつかになつたらどんなに奇麗だらう、丁度夕日もあたるしと思ひ思ひした事がなつかしい。ふと鐘の音がした樣なので、こんな事思つてゐたからなのかしらと二度めの音を待つてゐるとやはりほんたうの鐘であつた、何だか嬉しい樣な氣がしてそのまゝ目をとぢて何も考へないできく。

蔦の中からひゞく鐘は私の大すきな夕ぐれの音なのである。（天賞）

材料が珍しい上に、心持も新しい。（評）

○牡丹の種子

札幌　俣野幽香里

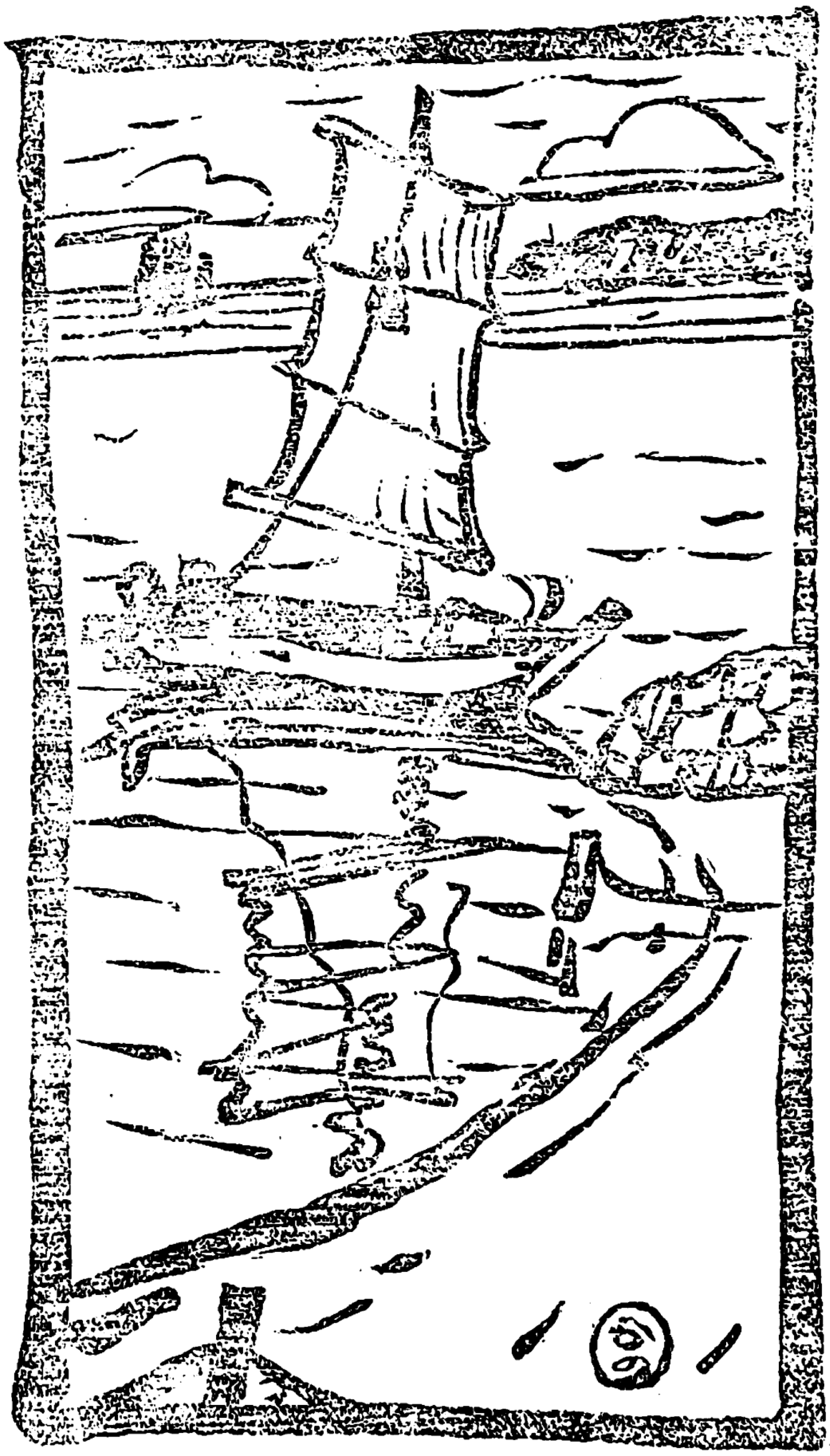
ひや／＼としめつぽいクロバアに膝をついて牡丹の種子をとる。白い花の方はまだ口も開かないから紅牡丹のだけ。

音を忍びながら葉を渡つてきた風が輕く冷く前髮の中に泌み入る。どこかで蟬がないて居る。

靑黑く硬ばつた莢が五つ不規則な星形をして、脈のはつきりした海老茶色の葉や、うつすらと心もち黃昧

かつた葉の重り合つた中から覗いてる。下の方の日當たりいゝのは莢がきつかりと眞中から割れて、栗色の艶々したのや、かき餅のあられみたいなのや、みんな小指の先程の實が今にもこぼれ落ちさう。けれども葉の蔭のはどれもこれも若くて、片一方の莢がばかに大きかつたり、一粒位しか入つてなかつたり片輪なのが多い。

明るい日ざしが庭いつぱいにさして背中も頸も暖い右の拇指の爪で一寸引くとコロ〳〵と左の掌におもしろい程溜るのを、匂のたかい石鹸の箱の中にあけてはまたとる。細かい毛がうす黒く生えた莢の手ざはりをふと猿の掌みたいなと思つたら可笑しくなつた。



かゝり舟　山口　持畑かの

手をのべて奥の方のをとらうとすると、氣味の惡い蟲が・・・淡黄色に黒い縞のある一寸位の蟲が靜かに頭を擡げてゐる何だかこはくなつてつひと立ち上ると、そこゝに止つてゐた蜻蛉が輕く羽を光らせる。紅百合の珠芽が葡萄色にかゞやく。

澄みきつた空をさまぐに形をかへながら眞白な雲が流れる。

眞赤な唐辛をつるしてある隣の格子先のオンコの木

には絲を切つた根掛の珊瑚のやうな、綺麗な可愛い實が澤山ついてゐる。濃い綠の中の眞赤な實、全く美しい。

綠に腰をかけて私は種子を數へてみた。（地賞）

秋らしい感じが好い。（評）

○出　水

德島　蔦　紅

夜來の雨は其日の午後になつてもやまなかつた。其のみか益々強く、萬象を破壞せではやまじと云つた樣な凄まじい勢で降るのであつた。最うと賴みを持つて居た夕方になつても一二度小雨になつて愁眉を開きかけると又、勢を加へるのであつた。

宅の下の美しかつた川は濁流の音凄まじく其激波は朽ちた材木、里芋の大葉小さい木切等を手玉の樣に玩んでは吐出すのである。增水し切つた川幅は畑の石垣に向つて高さを增しつゝある。凝視してると何も覺えなくなつて濁流に呑まれ相に思ふ――私は身を退いた

雨戶を閉ぢた暮方からは只凄まじい音計りに氣もそゞろに惱むのであつた。

「さあ最う斯うして居られない」と父が不在の女計の家は度々此語を耳にした。浸水。流失と云ふ事が頭中を往來する。

急に四方が騷しくなつて提灯の灯が右往左往する、と家に來た人が「土橋が落ちた」「××家へ水がせき込んだ」「高橋の上へ水が乘つた」「彼所は床上へ浸水して今荷物を出して居る、あれ！彼の灯」とみの笠に危い提灯の灯を守り乍ら人々は云つて去り〳〵した。何だか人迄が無情の樣に思へる。見舞れる度「大丈夫ですまだ一丈有りますから」と其賴みの一丈はマイナス幾尺石垣に寄せて居るのに……。人の足が一寸絕えた。雨は依然としてやまない。

母は又戶を開けた――私にはこれが恐怖の念を增さしむる樣に思はれる。何處に逃げのびて居るのか哀音微かに激流の間に〳〵蟲の音がする。

「おや此の下で波があれ?!」と母は絕叫して力無く戶を閉した。そして不安と恐怖の念に閉されて室を見廻して居る。私は凡べての物を奪はれた程の便り無さを感じて母にすがり度く思つた

何悠に旅の父が心を傷めて居るかを思ふと火鉢の側に頭を垂れて瞑目して居る母をいとしく思はずには居られなかつた。「母樣屋根が浸らなくては流れはしま

せん」と強く云放つた。私は大なる責任を感じた。家財の一部を出す順序を考へた。あゝ自分の姿の弱々しい女である事を何恁に殘念に思つたか、而し母のうなづくのを見て心は強くなつた。先づ用箪笥の抽出の一つを自分の側へ持つて來て置いた。と人が來た「水枕うちました今に引きます」と確な色を見せる。急いで裏を開けて見た――雨の音の凄まじい暗い中に廣く畑に迄浸水して居るのがほの白くかすかに見えるのだ。長くは見て居られなかつた。

再び見た時は大分減水して居た、石垣迄見え出した。母と幸を喜ぶにつけ旅からやがて歸る父の喜ばしげな面まで偲ばれるのであつた。（入賞）

此君も根氣好く作る丈に文章は進んで來た。（評）

○丘の家にて

伏見　病葉

心細い迄に靜かになつて來たので、私は漸く小本を閉ぢて何となく邊りを見廻した。

自分が今倚つてゐるコンクリート造の椽には、菩提樹の枝がボツサリと、枝垂れ掛かつて其の蔭からは茫乎とした花を五つ六つ着けた黄薔薇の一株が、しよんぼりと、すね者の如にしよげた形で覗いてゐる。右の直ぐ傍の、寂れた葡萄棚には腐つた如な色をしたいぢけた果實が一房未練さうにくつ附いてゐて、焦茶色に乾からびた葉の落殘つたのとクチヤクチヤに混ざつて、眞綿の如な蜘蛛の巣に欲しい儘に縺らめられて居る。其の蔭の遊動圓木は疲れた如にゴつしりと、靜まつてゐてたゞれた如な色に踏み荒された其の下の土から細い路がうね〳〵と、芝生を縫つて行つて彼方の八ツ手の葉蔭で消えてゐる。八ツ手の葉蔭からは、奥の谷川に懸かつてる鐵橋の乳色が目立つて洩れてゐる。

ふと空の色に誘はれて、遠く〳〵瞳を移すと、遥か彼方の薄紅葉した梢の間から、山寺の鐘樓の黑ずんだのが小さく見えて、其の麓の方にはは白く所々崩れた築地が長くうねつてゐる。程近い堤の下には幅廣の赤茶けた坂路を、騾馬が數匹トボ〳〵と追はれて行く、弱々しい姿だ……………。

私は凝としては居られない様な氣持になつて、すた〳〵と庭へ降りた池の邊りからずつと廣く玄關の方へと敷きつめた白砂利の一隅には、石像を圍んだ玉垣の邊りに、グミが澤山熟してゐるので、近くに鎖で遁がれた小猿がそれへ手を屆かさう〳〵として居た。

荒んだ光景が見たいのでやがて私は裏の方へ行つて見た。草のざつと刈り取られた凹凸した廣い空地……其處に古びた倉庫を背後にして下僕の一人が、無花果の下蔭でせつせと空俵に何か詰め込んで居る。足下には、瀬戸物の破片や錆びたブリキやスリツパの古いの等が、埃や種々の塵芥にまみれて散らばつてゐる。片隅には赤い鐵管が轉ろがして在り、亂角に切つた花崗石が亂雜に積んであつて、せゝこましい大工小屋から鋸屑が溢ふれたりしてゐる。其處からガラ〳〵と降りた一方は狹い淺い川が流れてゐる。其の上流は底の石が能く見え透いてる清さだが此處から下流は、石崖の間からブチ〳〵と泡が噴き出て、絶えず暗紫色のギラギラした水が漂つてゐる。

尻に白い綿の如なものを着けた小さい羽蟲に眼先を邪魔されて、ふと氣がつくと既う周圍は夕闇が迫つてゐた。坂の向ふの丘の蕎麥畑や紅葉山なども漸く暗に溶け行く頃、遥か彼方の野面と覺しき暗黒の穀中に唯一點、赤い灯が鷂に滲んで濡れ色におぼめき初めた。野守の灯でゝもあらう……？　振り返ると、内にも築山の森蔭にもアーク燈が銀紫色に茫……と輝きそびえて噴水がキラ〳〵と空中で光つて居た。

何處かで透き通った聲に哀れっぽく、兎が啼いた。只意を持つて書いてあるだけ此作者の態度が嬉しく思はれる。（評）

○九月の或る日

近江　鈴蘭

シードタイムなので何處の畑も、根菜類の播種に忙がしさうだ、うちも今日は、おはま（作女）が來て、朝から夏の作物を引きぬいて居る、くたくになつた莖の下から蟋蟀が、吃驚いたやうにとび出す、小さな、眼の中へ這入りさうな雜草の實が、引張る度にパラく四方にとぶ、又來ん春にはうらくと長閑かな光の下に柔かい芽をふくのであらう。

正午過ぎにすつかり引き終つた、畑中が、がらんとして荒地へでも行つた如うだ、枯れた作物のつるや雜草を畑の眞中に、よせて一寸火をつけると、ぼやくと赤い焔がたつ、紫色の煙が、のんびり晴れた大空へ上がつてゆく、ぼちくとそれでも割合に力ある音して、燃えるのが何となく物哀れである。亡びゆく物の不憫さ……は噫、この小さな雜草にも。悟られるものを――。

燃え終つた草は、迚も草自身では思ひつきさうにもない形になつて砂を盛つた如うに成つてゐる畑の端から、はまが掘り返しかけた、白く干乾びた土が、粉々になつて、眞黑ろい土が上に現はれて來る。新らしく掘り返へされた、酸性土からは、ふくよかな、何とも名づけやうもない香が、佇立してゐる私の身に、まつはつて來て、何か知らなつかしい。ふり上げる鍬の先きが、きらりく光る、銀色の線が、つと走るでくみじかい間なので、眼が痛たい様だ。セルビヤの紅い花の汁に浸つて來たやうな、あか蜻蛉が、ちらく目の前を斜にとび交ふだけで、何故か今日は蝶一つ舞つて來ない。歩を轉じて家の裏に來て見たら、小豆や胡蔴や南瓜やが混然と、畑から穫つたまゝの、姿でおかれてある。收穫の歡びは私に、何となく豐かな悠暢な農家の生活を思はせるのである。

自然は何うしても農に歸す。（評）

○朱雀野の秋

京都　壽賀子

未だ刈り取られずにあるよく實のつた稻が黃金色になつて、吹く風に波の樣にうねつてゐる、古洋服に古帽子の變てこな案山子が所々に立つて、鳴子にかへた石油かんが下つてゐる、一面黃金色の中に名高い傳說のある白龍が丘の茂りのみ靑うして、午後の强い秋の日光の反映にかうした野の影が油畫の樣に見える。

南に向つた縁からは東と西とから京の町を取り卷いた山の端と端とがはつきりと見えて、十町向ふを走り行く東山電車の家根がキラくと光つて森の中を見え隱に西に東に通ふのや遠くの牧場に上る煙毎日く時を定めては西に行く汽車などが一とめに見える、ガランく繩を引いては鳴る石油鑵の立つパッと立つ雀の羽ばたきがおそろしい音に一時に響く、百舌鳥の聲が時々キッキキキと强く高く聞こえる野の中づたひに歸る中學生のたはむれる聲と遠き畑に話す百姓等の聲のみ位である。

都會を離れた平和な田舍に住まふ身には、殊更に畑の中にまつすぐに小さくく見えるまで並んでゐる電柱や、鳥おどしや鳴子にさへも文明時勢の變化を痛切に思はずにはゐられない。

夕暮にゴーンと響く妙心寺の鐘の重き餘音に胸に泌む瞬間現實から離れたやうな感想がする。

餘音のかすかに消え行けば何となう悲哀の情が胸に滿ちて靜寂な田舍に若き夢を葬る我と我が身をふり返り見てはあつい淚は頰を傳ふるのである。

「悲慘な家た若い女の住んでゐる家を思へようかこんな家に獨り住む若い女があらうか、さうして[illegible]野の中の[illegible]の罪にお住はれ！我が家を見れば、低い軒端に夕暉せまりて何の色彩もなき我部室の淋びしさ、――朱雀野、朱雀野なつかしき追憶のいくつも殘る我夢をつゝめる朱雀野よ、私はいつまでもかうした靜かな野に昔の夢を思ひ出てゝは泣かう、我が涙よ、朱雀野に降りそゝぐ雨ともなれよ。

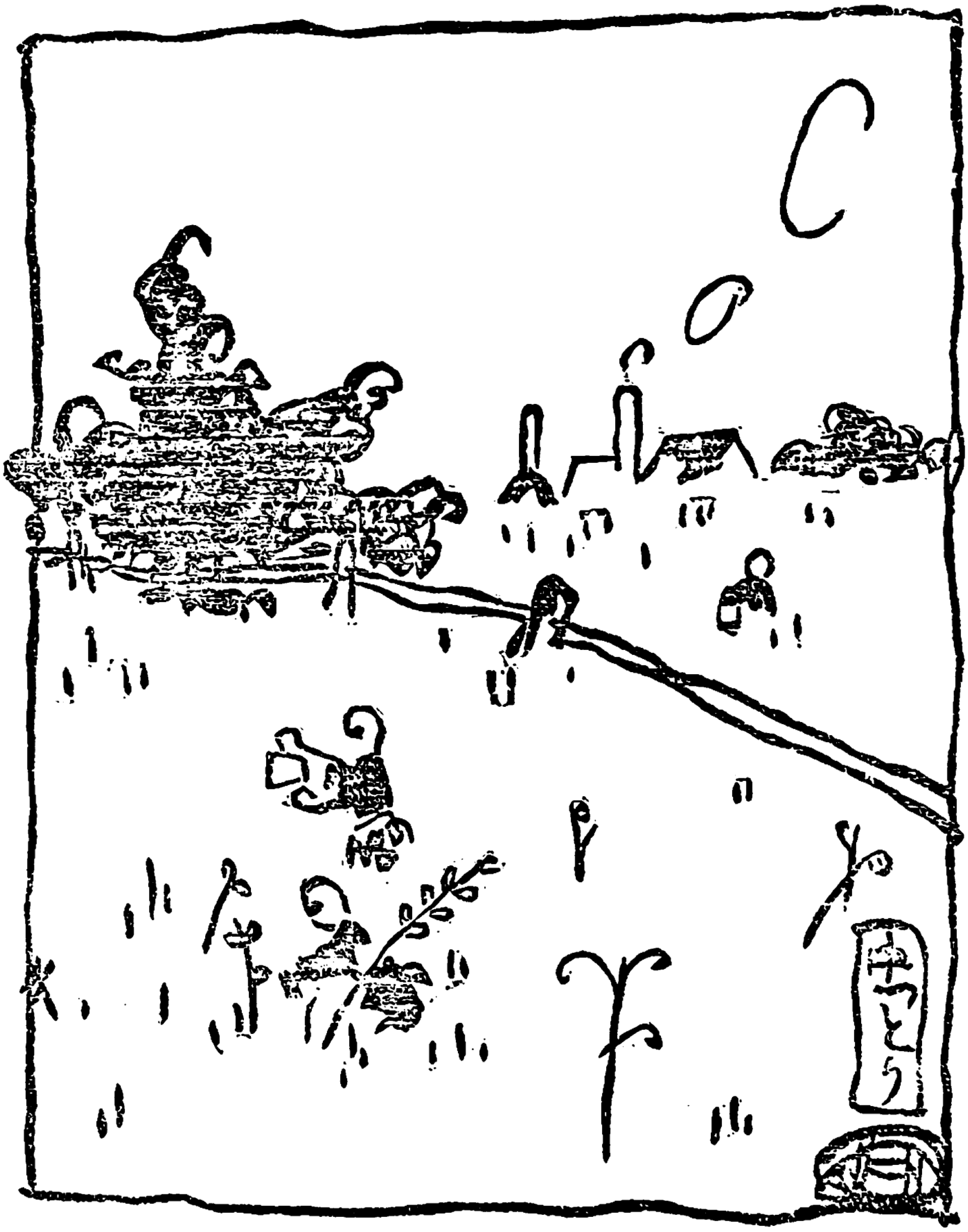
京都の郊外といふ地の利のわりに文は引立たない。（評）

○芋掘

岡山縣　筑紫原嵯峨野

薩摩芋の莖がようはびこつて居ますと聞いて食べたくてたまらなくなつたので妹を引張つて三つ鍬と鎌と籠とを、お前持つて否姉さん持つてなど爭ひながら、山裾の高所にある畑へ行つた。敷いた樣になつてる黒ずんだ青い葉をかき分けると蔓があつち行きこつち來てこんぐらかつてる、一本ひつぱると長い長い一丈に餘る程、妹は笑ひ笑ひ一本一本ひつばるのぢやない鎌てかうして一度に皆寄せつけてしまふのだつて、下の方から根本根本を切つては一緒になつたまゝだんだん上へ上へとまくり上げて行く、其跡を所嫌はず鍬で掘り散すと出るわ出るわ、其所にもこゝにも、面白い程、どす黒い土の間から美しい色をしたのが半分ばかりのぞいてる、爪へ土がはいるのも我慢してひつぱり出すと濕氣のある氣味惡い土の塊が付いて出る、小供の小指ばかりの根の肉色の最端はふーとふくらんでる、も少し地の中に置いたなら普通の大きさになるんだらうか。

二十分ばかりせつせと掘つたら手も足も土だらけ、草履の上へ土がかさんで重くて冷たい、雨上りの午後の太陽がカラッと強く、二枚重ねた單の上をがん〳〵射すものだから汗は出ないが暑くてたまらない、餘り苦しいので高い桐の陰の落ちてる畑の側の小草の生えてるぎせの上へ轉ぶ樣にして休んだ。



蟲とり　函館　谷内ちよ子

すゝ後の小道を昇つて行くこゝから少し仰いて見る位の所に山を脊負つた、疊ならやつと十疊位敷かれさうな一軒の家がある、麥藁屋根の朽ちて今にも軒からすべり落ちさうな危ない屋根、炎だらうに色んな道具が一つぱい置かれてる、雨戸が二枚ばかり閉まつてすゝけた穴の多い障子が三枚見える、人影はないしーんとしたものだ、鷄が二羽前の坂になつてる里芋畑の中をかき散らしてる。

三間ばかりのを二線漸うやう掘つたら籠に一杯になつたので、切り寄せた莖は其まゝにして置いて歸りかけた、よく稔つた田と田との間をだん〳〵と下へ下りて來たはつれが谷川になつてる、飛び石を五つ渡つて向岸の竹藪のほとりで洗つた。

川柳が一杯茂つてる間をくゞつて清い水が流れて來る竹藪のほとりには雜草にまじてぶつ〳〵の樣な水引草と、紫に空色のまじつた野菊とが丈低く咲いてきりぎ蟲の鳴き聲がチ、、と聞えてゐた。

此も實際だけにおもしろい。（評）

○國境

羽後　さぎ草

ローレライが節の閃めきもしのばるゝ厳を右手に白き花さく川べり傳ひに、登り行く足の輕さ。六里の峠を越せば、そこに陸奥の國が現はるゝ。他國の人の群が居るあゝ他國の人の群が居る、吾心あけの細引く銀鈴のごところびよろこぶ。

見返る彼方、人里も見えぬ、胴と首を直角に仰むけば白雲浮ぶ青空がやつと見ゆる迄に、山は高く迫る、裏葉白う翻る雜木は、茂り茂れども丁たる斧の音もせぬ。長木澤の深林よ、なんぞ意味深き沈默を守れる、なんぞ人の身の小さき事よ。ちゝと鳴〻鳥は人恐れもせず頸傾げ居る、瑠璃鳥と、繪の師は教へて下しつた、極樂の圖に見た樣に思ふ。

三人並べぬ道は、時々倒木に遮られて、千折れ、八千折れ、前行く人は十歩にして影かくす、かくれた友は楓の間からチラリと見ゆる、「おうい」とよび「おうい」とよぶも、こたませぬ程に山は迫る、山の氣配りて鋸となる、白鷺彼方の峰を覆ふよと見るまもなくしと〳〵と柔らかな線になつた。

山の雨。限りなき青葉のそよぎの中に、懸巣隠るゝ山の雨、しめるがまゝにしめらして、喘ぎ行く吾前にこぶしの花尼僧の樣に立つて居る、白き獸と目驚かした殘る雪の珍らしさを踏み越えて我等は遂に國境の峠の上に立つた。十時二十三分。

海拔二千尺　國境の木標雨に曝され風に打たれ獨り、峠の壘を守るのであつた。

とくさ。木賊。谷うづみ峰よぢ登りし木賊の茂み、遠つ世よりの大うからのごと、花なく葉なき二尺の莖はすう〳〵と思ひのまゝに延びて居る。

國境と云ふことは面白い。（評）

○稻苅

上毛　阿久津雲路

私は秋蜻蛉の飛まはる黃金色の田で毎日〳〵仕事をしてゐる靜な日稻を苅るのは實に愉快だ黃金色に實入つた稻に太田の金山もその黃の中にうづもれさうに遠く〳〵赤城の裾まで榛名の麓まで續いてゐる。

おも〳〵しく實入つた思のまゝに畔に入亂れてゐるのを押分〳〵行と草もみぢの葉も莖も血に染た樣に紅になつたのがゝたまつて秋めいてゐる、優しい濃い紫の小さな花をつけた水草も交て生てゐる、それを踏む時には何んともなしに惜まれた、蓮華の種子が鈴の樣な音をたてゝ私の足にさはる、そのあたり鐘打きによく似た聲でとぎれ〳〵蟲が鳴いてゐた、私はどうかして其の姿を見ようと思つたけれど、見ることはできなかつた、やがて私の家の田に來た。さうして二株三株苅るところにも濃い紫の花をつけた水草が一面咲いてゐる、其の上にいなごが一匹低くはたばたと飛んだ、すみれの香によく似た微な水草の香に包まれて、いなご

の行くさきを見てゐると、二三株むかふの水草のかげにかくれてしまつたあの美しい花の下で美しい夢を結ぶのだらうか、私は心行くまで夢をむすばせたかつた…………また二三株刈る今まで夢見てゐたいなごは又ぱた〴〵と飛んで二三株むかふの水草の中に身をやどした、私は其いづきの株を刈取ることができなかつた………。

「姉さん」と云ふ聲に私は驚いてあたりを見やつた。いなごをおひかけながらかく云つた弟は稲田の中に首だけ出して。お母さんが姉さんに手つだひなと云つたから來たよと、いなご片手にがさ〴〵と稲押分けて來た、…………

やがて二人はざく〳〵と稲を刈りはじめた。

好き素質あり(評)

○駿河の海

静岡　葉子

九月と云ても三保は春のやうに、一丈餘りの砂濱の上には陽炎が燃えて居る、其麥は葉のかげには、一畑毎に井戸が有つて、水をくんではかけて居る、娘の白い襦袢が、目まぐるしい程・あざやかに見える、こゝ二十日ばかりはこの林のやうな葉の上に、一滴の雨もそゝがれないのだ私はとう〳〵三保の雨の日を見ずに、明日は此地を去らねばならぬ。

今日も夕陽が美しい、夕榮の海岸に、入陽の山と海を寫生して居た、五六人の學生らしい人達は、一分間にも變てゆくだらうに、このけしきを、格別急がうともせずに、一人が筆を洗ふと、池のやうな靜な海は容易にそのコバルト色の、水の一かたまりをかきけさうとはしたかつたスッと汀に水をきると、細かい眞白な石に、薄い色がついたやうに思はれた、若い人は繪筆を砂地に投げ捨てると同時に、浴衣をぬいでぬき手を切つておよぎ始めた夕日がまともにさすので、たゞ頭にまいた手拭がチラ〳〵光る、石油發動機のカタ〳〵音のする船が、今出て行く方に江尻や淸水の町が、日をあびて美しくつゞいて居る、この日の入る刹那の明いけしきが消ると、半島の突端の小い燈臺がかゞやき始るのだ。

三保は半島である、松原を通りぬけて、外海の側に出ると磯は小砂がなくて細い石がしつとりぬれて居る、汀へ白い曲線をゑがいて、ゆるやかに引て行く、波の工合がなんとも云へぬ忘れ難いなつかしい感じをさせる、私一人きりと思つたらまたお染が立つて居た、紺がすりの着物に桃色の太いひもと、たすきにかけて、帶をしめぬ下半身がぼんやり地から生えたやうに、見動きもしない、何と云て居るんだらう、あの荒い浪の中に、なにの見えるのだらうか、ふと雙手を廣げて、頭上に高くあげた、——と思ふと振りかへりざま、見むきもせずに、すた〳〵と松原の中へ這入て行た、今港に居る汽船が、駿河港を出て行く時、お染はまたこの汀に立て泣くだらう、ハワイか米國か数年前に去つた人を、未猶戀うて二十五六の今日まで、赤や桃色と云ふ處女らしい色を、はなしきらずに居る、あまりにおだやかな、自然の中に生い立つた人達の八十九十の齢を保つは、こゝでは普通なんだから、お染は猶五十年の命を處女の心持で生きるのであらう、そして外國行の汽船がいつも目の前を往來して、たえず彼女の心をいら〳〵させる、と思ふとたまらなくあはれに思ふ。

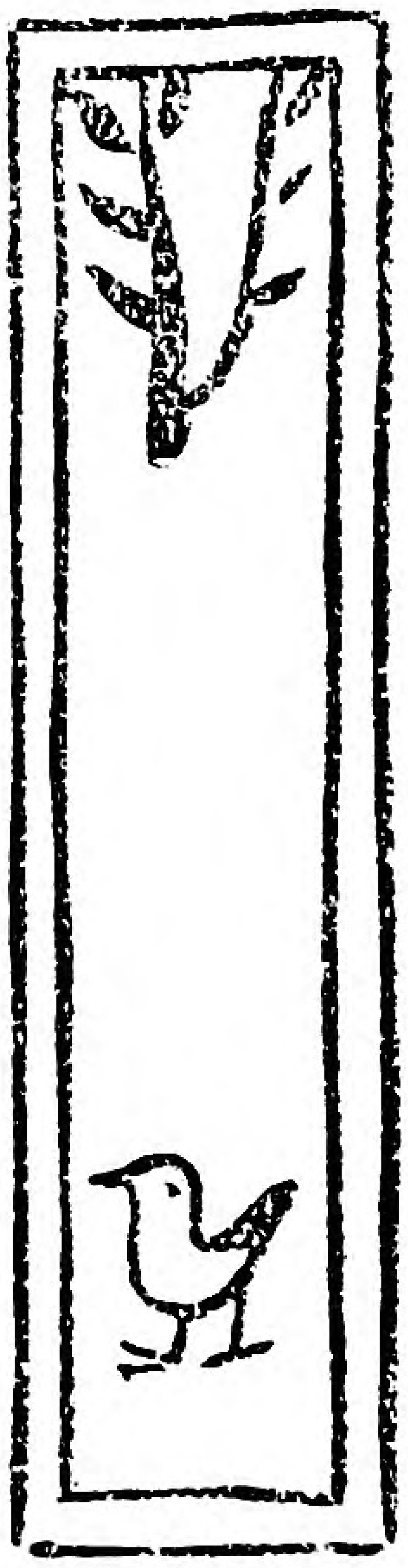
黄昏の磯を歩いたりするは、彼女と私と二人きりである。

逢ふとニッコリともせずに、默禮するやうになつたのは、五日目の朝であつた、私は明日から居なくなる、秋ふくる海の村はさぞ淋しいであらう、夕日の名殘か、一つ取り殘されたきうりに、薄い日がさして居る。いつぱいつめた行李に、カチンと錠をして縁側にころがし出して私は是を書いた、二十日間に一人の知己をも得なかつたけれど、三保はなつかしい處である、是が自然に別れる苦痛だらうか、と疑ひながらも私はやつぱりさうだらうと今夜は信じて居る。

心持は至極好いが、其心持は充分に表はれて來ない、察してみるだけた女性は何うしても自然の恩寵者でないらしい。(評)

小品文募集

自然と人事を問はず
淸新なる散文を募る



評論　編輯局選

○働いて寸暇を求めよ

埼玉　地疋福子

私は之迄針を持たない日は無い位毎日針と絲とに親しんで居りました素より小人数の家内何時迄しごとのあるものでは御座いません、手のろな私のする事でもいつも順々と纏つていつて未だ暑い内に冬物は大抵形付いて仕舞ひました、それでも習慣のせいか仕事を出さない日は何だか間が抜けてるやうな氣がして、最う駄目だと打捨つたものまでもう一度役に立てゝ等と引き出したり、襦袢や胴着の半襟を掛け替へて見たりしましたが直きにする事がなくなつてしまふのです、こんな譯で一日何にもしないで遊んで居つた事が御座います、恰度雜誌も讀み終つた頃ですし筆を執るにも思はしい材料のない時でした、さあ閑で〳〵堪りません机の前に坐つて見たり古い雜誌を引張り出して見たり庭へ出て見たり畑を歩いて見たり、誰に言ふともなく「一體如何したらいゝんだらう、本當に閑で閑でしやうが無い」とじれて見たり、其日の長う御座いましたこと。

斯うして一日無聊に苦しんで私はつく〴〵感じました、人間は矢張働くべきものです、遊んで居るものではありません、殊に閑は苦しみでこそあれ決して愉快なものでは御座いませんでした、世の中に閑程馬鹿らしく閑程つまらないものはありますまい、忙しい時、三日も寢て見たい等と思つたのは誠に愚な至りで御座いました、人は何でも働いて其忙しい中から見出でた安逸例へばまづ一服といふ處に眞に尊い價値があるのです、閑散といふ事も偶にはよろしう御座いますけれどそれが幾日も續いたならたのしみどころではなく寧ろ苦痛でせう、よく御隱居樣と云はるゝ身分のある人が庭に出て草を引いて居られるのを見受ける事があります、矢張此の苦痛―徒然にくるしまれた結果だらうと存じます。

「働いて寸暇を求めよ」其處に尊い精神の慰安と、勞力に對する報酬とを期せずして居ることが出來ませう。（入賞）

ひまほど馬鹿らしいものはないとは眞實です。（評）

大波小波

☆

神田林みつ子

▲所謂『新しい女』の塊りと言はれて居ります青鞜社の人々が今日尚ほ、社會から懷疑の瞳で迎へられて居るといふ事は私等女性として、誠に悲しむべき事實でございます。

▲然しながら私等自身も冷靜に、さうして公平に深く考へてみますと失禮ではございますがそれ等に對していさゝか慊足らない節があるのでございます。

▲かつて青鞜社あの人々が、あの吉原や、十二階下邊りの廊へ白晝臆面もなく浮れ込んだといふ事がありました、當時これを知りました神經質な敎育家は忽ち國家の大事件でも起つたかの樣に騷ぎ出しました。さうして記事に飢ゑた新聞紙は筆を揃へてこゝに『新しい女』といふ感じの良くない——私はさう思ひます——舶來の名稱を付けて、女性といふ問題に餘りに冷淡な天下の耳目を動しました。

▲それ以來、諸方面から起る冷笑嘲罵の變態した煽動的のお世辭の反動によりまして幸か不幸か多くの不健全な模造ノラや疑似マグダや和製ヘッダが產れましてみな思ひ思ひの方面に發展を試みたのでございます。

▲扨てこれ等の人々の今日までの傾向に依つて考へますとその思想上、その言論上ではいかにも立派な主義を主張して居ながらその實際上の功績は悲しい哉一向に擧つて居ない樣でございます。さうして或るブランクな人々は人の目を引く樣な服裝をして傾斜の巷に入り込んだり又ミーチングの席で、殊更に强い酒を飮んでみる等の女にあるまじき突飛な事をして、貧弱な自己と淺薄な名稱とに粉墨を施して、實質以上の價値あるものに見せよう等のウイークな傾向が表れました。一面それ等の人々の總ての行動は現實主義で實際主義で優柔不斷な舊來の女——その人々から見ますと——の性質を破壞して新しい建設を試みたその勇敢といふ點は、たゞ口先許りのローマンチシストに比較して一大飛躍には相違ございません。

▲然しながらこれ等の行動は尠くとも現代の日本の女としては餘りに常規を逸した行動で、寧ろ異性に對する一種の反抗——而も徒爾なる——ではなからうかと思はれるのでございましてて反抗と虛僞とを全く知らないと呼號された人々の行動としては餘りに矛盾して居る樣に考へられるのでございます。

▲苟も藝術家とならば、もう少しその一擧一動に眞摯と愼重とを以て藝術家らしい行動をとつて頂きたいのでございます。

▲然し今玆に一步退いて考へてみますと、眞の意義の『新しい女』と現今の日本の『新しい女』との根柢の間には未だ未だ深いさうして廣い溝渠がある樣に思はれるのでございます。

▲要するに私は、今假りに日本にも所謂『新しい女』があるとしたならばそは過渡期の不秩序の社會が產んだ一種の自儘女に過ぎないといふ意見には只今の私はたゞ目を閉ぢて同意すべく餘儀なくせしめられて居る事を悲しく思ふのでございます。

▲何うか自ら『新しい女』と呼號なさる皆さま！——青鞜社の皆さま！ 良く良く御自重なすつて餘り輕佻な行爲や誤解を招く擧動をなさらないで下さい、さうして衒氣や虛榮を捨てゝもう一度眞の自覺をなすつて下さい、私等否總ての女はその新しい建設に就いて滿腔の熱誠を以て爲し能ふる限りの後援を致すでございませう。

☆

陸前ふく子

○水野葉舟氏は妙齡の女人に對してさながら青年少年にでも云ふ如く諸君々々と仰有る。然しこの諸君の語は諸孃や諸子と云ふよりも隔てがない樣でなつかしく思ふ。階上の書齋よりは趣味津々たる文字＝文學についてのお話を伺ふ程すきなものはない。

○醉茗先生は溫厚篤實人の感情を傷つける樣なことは決して仰有らない方だと思ふ。先生はどこ迄も平和を悅ばれる例へば春風の樣の君子でいらつしやると思ふ。

○夜雨先生と云へば異口同音どなたも憂鬱な方だと云ふ樣だが私は如何しても憂鬱一方の方とは思はれない、何故と云ふと先生のお作には滑稽諧謔が多いからだ。先生は沈默の方らしいが口を開けばよく串談を仰有る方ではあるまいか。

御病身でもなく人にも背かれなさらなかつたなら圓滑洒脱洒々落々たる方だつたらうと思ふ。先生は御親切で勿體ぶらない方な樣だ。

○柳はみどり花はくれなゐは近頃の快文字である再讀三讀與次第に深い。けれどこの方の戀愛觀はいさゝか感心されない。小磯女史の靑鞜の女はキビ〳〵とした筆致、あの女あの女とは同人としては酷な言葉だ。

☆

福岡　筑紫星夜子

▲此頃よく黑いリボンを髪にさした人を見うける事がある私はその黑いリボンを訝しく思ふ。喪章はちやんと左胸に附してあるのだからまさか喪章ではあるまい、それなら裝飾のつもりなのだらうか？諒闇中だからと云つてリボンを黑くしても殊更裝飾をするには及ぶまいと思ふ、諒闇中だからといふ謹愼の意があるならば黑にしろ白にしろ裝飾と名のつく物は一切用ひないがいゝではないか、序時でも髪の裝飾等はなければなくてすむものであるやむごとなき高貴のおん方々は知らず、諒闇中は我々はたとへ黑色のものでも裝飾等はほどこさないのが當然だらうと私は思ふ。

☆

長崎　町田敏子

▲評論！私はまだ年若い十七の少女で「評論」といふ題の下に筆を取るのは少し難しい如な氣もするが一寸自分が思た事を云はせて頂き度い。

▲女が書物にばかりかぢりついてゐるのは餘り好いものちやないとか、異性との交際は身を過る本だとか、嫁ぐ時机を持つて嫁いだりするとがきらふとかこんな事を時々聞く事があるが姑さうまで女は社會と距つた者だらうか、女の讀書がなぜいゝ事でないのか、男でなければ讀書に親しむ事は出來ないのだらうか？そんな事はない筈だ、同じ人間に生れて居るものが男だからどうだ、女だからこうだなんて男女の仲はさう迄かけはなれたものだらうか。

▲學校を卒業すると讀書も許さない、縫取る事もあんまりさせない、外出もさせない、殊に夜の外出は女にはよくないと云ふ、こんな風で束縛してしまふ、そして妙な事ばかり耳の痛い程云つて聞かせたりするこんな束縛をするから、今時の私等の如な年の若い女等は、其束縛を逃れよう逃れようとあせるのだ。少し戀つた女になると束縛に堪へ切れないので家を出たりしてしまふ。さうした上句には其親達は自分等のあやまつた束縛をして居たのには氣がつかないので子の失策のやうに云ふ。今一度若い者を教育する前に年寄つた人を教育する必要があると思ふ

☆

紀伊　玉ゆら

△街道なんかで、大勢の男學生と行き會ふとき片よつてくれゝばよいものを、二人以上あつた時は必ず路の兩側へ別れてしまひますから、私共は中を通らねばなりません、きまりのわるいことです。

此方も大勢で彼も大勢だと云ふ場合には、女學生の方でも必度何かしやべり出しますが、男學生の方ではズラリと一列にならんで道をふさいだり、ハイヤなんかどなつたり、すり合ふ樣によつてくるものや、つまらない歌を吹きかける樣に歌ふものや、又中には同志がおし合ひをして失敬にも、寄りかゝりにくるものもあります、向ふも一人此方も一人のときは先づ何ごともなく通られます其の代り此方が二三人で何か笑ひ與じながら行くと、男學生は一人であつてごらんなさい、中には眞赤なかほして、目のやり所のない樣な、妙にきまりわるさうな風をして通るのでかへつて氣の毒になることがあります。

☆

攝津　絲萩

△私の知人で知己で知る人ぞ知る、高慢家がございますの、……一寸雜誌なんかへ。「評」とでも出て居らうものなら、すぐに、それを持つて來ては、見せつけられますので、あまり感心せん文章ですが、それとも云はれず、よいかげんのあいさつをすれば、向ふは喜んで持つて歸ります。……ほんとにをかしい人です、そんなに自分の名が出れば、えらいのでせうか？

☆

岡山　洋月子

△私の宅の前に某省へ勤めてる夫婦があります其夫なる人はよく云ふお目出度い人なので夫はく〳〵外で見て居てさへ胸が惡るくなりますわ男つて女にかけたらあんなにまでなるのかと思ふとほんとに情なくなります、おまけに其奥樣は新聞屋つて評がありますの近所近邊の事殘らずしやべりたてますのよ此間たうとうお隣の惡口云つたとか云はないとかでけんかをおつぱじめてたうとう何處かへ引越しゝましたの、私は何時も不心得なる妻の爲めに面目を失しては此

處彼處へ移り住む夫たる人の哀れなる樣を思ひうかべてはあざ笑つて居りますの。

☆

秋田　富田きらゝ女

△お懷慕しう存じますわ、おさしつかひ無くば何卒永久のお交際願はしう存じますの。私ネ何々雜誌々上にお名前拜見致しましてより、お懷しさは增し行くのみにて、何時かは友と叫びまさん時が有るでせうかと思つて居りますけれど——仲々もどかしく存じまして失禮をも顧みず手紙を以つて、君の文才を慕ふ！又君の詩想を愛づる此少女と、此後雁の便りに文の交りをお願ひ申しますわ、何卒ネ宜敷。御返事待つて居りますのよ佐樣奈良と。いと懇に？いと云ひ述して玉章下さる。

△然し、手紙を貰つた人は直接の文通が出來ませんけれど、折角、書束下さるに返事を書かなければ成らぬも、浮世の義理！

△「お麗はしき水莖の跡、嬉しく拜見致しました、數成らぬ私の事左程迄にね嬉しいわ、私もお懷しう存じますの、けれど私父母や先すら直接の文通は斷られて居りますから、實に申し上げがたいのですが何卒惡しからず思し召して下さい。誌上で末永くお交りを願ひます。かしこと、

△簡單に書いて返事を出す。扨て、十日計り立つてより長い手紙が來た。今度は高襟な西洋封筒に、菫色のインキにて走り書に認め裏には、「何々スクールにてホワイトローズ」とかの雅號で——。受取り人は何と思ふで有らうか？

△も六回位文の交際した人なら、レツトローズでも可し。ホワイトリ、ーでも何でもわかるがまだ一度？二度下さるレターに此麽事を書いちや失禮と思ふ！、併して、手紙は嬉しく讀んだ直接の交際出來んといふ事私何麽に落膽したか知れん。願はくは君よ、君を思ふ少女の心を、察してみて給へ。私の通つて居る學校は〇〇高女で有る?! 私は、そこの高女の本科三年だ、貴女も女學校に居つて被在るか、それ共まだ高等小學か、お知せ下さい。私の通つて居る女學校は多くの女學校中一番六ケしいから、隨分窮屈だと見ず知らずの者に遠慮會釋も無く紹介して居る貴女は御幾才？私は十六だ——。

△そして、終の方に何子ちやん時々レターサンキユウ。終の方に又少さく姉ちやまと呼ばして頂戴お懷しき姉ちやまに參らすと、何もかも躊躇せずに、喋々と辯じて居る是でも—受取人は何と思ふであらう!?。

△是れに因つて、交際は出來る—永久の交りを願ふ。年は十九だ學校は最う卒へた。姉等と呼んで下さる御厚意は難有う、けれど羞しい——。

△さうすると「云ひでせう私等の友達にも皆誌友の姉ちやんが居ります、よう姉ちやま一生の願ひだわ、姉ちやま！」

△斯麽事書いて居乍ら一年とは續かぬ！はては、此頃如何にお在し給ふやと問ひやりては姉ちやま毎度レター thank you でもね、あいさには學期試驗の爲にさうさい〳〵手紙差し上げる事六ケしかつたもの。とて逐々葉書だも返さぬ樣に成りぬかし！。

△吁。憐れ〳〵誌友の交りなれや！。

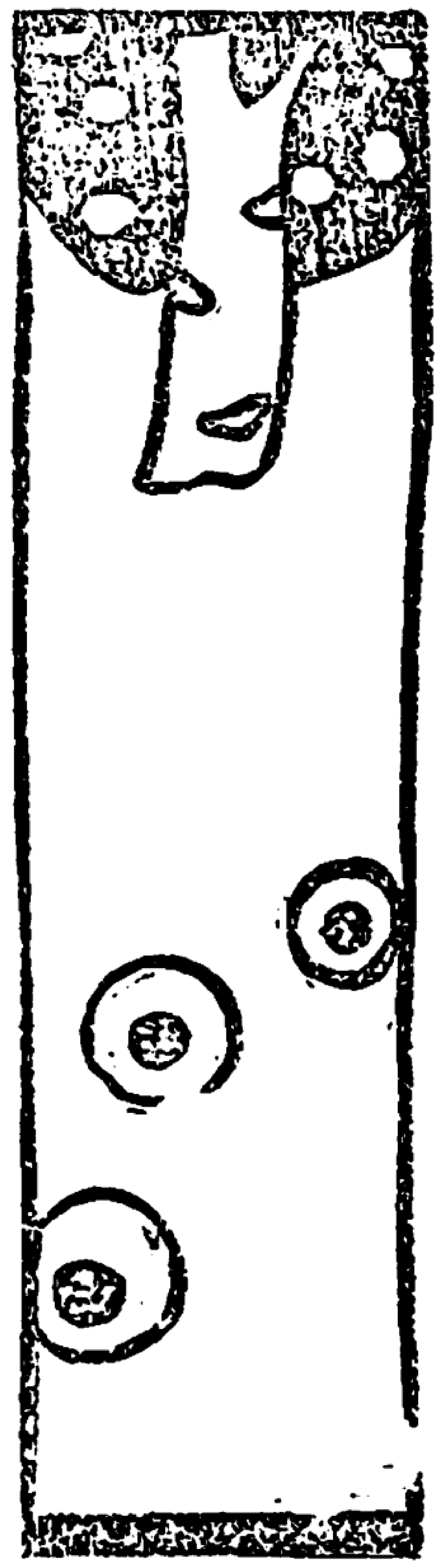
編輯通信

新年附錄に就いて

別項に豫告の通り、新年號の本誌大附錄は、美人畫に於て當代第一流の名家、石川寅治畫伯の筆になる高尚優美なる油繪を、縱一尺三寸、横一尺の大阪光澤紙に原色版にて刷出すものなれば全く原畫を見ると寸分の差異なし、諸孃が額面用として永く書齋を飾るには此上もなき美しきものなり、特に豫告す。

●●●●●●●●●新入社の記者に就いて

本號四八頁豫告の通り、お伽世界記者として伊藤源宗君入社の筈なりしも、突然郷里に歸省の事情起り、遺憾ながら同氏の入社は一先づ見合すことゝなり、新たに他の一記者の入社を見る筈なり。



俳句

内藤鳴雪選

○（天賞）
明月や影踏みあいて戯るゝ　麹町　牧野銀杏子

○（地賞）
古案山子月を仰いで嘆ずらく　下谷　山脇もと子

○（人賞）
行く年や硯の上の小盃　下關　西村文江

佳作

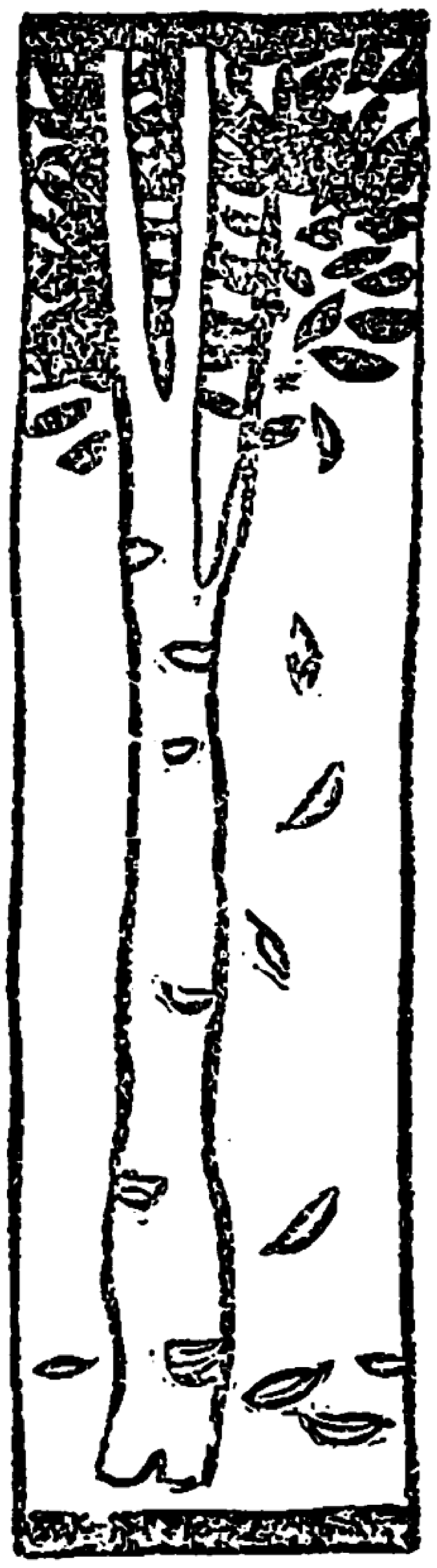
よき羽の征矢に輝く秋日かな　下總　浮舟
温泉を出て鬪取美なり冬の朝　日本橋　小林政子
いつしかと別れ秋や夕日かげ　石川縣　宇保賀
大根引く尾張女の力かな　若狹　元山ふく子
寝心や干した蒲團に日の匂ひ　日光　吉新秋子
吾妹子の鼻低きかな秋の風　筑後　栗山寛子

日を負て歩む人あり今朝の冬　東京　草路

幼君をいさむる秋の一夜かな　王子町　柏葉
夕顔の朝咲く窓や秋寒し　長崎縣　伊藤夕陽子
夕顔や大津繪ひさぐ軒の下　近江　瑠璃香
淋しさの櫛にぬけ毛や今朝の秋　愛媛　優花
桐畑のこゝにもさみし秋の月　木曾　月見草
綫龜の甲にも寺の落葉かな　下谷　柳よし子
小春日や縁に毬つく女の子　神戸　山村香枝
絡緯や秋の誠を訴ふる　靜岡　水野富貴子
待人や戀にも月の庭歩き　澁谷　季子
忘られぬ悲しみもあり秋の暮　目黒　白百合
初時雨都を落つる支度かな　本所　川上葉子
張物の縞のゆがみや小六月　京橋　奥村孝子
草紙讀も眺めがちなる夜なべかな　京都　蕗賀子
明月や窓よりのぞく山一ツ　千葉　花蝶
灯ともして風呂をおとせば雁渡る　札幌　保野幽香里
尾花咲く月下に走る狐かな　澁谷　藤香
子狸の來て啼く古塔や星月夜　神戸　緑子
あぢさゐの咲き殘りけり秋の朝　廣島縣　宮垣初代
秋風に歌人戀しきむかしかな　大阪市　關地敏子
名月の縁に須磨琴かなでけり　相模　高根小鈴
寒月や庭を走れる猫の影　神奈川　木村紫雲子
滿天に星斗輝く夜寒かな　長野縣　淺田千代子
雲たれて一渓白し秋の宵　淡路　高田菀子
落葉してさつぱりしたり梅もどき　埼玉縣　渡邊積翠
霧の中に女一人や須磨の磯　神戸市　田中落葉子
曉や鐘の音三里山寒し　東京　草苺
秋雨に濡れてこひしき文箱かな　周防　しろきはな
三つ四つの落葉に茶道掃りけり　熊本縣　長野わき枝
落葉焚く野風呂の中の落葉哉　上毛　雲路

水や空空や水なる海も秋　播磨　うずみどり
山燒けの梢しづまりて冬の雨　山口縣　椰艮美那子
初しぐれ今日の晴着をぬらしけり　舞鶴　雪子
くれの秋もの思にして時雨かな　廣島市　清子
水門に落葉たまりて秋行きぬ　赤坂　古賀まさ子
千金の女賣れけり夜の秋　佐賀市　黑田紫蘭
夕月や顏を羞ぢらふ袖頭巾　伊賀　古蔦女
霜よけの傘婆娑として菊の花　竹田節子
狐鳴く夜も秋なれや味が里　兵庫縣　花吹雪
月の夜や二人落行く田舍道　岡山市　野菊
鏡屋に素顏羞かし秋の人　山城　木の花
松茸を賣る聲も秋更けてけり　山口　千香
秋の夜や秘めて煮る蟲藥　廣島縣　小出百代
山寺の鐘さへ鳴らぬ夜寒かな　四谷　婦美子
コスモスの花は殘りて柿落葉　長野縣　秋野晃
下京のあした美はし花賣女　伯耆　田中春子
コスモスは咲けど淋しき庵哉　關口ちよの
名月に歌詠みかはす宿女哉　靜岡市　石垣靜子
宮城野にしづくのあまる小萩かな　N子
磯づたひ何處まで行かむ今日の月　佐賀　花の雫
白鳩の北に飛びけり秋の風　茨城縣　小堀とし子
野に咲けば野の花らしき彼岸哉　旅順　泥子
うら枯や重しと見ゆるひさご棚　金澤　光朗女
朝寒〻うづら鳴くなるきりの海　呉市　山本哲子
枝折戸を重しと押しぬ霜の朝　山形　伊藤智惠子
秋更けて句梅の人の欠びかな　大阪市　大關さとみ
秋暮れて倒れ木に見る蟬の殼　信濃　岡部かし子
旅人の杖にとまるや秋の蝶　紀伊　大澤古幽
朝寒の原に名馬の騎乘かな　福岡市　青木夜潮
さして行く故郷はいづこ秋の雲　霧多布港　大野波萬子
旅人や月見て越ゆる國境　伊賀　福田惠美子

朝霧や馬打ちわたす大井川　大阪市　河盛よしの
小春日や大佛の手に蟲のこゑ　奈良縣　多香子
兒猫は未だ戀知らず今朝の秋　朝鮮　白菊女
ゆるしまだ君が肌吹く秋の風　備前　我澤竹子
若き尼の衣かへけり秋びより　白妙女
葉の落ちし銀杏の枝や旅鳥　大阪　村田擴子
名月に毛槍振りゆく僕かな　芝　小倉ため子
秋雨や巡禮小さき丘の道　本鄉　星とよ子
秋の夜の時計の音や胸を打つ　小林操子
垣越して來る菊畑や讀書の子　北海道　伏見屋康子
雨終日獨居の庭におち落かな　久留米　久商女
風呂歸り橋に砧の聞ゆなり　信濃　青木かつの
賤が家に八重垣遶る黄菊哉　宮城縣　志子英子
山門の甍に凄し秋の月　茨城縣　皆川さち子
報國の武を練る秋の女哉　京橋　渚の花
露けさに一枝ほしきはぎの花　吉備　よしの
行秋を戀になどりの小雨かな　福井縣　土屋黄昏
杖立てゝまたも彳む紅葉かな　德島縣　行く雲
龍田川冬は錦の夢さびし　小石川　中村千代子
海遠く見る秋晴や岡の家　上毛　夕野路露子
木曾川や鹿夢醒めて水鏡　水戸市　川和美代子
夜の明ける度に新らし夏の山　信濃　保科伊津子
夕風のうしろ煽りやはなすゝき　大阪府　宮崎唯代
秋の野や空に響きて駒の聲　沖繩　みえ子
行軍の馬嘶い來る花野かな　土佐　橋田紫葉
壁を飼ふ蟲の響や秋の夜半　支那　內山小久子
流木に鳥むれたり濱の秋　深川　曉子
照りかへす巖うつくし夕紅葉　茨城　波之香
朝霧や龍田の姫の頰冠り　伯耆　田村美子
霜寒やテカ〳〵光る斧の色　伊豆　菊地づさ子



初作

編輯局選

○人形

小石川　晝なく蟲

冷い床の中で母樣の寢に來て下さるのを待つて居る時メリーはいつも簞笥の上から、じつと私を見おろして居るのでした。暗い釣ランプの灯影がその顏の半分を照して、柔い金髮が時々チラ〳〵とゆれる樣に見える。私は毎晩毎晩人形が何とか言ひ出しはしまいかと思つて、じつとその顏を見つめながら、いつか、母樣の來て下さるのも知らないでうと〳〵とそのまんま眠つて仕舞ふのが常でした。かうして十年間、ガラス戸のすき間から積つた塵は、着のみ着のまゝの白毛の洋服にしみついて、誰が壞したともなくその手は折れ、いつの間にか玩具戸棚の隅にはふり出されたその樣子を見る度に、放浪し盡した敗殘者の樣な痛ましい氣がしながら、でもなぜか可愛いと思つて抱き上げた事はありませんでした。そして此頃はもう荒み行く此人形を見るのもいら〳〵しい樣な氣がして來るのでした、私はぢいやに人形の寢棺を作らせて摘むだりんどうの花を一ぱいつめました。うすいクリームの洋服に同じ色の帽子を被らせてそのまゝ、うす紫の花の中に埋めました。私は此の子の頰を此時ほど晴れやかに美くしいと思つた事は御座いませんでした。そのまゝ棺を裏の川へ入れました。唯何の氣もなく、笹舟を流す樣な輕い心持ちで。水はどん〳〵流れて行きます。私は手離したのが今更にやる瀨なくなつて呼びもどしたい樣な氣の胸に迫るのをこらへて、じつと下を見ました。白木の箱は躍る樣に流れて行きます。枯葉が、かさこそと音を立てゝ散ると、又、靜かに水に浮むで小さな箱のあとを追ふて行きます、あゝ私は何故おまへを流したらう、ならう事ならこのせゝらぎをみんな止めて花に埋れてまだ濡れぬおまへの頰に口づけしたい。——私の悲しいオフヒリアよ、ではさやうなら。(天賞)

近頃の新しい少女のライフは此んな思想に支配されてゐる。(評)

○雲の行く方

栃木縣　千葉時代子

秋の夕、寮舍の窓に凭つて、西の空を見て居ますと、いろ〳〵の奇麗な雲が、明神山の森の方へ、流れて行きます。私は、それを泥と見送るのが、何より好きですの、樣々の形をした雲が、後から〳〵と湧いて來ます。さうすると、過去が堪らない程戀しくなつて來ます。色々な感想が、其雲のやうに湧いて來ます。國に居て見た雲の、色も、形も、ちやうど、あんな色、あんな形をして居ました。あゝ揃はれの露姉樣は、お可哀想に、何うしてらつしやるでせう。都の千姉樣は何うして……私は窓に頰杖ついたまゝ、自修時間になつたのも知らずに、何時迄も、雲の行く方を見送つて居るのです。(地賞)

文章はおちついてゐるが、心持は嘘らしい、眞實の氣が乏しい。(評)

○山住ひ

筑紫　世司木幸子

戀愛とは何だらう、戀とは何の事だらう。私にはわからない、私は男を知らないのである。相愛する心だつて?それ丈では私にはわからない

私は妹を愛して居る、妹は「姉ちやん姉ちやん」と私でなければならないかのやうに寄つて來る、幼い弟のあの罪のない顔、私は可愛くてくたまらない、私は男と云ふものを、知らないのである、男のために、裝ふのだつて誰が、云ひはじめたのだらう、私は髮も結はなければ、お化粧もした事はない。雜誌を見て居ると甘い戀に醉ふとか戀の苦い經驗とか失戀の涙だとかよくある、私にはわからない事ながらいやないやな氣がする、もう秋風が身に沁む頃となつた鶺鴒が泉水のふちで尾をふる時が來た、鶯が下葉の枯れた萩の枝で虫をさがして居る、櫻よりすきなもみぢの下でこんな可愛らしい小鳥の遊んで居るのを見るのを何よりもよろこんで居る私は、溫い父母の傍に山賤の生活をして戀も男も知らないで二十の年ももう暮れる。

（入賞）

豈戀を知らざらんや（評）

○日記

新潟市　まり子

八月二十五日。今日は又朝から雨降り、繁り合つた樹木からは、たえずポチ〻としづくがおちる、今日は天神樣のおまつり、いつも二十五日には、きまつた樣に雨がふる、きつと天がおなげきになるのだらう、山手の方からド、、コドン〻とたいこの音がきこえる、きのふおさへて

きたかにの大きいのは皆、にげてしまつたが、小さいのはまだ居る、しばらくたつと、本家の叔父樣が、義雄樣を、つれあそばしておいでになつた、皆で、ずゐみつとうをたべた、こんなにおいしい桃は近年はじめてだ。晝後、本をよんだりして居るうちに、いつか夢心地になつてねむつてしまつた、目をさましてみると、もう四時近く雨ははれた○○さんが六時の汽車に、おかへりになるので、停車場迄みおくりにいつた、店に休んでゐると、まもなく上りの汽車が來た、驛夫の羽生田羽生田と呼ぶこゑも、かすかにきこえた、乘客は六七人、下車した人は一人、物賣でもない驛長が、合圖すると、發車した、後は寂寞にかへつて、汽笛が斷續してきこえる、下りが來るまでは、一時間もあるので私はまた病がすつかりせんので、これで失禮してかへり路についた、日は全〻くれて淸い月は、下界に青白い光をなげて、涼しい風がそよ〻吹いて、ほんたうによいきもちであつた。

初心らしい日記。（評）



ひとみ　福岡松村芳子

○恐しい罪

京都　艶子

しと〳〵とをやみなく小雨降る夕あたりは森としていつもの猫の聲さへ聞えない唯時々秋風がすうつと吹いてきてすぐ裏の竹藪の笹を物凄く動揺さす時バラ〳〵ッと一時にはふり落ちる音のみがあたりの寂寞を破つて居る。丁度露子は秋の夜長を母と弟と三人で茶の間の明るい電燈の下で紫有禪のメリンスの被布を縫つて居たが雨の夜の訪れる人もない此家のあまりのさびしさに針持つ手を休めて考へる事もなくぼんやりと天井をみつめて居たが、忽ち門の方でトボ〳〵とわらじふみしめる音に我に歸つたそしてそれが黒ずんだ布の帽子を被り雨にぬれたわらじを重さうにはいて黒い油の香のとれた雨がつぱまた郵便屋さんと云ふ事が露子の頭にうかんだ。でつと立つてとりにいつた、それは露子の妹から東京の兄へ出す手紙だつた、母樣は不思議さうに露子の手をみつめながら「誰から來たの」、「秋ちやんから義兄さまへこれに所がわからないから附變して送つてくれつて」「さうかいどんな事が書いてあるだらうお前まあきてごらん」と母樣はなふさもなくおつしやいましたが露子はためらひました、然し好奇心は充分あつたので、それはいつも面白い事ばかりいつてよこす妹の手紙が先日の手紙によつてすつかり變つてたからなのです。でためらつたのも束の間次のミニットにははや露子の手はかたく締められてあつた封をきつて居りましたが又自分にどんな恐しい罪を犯して居ると云ふ事には氣付かなんだ、唯好奇心にかられて愛人にでも送る手紙のやうな思ひをしながら半頃まですよんでいつたが突然何物かに彈かれたやうに身をふるはした。ブル〳〵ふるう手に手紙をくる〳〵とまき納めたが扨て心臟の鼓動は無鐡砲な露子の神經をも刺戟したと同時に今迄の事が急に空恐しくなり、ゐたまらず母樣が何事かたづねて居られるのも夢のやうに聞いて自分の室へひきさがり暫く漠然と立ちすくんだ、やがて机にむかつてペンをとつた手はブル〳〵とふるへどんな事を書いていいのかそれさへわからなんだ勿論兄に出す爲に——。

雨はいつの間にかやんでゐた、そしてポタリ〳〵と落つる雨だれの音が丁度露子のみだれた心をしづめるやうに——雨の夜の哀音をつげるやうに——。

○私決めました

島根縣　今藤貞子

さうだわ、流元でも室内でもいろんな物があやなしに亂れて、手のつけ樣もない樣な時きれいに片端からをさめていつて、やがてきちんとなつた時の心地よさ、淸い光線が隅までさして、きれいな空氣が通つてはんたうに何事でもさうだわ、私も塵にまみれ亂れた心を、一つ〳〵淸いものにみがきませう、必度、どんな惡魔の試にも打ち勝つて又かよわい母の片腕ともなつて、田にも畑にも親しみませう。虛榮にあこがれた望は捨てゝしまつて……姉は云ひました、目立つたよい事しよう立負しようとあせらずに、惡い事のない樣にすればそれが凡人の上ですよつてだから私きつとさうしますわ。

きゆつ〳〵とお茶碗洗ふ手元へ、格子の窓から朝風が流れ込む、ばけつさげて井戸に出ると、天は高くすみ渡つて、ふうわりと綿の樣な雲は自然のほゝ笑と思はれ、氣高い太陽が東の眞仁山の上に現はれて、世の者は全く暗いまよひから救はれた樣の心地、見る物皆自分の心にかなつて、足もとになくキリゴさへ務に怠らず鳴くよと思はれる。

○安房の一日

登美子

七月三十日に　畏れ多くも　明治天皇陛下御崩御遊ばされ　今上天皇陛下御踐祚あらせられてこゝに大正元年とはなりぬ、常なれば夏の暑さを山に海におのがじゝ、さけべきなるを、御大喪中とてごゑんりよ申し上げし人の多きこそこよなく嬉しけれ。

吾しも吾は病になかされて醫師の君の轉地療養こそよけれとすゝむるまゝに安房海岸には出向きぬ、關東平野の唯中、利根の川邊に生れ！子には白砂靑松、白波よする岸の邊や沖の岩上に遊ぶかもめ眞帆片帆の影さへ見とれて暮す日ぞ多き。

読友くらぶ

○交際

備後神邊　村田よし子

▲習字　先日は御手紙どもありがたう。皆様に御願ひ致します、私事は習字に趣味あるもので御座います故皆樣の御手すさびを御願ひ致します併し近邊に書家が御座いますなら半折へ書いて貰つて御送り下さいきつと〳〵御禮致します。

○鹿兒島市清水町一六　美代百合子

▲誌友の皆樣　私も本誌の愛讀者なのよ何卒末長く御交りを願ひます。

○滋賀縣甲賀郡水口町　堤愛子

▲おひさ〳〵御寒く成りますが誌友の皆樣には御きげんよく御いで遊ばしますか、京都のよし枝樣お正月にはぜひ御遊びに入らしつて下さいまし。

○水戸市下山町小室熊次郎方　三村すけ子

▲黄色な入日につまされて廢れかゝつた片田舍町に禿筆に徒然を慰めて居る女詩人の身なのよ黄色い暮れ秋のほのめき、細雨の忍びやかな音、皆んな淋しい妾のハートをさわがします詩にまれ歌にまれ哀れんで下さいな。

○茨城縣下妻郡　神澤辰代

▲常陸野より　無意味に眺むる筑波山の偉姿さへその思ひはとり〴〵にうつると云へるものを孤り十幾年の笑ひも褪せてとぼ〳〵たどる少女をあはれとも思召さずや。

○東京神田區表神保町一〇野村方　みつ子

▲私は毎日うつとりと赤い灯を潤んだ瞳で見つめて居る樣な心持で過して居ります。私は淺草の樣な赤い灯の街が大好きです。然し又クラシツクな匂のする彦根、須磨、京都は私の旅行をした土地の内で一等深い印象を刻み付けられた處でした。あゝ私は矛盾して居る樣です。でも仕方がありません。

○岡山縣吉備郡庭瀬驛前四〇六黒瀬寅造方　經子

▲私は去年二月からの愛讀者でしたが投書した事はありません芳野姉さんは時々投書いたして居りましたが十一月十日に渡米したのでこんどは私が投書いたそうと思ふておますから博學なる諸姉樣御教導の程を希ひます終りに望みまして如何なる小說にても宜しい故送つて下さいキツト御返禮は致しますサヨナラ。

○山口縣長府町　久保みどり

▲本誌十月號にて御交際を御ねがひ致しました所皆樣からお手紙やら御葉書やらを下さいましたが御住所のわからないお方には御返事を上げまんで申譯も御座いません何卒御立腹なく

相變らず誌上の諸姉樣方御交り下さいまし失禮ながら誌上を拜借いたしまして御わびまで。

新潟縣中魚沼郡水澤村新宮
村山ぎん子

○

▲●●●●妾は朝顏狂　妾は朝顏花狂ひで御座います今では交り種子七十三種を得ました、誌友の皆樣の中で朝顏を培養せられていらつしやる御方が御座いましたら種子の交換をして下さいませんか。

兵庫縣武庫郡御影町桑原方
割田操

○

▲●●●●●●●●●●東北地方の誌友諸姉樣　私は幼時より不幸のみ續き運命の冷手に飜弄され淡いく人生の悲哀を感じては月に向つて不過を愬ふる境遇です！同情に富ませらるゝ誌友の諸姉樣方よ懷かしき奥羽地方の繪ハガキや御玉章を御惠み下さい屹度御返事申します。

函館區東河町二二一營方
谷内ちよ子

○

▲●●●●●雪の國より　柱暦も日にく痩せて、蝦夷の島根にはたうとう都人の想ひ及ばぬ寒い寒い冬が來ました。北國の街々は雪に埋もれて、雪辷りの勇ましい子供や橇馬車の寒い姿を見るのも近いこと。誌友の皆樣方お健やかにお出で遊ばしませ。そしてどなたか言海でも辭林でも不用なのが有りましたならお送り下さいませんか。お禮はしてよ。未使用の風景繪葉書もね。屹度……。

下谷根岸元金杉一五三
薄井野菊

○

▲●●●●御慕しき　記者樣はじめ誌友の諸姉樣方御機嫌如何ですか？私十月號で御依頼致しましたところ皆々樣より繪はがきやレター下すつて難有存じます直ぐ御返事を差し上げて置きましたが重ねて誌上で御禮申あげます尚同好の方々よ何卒ゑはがきやレター！御惠み下さいませ御返事致します。

東京日本橋芳町十番地堀方
荒井くみ

○

▲●●●●●日本橋より　妾はつい先頃御仲間入りをさして頂いたばかりでほんたうに淋しく暮らして居る者なのよ、何卒哀れと御思召して御交り下さいな屹度々々御返事は差上げますわ。

名古屋市中區中之町三ノ三一
齋藤病院内
宮本貞子

○

▲●●●●妾は中京の一隅に住む無學の一女にて候諸嬢と同じく又なつかしき文壇の愛讀者にて候若し諸姉君樣の内に獨立思想を存し將來を產婆を以て世に立たむとする方なるべく逆境に立ち給ひて悲慘なる經歷を有せらるゝ君而して文學を愛せらるゝ御方あらば水魚の御交り願はしく候一時的の交りは絕對に御ことわりいたします御交り下さる方あらば下名まで御手紙下さい必ず御返事致します。

土佐香美郡山田古町
伊志川日登志子

○

▲●●●●私は土佐の田舍町に昨年の一月より本誌を友としなつかしき皆樣の御秀作にしたしんで居る者のであります文藝の友として、短歌の友として、御交際下さる御方はありますまいかきつと御返事は致します。なほ新年の繪葉書の交換もお願ひ致します

京都市四條通り新町東入
勝岡とし子

○

▲●●●●●●●おなつかしき皆樣　永久に清きお手紙の交際をしてくださいよお願ひいたしますさらば諸姉樣!!!御免遊ばせ。

埼玉縣北埼玉郡三保村大字北小濱小林嘉衛門方
齋藤靜子

○

▲●●武藏野の片里より御懷かしき誌友の皆樣方よなつかしき誌友の皆樣方よ何卒御手紙や繪葉書寫眞などの御交換を願ひたう存じます。

岩手縣九戸郡大野村
秋野光子

○

▲●●●●●●お懷かしき皆樣、何もお變りはございませんか私は寂しい田舍に埋もれて唯女子文壇を唯一の友としてゐるものですが今後はどうぞ隔てなくお交はり下さい尚は折々御通信下さると誠にありがたう存じます。

群馬縣多野郡鬼石町相生町
新井延

○

▲●●初冬　御寒くなりました誌友の皆々樣御變りはございませんか妾に文壇を友として淋しき日を送つてをります何卒末長く御手紙繪葉書の御交換を願ひます、

○　上總君津郡小櫃村戸崎一四一五
加藤とよ子

▲私は九月●●●からの愛讀者です永久に御引立御交り下さいね御返事ば屹度。

○　名古屋市西區鹽町通小舟町
森田屋方
科野みさを

▲海外在留●●●●の御方は男女にかゝはらず御通信して下さい内地は御婦人及び少女様方に限り御通信致し度く。

○　備中國後月郡高屋村
山下喜美枝

▲淋しい子より●●●●●●　妾も愛讀者の一人であります妾の住む處は極く淋しい處で何一つ友とするものはありません諸環様方の永久變りなき親しきお交りのみ待ち焦れて居りますから仰ぎ願はくば頼りなき妾に一片の葉舟を投じて長しへに慰めて下さい……。

○　富山市赤十字社支部病院
寄宿舍内
渡邊須賀

▲田舍に居て●●●●●　自然を友として暮して居るナースシックでございます以後よろしく神聖なる御交はりを御願ひ申します。

○　佐賀縣東松浦郡湊尋常高等小學校
蓬頂紅葉

▲肥前より●●●●　東京大坂神戸名古屋上野下野及び嘉藻の御存じの方へ妾は大山小學校へ居ました乙代です誌友の皆様レターや繪葉書の御交換を願ひます。

○　樺太西海岸眞岡本町二丁目
香深館内高澤方
西島美女香

▲樺太より●●●●　皆様私ね今度當所にうつりましたのやはり淋しい月日を送つて居りますのよ何卒うるはしい御玉章願ひますよ御返事はキット

誌友くらぶを全廢す

本誌の革新と共に新年號から誌友くらぶを全廢いたします、其代り諸環が公に言ひたいこと、即ち短い述懷や不平や地方の通信などは從來の大波小波と云ふ欄を擴張して別に題を設けて掲げますから幾許にても投稿をして下さい、只、交換、交際等は自今中止いたしますから、其つもりにて投稿を御見合せ下さい一部の愛讀者にはお氣の毒ですが、記者の微衷を諒として廢止の主旨を洞察あらんことを希望いたします。

○　美濃國加茂郡和知村愛光舍
牧場前伊藤春三郎內
伊藤僥子

▲私は木曾川畔●●●●●●●の片田舍にさびしいさびしい生活をしてをる不束者でございますが、お情け厚き誌友の皆様何卒長しへにお手紙や繪葉書の御交換を遊ばして頂戴な。

○　北海道上川郡旭川町四條通
五丁目右五號
加茂菊子

▲北國より●●●　お懐かしき誌友の皆様私は誠に不束者ですが何卒うるはしき御玉章をお願ひ致します。

○　京都市室町通り佛光寺上ル
東山內
長谷川まつ代子

▲追々寒くなります●●●●●●　皆々様私も本誌の愛讀者で御座います何卒誌上及び御手紙の御交際を願ひます。

○　東京府下龜戸
佐藤清星

▲故郷は秋田●●●●●　です別に友とてなく本誌と清笛は何よりの友として淋しく暮して居るのですから御情ある姉妹様方何卒御交り下さいましな

○　北海道霧多布港
關根優月

▲旅から旅へと●●●●●　漂浪の生活を續けた事もありますが今はさゝやかなれ共希望を持つて一たび傷ついた心を癒つてゐます。多才なる文壇の諸姉様方永久に清きレターの交換をひたすらに望みますさらば。

○　長野縣更級郡八幡村
青木豐治方
青木よし子

▲故郷へ●●●　私事今迄松代の山崎方に居りまし

たが都合あつて十二月限り退出し故郷へ戻りますが山崎に居つたと同樣に相變らず御玉章或は繪葉書の交換を御願ひ申ます。

牛込區辨天町一四二
滿淵德藏樣方
K　N　子

○

●●●●●●●悲しき妾が境遇　親には幼い時に別れ姉二人の家庭です、今は都の學窓にて過去を追想しては泣いて居ります、何卒哀れと思召されますならお交り被下ませ門司福岡の方は盛に投稿遊せば又レターも願ひます。

隱岐國周吉郡中條村田畑内
山邊きい子

○

●●●日本海の孤島に淋しく暮して居る者でございますの、病氣がちな母に何か面白い小說を見せ度いと思ひますが御情深い誌友の皆樣どの樣なのでも宜しうございます故しばらくお貸し下さいませんか、御禮は必ず致します。

大阪松島正業館内
仙　波

○

●●●●凋落の秋！　何たる淋しい將た悲しいシーズンでせう、希望と欣びに充てる世の若き皆樣よ、皆樣の御心に溫かき同情が御座いましたならば秋に悲しむ零落の子の、荒める靈を慰め給へや。

記者より

▲鴨田まさ子さんに、投書ばかりなら開封はかまいません▲山うさぎさんに、一月號は例號です、其代り十五日に增刊が出る筈です▲田舍の姫さんに、如何にも東京に結婚媒介所はありますけれど、恐く信用するわけにはゆきません▲野菊さんに、お尋ねの通り投稿は同封でかまひません▲吉田夕草さんに、病氣御全快御歸鄉の由おめでたう存じます、賞品は目下編輯多忙にて送りかねて居ますが、追つて必ず送ります▲福井の黃昏さんに、お答は野菊さんの通り▲待宵草さんに、誌上に出す時は匿名でかまひません▲沼倉ふく子其他數十名の賞品禮狀は正に拜見いたしました御丁寧に存じます。

書籍交換

○

岩手縣岩手郡巻堀村馬場
宮野ふく

▲不用之書　金色夜叉脚本、巨人之自白四冊(上中下卷)平凡、アメリカ物語、あらゝぎ、乞食膝栗毛、伊曾保物語、靈か肉か、バンカラ日記二冊、春之光、綠葉集、當世五人男(倉橋幸藏)八軒長屋、肉彈、春、破戒。
△讀みたい書　寄生木、獨步全集、眉山全集、夫さだめ、寶むすこ、五々の春、二十八人集、家不如歸、雜木林、停雲集、食後、小說藤村集、伯爵夫人、紅葉全集一卷、一葉全集前編。

○

宮城縣登米町
海老名たけの

▲私の持つて居る上等鈴木製ヴワイオリン附屬品共やむをえぬ事情のため至急御讓り致しますお望の方は至急御一報下さいませ。

○

東京市牛込區山吹町五一
須藤方
田中萩花

▲所持の書　想の泉、毒草、焔舞、秘めし思、潮まち草、女ジゴマ、栞、世渡りの道、貞烈乃木夫人、黎明期の文學、自然と趣味、寄生木、樗牛全集、講談不如歸、土、片男浪、筆子、琵琶歌、バイオリン譜、寫眞術等
△望みの書　女子文壇(三十九年頃より四十一年頃まで)文章世界(同上)萬朝報(四十年頃より四十四年頃まで)辭林等其他いろ〳〵にてよろしくあります。猶諸孃の御交際を願ひます。風景繪葉を殊に望む。

○

仙臺市鐵砲町十四
館山妙香

△九月の本誌御不用の方はなにとぞ御ゆづり下さいませんかおねがひよ。

○

岡山縣赤磐郡五城村大字新庄
野崎靜子

▲入用の書　若き女の手紙、數學一萬題、漢學捷徑、最新女子書翰文、實用裁縫全書、裁縫指南(喜多見佐喜子女史著)近世美學(文學博士高山林次郎著)忘れがたみ(櫻井鷗村著)夜雨集、秘めし思、こゝろの秘密(女學世界第九卷第二號增刊)
△不用の書　世界語、最新世界地理、上下各一冊、日本無雙玉篇、速算輕妙秘術、無上の快樂二冊、新式速記術、最新式記憶術、本年一月婦人世界、數學世界(幾何)校訂日本外史、以上御交換又は御讓り下さいませ。

○

岡山市櫻町二五
山本惣次郎内
山本孝

△皆々樣の內夢二畫集御持ちの御方は御ゆづり下さいませんか、何んの卷でもよろしい、又、私も、ハーモニカが不用になつてをりますから御入用の御方には御ゆづり致します。

○

茨城縣那珂郡戸多村大字戸

赤地利子

▲妾の手許に繪畫講習會發行の『繪畫講習錄』全部二十四冊、外に織田一磨先生の『水彩畫法』『スケッチの栞』等の不用書がありますから「絹ハンカチーフ」や「リボン」と交換を願ひます御望みの御方は下名宛申込んで下さいませ。

○

新潟縣中蒲原郡小須戸局內

大鹿

關口としを

▲尾崎紅葉著紅葉集二卷を所持す田山花袋氏著田舍教師か又は夢二畫集三冊と交換したし。愛山氏の高等作文敎範を所持す松屋哲太郎氏の用器畫解式と御交換下さる方は御一報下さい。尙ほ自筆の水彩畫鉛筆畫の交換を望む望みの方は畫を御送附下さい何卒。

○

高崎市白銀町

岸ともゝ

△萬天下の御姉上樣方のうちに明治四十年中に發行の女學世界、婦人畫報、婦人世界、少女世界、少女の友、少年、日本少年、中學世界等御持ち合せの方はなるべく一號より號を合せておかし下さいませんか思召しの御方は何卒御一報下さいませ。

○

佐賀縣鹿島町中川筑後屋方

蘆なみ子

▲不用の書　新曲浦島、名著新澤、響、近代文學評註、明治名著集上製、纖葉流、七本櫻、書生氣質、商人氣質、浮雲、浮城物語、大詩人、埋木、二人女房、明治の小說、合本。△入用の書。日本少女寶典、落語全集、俳句大辭典。

○

秋田縣平鹿郡横手町本町

熊谷美代

△諸姉樣方のうち「春」と言ふ小說御持ちの方は御座いませんでせうか何卒御ゆづり下さい御禮は屹度致します。

▲私のところには女學世界「一卷三號より今年の五月まで」少女世界、少女の友、捨子、おてんば娘日記等不用でございますから御入用の方にお上げ申します。

個人消息

○

東京根岸にて

てい子

▲栗原かね子樣其の後の御けしき如何？只今何處に御住ひ遊ばして御居で？もし御目にふれましたら御住所を。

○

南都

多香子

▲懷しいく福知山の葉津子樣最後の「少女」七月號を見たのは九月二十八日でしたの、作文欄の私へ下すつた優しい御便り多賀はほんとにく嬉しう御座いましてよ。初めつから優しい御心根はよくく存じて居ましたけれど……ネー葉津樣いくらへだつとも二人は永久にSよ。貴女の御名を女子文壇の九月號で拜見しまして餘りの懷しさに私も女子文壇へ參りました。こゝで御目にかかりませうネー。

○

穗星子

京都の別所君子さん。貴女は小林君子と云つて居られる、あの琵琶の御上手な君子さんとは違つて？きつとさうでしやう、えゝ。今も原田先生の御許へ通つておらしつて！私ね學校の方を去つたものですから只今は先生の許へ通はないのよ、何とか云つておられるでしやうねえ。每日放縱なライフを續けて居る私は、少々の束縛を望んで居ります。一度あの御上手な琵琶を聞して頂戴な、又御交際をもねえ。

○

磐城にて

しま子

▲いせ子樣……わかりましたわ如何して御忘れ致しましやう！いつもく御忍び申して居りますものを、あの悲しいお別れ致しまして後少しも御樣子がわかりませんので永久の御別れと思ひましたに御懷しう御座いますお玉章を……。

○

石川

つる草

▲羽前の長澤美也子樣御なつかしいわ、私ね文壇以外貴女の寄稿しておらつしやる雜誌上に月月お作を拜見してなつかしとのみ思つておましたの、どうぞ妹と思召して御交り下さいな。私の住所及本名それは紙上では申しかねますから××の千鳥さんに聞いて頂戴な。

＊　＊　＊　＊

雜報

大演習

十一月十二日京濱灣に於て大觀艦式があつた、浪靜かな品川の海に百餘の大艦小艦は雄大な姿を並べ空にはパ式飛行船が現はれた。今上陛下第一回の大盛儀は海より陸に引續いて、川越町を中心にせる廣茫たる武藏野に十五日より十八日まで陸軍大演習を御擧行になつた。御馬を陣頭に立て給ひ親しく御統監遊ばされし　大元帥陛下の御武德は申すも畏し。所澤に於ける飛行隊が、偵察に從つて成功したる事等は今までに無き偉觀であつた。海にも陸にも空にも武を練り給ふ御治世はどんなに心强いことであらう。

繪の展覽會

△文部省展覽會　は前月十七日めでたく閉會したが、閉會以來入場者の總數十六萬人餘で一日平均四千五百人弱になる、昨年から見ると二倍の入場者だ、又出品の繪畫で賣約濟となつたものは八十三點あつた、何にしても年に盛んになるのは欣ばしい。また右文展の繪は京京を終つてから京都で開いてゐる。

△ヒユザン會　高村光太郎、齋藤與里氏等が主催のヒユザン會は讀賣新聞の樓上で開いたが若い人達は面白い繪があると云つて澤山見に行つたやうだ。

△丸山晩霞畵會　丸山晩霞氏歸朝記念の畵會は帝國ホテルで開いた、製品數二百に餘り氏得意の作も少くはない、個人の展覽會としては堂々たるものだつた。

△夢二展覽會　前月二十三日から本月二日まで京都圖書館内で開いてゐる竹久夢二氏の畵會は出品の數も數百點に上り、氏獨特の氣分を表現してゐる、殊に子供の室があつて、子供達の爲に可愛らしい繪を列べたり、描いたりする自由な一室を設けたのは、好い考であつた。

△行樹會　美術學校の學生中の一派が開いたので會場は赤坂の三會堂だつた、此會にも新しい氣運の動いてゐるものがあつた。

與謝野夫人歸朝

巴人與謝野氏に先立つて、前月上旬神戸に上陸した與謝野夫人晶子は、其後家庭の人となつて嬉しく子供達と共に巴人の歸朝を待つてゐる、一時健康勝れずとの噂もあつたが、歸朝と同時に以前の健康に復り、滯佛中面白半分に習得したスケツチを描いたりしてゐる、洋行後の夫人は外見は何の變つたこともないが、其新しい見聞は思想の上に少からぬ影響があつたであらうと思ふ。

劇界と女優

△山川浦路を中心にせる近代劇協會ではイブセンのヘダ、カブラを演じて可成りの人氣を集めた。文藝協會の第四回公演は十一月十六日より二十五日まで十日間有樂座に於て開かれた。マグダほどの問題をひきおこしはしなからうが初日は既に賣切れとなる程好劇家には待たれたものであつた。一回毎に地歩を固めて行きつゝあるのを見るのは喜ばしい。

△此頃はしきりに女優が募集せられる、さきに帝國劇場では五人の合格者を入れ、有樂座では座附女優十餘名を發表した。此頃松竹合名會社では大阪で百三十一人東京で五六十人の應募者を得た。また結果は發表せられないが、何しろ女優の數はおびたゞしくなるであらう、從つて女優問題に就いては多少論じられて居るが、兎に角時勢が要求するのであるから止むを得ないだらう要するに眞面目に歩いてゆくものが最後の勝利になるであらう。

新刊

○家庭和洋料理　　赤堀菊子著

料理の大家として知られたる赤堀氏の著述である料理書は數へ切れぬほど澤山あるが、本書は打見たるところ、實地に應用するに都合好く、又親切に書いてあるから、何んな婦人でも此書一冊を參考として、四季思ふやうな料理が出來る、西洋料理にも珍しくて、簡單なものがある通俗といふ本旨にもかなひ、型にもはまらず近來最も優れて好い料理書だと思ふ。（定價金八拾錢、麹町區飯田町東京社出版）

○青空　　吉江孤雁著

著者は人も知る如く信濃の人で、また自然を愛する人だ、信州の人は生れながらにして自然に恩寵を享けてゐる、況して著者の如く其自然を好く味はうとする人があれば、其周圍は無限の

題材である。本書收むるところ落葉以下十數篇の小品文は悉く著者の自然觀を詩化したもので何の篇からも快い自然の印象を受取ることができる（定價金五拾五錢、神田表神保町中興館出版）

○悲しき愛　富田砕花著

新進歌人富田砕花氏の歌集である、氏の歌は新進歌人中でも一家の風があつて、努めて已まずんば歌壇一方の雄たるであらう、本書に收めた歌は何れも青春の日の憂ひを歌つたもので、若い讀者の胸には必ず共鳴する處があるであらう製本は小形なれども體裁頗る氣持が好い。（定價金六拾五錢、淺草下平衛門町岡村盛花堂出版）

○運命　栗野美秋著

此も青年歌人の集である、少し生硬な處はあるが又別樣の妙味も存してゐる。

○和歌講義錄　和歌研究會

新しく出た和歌講義錄で、講師の顔ぶれは、阪武島、金子、海上、蒲園、三井、伊藤、大口などと云ふ諸氏で、新に奔らず舊に泥まぬ處が特色であらう、別に『和歌』と云ふ雜誌も同じ所から發行してゐる、會費一箇月金參拾五錢（府下巣鴨町二、大日本和歌研究會發行）

▽レヅールの發賣。本町三丁目博愛堂發賣のレヅールは、多年獨逸で研究をした間中綱彦氏の創製に成るふけ取香水で、髮の毛の拔けるを止め、くせを直すばかりでなく、ふけを取るといふのが特色で、近頃評判の香水である。

▽東京音樂會にては來る二十五日より二週間第四回冬季講習會を催す、委細は神田今川小路二ノ十二同校に聞合されて宜い。

▲投稿募集のかずかず▼

經驗談

皆さんが日常見たこと、聞いたこと、又は行つたこと、感じたこと考へたことのいろいろを短く書いて送つて下さい、なるべく實際の經驗にもとづいたものが宜しいのです、皆さんが自ら心覺えに書き遂して置かうと思ふやうなことを、世間の婦人達にも知らせると云ふ趣意で、なるべく爲になることがよろしいのです、原稿は二十四字詰、二十行以内、掲載したるものには聊か贈賞いたします。

婦人職業談

獨立して營業してゐる婦人と、勤人として通つてゐる婦人とを問はず、自ら職業に從事してゐる方の實際の經驗を書いたもの、斷片的、描寫的のものより、纏つた記事として送つて下さい、二十四字詰振がなつき、掲載したるものには金五圓以下貳圓以上の報酬を正金にて呈す。

無名婦人傳

每號募集の通りです、餘り小說體に近いものは採らず、文章は拙くとも事實を正確に書いたものがよろしい、報酬金五圓以下金壹圓以上正金を呈す。

『増刊 現代婦人』春の巻（一月十五日發行）投稿募集

増刊『現代婦人』春の巻には主として從來本欄原稿として投寄せられた多數の原稿中より尤も優れたものを選んで發表する方針ですけれども、特に長篇の告白やうのものを、此際本欄用として投稿されたならば右増刊の選抜中にも加へることになつてゐます、又特に増刊に掲載する爲め、左の二題の文章を募集します。

▲町より村より

皆さんの住む町なり村なりの風俗でも、奇談でも、傳說でも、最近の出來ごとでも、名所でも何でも宜いことゝして、面白い記事を作つて下さい、出來ることなら新しく開けて行く樣子を書いたものが最も面白からうと思ひます、二十四字詰振がなつき、五十行以内一等（金三圓）以下約十人に贈賞す。

▲顔の寫生

寫生と云つても繪ではありません、文章で寫生するのです、男の顔でも、女の顔でも、子供でも、美人でも、ひよつとこでも、爪實顔でも、巧みに描寫したものを取ります、二十四字詰振假名つき、五十行以内、一等（金三圓）以下約十人に贈賞す。

右の外、誌友の作物は從來の如く募集しますが、掲載の紙面が狹くなりますから、主として小品文を採用します、長さは二十四字詰五十行以内、其他小說（百行以内、ふりがな無し）評論（斷片的のものも含む）、和歌、詩等も以前の如く募集します。

▲右凡て原稿締切（町より村より、顔の寫生は十二月十日）每月十五日▼

十二月

歳の暮といふものは、何となく活氣づいて、面白いものです、自然は冬枯の沈默に閉されて了つた代り、人間が時の流れに逐はれて、覺めたり、悶えたり、驚いたり、飛び立つたりするやうです、地方の歳の暮は何と云つてものんきですが、村より町、町より市、市より都會と云つたやうに、多勢人の集る所ほど、暮らしい活氣が盛んに見えます。歳の暮ほど人の動く時はない、一日〳〵と迫つて行く年の瀬に、何を何うすると云ふこともなく、物事を片づけたいやうな氣になつて、忙しくもない人までが、忙しさうに動き出すのです。

此の渦捲く渦の中に立つて、同じ渦捲に入つて行く人と、靜に見て行く人とあるのです。何事にも見るといふことは其味の伴ふもので、都會を見るなどいふことは大いなる其味でもあり、大いなる經驗でもあるので、殊に歳の暮の見るべきものは、都會の渦捲でせう、活動、飛躍、進歩、革新の裡に、不安、恐怖、矛盾、頽癈の裏面があつて、平凡なる人生生活が、平凡に繰返されて行く間に、言ひ知れぬ暗示があります

日曜　一日　八日　十五日　二十二日　二十九日

○本誌投稿及び懸賞規定

▲投稿は凡て女子に限る▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること▲原稿は凡て女士文壇社宛（未納税は斷じて受付ず）に送ること、▲小説と詩は振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以内、散文は三十乃至五十行、初作は三十行以内▲各種類毎に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす、▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る▲別に本欄の原稿を募る長さは二十四字詰二百行内外とし總振假名をつけること▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め大さは二寸に三寸一人一枚限。

◎投稿は毎月十五日到着を以て嚴に締切る

▲小說と散文は　▲天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す▲『詩』は天賞金貳圓地賞金七拾錢、人賞金四拾錢▲『和歌』『俳句』圖畫『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す▲『本欄』は金五圓以下壹圓以上正金にて呈す（但し短きものは此限にりあらず）▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す

大正元年十一月二十五日印刷納本
大正元年十二月一日第八年第十二號發行

不許複製

編輯兼發行人　野口竹次郎
印刷人　松本㦸
印刷所　東京國文社

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地
女子文壇社
電話京橋六〇七番
振替東京壹七貳九番

特約販賣
東京堂、北隆館、上田屋、至誠堂
東海堂、良明堂、大阪盛文館外

日本女子商業學校學監嘉悅孝子女史案

最新實用 家計簿

此『家計簿』の重寶がらるゝ理由

▲類似品續出す日本女子商業學校出版部に御注意願ます

定價金五拾錢
郵税八錢

▲いつからでもつけられる家計簿は本書の外ありません

組織の特長

▲此帳簿は一度つけると賄帳日記帳金銀出納帳元帳をつけたのと同じ結果を一頁内で示します組織になつてゐます。

▲收支一覽表は月々の小計、累計、一年中の收支豫算超過か否かゞ分る組織で家計の歷史とする爲に年々保存するやうに出來てゐます。

▲立替金及時貸表、負債償却明細表を新らしく加へました。

利益の要點

▲費用を省く……(一冊にて何冊も兼る故なり)

▲時間の經濟となる‥(一度つければ凡てのものをつけしと同じき故なり)

▲一目にて家計の模樣を知る(一頁の中に凡てのものが現はるゝ故也)

▲生活費の膨脹を防ぐ(絶えず豫算と支出との差を知るを得る爲なり)

▲家計の歷史を作る‥(一覽表を保存し得る故也)

發行所 日本女子商業學校出版部
發兌元 東京市京橋區南鍛冶町 松邑三松堂
電話京橋一二七六
振替東京七九三四

（大正元年十一月廿五日印刷納本）

女子文壇

十二月一日發行
第八年第十二號
（毎月一回一日）

求婚廣告を見て

近頃の新聞には、求婚廣告といふものが大分見えるが、是を仔細に調べて見ると、今の人が何を標準として妻君を撰擇して居るかゞ分る、即ち何の廣告にも「身體の强壯」といふことを第一に置いてあるから、此「身體の强壯」といふ事が標準であるといふこともすぐ知れる。

昔は妻君を床飾り同様に心得た時代が有つた此時代には容貌さへ好ければ、それ一つで易々と玉の輿に乘つた者も少くなかつた、併し今日は自分の妻といふものに付て、眞面目に考へる様になつて來た、それで、容色本位で妻君を撰ぶ人でもあらうものなら、無智の人不心得の人として、他人から笑はれる様な始末である。

扨て妻君を撰ぶ標準が、何故こんなに變化したのであらうかと云ふと、全く生存競爭の結果である、人口はドシ〳〵殖えて來る、同種類の職業は増して來る、そこで人と人、職業と職業の競爭が始まる、今日の様な烈しい競爭の世の中では、商賣をやつても中々うまい儲けはなし、給料なども各方面共に昔より相場がズツト下つて居る、で、これからの人は相當の教育あり技術があつても、僅か許りの給料で辛棒せねばならぬ次第である、それで、上流社會は別として中流以下の家庭では、女中を置かず妻君自ら水もくむ、御飯も炊く、洗濯もするといふ風にして、少しでも夫の負擔を輕くせねば、一家の經濟は保つて行けない。

處で身體が弱かつたら、いくら意氣込みが旺んでも、ドツコイ身體が動かない、夫の負擔を輕くする處が、反對に高い藥を飲んで夫の負擔を重くするといふ具合で細腕一つで活計を立て〻行く夫には誠に堪へ切れない現今の人が妻君の體格に重きを置くのもこれが大原因である、それで今後の女子は身體が弱いと結婚上非常な損がある。

獨り結婚前の女子許りでない、既に嫁いた人でも同じ道理である妻君がいつまでも身體が弱くてぶら〳〵して居ては遂に小言も出る、品行問題からの痴話喧嘩に花が咲いて、出すの出るの騒ぐ様な結局自分の不幸を招く基となるのであるから「健康」といふ事には大に注意せねばならぬ。

然らば婦人の健康は如何にして計るかといふに勿論中將湯を服用するが一番安全且つ迅速である、中將湯が子宮血の道から起る諸症及び月經に關する色々の障害、それから産前産後の故障等婦人病一切に有効な事は、世既に定評あるが、中將湯が他の婦人藥に比して甚だよく利く譯は他の藥の様に一藥萬能主義で無くて各病人の容態に應じて十數種の加減藥を調合發賣して居つて、病人が自己の容態を詳しく書き添へて本舗へ申込めば其容態にキツシリ當てはまつた加減藥を送ることになつて居るからである。

猶ほ婦人病の起る原因や兆候及び治療の方法等に付ては「婦人衞生手引」に詳細記述してあるから早速取寄せて一讀するがよい、本舗は東京市日本橋區通四丁目或は大阪市堺筋大寶寺町津村順天堂へ申込めば、無代進呈するから希望者は遠慮なくハガキをして同所へ至急申込むがよい。

（明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可）

女子文壇 定價金拾五錢 郵稅一錢